

---

# 新たなる人生の始まり

メルクリウス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新たなる人生の始まり

### 【Nコード】

N3579K

### 【作者名】

メルクリウス

### 【あらすじ】

この作品はオリ主最強、原作レイプ、などが含まれております、原作を壊したくない・汚したくない方は読むのをやめるのをオススメします。

……ある日とある少年桜井紫郎は神のミスにより殺されてしまった

……

……だが神は紫郎を生き返らせ、第二の人生を歩む事になった……

そして紫郎は喜んで！第二の人生を全力で楽しもうと決意する！

(注：この物語は都合主義的としています。原作崩壊なんて当たり前になってしまいかもしれません。)(気分により更新状況は違います)

## 第一話 新たなる人生

(前書き)

はじめまして、メルクリウスです。処女作なので、あまり期待しないでください。

自分文才の才能ないので……でも頑張りますので、宜しくお願います。

## 第一話 新たなる人生

はあ〜何時もと変わらぬ日常……………

学校行つてつまらん授業受けて、帰りに友達とゲーセンや本屋に行つたりして。

平和な日常を送っているのになんか物足りないなあ……………

「まあ、平和なのはいいことだからなあ」

と思いつつ家に帰って行っている所です。

んあ〜そういえば自己紹介してなかったなあWWW

俺の名前は、さくらいしろう櫻井紫郎17歳です。

一般的な名前で、身長は185cmクラスじゃ一応後ろの方にいるんだWWW

こうみえてもアニメ好きなオタクですよ！

好きなアニメは、なのは、ネギま、Fate、月姫、東方……………その他諸々あるんじゃないWWW

おっと…ちょい自重、自重……………ふう…

さてと帰りますかと思ひ、角を曲がったら……………

キイイイー！！！！

ドン！！！！

グシャー！！！！

最後に見たのは血だらけの自分……そして意識がシャットダウンした……

そして……俺は目を覚ますと……

「知らない天じよ「起きたか？」  
言わせるよおお！ってか誰だよ……？」

ちよつと！この女性、誰ですか？

「いや〜すまないねえ！手違いで君の運命を弄ってしまい、寿命より早く死なせてしまった…ごめんちゃいWWWてへえ〜ついでに妾は神様だからよろしくねえ」

いきなりのことで意味がわからなかったが……一分後……

「ぶらららああああああア！！ てへえ〜……じゃないだろお！ このくそやろうおお〜俺の人生返せやああ！」

ティーズのオルドスみたいな声を出してしまった……

「えええ〜ならこうしよう君に私の力をやろう、それで何処へでも行くがいいわ」

私の力？……………神の力かあ！！

「マジで??？」

「マジもマジおおマジじゃ！」

「もしや……………アニメの技とかもできるのか？」

「当たり前じゃい！ その気になれば惑星だって壊せるわ」

それは凄過ぎる。

「マジかよ！チートじゃん」

「りゃ、マジでチートだwww」

「うんうん、チートじゃあ！オマケで容姿も変えてやるっか？」

「マジで、お願いします、神様！」

神様って優しいなあ

( 神に殺されたことをすっかり忘れている )

「うむ！まかせ」腰まである金髪に、目は真紅で身長190cmのイケメンにしてくれ」わ、わかったわい」

神様は紫郎の勢いにちょっと押されていた…

「なら異世界に行きたいです」

「そんなもん余裕じゃ！」

マジかよ、じゃ、じゃあ……………

「じゃあ恋姫無双の世界へお願いします。」

「うむ、了解した。」

「ひゃあああほおおお」

やべえ〜俺の人生最大の嬉しさ

「うむ、では行って来い！ついでに向こうに行ったら容姿も変わっているし、能力も付いてるから」

ゲートみたいな物が出てきた。

「分かりました、では桜井紫郎行ってまいります！」

勢いよく飛び込んだ。

さあ〜ここからは俺の時代だああ！！



## 第一話 新たなる人生

(後書き)

初めて小説を書きましたけど、本当に疲れました。

こつゆうのを連載している人に敬意と尊敬いたします！

自分も頑張りますので、これから宜しくお願いいたします！！

第二話 やって来ました！恋姫の世界（主人公の能力説明）

（前書き）

ぐはぁーこれは意外に体力と精神力を使いますねえ。  
でもド根性で書いてみました。

## 第二話 やって来ました！恋姫の世界（主人公の能力説明）

「んん…うう…ふわあ…ってあれ…ここ…どこだ？」

目を覚まして辺りを見回すと、森やらだだっ広い荒野にデケエ山……

「うん、異世界だねえ」

一人で納得してしまったよ…

ちよっと頭の中を整理してみよう……確か…俺は死んだよなあ？

そして神様に会って生き返らせてもらった…

そして異世界に行ってみようになった……だなあ…

そういえばなんか目線が変わっているような……って髪が金髪になつてるよ！

「あっそういえば…ついでに向こうに行ったら容姿も変わっているし、能力も付いてるから」って行っていたようなあ……？能力？？」

容姿が変わったのは分かるが……能力ってなんだ……？

んん…ポケットに紙が三枚入っていた。

えっとどれどれ……

神「やあー目が覚めたか？起きたら分かる通りにあんたは恋姫の世

界に来ているぜ 自分でも思うが、もうすでにあんたの容姿は変わっているwwwそしてここからが重要だ、あんたの力は私と同じ神の力じゃぞ……でもあんたはまだその力を持つて初心者なのだ……もしかして暴走してしまったら大変じゃろ？だから私は事前に力を封印したぞ……でも多少は力あるから心配するなかれ！」

ふむふむなるほど……では二枚目を見てみよう。

神「それでその力についてだが、正直に申すとチートだ！それ以外に当てはまらん……まずあんたが創造・想像した物はなんでもできる……「ただし生命を創るのは無理だから」……ここ重要だから、ペンで引いて（おまえは先生か！）……それはいいとして……後は自分の性格も創造すれば変わるぞ、肉体は神だ、どんな物も受けつけない、物理攻撃、魔法攻撃はもちろん、毒も効かん」

えええ……無敵じゃんかよ、どこを封印したんだよ……？

神「ついでに自分の血を相手にあげるなよ、神の血は与えた相手を不老不死にしてしまう……それゆえに狙われるからのう、だが大抵傷を負う事はないだろ……自分の行為で傷を負いたい場合は自分で自分を刺せ、そしたら負える……だがそれはそれでマゾだぞ……もしも傷を負ったら、まずそいつは神に近い存在だ……まあまずないだろwww……血の話に戻るが、どんな傷でも病気でも治してしまうので……あつ、あんたはもう不老不死だから！ついでに三枚目はあんたのパラメーターが書いてあるので……三枚目を見たら自動的に能力と体が神になりますよ……後天下を取って二年ぐらいたったら一回会いに行きますので、でもしも連絡したい場合は強く願えば妾に届くはずじゃ、じゃあまたなあ」

これはチートだなあ……うん！やってやるぜ、天下取りじゃ！

てか「天下を取って」って言うてるから、天下取れるってネタバレしているじゃないか。

…そういうえば三枚目、三枚目………って何じゃこりゃああ！

主人公紹介

櫻井 紫郎 (さくらいしろう)

年齢17歳 男

パラメーター (Fate風)

【筋力】 EX 【魔力】 EX

【幸運】 EX 【耐久】 EX

【敏捷】 EX 【宝具】 EX

【保有スキル】

気：EX

神の体のおかげで無限の気。

肉体強化等幅広い応用性を持つ。

気配察知：EX

気の応用により相手の気を感じ取り場所を察知することができる。

気配遮断：EX

気の応用により自らの気を抑え気配を察知しにくくさせる。

創造・想像

自分が思い描いた物はなんでもできる（ただし生命を創るのは無理です）

（金ピカ王の王の財宝「ゲート・オブ・バビロン」もできる）

魔力：E X

どんな魔術、魔法を唱えても減る事がない。（死者蘇生可能）  
アニメ、ゲームの技可能

（死者蘇生可能な条件）

? : 亡くなった人の体が残っていること（白骨は不可能）

? : その人の肉親的な人の血を少しもらうこと（本人の血は無理）

運命：E X

自分に上手くいくようになってゆく…（回りも巻き込まれる）

特に女性へのフラグ乱立が勃発する……

奇跡にしか思えないことが起こる。

耐久：E X

神の体なので、一般人には傷一つ付けられない。

神同士の戦いになれば、それなりに負ってしまう。

敏捷：E X

人間の目にはまったく映らない、でも自分で速度を制限できる。

宝具：E X

この世のすべての物を使える。（触ればどうやって使うのかも分かる）

.....

.....  
.....  
.....

神「これを読み終わったらこの紙は勝手に燃える…後自分で訓練するよにいつか来たるべき戦いのためになあ……後北郷一刀は来ないから原作どつりやらなくてもいいぞ。

その世界はあなたの自由にやりなあ、あなたが主人公じゃ……  
…今度こそまたなあ　「！」

紙は燃えつていった………

来たるべき戦い…？

少し気になるな……だが今はこの世界のことを考えよう。

んん〜なんだか体に力がみなぎってくる、へえ〜これが神の力、神の体か！

これならなんでもできそうだ。

神には殺されたが、こんな力をくれるんだ…感謝するよ……本当に！

とりあえず、そこら辺フラついてみますか………

第二話 やって来ました！恋姫の世界（主人公の能力説明）

（後書き）

疲れた………



第三話 物語の始まり

(前書き)

### 第三話 物語の始まり

「まずはこの能力を把握しておこう！」

目を閉じて、Fateに出てくるセイバーが持っている『約束された勝利の剣』と『全て遠き理想郷』を創造してみた………

すると……手には約束された勝利の剣、全て遠き理想郷が出てきた。

うおおおーマジかよ！

鞘から抜いてみると剣の使い方が頭に情報として流れ込んできた………

なるほど……これはすごい能力だ。

振ってみたら、自分の手に馴染むし、使い方も分かる。

すごいなあ、神様感謝するぜ

『よしあれやってみるか！』

約束された勝利の剣が光だし、唸りを上げていく。

「『約束された勝利の剣』……！！！」

ドオオオオオオオオオン！！

轟音を立て、爆煙をまき散らす。

……ちよつとおお、これはやばいでしょ……山が半分吹き飛んでるよｗｗｗｗ

……こいつは強力すぎる……予想外だ……

俺もついに人外になってしまったか……

あなたは神様に会った時点で人外だよ

……真名を開放しないようにしよう……セイバーが「地上を掃う憂いは無い」って言っていた理由が分かったよ……

っていつか早くこの場離れた方がいいよな……？

「待つつ待つてくださーい！」

タッタッタッタ……

……ん？

「待つてくださいつてば〜」

「ん……俺か??」

「ハア、ハア……他に誰がいるんですか……ハア……」

かなり可愛い桃髪の子が走ってきた。

つてあれは劉備！

紫郎は原作知識有り

「桃香様」

「お姉ちゃん」

後ろからは黒髪のこれまた可愛い子？……いや美少女と言った方がいいな。

と赤い髪の子ビっ子が……って関羽と張飛じゃんwww

まさかこんな早く会えるとは……

「愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、遅いよ」

「桃香様がいきなり走り出すから……」

「そーなのだ、鈴々達も急いできたのだ」

「だって……2人も見たでしょ？この人剣から光を出して、山を吹き飛ばしたんだよ！」

やっぱり、あれを見られていたか……

さすがにやり過ぎた。

「確かに……妖術の類いかもしれませんよ」

「あれはすごかったのだ、山が跡形もなく吹き飛んだのだ！」

能力の試しに夢中になりすぎて回りに気をくばってなかったか……

……

ただ単に興奮しすぎなだけですよwww

…ここは知らない振りをするか……

「…え〜っと、君ら、誰？」

「あ、すみません、私は劉備、字は玄德って言います（近くで見るとものすごいカッコいい人だなあ／＼／＼）」

「我が名は関羽、字は雲長です（こんな御仁もいるのだな）」

「鈴々はね〜、張飛 字は翼徳なのだ〜！（綺麗な髪なのだ〜）」

ん〜なんでこの子達顔が赤いんだ？

熱でもあるのか…？

> 今の紫郎は超絶カッコいいです<

「自己紹介ありがとう…俺は櫻井紫郎、姓が櫻井で名が紫郎だ。字はない」

「字がない？」

「愛紗ちゃん、きつとこの方が天の御遣いだよ〜変な服着てるし、さっき不思議な術使ったし」

劉備よ、失礼だぞ！これは学ランといって俺の戦闘服だ。服は学  
校帰りのまんま

……よしつ、原作介入しますかWWW

「確かに…天からは来たぞ」

「やっぱり！！」

「あの…お願いがあるんですが？」

なんだろ…？

「どうした？」

「私達と一緒に来てください！」

これは介入チャンス

「私達は戦乱の世で苦しんでる人たちを助けたいんです、でも、評  
判がなければ人は集まらない…」

「………どうかお力をお貸しください…」

「お願いなのだ！」

……翌々真剣に考えれば本当に荒れている世の中だよなあ。

このもらった力が役にたつのなら存分に使おうじゃないか

「断つても行くあてないし…俺の力で一人でも多く救えるならこの力を使うよ、だから君たちも自分に力を貸してくれないかい？」

紫郎は真剣な表情で話しかけ、最後は笑顔で応じた。

劉備たちは彼が一瞬放った覇気とカリスマ性に「この人ならこの乱世の時代を終わらせられる」そう確信した……

…最後に見せた彼の笑顔に彼女たちは頬を真っ赤に染め……

「よ、宜しくお願いします……／＼／＼もう絶対お顔真っ赤だよ／＼」

劉備は紫郎を直視できず、顔を背けていた。

「こ、こっ、こちらこそ、よ、宜しくお願いします……／＼／＼この人となら…私はどこまでも行ける」

関羽はたじろぐが内心忠義を固く誓った。

「よ、よろしくなのだ／＼（カッ）よすぎなのだ」

張飛は「頼れそうなお兄ちゃんだな」と思っていた。

「宜しくなあ」

> 紫郎は鈍感ではないが、抜けてる<

「あっと、そうだ！忘れていました……私の真名は桃香です」

「私の真名は愛紗です」

「鈴々は鈴々なのだ」

知っているけど、ここは惚けた方がいいかな。

「真名ってなんだ？」

「家族や親しき者しか呼ぶことを許されない神聖な名です！」

「いいのか……そんな重要なこと教えて？」

「いいですよ、貴方様は私たちのご主人様なんですから」

「そうなのだ」

「じゃあありがたく呼ばせてもらいます」

またもやいい笑顔をした……

「ご主人様あ／＼／」

「…／／／（コクツ）」

「紫郎おにいちゃん」

またもや顔を真っ赤にしている、桃香たち…

「（幸せすぎる…／／／）」



その場で紫郎は和んでいた。

〔桃香 side〕

私はすごい音とともに光り輝く物が放たれた所に走り出した。

なぜだか、行かなければならないような気がした。

怖さや恐れも何にも感じず…

私はただ走り続けた。

…そして…私はご主人様と出会った。

最初見た時…体にビリビリっていう感じの衝撃が走り、お顔が少し暖かくなる感じがしましたが…

私はこれがなんなのか、まったく分かりませんでした。

名前は櫻井紫郎というそうです。

私は思いきつて力を貸して頂く為に御願ひ致しました。

愛紗ちゃんや鈴々ちゃんも一緒に御願ひしてくれました。

紫郎さんはちよつと真剣に考えて……

「断つても行くあてないし……俺の力で一人でも多く救えるならこの力を使うよ、だから君たちも自分に力を貸してくれないかい？」

と言つた時に一瞬放つた覇気とカリスマ性に私は……

この御方を見つけられてよかつたと思つた。

……でも最後の笑顔は反則だよ……

〔桃香 side out〕

〔愛紗 side〕

轟音と共に桃香様が光が放たれた方へ走り出した。

私も鈴々も桃香様を追いかけて行つた。

だが……あれはいつたい……

やっと桃香様に追いついたと思っただら…目の前に…金色の髪に真紅の瞳をした男が居た。

私は警戒を解かずに男を見ていた。

こんな綺麗な容姿の御仁も世の中にはいるのだな。

この方は天から来たと言っている。

間違いないな、この御方は天の御遣い様だ。

桃香様が「この戦乱で苦しんでる人たちを助けたいんです」と紫郎様に協力を持ちかけています。

私も鈴々御願いたしました。

紫郎様は「断つても行くあてないし…俺の力で一人でも多く救えるならこの力を使うよ、だから君たちも自分に力を貸してくれないかい？」

私は彼が一瞬放った覇気とカリスマ性に…身も心も捧げる忠義を誓った。

ですが…あの笑顔は反則ですね…//

〈愛紗 side out〉

〔鈴々side〕

突然大きな音がしたと思ったら、さっき合った御山消えていたのだ。本当に驚いたのだ。

でも桃香お姉ちゃんが急に走り出して、愛紗と鈴々も後を追いかけたのだ。

そしたら金色の髪をした、男の人がいたのだ。

鈴々はあんな綺麗な髪をした人見た事ないのだ。

このお兄ちゃんは櫻井紫郎とい名前なのだ。

桃香お姉ちゃんも愛紗もあのお兄ちゃんが天の御遣い様だから、協力してくださいって言うてるみたいなので、鈴々もお願いしたのだ。

お兄ちゃんは分かってくれたのだ。

紫郎お兄ちゃんって呼んでいいのかなあ……？

〔鈴々side out〕

第三話 物語の始まり (後書き)

連続で書くのは疲れますねえ！  
でも面白いので書き続けます。

## 第四話 方針決定

和んでいたけど、これからどうするか決めないと。

「さて…これからどうする？」

「そうですね…じゃあ…」お腹ぺこぺこなのだ…」「ごらあ！鈴々、人が話そうとしているのに」

「でも…お腹減ったのだ…」

見ていて和むなあ

「そうだねえ、私もお腹空いた！」

本当の姉妹みたいだな。

「ですけど…」「いいんじゃない、愛紗」ご主人様あ！」

「自分もお腹減ったし、それにみんなにはいつでも元気でいて欲しいから」

この世界に来て、まだ何も食べていないような。

「…ご主人様がそういうのであれば…」

愛紗も渋々納得してくれた。

「やったあ！」

「この近くに街があったのだ」

この時代の町はどうなっているんだろ…？

興味を惹かれるな。

「ならそこに行こうか、街はどっちの方に？」

「確か……あちらの方角ですね！」

そう言い東方向を指さす

よしなら自分の力を試してみるか……

「そう。じゃ」

ふわっ

「……え？」

愛紗と桃香とは突然の浮遊感。

「鈴々ちゃんは背中に乗って」

「了解なのだ」

愛紗と桃香は愛紗は背中と膝の裏に手を回され紫郎に抱かれていた  
(所謂お姫様抱っこ)、鈴々は背中に乗せて……

うわああ〜これ超ハーレムじゃん！

「愛紗、桃香、鈴々ちゃん、首に手を回して、ちゃんと掴まっていたねえ」

「分かったのだ〜」

鈴々は負んぶされたことがあまりないのか喜んでいた。

それに比べ二人は……紫郎の声がすぐ近くで聞こえ、顔を上げると本当に目と鼻の先に紫郎の顔があるため……顔を真っ赤していた。

……だが紫郎は……

胸があぁー胸が当たるぅ！……ふうう〜クールにいこう、so c  
o o ーにいこう……ふう〜

違う意味で焦っていたwww

あれ……桃香も愛紗も顔赤いけど……

「顔、赤いけど大丈夫？」

「えー？ あ、はい……／／／（ちっ近いですよ、ご主人様／／／）」

「……／／／……コクコク……／／／（殿方にこんなことをされるのは初めてなのに、しかもご主人様に／／／）」

桃香は近すぎる顔に動揺している。



愛紗は首を縦に振っていて、顔はリンゴみたいに真っ赤になっていた。

心配そうに見る紫郎の顔にも胸がドキドキする二人……

「じゃ、いくよー！」

その言葉と共に、そこにいた四人は居なくなった。

まるで、一瞬で消えたかのように……。

第四話 方針決定 (後書き)

今日はこれぐらいで……… 展開的にはマイペースなので……… 何  
か要望があれば聞きます!!

第五話 腹ごしらえ (前書き)

今日は疲れていたのであまり真剣にできませんでした……すいませ  
ん……

## 第五話 腹ごしらえ

ふう〜着いたなあ！」

案外簡単に縮地はできるものだなWWW

まあこれもこの体のおかげだな。

「ご主人様！今のはいったいなんですか？？」

「そうです、今のはいったい……」

「なんなのだ〜」

……やっぱりこうなりますか！

「今のは縮地っていう移動法だよ」

「…縮…地…??」

いきなり言われても困るよな……

「そう！つまり早く移動する方法って覚えとけばいいよ」

「……あれは……私にもできますか……？」

んん…どうなんだろう…？

俺はこの体で出来たようなもんだし……

でも足に気を集めて蹴る感じだから……まあ努力すればできるだ  
ろwww

無事に着いた事も兼ねて、後で神様に連絡を取ってみよう。

「できると思うけど…（多分）……なんなら教えようか？」

「本当ですか？ぜひ、教えてください！」

すごい眼差しで見てるうううういい目をしているね。

「俺も修行を兼ねてやるけどいいかい？」

一緒にやれば効率が良いしね。

「はい、宜しくお願いします」

「うん、ヨロシクね」

紫郎は満面の笑みで受け答えした。

「／／／（殿方の笑みとはあんなにも綺麗なんでしょうか／／／）」

愛紗はあまり男性と触れ合わないので、紫郎の笑みにやられた。

「愛紗く顔真っ赤なのだあ〜」

「本当だあ〜愛紗ちゃんお顔真っ赤だ〜（あんな笑顔されたら私も  
真っ赤になっちゃうよ／／／）」

またまた四人で和んでいた。

「それじゃあ街に入ろうか」

「「「うん」そうですね」「なのだあ」「」」

うん、「元気があって良い事だ。」

……

……

……

うおおお〜昔の街はこうなっているのか……！

なぜだか好奇心が疼く〜。

さてさて……街に着いて飯屋に向かった俺たちは……

「お〜い桃香、これっていくらぐらいになるんだ？」

「う〜ん……これはやばいかも」

「そうですね……鈴々、今日はあまり食べ過ぎるなよ」

「分かったのだ」

と言いつつ目の前には空の器が沢山あるんだが？

「…時既に遅し…じゃないのか？」

「大丈夫です … 鈴々ちゃん、それとあと一皿だけだよ？」

「オイオイ、やっぱりギリギリかよ！」

「まあ…もし足らなかつたら、俺が創り出すつもりだがな」

「いゝやゝ、それは犯罪だと思いますが……」

「はゝい…おばちゃん、杏仁豆腐一皿追加なのだゝ」

「そして早ッ！マジで食う気が！」

「呆れるぜ……」

「ふう〜で、これからどうする？」

「そうですね……まずは近くの太守の下へ行つて志願兵…あわよくば将として一時的に召し抱えてもらうしかないでしょう……」

「だな、まだ俺達にはこの国は愚か、この街も守れる力はないからな……」

「でも俺の力を使えば、世界も手に入れられると思うがWWW」

「この近くの太守…誰かいたっけ？」

「いや、俺に聞かれても…」

「俺はまだこの辺の地理は知らないんだが？」

「とりあえず、その人を探して会ってみなきゃ何にもならないのだ  
…あ、おばちゃん、ごちそうさまなのだ」

早ッ、もう食ったのか……噛んで食べてるのか……？

「はいよ」

「あ、お代はこれで……」

「え〜とと……ちょっと足りないねえ」

おい、桃香！足りるんじゃないのかよ。

「え、足りないあ……えつと……」

「……まあいいさ、厨房から聞いてたよ。あんた達、これから太守様のところに行つて戦うんだろ？それも人助け、戦乱の世を終わらせるために……あんた達みたいなのがいてくれたらあたしらみたいないな民の生活も助かりそうだし、期待してるよ！」

何という地獄耳……

だが、助かりました、このご恩は一生忘れません。

「あ……ありがとうございます」

「／／／……この辺りの太守様は公孫贄様だ、頑張んなよ／／／」



ありやくどうしたのか？

……顔を真っ赤にして……？？

まさか俺の笑顔に……？……………そんなわけないか……

いゝやくあなたの笑顔のせいですよ！

それにしても歳の差関係なく、被害をうけているな……

紫郎の笑顔は誰もを魅了する

それにしても何から何までなんていい人だ……

やべ、泣きそう……………あのおばちゃんに良い事がありますように

「…あ！」

「どうした、桃香？」

「公孫贖って…確か白蓮ちゃん、この辺りに赴任したって言ってた」

……………真名ってことは親友だろ忘れてたのかよ。

「…もっと早く思い出せよ…まあ、桃香の知り合いなら何とかなるだろ、早く行こう」

「…はいつ！」  
「…応なのだ」  
「…」

第五話 腹ごしらえ (後書き)

今回は公孫贄と趙雲を出して、ついに戦いに入りたいと思います！

なんか今日は疲れたので…ゆっくりやります！後一話は書いて終わりたいと思います。

第六話 新たな出会い ( ) (前書き)

疲れた……！

## 第六話 新たな出会い（ ）

その後は俺達は公孫贄の城までやって来たわけだが…

「何者だ！」

門番に止められている。

「えっと…この城の太守様に会いに来たんですけど…劉備が来たと伝えてもらえますか？」

「怪しいな…本当に客か？」

「昔からの友達なので分かります」と

「ふむ…嘘だった場合には承知せんぞ」

ああ〜こいつ桃香に手を出すなら俺が許さないぞ！

ツカツカ…

「はふ〜…怖かったあ〜…」

「大丈夫だぞ、桃香…俺がそばに居てやるから何も心配することはないぞ もちろん愛紗や鈴々もねえ！」

紫郎は優しく微笑みながら自分の本心を言った。

「ひゃい／＼／＼（ご主人様あ！そんな恥ずかしいことを笑顔で言わ

れたら…… / / / ……」

桃香は恥ずかしくて嘔んでしまったが内心は嬉しさでいっぱいなのであった。

「私もご主人様をお守り致します… / / / (なんだかオマケみたいな言われ方ですねえ、桃香様が羨ましい……)」

愛紗は桃香にちょっと嫉妬していた。

「鈴々も紫郎お兄ちゃんの事守ってあげるのだ〜 (やっぱりお兄ちゃんはいいい人なのだ〜)」

鈴々はいいお兄ちゃんと改めて認識した。

タッタッタ…

「お会いしてくださるそうだ、ついてこい」

「良かったあ〜…」

会わせてくれなかった乗り込んでいたけどなあ W W W

………

………

………

「桃香、久しぶりだなー！」

「白蓮ちゃん！久しぶりだね。」

流石女の子……久々の再会でできて楽しそうだな……つつつか公孫贄も可愛いな……

「桃香、今までどうしてたんだ？全然連絡取れないし心配してたんだぞ？」

「んとね、あちこちで色んな人を助けてた。」

「……それだけ？」

「うん、それだけ。」

公孫贄が思いつきり呆れているぞ。

「……はあーちょっと待て桃香、そんなことばっかやってたのか？」

「う、うん……」

「どっして……？」

「……私どこかの県に所属して、その周辺の人たちしか助けることが出来ないっていうの、イヤだったの。」

いい信念を持っている……俺もそれに答えないとイケないな。

「だからって、一人で頑張ってもたかが知れてるだろうに……」

「そんなことないよ？私にはすっごい仲間達がいるもん それに…」

桃香がこちらをチラチラ見てくる??

とりあえず笑顔でお返し

「／／／」

桃香はいきなりの奇襲に赤面してしまった。

「んん？??で、桃香が言ってるのはこの3人の事か？」

「そうだよ 関雲長、張翼徳、それに天の御遣いの櫻井紫郎さん」

「天の御遣い？この辺りではかなりの噂になっていたけど…本物か？（それにしても…／／カッコいい男だなあ…／／）…」

公孫贄の顔が赤いような…？

公孫贄は紫郎の容姿に頬を染めていた。

「本物だよ！」

「ふん…」

うう、ジロジロ見られると何か照れる／／／…お返しに笑顔を…

「／／／…うう…／／／（なんだ…あの男の笑顔見たら胸がドキドキする／／／）…」

やっぱり顔が赤いような？…？

「もしかして白蓮ちゃん、惚れちゃった？」

「な、なにを…／＼言うんだ？桃香！（確かに…あの男を見た  
ら胸がドキドキすんだが…／＼…これは惚れたのか…／＼）  
……」

公孫賛は自分の中に駆け巡る感情を整理していた。

「惚れてくれたら、嬉しいねえ！まあとりあえず櫻井紫郎です。  
以後お見知りおきを！」

紫郎は公孫賛に近づき……公孫賛の手を取り…手の甲にキスをした。

「「ええ〜！」」

「??.?」

桃香や愛紗は驚いているみたい。

鈴々はこの行動の意味があまり分かってないみたい。

「なあ／＼／！」

やっぱり驚くよなあ W W W

「な、何をしているのですか??ご主人様あ……」



愛紗、そんな剣幕で青龍偃月刀せいりゅうえんげつとうを構えないでくれ……

「そつだよくなにやってるのかな……?」

桃香も剣を抜こうとしないでくれ……

「何をしているのだ??」

鈴々は分かってなさそう……

「こ、これは挨拶だよ!! そう、挨拶! なら桃香達には後で唇にしてあげるよつか?」

「……………えっ／＼／」

「?????」

桃香と愛紗は顔真っ赤にして、鈴々は意味不明って感じになっていた。

「ゴホン……………ちょっといいか……?」

あつとついつい話しに夢中になってしまっていた。

「どうした? 公孫賛」

公孫賛は一瞬暗い表情をしたが……

「ああ、その……だな……………私のことは……白蓮と呼んでくれ!」

「……………へえ…？でもそれって真名なんじゃ？」

「いいんだ……………おまえには真名を呼んで欲しいんだ／＼（こいつには真名で呼んで欲しい／＼……………な、なんだこの気持ちは…／＼）……………」

まだ白蓮は自分の恋の気持ちに気づいていなかった。

「分かった、なら白蓮って呼ばしてもらおうよ！そしたら俺のことは紫郎と呼んでくれ！」

俺はできるだけ良い笑顔で応えた。

「うん！あ、ありがとう……………紫郎…／＼／」

ぐはっ！まさかこんな表情ができるとは……………

紫郎は白蓮のその表情にキュンとしてしまった！！

……………愛紗達は「ライバルが増えたか……………」っとジッと見ていた！

「…で、だ…桃香、本当の用は何なんだ？ただ会いに来たって訳じゃないだろ？」

そうだったよ、のんびりしすぎて、危うく本来の目的を忘れる所だった。

「うん、盗賊退治してるって聞いて、お手伝いしようかと思って」

「おお、助かる！兵はいるが、指揮できる人間が少なくて悩んでた

んだ」

「皆すっごく強いよ、保証するよ!」

「桃香がそういうんなら安心なんだろうけど…本当か?」

仲良しだなwww…あれあの人…

「おやおや、伯珪殿にはその2人の力量が見抜けませんか?」

青い髪のこれまた美少女…って趙雲だなあ!あいかかわらず挑発的口調だなあ!

「そういうそっちは力量が分かるのか?」

「当然。少なくとも後ろの2人は只者ではないな」

さすがだあ…いい洞察眼を持っている。

「そういう貴女も腕が立つ…そう見たが?」

「鈴々も思っただけ」

さすがは武人同士、本能的に強いと分かるのだな。

「…白蓮、あれ誰ですか?」

「ああ、あれはうちの客将で…」

「公孫贄の客将?ってことはこの時期なら…趙雲か?」

「!?!?…貴方は何者だ？」

「何で分かったんだ」

それは俺はこの世界を知っていますからWWW

「ご主人様は天の御遣いだから」

「まあ、確かに、天から来ました！」

あまり滞在しなかったけど、あそこは天の国だろ……多分……

「成る程：本物の天の御遣いかどうかは知らんが、そちらも油断ならぬ人のようだ！（それにしてもなんと神々しい！それになんて綺麗な顔、瞳、髪、こんな殿方が天界にはいるのか！……ふっ！カツコいいなあ／＼／＼）」

趙雲も表情には出していないが、紫郎の魅力に惹かれていた。

「そうですか：自分は櫻井紫郎です、以後お見知りおきを…」

趙雲の手をとり、また手の甲にキスをした。

「!?!?!…／＼／＼」

「「「「あつ！」「」「」

また愛紗達驚いてるよWWW

……なぜ白蓮も？

「…なつ、何を／＼／」

「挨拶だよ！挨拶！」

顔真っ赤にしちゃって……趙雲もウブだなあ（普通の人とは初対面の人にしない！）

「ゴホン」趙雲、紫郎話を戻すがいいかな……？」

白蓮の後ろに修羅が見えたような……気のせい……気のせいだよな……？

気のせいなんかではありません

「「どうぞ」」

趙雲とイキびったりじゃん！

「ああ、桃香の力は知ってるし、他の2人に関しても趙雲が認める位だからな…不安は残るが、今は他に人物がいないんだ、力を貸してくれ」

「もちろんだよ」

是を気に能力を把握しよう。

「私、たくさん頑張っちゃおうよ！」

なんか……和む。

「…で、早速なんだが作戦は？こつちと向こうそれぞれの人数、周辺の地形も教えてくれると助かる」

「ああ…こつちが約三千、向こうが約五千だ。向こうの拠点は谷に挟まれてる」

「兵数に差があるな…ここは策を使うしかない…谷の上に弓兵、出口の側に伏兵、正面からは本隊兼圀だな…兵の編成は弓兵500、伏兵1000、本隊1500…これでどうだ…？」

桃香達はすぐに策を出してきた紫郎に驚いていた。

紫郎というと……

ふう〜、これはゲームで鍛えた知恵は伊達じゃないなあ！！

ゲームでやっていたことを実践しようとしていた。

「ご主人様って頭良いんですね！」

瞳をキラキラさせながら紫郎を見ている。

「とても頼れる感じがするのだ〜」

鈴々も目を輝かせながら紫郎を見ていた。

「ご主人様、流石です！（ご主人様は知略に長けている御方なのか…武はどれほどのものなのか…）」

愛紗は紫郎の知略に感動した反面、武の方も気になっていた。

「ほうとう……中々……（この人なら我が命を預けるに相応しい人かも  
しれない……いかん……まだ決まったわけではない……とにかくこの  
戦で見定めさせてもらいますよ）……フフツ……」

妖艶な目つきで紫郎を見ていた。

だが……紫郎は気付く事はなかった。

「凄いな／＼／＼……なら、それでいこう、将の配置は？」

白蓮は惚れ惚れしながら紫郎を見ていた……

……

**第六話 新たな出会い ( ) (後書き)**

次こそは戦闘シーンを出します。

今回の結構長く書いてしまいました。



主人公詳細設定 ( ) (前書き)

すいません。

今更ですが、ちゃんとした設定を！

## 主人公詳細設定 ( )

名前：櫻井 紫郎 (さくらいしろう)

性別：男

年齢：17歳

身体的特徴

髪：金色、腰まで伸びてる。

瞳：真紅

身長：190?

体形：痩せマッチョ。筋肉が目立つほどではない。

( モデルはDies iraeのハイドリヒ卿 )

性格：黄金の長髪と瞳を持ち、常に気品に溢れた振る舞いをして  
いるが、親しい者には明るく友好的な人間でいる。戦闘時は性格が  
変わる。特に女性には非常に優しい(自分の容姿を自覚しているの  
に優しく接するため女性は顔を真っ赤にしてしまう。)

嫌いな奴は徹底的に叩き潰しその後で調教する。自分の仲間(女性  
陣)に手を出す奴は誰であろうと制裁を下す。

パラメーター (Fate風)

【筋力】 EX 【魔力】 EX

【幸運】 EX 【耐久】 EX

【敏捷】 EX 【宝具】 EX

【保有スキル】

気：EX

神の体のおかげで無限の気。

肉体強化等幅広い応用性を持つ。

気配察知：EX

気の応用により相手の気を感じ取り場所を察知することができる。

気配遮断：EX

気の応用により自らの気を抑え気配を察知しにくくさせる。

魔力：EX

どんな魔術、魔法を唱えても減る事がない。（死者蘇生可能）

アニメ、ゲームの技可能

運命：EX

自分に上手くいくようになってゆく…（回りも巻き込まれる）

特に女性へのフラグ乱立が勃発する

耐久：EX

神の体なので、一般人には傷一つ付けられない。

神同士の戦いになれば、それなりに負ってしまふ。

敏捷：EX

人間の目にはまったく映らない、でも自分で速度を制限できる。

宝具：EX

この世のすべての物を使える。（触ればどうやって使うのかも分かる）

## 創造・想像

自分が思い描いた物はなんでもできる（ただし生命を創るのは無理ですから）

（金ピカ王の王の財宝もできるゲート・オブ・バビロン）」

天然たらし

これは常時発動している。

見た目が見た目でそれでも充分モテるのだが……

温厚で優しく誰にでも好かれやすく、器の広さや器量良しなのが……抜けている所もあり、そこがなぜだか女性にはグッと来る。

意中の相手だけではなく、男女関係なく惹きつけてしまい、崇拜されてしまう。

種族を問わずフラグを立ててしまう。

その分他の女性の嫉妬心が倍増し、倍返して何かをさせられる。

## 技能

オールラウンダー：触ればあらゆる武器を熟練者並みに扱える。状況に応じて対応の仕方も変わる。

神眼：神の目、何もかもすべてを見据える目、幻術、物理術を使ったりもできる。

無限倉庫：亜空間にある倉庫、自由にものを出し入れ出来る。

中は時間の概念が無いため、食べ物を入れても腐らない。

ネタバレ

主人公は元々武術をやって、それなりにできる男。  
だが高校入学してから腑抜けになってしまい、やることもなかった  
ので片っ端からゲームや漫画、アニメ、特撮を漁ったことで、一応  
オタクになってしまった。

主人公詳細設定 ( ) (後書き)

なんか物足りないような……

後台詞の前に名前いれないようにします。

## 第七話 賊討伐（前書き）

すみません。いきなり書き方変えてしまい。

本当に……小説を書くのは難しいですねえ……

## 第七話 賊討伐

さて……どうするか……これが初戦闘だからこの神の体、能力を確かめますか……

「まずは、俺が突っ込む、適当に切り上げる、追尾してきた敵をよつてたかって多方向からタコ殴り……でいこう（だが俺の力で殲滅させられそうな気がするが……）」

「ご主人様あ！そんな無茶な……」

……ですよねえ！！

「く……っ、ははははは！面白いですねえ！私も連れていって貰えるのですかな？」

「もちろんだよ！」

「当然、武人として血がたぎる……それと、星で結構。貴方は強く、気高く、面白い……我が真名を預けるのに十分な御方だ」

これは……嬉しいじゃないか！

「ありがたく呼ばせてもらっよう……なら行こうか！ニコッ」

「／／／／／（なんですか／／／あの笑顔は／／／）」

星は戦闘前だというのに紫郎にやられてしまった……



「ご主人様、行くなら私も……」

「鈴々も行く〜!」

誰かには残って部隊の指揮をして欲しいから……んん〜……

「ん〜……じゃ愛紗、一緒に行くか?」

「は……っ、はい、ご主人様!」

「鈴々も行きかけたのだ〜……」

「分けた兵の分の将は残さないといけないし、鈴々なら何かあっても皆を守るだろ?頼りにしてるよ。これが終わったら撫でてあげるよ!」

「にゃ〜……なら頑張るのだ……」

よし、全て思惑通り……

「じゃ、白蓮は本陣で鈴々は伏兵、桃香は弓兵の指揮を頼む。俺らが退いて敵が出てきたら叩いてくれ」

「分かった」「任せて」「応なのだ〜!」

左から白蓮、桃香 鈴々返事をしてくれた。

「んじゃ愛紗、星、行くぞ!」

「「御意!」「」

.....

さて……… 賊共我が力の実験材料になつてもらおうか………

「くそ虫共おー、出てこーい！」

あれ〜こんな呼び方でよかつたかなあ………？

「何者だ」

「誰がくそ虫呼ばわりしやがつて…許せねえ！」

「お前ら、思い知らせてやろうぜ！」

ウオオオオオ！

「出てきたか………」

さてと、まず何からいこうか………

「ご主人様、さすがに今のはどうかと………」

「まあ、出てきたのだから良いとしようではないか、関羽？」

「今より共に死地へ赴くのだ、愛紗で良い」

「なら私も星で良いぞ」

うん！こちらの二人も仲良くなっているみたいだ……さて、俺は……

紫郎はまた約束された勝利の剣を創造し装備した。  
エクスカリバー

「あれ……ご主人様……いつの間に剣を……？」

「さっきまで何も持っていなかったような……？」

二人とも驚いてるなWWW

「これは俺の能力だよ！」

「……能……力……？」

「それはいつたいなんですか？」

説明が面倒だな……

「その説明は後でしてあげるよ！今は……目の前の敵に集中！」

話してる間に賊が接近しているな……

「各々軽く戦い気を見て退くぞ！」

「「御意！」」

さて……飛ばしていきますかWWW

.....

（愛紗、星）

二人は背中合わせになり、向かって来る敵を次々に切り伏せてゆく……敵も負けじと向かってくるも……二人の武勇の前には屍になつていくしかなかった……

「ふん……まさかこんなにも安心して背中を任せられるとは思わなかったぞ！」

また一人と斬つてゆく星……

「それは私も同じ気持ちだ」

それに便乗する愛紗……

二人は戦場だというのに笑い合っていた。

「それにしてもお主の主は凄まじいな！（戦う姿も凛々しくてカッコいいではないか／＼／＼／＼）」

星は戦いながらも内心ドキドキしながら紫郎を見ていた。

「……私もさすがに驚いている……（ああ／＼もう／＼ご主人様

はなにをやっても惚れ惚れします／＼／＼／」

愛紗はうつとりしながらも戦っていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

（紫郎）

俺は辺りの賊を斬りまくった……すごいなあ……この体……相手の動きがスローモーションのように見えるぞ！それに剣をいくら振っても疲れやしない……本当にすごいぞ！

さてと次の段階にいきますか……俺はゲイボルクを創造してみた。

おお！本当に赤い槍だあ！すげえ！禍々しい槍だな……今の俺は右手にエクスカリバー、左手にゲイボルクという組み合わせ……見た目からみて、すごい装備だあ！

内心感動していると……

「余裕かましてるんじゃないぞ！」

一斉に賊が襲い掛かってきた……

「……………」

紫郎は無言で賊を見ていた……すると……ゆっくりと倒れていった。

「な、な、何が起きたんだ!!」

賊共は慌てだした。

紫郎はただ単に槍で刺し、剣で斬ったという動作をしただけであった……だが彼の動作を誰も目視できはしなかった……紫郎が速過ぎるのだ!

「どうした!その程度なのか……?期待外れにもほどがある!」

余裕の笑みをみせて、敵を挑発する。

「やろつおー!ー!一斉に行くぞ!」

賊はまたもや一斉に仕掛けてきた……

「(またか……こいつらは学習能力はないのか?)」

呆れつつ斬れ伏せていった。

.....

よし……そろそろか!

「愛紗、星、退くぞ」

「「御意」」

上手くやってくれよ……

……

「着たな！」「来ました」「着たのだ」

三人はそれぞれ反応し……

「今だ！全軍……」

「突撃なのだー！」

白蓮、鈴々、ナイスなタイミングだあ！

「私達も行くよ、射てー！」

桃香もナイス援護！

「うわっ、何だ……」

「お頭、全方向から攻撃が……！」

「クソ、ハメられたか！構わん、突っ込（させるかあ！）だ、誰だ  
！」

あまり犠牲は出したくないのでね………エクスカリバーを地面に刺

し……ジャンプし……

「その心臓……貫い受けるうう！」

槍を相手に……

「ゲイボルクッ！」

……投げつけた……槍は一直線に相手に向かい、心臓の位置を突き抜いた。

「おまえ達の頭は、この櫻井紫郎が討ち取った！」

賊共は頭を失い、我先にと逃げていった……これで終わりか……

……

「……白蓮、残りは？」

「粗方殲滅した……私たちの勝利だあ！」

ふう〜よかった……本当に……

「作戦成功、つてとこか……」

「お疲れ様です、ご主人様」



「いやはや、先程の武勇は惚れ惚れしました」

褒められると……意外に照れるなあ……／＼／＼／

「ありがとう！星！みんなは怪我はないかい？」

「「「「ないぞ（ないですよ）（ないです）（ないのだ〜！）」」」」

それはなりよりだ……！

「さてと終わったことだし、私の城に招待しよう！派手に宴を開こうと思うのだが……来てはくれぬか？」

ここは白蓮の申し出を受けますか！

「ぜひー！ニコッ」

「／＼／＼ありがとう……／＼／＼」

あらら〜また顔を真っ赤にさせちゃって……

すると……後ろから殺気を感じ、振り向いてみたら……般若が居た……！！

「ご主人様……何いちゃついでるのかな……かな？」

「何をやっておられるのですか？ニコッ（黒）」

「主は何をやっておられるのです……………」

「お兄ちゃん撫でて！」

左から桃香、愛紗、星、鈴々……………桃香ひぐらしの竜宮〇〇になつて  
るよお！愛紗その素敵そつな笑顔が俺には怖すぎる……………星は普  
通だな……………鈴々君の無邪気過ぎる所好きだぞ、ちゃんと撫でてやる  
ぞ……………てか星…主って言わなかったか？

「星……………主って言わなかった？」

「言いましたけど……………何か？」

こつちが聞いてるのに……………

「私は主に心底惚れてしまいました……………それに……………／／／／／／」

「それに……………」

あれ……………？顔赤くない……………

「なんでもありませんよ！」

あつ！無理やり誤魔化した！

「さてと私の城に帰ろうか！」

はぁ〜まァーいいか……………

「そつだな！行こう（ガシッ）……か…？」

あ、あれ……肩を誰かに掴まれている……振り返ると……

「どこに行くの（ですか）？」

まだ怒っているのか………はあ〜

「これで許してねえ！」

桃香と愛紗に軽くキスをした。

「／／／／／／／／／／」

2人とも顔を真っ赤にして下を向いてしまった…

「『『『あぁあ〜』』』」

そついえば居たんだなあ………

## 第七話 賊討伐（後書き）

これからバイトとかで忙しくなってしまうので、更新が遅れる場合があるかもしれないので、そこはすいません。

感想とかドンドン書いてくださいねえ。

## 第八話 宴、決意の時

あの後は大変だった……

とりあえずその場を静めて白蓮の城に行き宴を楽しんでいた……

……そこから始まったハーレムの状態を聞かせてあげようWWW

……

「酒は美味しいなあ」

初めて飲むがなんだかんだで美味しい……まったく酔わないし……  
こうゆうのにも使えるなあ、神の体。

「あや、主はあまりお酒を飲まないのですか？」

「実をいうとこれが初めてだ！」

「どうでしたか？」

「美味だ」

本当に美味しいな。

「ご主人様、杯が空ですよ。どうぞ」

「ありがとう！桃香」

うん！やっぱり美少女がいてくれるお酒は格別だ。

「紫郎はいい飲みっぷりだね／＼」

白蓮か……ちょっと酔ってるな。

「ご主人様、また杯が空に……どうぞ」

「ありがとう！愛紗」

やっぱり美女とお酒は合う。

今の俺の状態は右と左に桃香、愛紗がそれぞれお酒を空になったら  
いれてくれる……ハーレムだあWWW  
白蓮と星は前で一緒に飲んでいる。鈴々は他の所行ってすごい勢いで  
食べている。

「桃香も愛紗も自分でいれるから、自分達も飲みなよ」

「私たちはいいですから、ご主人様は気にせず飲んでください（な  
んか妻みたい／＼）」

「そうです！ですから飲んでください（なんか妻が夫にお酒を注ぐ  
感じみたい／＼わ、私は何を思って／＼）」

桃香も愛紗も変な妄想してしまっていた……

ここは積極的に攻めてみますかWWW

「ふう〜ん……ご主人様の命令を聞けないんだ……ならあー！」

杯の中を一気に口に入れて……

「んん〜！！」

桃香と愛紗の口にそれぞれ流し込んだ……簡単にいえば口移し！

「ぷはあ〜！〜！どうだい……お味の方は？」

「／／／……お、おいし……かったです／／／」

ふふふ！二人とも顔を真っ赤にしちゃって可愛過ぎるよ。

白蓮に星は呆然としていた……すると……

「私にもやってくれ（くれないか）／／／」

ま、まさか……そうくるか……いいだろう、今日の俺は自重なんかしないぜ！

「いいよ！濃厚な奴をやってやるよ」

「／／／」

ウブだね〜！

（紫郎には恥ずかしさの限度が狂っている）

.....

そこからはキスの応酬だった。

白蓮と星に濃厚なの（ディープキス）をやったら、愛紗、桃香も「してほしい」言ってきたので.....しちゃいましたWWW!! みんな頬を染めて色っぽくて、危うく理性が飛びかけてしまいそうでした。

その後もキスしていたら.....みんな軽く意識イってしまいました.....なぜかと思って考え込んでいた。

.....

「そして今に至る!!」

もしかすると自分の唾液はなんかあるのかと思い、近くにいた女性に.....いきなりキスを試してみました!!.....唾液を飲ませる感じで.....そしたら.....

軽くイってしまっていた.....これは間違いない.....お、俺の唾液は相手を発情させるみたい.....いったいどうなっているんだ...? この神の体は.....

.....



ふう〜一人でお酒を飲んでいたら、桃香達が起き始めた……………みんな俺の顔見たら顔真っ赤にしちゃって、本当に可愛いなあWWWあら〜みんなが近づいてきた……………

「ご主人様！せ、責任取ってください／＼／」

「／／／」

「わたし、私もだ…／／／」

「もちろん／／／私もですよ！主／／／」

上から桃香、愛紗、白蓮、星……………って責任って……………なんですとおおー！！

……………

……………美味しく頂いてしまいました！！

みなさん発情しちゃって……………色っぽくて……………俺の理性も吹っ飛んでしまいました！！

（想像におまかせします！）

……………

色々ありましたが……宴から数日が経ちました。この数日間はこの辺の地理を把握したり、街に行き、子供達と遊んだりして充実した時間を過ごせました！

……でも……愛紗達が顔を合わせるだけで、真っ赤になり顔を逸らしてしまうのですよ〜確かに！確かに！あんな恥ずかしいことをしたらそうなりますが……逸らされるとなぜか悲しくなります（泣）……でも二日ぐらいでそんなのもなくなり普通に話してくれます、嬉しい限りですよwwww

……………

「ちょっと旅に行つて来る〜」

「「「ええ〜！」「」」

やっぱりwww

「ご主人様！また、いきなり何故ですか？」

「俺は……まだこの世界の事を知らな過ぎるから、だから行くことがなあ〜っと思ってるんだ」

「ですが……お金や食料の手に入れ方は分かるのか？」

「何とかなるだろう……」（多分）

「なら私が行きましょう」

星が名乗り出てくれた。

「私は主に仕える身……それに旅の経験もある、付いていこう」

これはラッキーだなWWW

「ですが……心配するな」えっ！

「愛紗達がいる場所が俺の帰る場所だから！絶対に帰ってくるよ（ニコッ）」

こんな俺を心配してくれるなんて……泣けてくる……

「はう〜／＼／＼（ご主人様の決心は固いようですね……この笑顔が見られなくなるのは残念です／＼／＼）」

ふう〜これで行けるかな。

「分かりました。必ず帰ってきて下さいね……」

「絶対だよー！」

「絶対なのだ」

愛紗も桃香も鈴々も心配性だな

「ああ、分かっているよ………それじゃあ行くところか！」

「御意」

こうして俺は旅を始めた………

やばあ……………白蓮に別れの言葉言っていないじゃん！

## 第八話 宴、決意の時（後書き）

お疲れ様です。

ちよつと展開を早くしてみました。

自分的には最初行く所は呉にしようと思います。

読者の皆様にお願ひなのですが、華雄の真名を募集したいと思います。唯一真名がないキャラなので……

**第九話　まずは呉の人たちに行こう！（前書き）**

更新遅れてすいませんでした。

ちよつと色々ありまして、まだこれからも更新が遅れる場合がありますがその所は我慢してください。

第九話　まずは呉の人たちに会いに行こう！

桃香達と別れて数日が経ち……………

「…ここが建業か、星？」

「ええ」

まず最初に孫策が治める建業に来てみました。

でも、この数日間は大変だった……………

なぜか？それは星が寝込みを襲ってきたり、襲ってきたり、襲ってきたり……………とにかく大変な数日間を送ったのだ……………

「とにかくだ！中に入ってみよう」

「主…誰に話しかけているのですか？」

「気にしないで」

というわけで…早速入ってみるか



かなり賑わっているな、  
おおーあそこに売ってる肉まん買ってみよ  
うWWW

ザワザワ…

「ん？何かあったのか？」おばちゃん肉まん二つ下さい」「

「行ってみますか？」

「そっちなあ……」「星、肉まんどうぞ」「ありがとうございます！」「

何かあったのか……あつこの肉まん美味しいなWWW

…お、あそこに雰囲気違うお姉さんがいるな、武将かな？ちょっと聞いてみるか…でもあの人見た事あるような…？

「ちょっと、その美しいお姉さん」

「ん…儂か？（んんゝなかなかの顔立ちだな）」

「ええ、一際目を引くお方でしたから…何かあったのですか？」

「…あれ…主、性格変わっておりませぬか？（私にもそうゆう言葉をかけて欲しいものです…）」

「はっはっは！お主、口が巧いのう　実は今賊が街の民を人質にとっておつてな…」

じーさんとばーさんが捕まってる…あつちには…また美人のお姉さん？雰囲気からして向こうも将か……あの人どこかで…？

……星が一人でブツブツ言っているが……まあいいか！

「自分がなんとかしてみますよ」

「出来るのか？」

「ええ……じゃあ行きます」

一瞬であいつらの後ろに行つて、ぶん殴つてやる。

「」「」「」「」

よしっ終了

美しいお姉さんの所に行くとは啞然としていた。

それはそうか……いきなり目の前の人が消えたら、驚くなあ W W W

「……お、お主何者じゃ？」

「旅の者さ……お姉さんは？」

「おお、まだ名乗つておらんかったか……儂は黄蓋、字は公覆じゃ」

そつだよ！この人は呉の重鎮、黄蓋だ W W W

「……祭、一体あれは何？」

さつき賊と睨み合つてたお姉さんか……つてまさか……

「儂もよう分からん……そこの旅の者がな」

「ふくん……貴方達、名前は？」

「姓は櫻井、名は紫郎。字はない」

「我が名は趙雲、字は子竜」

「そう…私は孫策、字は伯符よ（綺麗な顔に髪の毛しているわね）」  
「やっぱりそうだったか…この人が江東の小霸王か。」

「あなたが江東の小霸王か…」

「へえ、私の事知ってるのね」

「あなたは有名ですから」

「話を戻すが、そっちは何者じゃ？」

「まあ一部じゃ天から来たとか言われてるけど…ちなみにさっきのは走っただけだ」

「…まさか、あなたが噂の天の御遣い？」

なんか有名になっているなwww

「そうみたいです」

「なんと、本当におつたとは…」

「…まあ立ち話も何だし、うちに来ない？歓迎するわよ」

「じゃあ失礼させてもらうよ」

呉の人たちとも顔見知りになっときたいし……

願ってもない誘いで城に来たけど……城デカいな！

「雪蓮！仕事サボってどこ行っていたの！」

入った瞬間怒られたしwww

「ごめんなさい冥琳、ちょっとした息抜きよ、息抜き」

「次サボったら仕事増やすから」

「ちょ、それだけのご勘弁を……」

主従関係が変わっている……これはこれでもしろいなwww

「で、そちらの方達は？」

やっとこつちに気づいた。

「初めまして、櫻井紫郎です…あなたは？」

「私は周瑜、字は公瑾…あなたが天の御遣い？」

「一応そう呼ばれていますが…」

これは疑われてるな

「冥琳、彼らは我が呉の民を救ってくれた恩人よ」

「そうでしたね、我が呉の民を救ってくれて感謝する」

「儂からも礼をいう」

「いえお気になさらず困っている人いたら助けたい性分です」

「それでも何かお礼をしなければ…」

「じゃあしばらくここに居させて貰いませんか？」

「ここの辺の地理を把握しておきたいし、いつかのために呉とは仲良くしておかねばならないし……」

「それぐらいならまかせて！」

「じゃあお世話になります！」  
「ニッコ」

ここは印象のいいイメージをつけなければ…

「わかったわ、祭、部屋に案内してあげて（カッコいいとは思っていたけど、まさかあんな笑顔をしてくれるとは…：反則よ／＼）」

「……………（あんな男も世の中にはいるのだな／＼）」

「わ、分かり申した、では私について参れ（不覚にもドキッとしてしまった／＼）」

三人はそれぞれ内心で紫郎の笑顔にやられていた。

黄蓋さんの案内で部屋に行こうとしたら孫策さんに止められた。

「あっ、そうだ、私のことはこれから雪蓮って呼んでねえ！」

「ちよつと、雪蓮！」

またいきなりな人だなWWW

「いいじゃない、色々聞いてみたいし…：それに私この子の事気に入っちゃった」

「孫策さん、真名は神聖なものなん「分かったわ」…：ちよつと周瑜さん！」

「は〜い、決まりね！これからは雪蓮って呼んでね」

あの周瑜さんがいうんだからいいかな。

「分かりました、これからは雪蓮と呼ばせてもらいますよ」

「それでいいわよ」

「策殿が許すなら儂もだな…儂は祭じゃ」

「はあ…私は冥琳よ」

冥琳さんは苦勞しているなあ…

「主、私という物がありながら、また女性を落として……（本当に主は罪作りな人だ……だがそこに惹かれるノノノ）」

星がなんか言った様な気がするが……まあいいか。

「では参ろうか」

祭さんが案内してくれるみたい……



「二人は一緒の部屋でいいかのう？」

「いやすがあ」「はい！ぜひお願いいたします」……ちよつと星、落ち着け」

「主は私が嫌いですか（上目使い……）」

ちよい、それは反則だあ！

「分かったよ」

「では、祭殿案内を頼みます」

「わ、分かった（紫郎も大変だなWWW）」

そして星と一緒の部屋になってしまった……

**第九話　まずは呉の人たちに会いに行こう！（後書き）**

やっぱり大規模な戦いが少ないような……だから呉でちょっと大きい戦いを引き起こしたいと思います。

字の間違えとかあつ

たら言っして下さい。

第十話 呉の将との顔合わせ（前書き）

更新遅れてしまいスイマセン…

ちよっと色々予定やらバイトが入ってしまったので

## 第十話 呉の将との顔合わせ

はあ〜〜なんか異常に眠いな……疲れでも溜まっているのかな？

それよりさつき祭さんが「大広間に来てくれ」と言われて向かっている。

星とは何かあった…？

なにもなかったよ……本当だから！

ただ一緒に寝ただけだよ！

不埒な行為とかしていないから、その所よろしく

なんかすごい面々がいるな……それにしても全員綺麗な人だな……

「小蓮だけいないみたいね、まあいいわ」

「姉様：こんな朝早くから何事ですか？」

「眠いですう……」

「皆に紹介したい人がいてね……こっちが櫻井紫郎、それでこっちが趙雲よ。2人は私の客で紫郎は天の御遣い、私の婚約者候補だから2人ともしばらくうちにいるからよろしくね」

……あれ、俺の耳どうかしちゃったのかな？

婚約者という言葉が聞こえたような……うん 気のせいだ……きつと……多分……

「ちょっと、姉様！ いったいどういことですか？」

「だ……から婚約者候補って言ったのよ」

気のせいではなかったか……はあ、星が睨んでくるよ

「それはいいとして、というわけで皆も自己紹介して」

いいのかよ！

「納得いかないが……私は孫権だ（姉様が見込んだ男か）」

雪蓮の妹か、姉と違いしつかりものそうだ。

「我が名は甘寧だ（こいつできるな）」

凜としていて、堂々と身構えてるな……でもなぜフンドシ？

「は、はいっ！私は周泰です！よろしくお願いします！（髪の毛綺麗だな）」

忍者みたいな服装だな

「私は陸遜です（とてもカッコいい殿方ですノノノ）それにしても雪蓮様も隅に置けませんね、いつ知り合っただんですか？」

のんびりとした人だな……あれ顔が少し赤いような……それにしてもこの国の軍師の発育は化け物か！

「ちょっとね……紫郎は私のこと助けてくれたのよ」

「……聞いてないわよ？」

確かに、その報告忘れていたよな……

「言ってなかった？賊が街の人を人質に取って困ってたときにね、紫郎があっという間に皆倒してくれたのよ」

「凄かったぞ？紫郎が消えたかと思ったら賊共が倒れておっつな……」

ただ縮地をしたただけだ

「とりあえず私と冥琳と祭は真名を教えたく、皆も教えなさい」

それはダメだろ……

「ちょっと！そんな神聖なものすぐ教えていいのか？信用してからでいいよ」

「え〜とお…私は穩です」

「私は明命です！」

この子達人の話聞いてたの！？

「いいのか？」

「だって悪い人じゃなさそうですし、雪蓮様や冥琳様が認めたらいいかな〜？って（それにあなたには真名で呼んで欲しいですし／＼／＼）」

「私もです」

「…分かった、2人ともありがたく呼ばさせてもらおうよ」

こんな簡単に真名をもらっていいものか……

「…私はまだ認められん、櫻井紫郎、私と手合わせしろ！」

「ちよつ（いいよ！）紫郎？」

「それで納得してくれるなら」

また試したいことがあったしな

「それなら手合わせはいいから、先に賊の討伐お願い」

「甘寧、討伐の後でもいいか？」

「かまわない」

なら先に賊共に新しい技をお見舞いしてやるぜ

「今回の指揮は蓮華に任せるわ、補佐として穩、明命、思春を付けるわ…後紫郎付いて行ってくれないかしら？」

「姉様！それは客人に失礼ですよ」

「孫権、大丈夫ですよ！自分も行くつもりでしたから」

「もちろん私も着いて行きますよ、主」

「なら決定ね」

これで行けるな

「賊の数は500〜800という報告が入っている、1000の兵を預けよう、だが賊共は砦を築いており中々に連携がとれているみたいだ」



「くれぐれも油断はするなかれ」

「じゃあ1刻後に出陣してください、では解散」

さてとちよつと体を動かしますか

「星、ちよつと体を動かしたいので付き合ってください」

「分かりました」

（雪蓮）

みんなが解散した後、私と冥琳と祭だけ残っている

「雪蓮何を考えてるの？」

やっぱり冥琳には隠し事は無理か…

「紫郎にはこの国に残って欲しいのよ、だって一目見て只者じゃないと思ってるもの」

「それは策殿と同意じゃ…それにいい目をしていた」

祭もやはりあの真紅の目はすべてを見抜いているような目、それになぜだか紫郎の優しさが見えた。

「それは私も思った、紫郎は将におさまる存在ではない間違いない王の素質を持っている」

冥琳にここまで言わせるなんて…

「それに私は王としてではなく、女として紫郎が欲しいのよ」

私は紫郎のことが好きになってしまったもの

「策殿、それは私とて同じですぞ…私も紫郎のことが気に入りました」

「はあーじゃあ私が紫郎を滞在させるために何か策を練りましょう」

さすが冥琳

「それじゃあ頼むわよ」

く穩く

冥琳様に聞きたいことがあったので、大広間に戻ってみたら……まさかあんな計画を作戦を立てていたとは、これはおもしろそうですねwww

私も紫郎さんに残って欲しいですし……えっ、理由ですか…それはですね……一目惚れですよ

あの真紅の目で見られた瞬間……体の奥から何かが込み上げてきて私の心臓もドキッと反応して、顔が赤くなる感じがしていて恥ずかしいですく

あれく私誰に言っていたのでしょうか？

とにかく紫郎さんには居て欲しいですねえく

あっ！いいこと思いつきました……ウフフ……

ゾク……

なっ、なんだ今の寒気は!?

いやな予感がする……

「主!大丈夫ですか?」

「大丈夫だよ」

今は戦の事に集中しよう。

## 第十話 呉の将との顔合わせ（後書き）

自分穩好きなものでして…ですのぢょい穩の登場回数が多くなる  
かもしれないので！

要望で「あのキャラの登場を多く」とかいつのがあれば言うてくだ  
さい。

## 第十一話 我が実力を見せてあげよう(前書き)

相変わらずの駄文ですが、読んでくれてありがとうございます。

やはり更新のペースは上がらなそうです。

その所ヨロシク御願いたします。

字の間違えやこの文章はこうした方がいいという感想はどんどんしててください。

## 第十一話 我が実力を見せてあげよう

あれから星と少し手合わせして体を動かして、軽く汗を流していたら……

孫尚香という少女に会った

雪蓮に似て天真爛漫な性格だったなwww

なぜだか、すぐに真名を覚えてくれたよ……「小蓮、シャオって呼んで」言われたので、ちゃんと笑顔で言いました。

ありやくなぜだかそっぽ向かれてしまいました……でもちよつと顔が赤いような……？

さて今は賊がいると皆に向かって進軍中ですが……ですが……

なぜか……穩が一緒に馬に乗っているのですよ!??



なんか「馬に乗れないんです」とすごい笑顔で言ってきたので、  
ついつい乗せてあげちゃいました

女性が困っているなら助けるのが普通ですよねえ

(この時、穩は後ろを向いて握り拳を作っていた)

でも待つてよ……普通乗れるよな…？

まあいいか！

「主、帰りは私を乗せてくださいねえ」と言っでこちらを不気味な  
笑みでドス黒いオーラを放ちながら見ている。

「あ、ああ……」

あれは怖いなあ……

ていうか…それをクスクス笑いながら星を見ないでくれよ、穩……

(先手必勝とはこのことですなえ)

(ちっ、主に悪い虫が付いてしまった……早急に手を打たねば！)

(さて、星さんも馬鹿じゃありませんから、こちらも策を考えとき  
ましようか……)

(むうう……)

星と穩は賊との戦いより紫郎の取り合いに必死であった……ていう

か戦に集中しろ！

「貴様ら！これから賊討伐だというのに何を考えておる」

ほら、怒られちゃったじゃん……

「すみません、俺から言っとくので……」

「頼むぞ」

ピリピリしているな

「ほら二人とも今は戦に集中してくれ」

「はい」「承知しております」

さて皆も見えてきたし……土煙が見えるな

打って出て来たのか……数がこちらより少ないに出てくるとは愚の骨頂。

それとも何か策でもあるのか？

「迎え撃つぞ！勇猛なる孫呉の兵たちよ！その命を燃やし尽くし、誇りと共に前進せよ！全軍！突撃！」

さてと働きますかWWW

（孫権）

（まだ真名を言っていないので孫権とします）

はあ〜〜姉様もいきなりなんだから…

それにしてもあの紫郎という男、纏っている物が違う…あれはまるで……姉様の真剣な時に纏っている覇気を感じさせる…

だから姉様はあの男を気に入ったのかもしいないな

「お姉ちゃん〜」

あれは小蓮か…なにかあったのか？

「お姉ちゃん、紫郎に会った？」

「会ったがそれがどうした？」

何を焦っているんだ？

「紫郎っていい男だと思わない？」

「えっ」

いきなり何を言っているんだ。

「だからあゝ紫郎っていい男だと思わない？」

「わ、私には分からないわよ……」

男性との面識なんてあまりないし、そんなことを意識したこともなかった……

「お姉ちゃんは分かってないな」

……ちょっと……ムカつくわね……

「それより私は戦の準備があるからまた後でね」

「ぶう〜ぶう〜」

なにをそんなにいじけるんだか？

……

今は順調に進軍をしているんだが……

なぜ奴の後ろに穩が乗っているのだ？

それよりもあの趙雲という奴の殺気がやばいな。

まったく何を言い合っているんだか……

「思春、ちよつと落ち着かせてきて」

「御意」

はあくまったく戦の前だというのに……

「伝令」

斥候から伝令か。

「どうした」

「はっ、こちらに向けて賊共が向かってきます」

こちらからでも分かるな。

「分かった、下がっていいぞ」

「はっ」

こちらでも黙視した。

私は剣を鞘から抜き……

「迎え撃つぞ！勇猛なる孫呉の兵たちよ！その命を燃やし尽くし、誇りと共に前進せよ！全軍！突撃！」

あなたの实力を見てあげるわ…紫郎…

俺は今ケルトの光神ルーの（轟く五星「ブリューナク」）を所持して戦っている。

この槍は凄過ぎる……まるで意思を持っており、投げると稲妻となつて自動的に敵を貫く、所持していれば必ず勝利をもたらすという…

チートですねえ〜

ある程度敵は倒しましたが、それでも賊共は皆に逃げてしまいました。

こちらの損害は極僅かでしたからよかったです。それでも疲労感があるみたいですね。

今は皆の近くに待機状態でいます。

「敵はまだ抵抗を続けるみたいだな」

「だがあまり時間は掛けたくわないですね」

「はい、こちらの兵の疲労もかなり溜まっているから蓮華と思春と穩が悩んでいるみたいだ。」

「すまんがちょっといいか？」

「どうしたんですか？」

「ここはあれを試しますか。」

「ちょっと試したいことがあるので、一人であの砦に行くから」

「」「」「」「はあ」「」「」

やっぱりこつこつゆう反応か〜

「ちよつとあなた何を考えているの」

「貴様は馬鹿か？まだ賊共はかなりいるのだぞ」

「そうですよ」

「危険過ぎます」

「主、なら私も連れて行って下さい！」

う〜ん〜あの技はあまり近くに居ると危険だからなあ。

「ちょっと離れた所から見えてくれるなら、来てもいいよ」

「承知しました、ですが危険になりましたら、そんなことは無視して行きますので（主は私が守るのだ……そして主の寵愛を受ける……）」

「分かったよ」

星の忠義ぶりには感服だねwww

（紫郎は忠義心と恋心の違いを理解していなかった）

「おい、貴様人の話を聞いていたのか？」

ちょっと孫権が怒ってるな。

「気にしないでくれ、もう俺は行くと決めた」

「そんな勝手が「けして近づくなよ」「おい！」

早く終わらして寝よう。

紫郎は砦の方に向かっていった。



く甘寧く

まったくあの男は何を考えているのだ。

まだ敵はかなりいるというのに……死んでも知らないぞ。

「紫郎さんは何を考えているのですかねえくく」

「そうだな、あの男は本当に何を考えているのか分からん」

それぞれがああ男の考えていると……ドゴゴゴーンッ

砦の方向を見てみると……砦が消し飛んでいた。

く星く

また主は何を考えているのか……

「星、ちょっと離れていてくれよ」

私はちょっと離れましたが……主の手には剣というより円柱状の刀身を持つ突撃槍のような形状の物を持っていた。

一目見て、あれは「やばい」と思えた。

あの剣か槍か分からない物からは禍々しい何かが出ている。

天の人はあんなことができるのか……だが私は……

……私はもつと主は何者かなのか知りたくなった。

この辺でいいかな。

砦よりちょっと離れた場所、多分弓が届かない距離ぐらいかな。

「星、ちょっと離れていてくれよ」

今から出す物は一般人には危険すぎるものだからな。

「王の財宝」内にある宝具を取り出す。

「 出番だエア。初めましてかな、これからよろしくとだけ言  
つておこう……おまえも不本意だろうが、なに、これも先達として  
の務めよ。真実を識るものとして、一つ教授してやるがい……！」

この剣は乖離剣エアという簡単に説明するとFateの、「〇ぴか  
、」「〇様」と呼ばれる

人のだ……このセリフカッコいいwww

それは唸りを上げて魔力を高めていき、やがて世界を切り裂く剣と  
なる。

「『天地乖離す開闢の星』エヌ・マ・エリシユ！……！」

ドゴゴゴーンッ

これはやり過ぎた……

砦が吹き飛んでしまったwww

すげえークレーターができています。

「主、あ、あれはいい……！」

星もやはりあれには驚くか……

「あれは借りた武器だよ」「

「あ、あれが武器なのですか？」

「ああ、禍々しすぎるがな」

「主はいつたい何者なのですか？」

やはり気になるよな…

簡単に説明してあげようか…

「実は……………」

この世界に来たことと神の様が知り合いのことを教えてあげた。

後は身体的特徴や能力を教えてあげた。

「なるほど、だからあんなに強かったのですね」

「すまん、ずっと黙っていて…」

「いえ、お気になさらず…」

やっぱり驚くよなWWW

「失望したなら、もう付いてこなくても「主！！」「んんっ？」

「私が仕えたいのは主、一人だけです…：どんなことがあるうとも私は主に付いて参ります（それにもう私はあ主のものですから／＼／＼）」

「

「あ、ありがとうな、星」

本当にありがとうな……星

……

少し時間がたつたら孫権達が来ました。

やはりかなり警戒しているな……

「紫郎さん、これはあなたがやったんですか？」

「ああ……」

そりゃ、誰でも驚きますよね……砦が吹き飛んだら……

「すまなかつたな、身勝手な行動を取ってしまったって」

「いや気にしないでくれ」

「それより何をしたんだ？」

「それは帰ってから、説明するよ」

なんか疲れないのに疲れた感があるな。

「分かった、目的は達したこの戦いは我らの勝利だ！」

ワアアアアアアア!

帰りはもちろん星を乗せました。

穩は普通に馬に乗れましたよw w w

この戦の後、紫郎には金獅子という異名が付いた。

岩を吹き飛ばし、数多の敵を赤子の如く捻じ伏せていたからだ………

第十一話 我が実力を見せてあげよう（後書き）

なぜだか：Fateと月姫を書きたくなくなった。

でもまずはちゃんと恋姫を終わらせますので！

読者の皆様、ちょっとしたアンケートを取りたいと思います。

反董卓連合はどっち視点にしたいですか？

？連合軍

？董卓軍

このどちらかでどちらがいいでしょうか？

第十二話 悪巧み……そしてあの子との遭遇（前書き）

ほのぼのしすぎかな？



## 第十二話 悪巧み……そしてあの子との遭遇

戦の後、城に戻り報告を済ませるまでは良かったのに…

穏や明命が「あの力はなんですか？」問い詰めてきて。

そこから話を聞いた…雪蓮や祭が話しに加わってきてとことん問い詰められました。

でも身体的特徴や能力ぐらいしか教えてあげませんでしたけど…

……さすがに神様の知り合いっていうのは伏せましたよ！

みなさんも一応納得してくれたみたいので…

それから甘寧が真名を教えてくださいました、思春っていうそうです。

ついで「いつでもいいから私と手合わせしてくれないか？」と言われたので、了承しました。

いきなり雪蓮が「今夜宴を開くわよ」「って言ってきて理由を聞くと…

「賊討伐も上手くいったし、それにあなた達の歓迎みたいな宴なんだから」

「皆には声かけといたから、後で大広間の部屋に来てね」

「ちよい…待って…」「じゃ〜ね〜」「人の話を聞けよ！」

なんか異常にテンションが高かったな…

く雪蓮く

「みんな集まったようね」

私は紫郎が来るより早くみんなを集めた。

「姉様どうしたのですか？まだ宴を開くに早いかと？」

よくぞ、聞いてくれましたwww

「みんなに言っておきたいことがあるのよ」

「なんですか？」

ふふふ〜

「紫郎を宴で酔わさせるのよ!」

「「「「えっ」「「「「なるほどな」、「貴方の考える」とはなんとなく推測できるわ」

祭と冥琳は分かっているみたいね。

「ちよ、何であれで祭も冥琳も分かるの?」

「「「何年一緒にいると思っている」「のじゃ」「「「「

さすがねえ!

「理由はなんなんですか?」

「実は……酔わせた勢いで誰か犯させて、天の血をこの呉の国に残そうという作戦よ!」

「「「「ええ〜」「「「「やっぱり」「「

はははっ〜どうだ参ったか!……私の考えた作戦

これが上手くいけば、紫郎はこの呉に滞在するしかあるまい。

「姉様いったいどうゆうことですか?」

「ぢぢぢぢとって、そぢぢぢぢとやぢ」

「ですけど、そんなやり方はあんまりかと思えますけど……」

「シャオも大丈夫かな」

やっぱり蓮華も明命もまだアマちゃんね。

シャオは充分魅力的よ。

思春は愕然として……

穏はあなたはなぜ腰をクネクネしているんだろ……なんか心ここにあらずって感じね。

「待たれよ!!」

げえ……あれは星だね……一番の障害に見つかってしまったか……

「すべて話は聞かせてもらった……だが私から主を取ろうというのであれば、孫策殿でも容赦はしませんぞ（主は私の物だ、主は私の物だ、主は……）」

（星はヤンデレになっている）（ヤンデレと化した星の武力は普段の二倍は上がっている）

ちよっと!あの殺気はマジですよ、あの目もやばすぎるでしょう!

「ちよっと落ち着くのじゃ、趙雲」

「冷静になれ」

ふふふゝすごい独占欲ねえ

「そついえば、趙雲は紫郎に抱かれたことあるの？」

ガシャン！

あつ、槍落とした……顔真つ赤だ。

「え、ええ、ありますよ、と、とてもよかったですよ」

「本当ですか？」

「ええ！あの時は接吻だけで……軽くイってしまいました」

「／／／」

そ、それはすごいわね。

みんなもみんなで真剣に聞いているみたいねえ

でも蓮華も明命これだけで顔真つ赤にするなんて……フッフ……

「でつでつ最後までしたの？」

「一応、でもその後の記憶は曖昧でしたけど……あの時ほど女に生まれてきてよかったと思わなかったことはありません／／／」

今の星は武人じゃなく、完璧に女だわｗｗ

「ですけど！主を酔わせるのは不可能かと思いますが」

切り替えはやあ！さっきまで女だったのに急に変わるのね……驚いたわwww

「それはどういう意味じゃ？」

「私も酒には強い方ですが……主は飲んでも飲んでも酔わなかったのですよ」

「それに一緒に飲んでた人達も主に注がせたりしましたが……まったく酔いませんでした」

これはやばそうね……

……でも燃えてきたわ！

「祭、一緒に酔わせるのを手伝ってくれない？趙雲もねえ？」

「もちろんですぞ」

「またあの気持ちを味わいたいのですし……いいでしょう」

フフフ私に掛かればこんなものよ。

「はあくまったく雪蓮、祭も何を考えているのか（でもこれはこれで面白そうではあるがな）」

冥琳は内心では面白がっていた。

「はあく姉様ときたら（私も少しは話してみようかしら……）」

蓮華はなんだかんだで興味を持っていた。

「はあ」

思春はなんか疲れていた。

「それはいいですね（紫郎さんになら……いいかも／＼／＼って何考  
えているんですか私／＼／＼）」

穩は想像に浸るっていた。

「にゃ～はは～（紫郎さんは猫は好きですかね？）」

明命はまったく違うことを考えていた。

これはおもしろくなりそうねえ～

紫郎はその頃……………

俺は今、町をフラついでる。

本当に平和だな、みんなが笑っていて、活気があつていい国を作っているな、雪蓮。

だけどもなさんこちらを見てくるんですねWWW

見た目が見た目ですから…

「そのカッコいいおにいさん」

ん？なんだ？

「どうしました？なにかあつたのですか？」

「いや、何も無いがよ、肉まん買ってかないか？」

路銀はまだ結構あるし、いいか！

「じゃあ一つもらつよ」

「まいど〜あり！それよりあんたが噂の天の御遣い様かい？」



「一応そう呼ばれている者ですが」

この肉まん美味しいな！

「やっぱりなあ〜金色の髪に真紅の瞳！いやでも目立つな」

「ですよねえ〜」

本当にそつだよなwww

.....

あれからまだ街をフラついています。

「う〜ん〜」

なんか困っている人がいるな。

「すみません、どうかしましたか？」

「ひゃ!?!」

おお、反応が可愛いなwww

「おっと、落ち着ちついて」

「すみません、ちょっと驚きまして…」

「いえよ、気にしないで」

鋭い眼光をしているな……っていつか、この子知っているような……

「あのもしかして……天の御遣い様……？」

「はあくまたか……一応そう呼ばれてる者だよ」

またか、本当に有名になったものだwww

「で、何を悩んでいたんだい？」

なるべく優しく話し掛けよう。

「え、えつとですね、眼鏡の度があっていなかったので、新しいのを買いに来ていて……」

「なるほど、それで悩んでいたのか」

「はい」

この子のは……片眼鏡か……初めてみるな。

「じゃあ、俺も一緒に選ぶの手伝うよ！」

「えっ！？いいですよ、悪いですから……」

「いやいや、約束の時間まで暇だからさあ……ついでだよ」

「ですけど……」

この子は遠慮しがちなwww

「ほらほら、これはどうだい？」

「あ、分かりました」

納得してくれたみたいだ。

「うん、人のご好意は受け取るものだよ」

紫郎は満面の笑みで返した。

「あっ……はい／＼／」

うん！偉いね。

ナデナデ……

「あの……恥ずかしいですう／＼／（なんか落ちつくなあ）（」

おっと、体が勝手に……

……この時街をゆく人達には……仲のいい兄弟に見えていたと……

（紫郎は撫でるを覚えた！）

「ごめんね、急に撫でてしまって」

「いえ、気にしないでください……（もっとして欲しかったな）……

……」

なんか残念そうな顔をしているが…？

「さてと、眼鏡を選ぼうか？」

「お願いします」

……………

そこからは一緒に眼鏡を選んでいて、そういえば自己紹介をしてなかったから名前を聞いたら…なんと呂蒙というそうです…なるほど呉の将。

やっと気に掛かっていた、問題が解けました。

なんでも今日から正式に軍師補佐になるみたいなので、しっかり準備しているみたいです。

ついでに真名も教えてくれました、亞莎というそうです。

「でも初対面の人に真名を教えるのかい？」と聞いてみたら、「紫郎さんは信用するに値する人なので」と言われた。

なんか会う人達によく信用されるような…

それから亞莎も城に行くそうなので、ちょっとフラついてから、城に向かいました。

く 亞莎 く

私は今、櫻井紫郎さんという御方と一緒に街を歩いています…

最初に声を掛けられたときに本当に驚いてしまい、あんな声を出してしまいました……

「すみません、どうかしましたか？」

「ひゃ!？」

… 本当に恥ずかしいですう／＼

私あまり人と上手く話すことが苦手で臆病になりがちなんですよ…

でも私に話し掛けてきた人は、金色の髪に真紅の瞳……あれ?ま、まさか!？

「あのもしかして……天の御遣い様……？」

「はあくまたか……一応そう呼ばれてる者だよ」

えええ〜すごい大物に話し掛けられちゃいました!?

「で、何を悩んでいたんだい?」

あつ、なんか話し方が優しい人だな〜

「え、えつとですね、眼鏡の度があっていなかったので、新しいのを買いに来ていて…」

「なるほど、それで悩んでいたのか」

「はい」

ははは〜お恥ずかしながら……

「じゃあ、俺も一緒に選ぶの手伝うよ!」

えつ……………えええ〜

「えつ!?!いいですよ、悪いですから」

「いやいや、約束の時間まで暇だからさあ……………ついでだよ」

「ですけど……………」

この御方は困っている人を放っておけない性分なのだな……………

「ほらほら、これはどうだい?」

「あ、分かりました」

この人は本当に優しい御方だ…この御時勢にこんな人もいるんですね…

「うん、人のご好意受け取るものだよ」

紫郎は満面の笑みで返した。

「あつ…はい／＼／」

あの笑顔からは…なんというか／＼／…あの御方の優しさみたいなのが伝わって来ます。

ナデナデ…

…私…もしかして撫でられてます…？

親以外に撫でられたことがないのに…なんで…

「あの……恥ずかしいですう／＼／（なんか落ちつくなあ〜）」

…なんで……こんなにも落ち着くんだろ…

お、おお、お兄ちゃんってこんな感じなのかな…／＼／

「ごめんね、急に撫でてしまって」

あつ、やめてしまった……なぜなんだろ…物足りない…

「…いえ、気にしないでください……（もっとして欲しかったな〜）」

……)」

はあくもっと求めればよかったな……って私は何を考えているんだ  
／／／

「さてと、眼鏡を選ぼうか？」

「お願いします」

この時間を大切にしよう。

……

そこからは眼鏡を選んで貰ったりして、有意義な時間を過ごせました！！

私もなぜか、紫郎さんと話している時は上手く話せる様になりました。

本当になんでこんなに話せるんだろっと自分でも思ってしまうほどでした。

それに私が仕事をさせていただく、周瑜様や陸遜様とは顔見知りみたいなんです。

御遣い様は顔が広いんですねえ

それから自己紹介の時、私はすぐに真名を教えました…

紫郎さんは驚いたみたいですが、私は本当に心のそこからあなたに



知って欲しかった。

…今日……この時に紫郎さんと巡り合わせてくれことに感謝します、  
神様。

その後はちょっとフラついてから、城に向かいました。

「でもお兄ちゃんって呼んでみたいな」

「んん〜なんか言った？」

「い、いえ／＼／＼なんでもありません…なんでもありません／＼／」

「???」

第十二話 悪巧み……そしてあの子との遭遇（後書き）

亞莎も呉では好きな方です。

亞莎出るタイミングがこんなものでよかったですでしょうか？

自分的には失敗しました。

それからお知らせです。

もう一回小説を見直して、文を直したいと思います。

直した文には、タイトルに がついていますので。

第十三話 大宴会……そしてイレギュラー発生！(R15) (前書き)

最近更新できなくて、すいませんでした。  
次もこのぐらい掛かるかもしれません。

話がグダグダになってきちゃいました……

第十三話 大宴会……………そしてイレギュラー発生！（R15）

どうも、櫻井紫郎です

今は亞莎と一緒に城に向かっています。

亞莎も最初に比べて緊張が解けたみたいで表情豊かになっています。

ほのぼのしていて癒されます

「主」

んっ…あれは…

タッタッタッタ…

「どうした？星」

前から走って来たのは、やはり星でした。

「もう全員揃って待っていますよ」

それは急がないと…

「主、1つ質問していいですか？」

いきなりどうした？……星…？

ドス黒いオーラ纏ってるよ……ちょっと……どうしたの！

「あ、ああ、いいよ」

亞莎が怯えちゃってるよ……

「その子は誰ですか？」

瞳に光が宿ってないよ……怖あ！

「え、えっと、この子は呂蒙って言って、今日から軍師補佐するみたいだよ、ほら、亞莎」

「ひあい、呂蒙といます、宜しくお願いします（噛んじゃったノノ）……」

噛んだねwww

「うむ…私は趙雲だ、以後宜しく……それで主はどうやって呂蒙殿と出会ったのですか？（まったく主の周りには女性しか寄って来ないですね……）」

それから星に亞莎出会った経緯と何をしていたかを説明した。

「分かりました、孫策殿達を待たすのも失礼ですから行きましょう（この娘は注意しておこう）……」

星の中では亞莎がなぜか危険視された……

女の勘って奴かなwww

……  
……  
……

「やっと来たようね」

呉の面々が勢揃いしていた。

「「呂蒙「ちゃん」」

「周瑜様、陸遜様これから宜しく御願ひ致します」

「冥琳、その子は？」

「呂蒙といって中々の逸材だ」

俺も思ったが中々の人材だ。

「ふん、ならこれからはちゃんとした仲間ね、私の真名は雪蓮よ」

「い、いいんですか？」

「気にしないでいいわよ、これからこの呉に力を尽くしてくれるのだから」

「あ、有難き幸せ、私の真名は亞莎と申します」

雪蓮は本当にドーンとしているな。

「私のことも冥琳と呼んでくれていい」

「僕は祭じゃ」

「蓮華よ、これからは宜しく頼むぞ」

「私は小蓮つていうの、気軽にシャオつて呼んでねえ」

「思春だ、宜しく頼む」

「穏です〜これから宜しくねえ〜」

「明命です、宜しく願います」

亞莎もこれで正式に呉の一員だな。

「皆様、これから宜しく御願ひ致します」

「じゃあ、自己紹介も済んだし、宴をやるわよ」

いきなりテンションが上がったなWWW

「紫郎はじゃんじゃん飲んだね」

「ほらほら、ドンドンドイケ」

雪蓮、祭も始まったばかりなのにかなりの勢いで飲んでるな。

ん〜冥琳と亞莎が二人で話しているような……

あっ、亞莎がこっち向いて赤面している。

何か俺の顔に付いているのか…？

冥琳は亞莎に雪蓮の作戦を伝えたら、亞莎が赤面したみたいww

w

酒のせいかな…？

「紫郎さんドンドン飲んでくださいねえ」

「どうぞ〜紫郎さん」

穩も明命は杯が空になったら、すぐに入れてくれる。

そういえば、桃香達元気かな？

「主、今この場にいない女の人を思いましたね？」

ちよつ、鋭いな〜つてか心を読むなよ。

「ははは〜」

星の目つきが怖いなあ〜

「櫻井、一緒に飲まないか？」

驚いた、思春が誘ってきたよ。

「いいぞ、思春」



「思春が真名を許してる…!?!」

俺も許してもらった事に驚いたよ。

「報告が終わった後ぐらいに教えてくれたよ」

「なら私も蓮華って呼んでいいわよ」

こりゃ驚いた、まさか許してもらえとは……

「いいのか?」

「思春までが認めたらならそれなりに信頼のおける人物なのでしょう…それに私だけ教えてないなんて何だか嫌な感じがして…」

それは確かに思うな。

「蓮華様もしかしてヤキモチ?」

そこでそれをいうかよ……

「…っ、違うわよ!」

ツンだなWWW

「赤くなってますな…」

本当だ、赤くなってる。

「少し酔っただけよ!」

「でもあんまり飲んでませんよ〜?」

「穩に趙雲、蓮華様をからかうのも大概にしるよ」

その言い方はおもしろいなwww

「ちょっと、思春!」

「皆さんそんなに…なら私も…?」

明命も勢いでそんなこと言っちゃだめだよ。

「何話しているのよ?」

「あつ、雪蓮様、実はです「言わなくていいのよ、穩」ええ〜詰まらないじゃないですかwww」

穩、一応仕える身なんだから……

「…皆に好かれているようだな…頑張れよ、櫻井?」

その冷静さをこの子達に分けてあげたいよ、冥琳。

……一時間後……

「ん〜ん〜」

「スウ〜スウ〜」

さすがに疲れたのか……明命とシャオは寝てしまいました。

蓮華、思春、冥琳、穩、亞莎はちよつと頬を赤く染めてる感じである。

それに比べ……雪蓮、祭、星はみんなと同じように頬を染めているのに飲むペースがまったく落ちていない。

そういう俺もこの三人についていつてるけどねえWWW

この体質のおかげだけだな。

「紫郎さ〜ん／＼／＼（もう〜酔って来ちゃいましたよ〜）」

「あっはっはっは！紫郎もドンドン飲んでねえ〜／＼／＼」

穩、甘え上戸

蓮華、笑い上戸

そういえば、孫権って酒乱だったんだけ……？

確か、酔っ払ってしまつと無茶な命令ばかりするとかあの張飛ですら孫権の酒癖の悪さには敵わないだろうと記憶している。

三国志の話でも……やはりここの孫権も……

正直ここまでカオスな状態になるとは思ってた紫郎……

「ほらほら〜じゃんじゃん〜飲みなさい！（本当に酒に強いわね、これじゃ私が先に根をあげそうね）……」

「さあ、まだまだあるぞ！（ここまで強いとは……感服するぞ）……」

「これからですよ、主（強いという問題ではないな、これは……）……」

雪蓮、祭、星も紫郎のお酒の強さに驚きを隠せない。

「紫郎〜もつと飲め飲め〜／＼／」

蓮華……酔ってるな……出されたらちゃんと飲みますよ、一杯もらおうか

「ぷはあ……美味しいね！〜！」

この味は最高だねwww

……んぐ……あれ……

バタン

紫郎は突然、バタンと倒れた。

（星side）

突然、主が倒れてしまった。

「紫郎さん、大丈夫ですか？」

「ちょっと、蓮華！何を飲ませたのよ」

「え〜っと、これを飲ませました」

酔いながらも孫権殿には理性があるみたいだ。

孫権殿は主に飲ませたお酒のビンを渡しました。

「え〜っと〜神殺しって書いてあるわね〜」

神殺し……？……神……神……主は神様と知り合いつて言っています……  
た……

それってやばいような……主……！！

「そのお酒ってかなり強いお酒って聞いたことあるわよ」

その通りですよ、周瑜殿、私も聞いたことはありません。

ですけど、主には相性最悪なのですよ……

ムクリ

主がゆっくりと起き上がった。

（星side out）

「クハハハハハ！！！」

紫郎はいきなり天井を見ながら笑い出した。

「し、紫郎さん、大丈夫ですか？」

亞莎は心配して声をかけてみた。

『大丈夫だ…心配してくれてありがとう』

「……………ツ／＼……………」

いつもより少し低く妙に色っぽい声で囁く紫郎……

目もキラッとつり上がりニッと妖艶な微笑みを浮かべている。

明らかにいつもと違う紫郎にみんな赤面してしまった。

紫郎覚醒状態の台詞は『』になります

「やった ついに酔ったのね、紫郎！」

「上手くいったのう」

雪蓮と祭は上手くいったことを喜んでいた。

だが……

（雪蓮 side）

ガシッ

「わッ!?!」

「なんじゃ!?!」

私と祭はいきなり紫郎に手をつかまれ引き寄せられ……

そして……

『なんだ……そんなに俺に酔って欲しかったのか?』

私達の耳元で色っぽい声で紫郎は言った。

「えっと……／＼／＼（この私が後手に回るなんて……）」

「そのじゃな……／＼／＼（不覚にも少しドキツとしてしまった）………」

まさか酔うとこんな風になるなんて……

『俺だけ酔ってるのも不公平だな』

紫郎は近くにあったお酒の入ったビンを取りグイツと酒を口に含み

……

えっ、ちよつと待つて！

「んづうツ！？んツ……フツうんツ……んツんづうツんツ／＼／」

「んぐうツ！？んん……んう……ふむ……んツ……んん……／＼／」

雪蓮と祭に口移しで飲ませる。

何度も口移しをして、今は酒を口に流し込みながら舌を絡ませている。

「ツハア……ハア……紫郎……あたしこれいじょうされたらよいつぶれちやうよお／＼／」

「ハア……ハア……儂もこれはやばいぞ／＼／」

……これは趙雲が言っていた通り、接吻だけでイキそうだわ……



祭も……我慢出来なさそうね。

『へえ……それは酒に酔うって事？』

紫郎はスツと私と祭の耳元に近づき……

『それとも……俺に酔うって事か？』

ニイツと妖艶に囁いた。

「うう……／＼／」

私だってやり返してあげたいけど……なぜだか体が動かないのよお！

雪蓮は自分のペースにもていきたいのだが……体が反応しないみたい。

「儂は……儂は／＼／」

祭はもう我慢出来ないみたいね……

「おっおねがいじゃ！もうガマンできないのじゃ」

ついに祭も降伏してしまったか……

『祭は素直で宜しい、シテあげてもいいよ……雪蓮は……だめな』

「ちよっせー！どっいっつとよ」

ええッ!?

ここまでして、それは無いと思っわよ。

『どっしりかな?シテあげてもいいけど...条件がある』

「じょう...けん?」

もう私はだめかも.....紫郎に何されても受け入れちゃう...//

紫郎の顔が近づいてきた.....

紫郎は雪蓮の唇にキスをして.....

『雪蓮...俺のものになれ』

「ええッ!?!?!」

雪蓮、驚愕、まさか紫郎からこんな事を言われるとは思ひもしなかったからだ。

『どっしりする?雪蓮?』

クスクスと悪戯っぽく微笑む紫郎.....

もう私は無理だ。

「ッな.....らあ...ッ//」

『.....ん、聞こえないな?』

「ッ〜!!なるから!!紫郎のものになるからッ!!私はもつ紫郎のものだからあッ／／／」

『良く言えました』

「ひゃんッ／／／」

「あっん／／／」

紫郎は雪蓮と祭の大きな胸を揉みだした。

『二人とも俺なしじゃあ生きられない体にしてやるよ』

「うあああッ／／／」

そこから私と祭は紫郎に身を委ねた。

〈雪蓮 side out〉

「ここはどこだ」お〜う〜気がついたか「あなたは…神!」

久しぶりに会ったが、何も変わってないな。

「神も良いが妾の名前はマリアじゃ、これからはそう呼ぶよ」  
名前あつたんだ……マリアっていうのか……普通だなwww

「貴様、今なんか侮辱しただろ」

「いやだなくそんなこと思うわけ無いだろ、それより宜しくな、マリア」

危なかった……絶対心読めるだろ、こいつ……

「まあいいだろ、それよりいきなり呼び捨てとはやるじゃないか、大抵初対面の奴は敬語なのに」

マリアからいきなり威圧みたいなものきた。

これが神か……

「……あんたには色々力をもらったが、あんたに殺されたのも事実だし、そんな奴に礼儀はいいだろうと思っただろ……」

実をいうと今自分は度胸試してみたいなことをしている。

自分の度胸がどのくらいあるのか知りたいから……

「ふっん、まだ根に持っていたのか、この私を相手にその根性は恐れ入るぞ」

「……」

その場にいる二人は向き合ったまま沈黙が続いた。

「……………フフフ、すまない、少し自分の度胸というものを試していた」

「…おまえは私で何を試しているんだ！」

「すまないって…」

「元人間だったのが嘘の様だな」

確かに、それは俺も思ったよWWW

「だが私ももう妾の口調を気にせずに話せるからいい」

あれはわざとやっていたのか。

「そういえばおまえは寝ていたから、精神だけをこちらに呼び寄せたから……………それより帰ったら面白い事になっているからな」

……………なるほど、ここにいる理由が分かったよ……………寝ていた…？

……………？……………おもしろいこと……………？

紫郎は起きた後に激しく後悔するのであった……………

「で、どうしたんだ俺を呼んだのは？」

「それがな、今おまえがいる世界、恋姫の世界にイレギュラーが生

じた」

それはやばいな。

「どんなイレギュラーなんだ？」

「それはこいつらに聞いてくれ……」

指された方向を見ていると……

二組のカップル……？……夫婦……？

「よっ！我はゼウスというものだ、二代目！」

白い髭を生やしたおっさんだな……二代目ってなんだよ！

「こら！あなたちゃんと挨拶しなさい！あっ、私はヘラです」

一言で言つと……金髪碧眼の美人。

「やあ、僕の名前はロキっていうんだ、宜しく」

こいつは男と分かるんだが……超イケメンだな……

髪型は深いブラックのロング、背は190cmぐらいかな。

で、こちらの女性が……

「はじめましてねえ　私はアングルボダっていうの気軽にアソって呼んでね　」

腰まである黒髪に深い緋の瞳を持つ絶世の美女というべきだな。

「これはどうも宜しく……って、その名前はギリシア神話や北欧神話に出てくるような……？」

「そうだ、私はどの神々よりも偉いんだぞ、ゼウスもロキも私の配下だぞ、他にも神々は私には頭が上がらない、どうだ偉いだろww  
w」

ええ〜俺そんな奴に力をもらったのかよww

てか……何者だよ……

「さっきゼウスが言っていた二代目ってなんだ？」

「それはおまえに私の地位を譲るからだ」

……それって……

「もしやおまえの地位に俺が入るといふことか？」

「そうゆづことになりますねえ」

「ですねえ〜」

へラは何でそんなニコニコしているんですか……アンもですか……

「えっと〜話を戻していいかい？」

空気になっていた、ゼウス、ロキが話してきた。

「そうだったな……で、神話に出てくる神々がどうしたのですか？」  
神なら自分の力でどうにかできるだろうに……

「実はなあ〜」

「僕達の娘が……」

ゼウスもロキも困っているみたいだな……む、娘……？

「家出した！」「んだ！」「……」

「はあ〜」

「……………」

……………訳がわからん……………へラさんやアンさんも呆れていますよ。

……………

……………

……………

それからはなんで家出したか聞いてみたら……………ゼウスもロキもかなりの親バカであることが分かった。

へラやアンが「私の父親がこんなだったら……………娘達と同じ行動をとっていたと思うわ……」と言っていたので、相当な親バカみたいです。



なんとなく伝わってくるよ……今も娘の名前を言いながらシクシク泣いているし……

SHUFFLE!のユー・トマとオーベシイみたいな感じか……

……問題がそいつらが家出して行った場所が……今俺がいる恋姫の世界だってことをマリアが調べたみたい。

でもフェンリルとヨルムガンドが女だとは思わなかった。

俺が「フェンリルとヨルムガンドは雄の狼と蛇じゃなかったか？」と聞いたら……

「何をいう！ちゃんとした人型の女の子をしているぞ、ただフェンには狼の耳とフサフサの尻尾が付いているのとヨルにも尻尾があるだけだ！」

フェン＝フェンリル、ヨル＝ヨルムガント

なるほど……よく分かった。

「それで紫郎にはそいつらを連れてきて欲しいのだよ」

「………頑張りますよ………だがちょっとお願い事があるんだが？」

「なんでもいいぞ」

「………この話も出してみるか！」

「俺の世界にあったマンガや小説やゲームの技や魔法の知識を教え

てくれ、後人間の体に戻してくれ」

欲張りだが創造の力でも十分に強いと思うが、そうゆづのを俺は使えるんだが、他の人達に教えたいと自分は考えているから……知識が欲しかった。

後は神の体は便利だが……強すぎる！それゆえに人間の体に戻りたいと思つてな。

「ふむ、分かった……だが人間の体でも十分に強い強さにしといてやる」

「ありがとうよ！」

これで修行しよう

「ついでに一言……」

マリアが真面目な顔で見てきた。

「死ぬなよ」

「分かっているよ」

こんな言葉をかけてくるとは……ちょっとカッコイイと思つたぞ！

「あつ、でもうちのアーちゃんかなり強いからねえ」

へラがいうつてことはアテネか！

「そつだぞ、自慢のわが娘は我があのt……」

うわあ〜語り出したよ。

「じゃあ〜そろそろ帰すぞ」

「分かった」

ナイス！マリア

ふ〜う〜長かったようで短かった様な……

「あつそうだった、おい〜紫郎！」

ゼウスとロキが呼んでいる。

「うちの娘に傷物にしたらぶつ殺すぞ！」「」

……貴様らあ〜別れ際にそんな無茶なこといつなよ！

……

……

……

「…此処は何処だ。」

起きた所は大広間、早速体を動かそうとするが…

(う、動かない……)

そう自分の体が動かないのだ、身動き一つ出来ない。

(まさか…これが噂に聞く金縛りと言うものか…)

と鬱になりながらも状況把握をするために雄一動く首を右に向ける。

チュツ

何かが唇に触れた。それは…

「……………」

穩の唇だった

(な、何故服を着ていない！)

そう穩の服装は服を着ていない、つまり一糸纏わぬ姿であった。穩にキス+裸という事を理解した俺は…昨日の事を必死に思い出そうとしたけど、まったく思い出せないでいた。

(……………マリアが言っていたのはこれか!!)

紫郎はマリアが言っていたことをようやく理解した。

「んツ…ん…ん…」

「ゲツ!?!」

1人の寝息を合図に寝ていた人たち全員が起きた。

思春は明命とシャオを部屋に運んだためにこの場にはおらず

「……………」

「……………」

「……………」

蓮華はまだ酒が抜けておらず、ボくっとしている感じ。

蓮華と亞莎だけは服をちゃんと着ている。

「……………おッ……………おはよう」

「……………ツ／＼……………」

「……………」

相変わらず寝ぼけている蓮華……………

「……………すみませんでした！」

俺は完璧な綺麗な土下座をやっていた。

「おはよう……………紫郎、昨日はとってもよかったわあ／＼／＼（あんな経  
験したら病み付きなっちゃうわよ／＼／＼）……………」

「昨夜はよかったぞ、紫郎……………またお願いするかもしれぬぞ／＼／  
（あれは……………本気で逝きかけたぞ／＼／＼）……………」

祭のか字が違うような……

よく見ると雪蓮と祭の肌はツヤツヤしている。

「攻められるだけでは納得いかん、今度は私が攻めるからな（まあ初めてが紫郎でよかったかな／＼）……」

冥琳は内心では乙女チックなことを思っていた。

「紫郎さん〜もし子供ができたら責任とってくださいね（まさか本当に成功するとは思いませんでしたけどこれはこれで……ありがとうです／＼）……」

「……分かってます……」

「うふふふ〜」

穏は好きな人に抱かれて喜んでいた。

「紫郎さん……」

「俺は亞莎に何かしたか……?」

「覚えていないんですか?」

まさか俺は亞莎にまで手を出したのか……

「すまなかった、俺がなんかしたなら謝る」

「いえ／＼何もされてませんから……（本当は接吻だけでイッてし

まったなんて言えないよ〜あ〜思い出しちゃって恥ずかしくな  
つてきちゃった／＼……」

亞沙は紫郎に接吻されたことを思い出してしまい顔が真っ赤であっ  
た。

「主！最高でしたよ」

「はは〜ありがとう（これはなんて答えればいいんだ？）」

星はまたあんな快感を味わえた事に酔いしれていた。

「〜〜」

蓮華はまだ寝ぼけていた。

……

……

……

紫郎暴走事件から一週間が経ち、俺はちゃんと酔った理由は星から  
聞いた。

酒飲むときは確認して飲もうと決心した。

体もちゃんと変わっていて思春と手負わせしていたらちゃんと傷を  
負った。

でも魔法もテイルズのヒールをしたらちゃんとできましたよWWW

月姫の空想具現化もできたけど、その後ぶっ倒れた。

やはりこの世界のバックアップを受けていないから、負荷が尋常じゃないらしい。

自分が知っている技、魔法は試して上手くいったよ。

後は変な噂とかも聞いたりしないし、本当にアテネやフェンリルはいるのか気になった。

大きい気配もまったくしないので足取りが掴めない……

つで、みんなとは……

大分俺は呉の国に慣れた。

民の人達からも変な目で見られず普通に慕ってくれている。

この一週間はゆっくり過ごせたよ。

雪蓮とは剣で手合わせしてたり政務を少し手伝ってあげたりしたけど……夜になると襲ってきて大変だった……すぐに気絶させてどうにかなったけど

祭とは弓の攻撃方法を教わった、使い方が分かるけど……どうゆう状況でどうゆう行動を取ればいいのか祭に教わった。

祭も夜は襲ってきたけど……即気絶させて退場してもらった。

冥琳とは政務を手伝ったりしたり軍人将棋をしたりして過ごした……



…ちなみに俺は6戦3勝3敗、引分けだった

それにしても冥琳はすごい数の書類をやっていたので、疲れを取る為にマッサージをしてあげたら疲れが取れたみたいで、次の日から絶好調な感じで政務をやっていた。

ついでに色々と政務に口を挟んでしまったが、それが採用されたのは驚いた。

蓮華とはお茶を飲んだり街に一緒に出かけたりしてゆっくり過ごした。

だが蓮華は自分を過小評価し過ぎ、暗い、真面目すぎるから……それを注意したら……「孫呉の王家の血を引く者として……」とか言っていたから俺は……「蓮華は『蓮華』だろ？『孫呉の王家の者』なのか？その考えはいいと思うがたまには切り替えて息抜きしないと潰れるぞ」と説教みたいなことを言ってしまった。

でも蓮華分かってくれてくれたのか、笑顔をむけてくれた……その笑顔にドキッとしたのは心の内に閉まっておこう。

シャオとは遊んでばかりいたけどちゃんと勉強を見てあげたりした。

思春とは一緒に手合わせをしたり街の警備をしたりして結構仲良くなっただけがする。

穏とは一緒に読書したり、街に買い物に行ったりとのんびりしていたけど……やっぱり俺が冥琳に教えた知識を知ったら……発情していた!!

襲い掛かってきたものの……またまた気絶させて難を逃れた。

明命とは、俺が猫に餌をやっていたら羨ましそうな目で見ていたので、一緒に餌をあげたり、猫と寝たりして遊んだ。

亞莎とはあの事件から二日間ぐらい顔見るとどっか行ってしまい避けられているのかと思いきや……今は嘘みたいになんと話してくれている。

俺の言葉を素直に受け止めて、なんでもイヤとは言わずにやってくれて……本当にいい子だと思ったよ。

「妹に欲しいな」と言ったら顔を真っ赤にして、ブツブツ何かを言っていたのが可愛いなと思ってしまったよ。

星とは今まで道理一緒に稽古してお酒飲んだりして過ごしたけど、意外な事に夜襲って来なかったあ！

理由を聞いてみると「私は主の正妻なのでいつでもできますから」といい笑顔で言っていました。

……突っ込む気力が出なかった。

みんなとはこれぐらいかな……さてそろそろかな……

……夜……

「星、荷物まとめけ」

「また旅に出るのですか？」

「そうだよ、俺達には帰る場所があるだろ……それにもう一つ寄りた場所があるから」

「…分かりました」

結局かなり呉に滞在してしまったから……もう一人……魏の霸王……曹操に会っておきたしな。

……

……

……

翌朝…

「紫〱郎」

雪蓮はドアを開けて紫郎を探した。

「ありゃ？いないなあ〱部屋出たのかな？窓空いてる……」

雪蓮は開けっ放しの窓を閉めにいった。

「まったくちゃんと閉めなさいよ〱」

窓を閉めると、机の上にある手紙に気づいた

「なにこれ？」

雪蓮は手紙を広げると読んでいった。読み終わると雪蓮は泣き出し  
そんな表情になっていた。

「そ…んな…」

雪蓮は急いでみんなを集めた

……

……

……

「みんないるわね…」

雪蓮は全員いるのを確認すると手紙を取り出した。

「なんですか？その手紙」

「紫郎からよ…今から読むから静かに聞いて…」

「ま…さか…！」

冥琳が感づいたみたいだ。

雪蓮は手紙を読み始めた。その手紙の内容は…

『みんなへ……たぶんみんながこれを読んでいる時はもう俺は呉を  
去っているだろう。』

俺にもやらなければならぬことがあってな……でも呉で過ごした  
7日間はとても快適でいい思い出になったよ、ありがとな。

それとみんなに一言ずつ……

雪蓮は冥琳に余り迷惑かけるなよ。

蓮華は真面目なのはいいが、たまには生き抜きしろよ。

冥琳は政務のことだけではなく自分の体のことも考えなよ。

祭はお酒飲み過ぎるなよ。

シャオはお転婆もほどほどにな、お姉ちゃんに迷惑を掛けない様にな。

穩は部屋に籠ってないでちょっとは運動しろよ。

思春は蓮華をしつかり支えてくれよ。

明命は猫好きなのもいいが、気を取られないようにしろよ。

亞莎はもっと人と話せるように。じゃあまた会おうぜ！ 櫻井紫郎

『

それを聞くと……

「あやつはいつてしまったのか……」

祭はちよつと悲しんでいた。

「そうか……（まだ天の知識を教えて欲しかったのに……）……」

冥琳はまだまだ聞きたいことがあったみたい。

「……………（なんだ、この喪失感は…紫郎がいなくなって悲しいのか？）……………」

蓮華は自分の心に巡る感情がなんなのか、分かっていなかった。

「せっかく仲良くなれたのになあ……………」

シャオは残念って感じをしていた。

「もつとお猫様について話したかったです……………」

明命は猫友達としてもつと居て欲しかったらしい。

「……………もつと居て欲しかったです（次会ったら逃がしませんから……………ふふふ……………」

穩は何かを決意した。

「また奴とは手合わせをしてもらいたい物だ」

思春は戦いたがっている。

「もう、みんなそんな顔しないの！」

「雪蓮様……………」

「もう会えないなんて決まったわけじゃないんだから！」

雪蓮はそう言つと空を見た。

(そう、紫郎……絶対に見つけ出してやるんだから！)

雪蓮は心にそう誓い、他のみんなも同じ気持ちだった。

んゝ手紙の裏に何か書いてある。

『主の正妻は私ですから。 趙雲 』

「……………」

その場が静まり返った。

「ふふふ」

雪蓮がいきなり笑い出した。

「みんな紫郎を見つけたら……捕獲するよつに……これは命令よ！」

雪蓮は真剣な表情で言った。

「御意！」

「はあゝ」

祭と冥琳はすぐ応えた。

他のみなさんは愕然としていた。

（待つてなさい！星！必ず見つけて紫郎を奪って見せるわ）

雪蓮は奪い取るのを決意した。

その頃…

「んー！」

「どうした？星…？」

「今誰かが主を奪い取ろうと決意したような気がして…」

「……………」

紫郎は無言で星を見ていた。

星は女の勘で感づいたみたい。





第十三話 大宴会……そしてイレギュラー発生！（R15）（後書き）

もう話が脱線してしまった…

高校だるいなあ〜バイトも入ってもっとダル過ぎる。

なるべく早く更新できるように頑張ります。

注意すべき点があれば、ドンドン感想下さい。

**主人公設定の変更 新キャラ登場！ (前書き)**

最近忙し過ぎてパソコン触る機会があまりなく、全然書けていませんでした。

本当にすいません。

## 主人公設定の変更 新キャラ登場！

パラメーター（Fate風） 神の体 人間へ（神の血の効果は継続）

【筋力】EX B 【魔力】EX（変化なし）

【幸運】EX S 【耐久】EX C

【敏捷】EX A 【宝具】EX（変化なし）

【保有スキル】

気：EX S

神の体から人間になってもかなりの気を保有している。  
肉体強化等幅広い応用性を持つ。

気配察知：EX B

気の応用により相手の気を感じ取り場所を察知することができる。  
人間に戻ってからちよつと鈍くなったみたいなので修行して成長に期待する。

気配遮断：EX A

気の応用により自らの気を抑え気配を察知しにくくさせる。  
かなりの強者でも気づけない。

魔力：EX（変化なし）

どんな魔術、魔法を唱えても魔力は減る事がない。（死者蘇生可能）  
アニメ、ゲームの技可能、

運命：EX（変化なし）

自分に上手くいくようになってゆく…（回りも巻き込まれる）

特に女性へのフラグ乱立が勃発する

これはもはや自分の宿命みたいな物なので誰にも止められない。

耐久：E X C

神の体から人間になり普通の体になり、一般人にも傷を付けられる様になった。

敏捷：E X A

走ってもかなりの速さを出せますが、技を使った場合誰の目にも見えなくなる。

でも自分で速度を制限できる。

宝具：E X（変化なし）

この世のすべての物を使える。（触ればどうやって使うのかも分かる）

最近では色々な武器をいじっている。

創造・想像

自分が思い描いた物はなんでもできる（ただし生命を創るのは無理です）

（金ピカ王の王の財宝もできる）  
ゲート・オブ・バビロン

最近では自分用の宝具を作ってみたり、色々道具を開発している。

天然たらし

これは常時発動している。

見た目が見た目でそれでも充分モテるのだが……

温厚で優しく誰にでも好かれやすく、器の広さや器量良しなのだが……抜けている所もあり、そこがなぜだか女性にはグツと来る。

意中の相手だけではなく、男女関係なく惹きつけてしまい、崇拜さ

れてしまう。

種族を問わずフラグを立ててしまう。

その分他の女性の嫉妬心が倍増し、倍返しで何かをさせられる。

## 技能

オールラウンダー：触ればあらゆる武器を熟練者並みに扱える。状況に応じて対応の仕方も変わる。

神眼：神の目、何もかもすべてを見据える目、幻術、物理術を使ったりもできる。最近では漫画の技を真似していたりする。

無限倉庫：亜空間にある倉庫、自由にものを出し入れ出来る。

中は時間の概念が無いため、食べ物を入れても腐らない。

今はマリアに頼んで色々な本を置いて貰っている。

## 追加要素

教育：マリアに頼み、技のやり方や魔法の使い方を教えてもらい、それを人に教えることができるようになった。戦術論や学問とかも可能

（自分はやり方が分からなくても何故か、上手くいつていたらしい）

カリスマ：人を引き付ける何かを持っており、自身が軍を持てばとてつもなく強くなる。（特に女性には絶大な効果がある）

ここからは新キャラの紹介（この人達は戦いに出てくるかまだ未定）

名前：マリア

種族：この世の言葉では表せない。

この宇宙、銀河系を作ったらしい。そこから面白くするために世界が分岐していったが増やしすぎて手に負えず、それぞれに自分より劣るが神々を生み出し管理させている。

その劣るといっても、オーディン、ゼウス、シヴァ、ヴィシヌ、ブラフマ、天照大神、その他色々

邪神も一応配下、生み出した理由……「面白くなりそうな予感がしたから」

能力：この世のすべての能力（知らないことはないらしい）

戦闘力：?????

なお、どのくらい強いかと言つとそれも不明

だが有名な神々が束になつても勝てないと言っているほど

好きなもの：紫郎を弄る事、ボツとすること、寝る事

嫌いなもの：特にない

呼ばれ方：マリア、マリア様、神、神様、姉御、創造主、その他色々

名前：ゼウス

種族：神（ギリシア神話の主神）

天候、特に雷を司る天空神であり、オリュンポス十二神をはじめとする神々の王である。

だがとても親バカであり、その執着心から娘であるアテネからは嫌われており、それが原因で家出されたことを自覚して無いらしく、妻であるヘラに説教をくらったみたいだ。

妻には頭が上がらないみたい。

見た目は白い髭を生やしたおっさんだが、ゼウス曰く「自分で姿なんて変えられるわいwww」と言っていた。

能力：すべての属性は使えるみたいだが、特に雷をよく使う。

戦闘力：オリュンポス十二神の中では一番だが、他の連中とは戦ったことがないらしい。

唯一オーディンとやりあった時に三日三晩戦い続けて、勝利がつか



ずマリアに止められて引き分けになった。

好きなもの：女性、アテネ娘

嫌いなもの：娘に手を出す奴（手を出したら散り一つ残らず消される）、ヘラの黒いオーラ

呼ばれ方：ゼウス、ゼツス、全知全能、浮気者

名前：ヘラ

種族：神（ギリシア神話）

ギリシア神話に登場する男神は総じて女性にだらしがなく、夫であるゼウスはその代表格である。

そのため、結婚の守護神でもあるヘラは嫉妬心が深く、旦那のゼウスが違う女性と話しているだけでそこに割り込んでゼウスを強制連行する。

簡単にいえば……重度のヤンデレだ。

金髪碧眼の美人……街とかで見かけたら10人が10人とも振り返るであろう（男女共々）

能力：戦闘能力はないが、自分の思った人に幸運をもたらす能力。

戦闘力：下の上ぐらい（恋姫でいう桃香ぐらい）

好きなもの：ゼウス、アテネ、紫郎（こんな息子を持ちたいそうです）、マリア様

嫌いなもの：ゼウスが他の女性と話している事

呼ばれ方：ヘラ、ヘラさん、女神様、ヤンデレ

名前：ロキ

種族：神（北欧神話）

巨人の血を引きながらもオーディンに力が認められてアースガルズに住み、オーディンやトールと共に旅に出ることもあった。

男神であるが、時に女性にも変化することもあると…

とにかく悪戯が好きでやりすぎで義兄弟のオーディンに毎回説教を喰らっている。

髪型は深いブラックのロング、背は190cmの超イケメン

能力：物を作り出す程度（本物とそっくりな物を作り出す）

戦闘力：戦闘力はあまりないが、逃げる事に関しては誰にも負けな  
い。

好きなもの：悪事、悪戯、アン、娘達

嫌いなもの：娘達に手を出す奴ら、義兄オーティン

呼ばれ方：ロキ、ロッキー、ロンロン、神速

名前：アングルボダ

種族：巨人族（北欧神話）

巨人族だが、普通の人間状態にもなれる。

腰まである黒髪に深い緋の瞳を持つ絶世の美女

夫の悪戯があまりにも馬鹿馬鹿しいので、一回本気で喧嘩をしてみ  
たら……圧勝だったみたい。

能力：これとってないが、力が強いぐらい。

戦闘力：ロキに勝つぐらいだから、それなりに強い。

好きなもの：ロキ、娘達、紫郎（愚痴を聞いてくれるから）

嫌いなもの：ロキの悪戯、料理

呼ばれ方：アン、アンさん、アンちゃん

（家出組）

名前：アテナ

種族：神（ギリシア神話）

知恵、芸術、工芸、戦略を司るギリシア神話の女神。

ゼウス曰く、妻のヘラに似過ぎており金髪碧眼の美人らしい、そして自慢の娘らしい……

ヘラ曰く、武力はかなり強いらしい、上（恋姫でいう思春ぐらい）下（恋姫でいう思春ぐらい）

でも頭が切れるらしく、守る戦いになると武力が2倍くらい上がるらしい。

能力：特にないらしい、防具を作るくらい（盾や鎧や指輪……その他諸々）

好きなもの：???

嫌いなもの：父親ゼウス、ゴキブリ

呼ばれ方、アテネ、アテナ、アツちゃん、アーたん、アーちゃん

名前：フェンリル

種族：人と巨人のハーフ（北欧神話）

歴史上では、オオカミの姿をした巨大な怪物と言われているが、実は人間の形をしているらしい……ただ狼の耳みたいのが付いているみたい。

ロキ曰く、髪は茶髪で体系はスリムで活発でいつも明るくて、ムードメーカーと言っていた。

アン曰く、狼と香辛料のホロだと言っていた……てか！狼と香辛料知ってるのかよ！

能力：獣化、遠吠えで仲間を呼べる。

好きなもの：???

嫌いなもの：父さん（ロキ）、花粉（花粉症らしい）

呼ばれ方：フェン、リル、フェンちゃん、フェイ

名前：ヨルムガント

種族：人と巨人のハーフ（北欧神話）

これまた、歴史上では、蛇の怪物と言われているが実は人間の形をしているらしい……ただ細い尻尾が付いているらしい。

ロキ曰く、髪は肩まである黒髪、体系はスリムでいつも姉と何かと張り合っており、負けず嫌いな女の子と言っていた。

アン曰く、尻尾を掴むと感じちゃうと言っていた、後ツンドラタイプと言っていた。………てか！現代用語をよく知っているな！

能力：腕が伸びるらしい、仲間の蛇を呼べる。

好きなもの：???

嫌いなもの：親父、<sup>ロキ</sup>雷

呼ばれ方：ヨル、スネーク（メタルギアのじゃありません）、

名前：ヘル

種族：人と巨人のハーフ（北欧神話）

3姉妹の中で唯一、人の体をしており、ちょっと体が弱いそうだ。

ロキ曰く、髪は肩に当たるぐらいの白い髪、体系はスリムで幼女、いつも姉達に振り回されており、姉妹の中で一番の面倒見がいいらしい。

アン曰く、3姉妹のうち一番家庭的と言っていた。

能力：死者の霊を操れる程度

好きなもの：???

嫌いなもの：男性、独りでいる事

呼ばれ方、ヘル、三女、幼女、

**主人公設定の変更 新キャラ登場！ (後書き)**

もし新キャラが戦いに参加した時に能力の詳細をのせたいと思います。

なるべく急いで次を作ります！

でも……メタルギアピースウォーカーを買ったためにそちらに集中するかもしれませんが……



第十四話 紫郎は伏竜と鳳雛と出会う(前書き)

本当に更新遅くてすみません。

## 第十四話 紫郎は伏竜と鳳雛と出会う

呉を出てから半日……

「主、日も暮れて来ましたから、この辺で今日は……」

「そうだね、星も歩き疲れたでしょ？」

「何を申される！これでも修練は欠かさずしてるゆえにこの程度では疲れはしません！」

確かに、汗一つ流していないからなあWWW

「分かったよ、丁度よくあそこに家があるから一晩泊まれないか聞いてみよう」

「承知しました」

いいタイミングで見つけてよかったよ。

……

……

……

（?????side）

私は何時も通り朱里と雛理と一緒に夕食の支度をしていたら……

ドン…ドン…

「すみません〜!」

誰か尋ねてきたのかしら…?

「私が出ますから、朱里、雛理は料理の続きをしておいて」

「はい」

「…先生…一応気をつけてください」

雛理は心配性ねえ

「心配しなくても大丈夫よ」

安心させようと雛理の頭を撫でた。

「…ん…」

雛理照れながらも納得してくれたみたい。

「ちょっと見てきますね」

私は玄関の方へと向かった。

ガチャ…

門を開けてみると、そこには…

「夜分遅くにすいません、私達は旅の者です…一晩だけ体を休めさせてくれませんか？」

私の目の前に現れたのは…金色の髪、真紅の瞳、気品に溢れた姿をした殿方…

私は…その人に見惚れてしまった。

「あの…大丈夫ですか？」

私は惚けていたらしい。

「あつ！はい、一晩ぐらいならいいですよ」

この人は私達に危害を加えたりはしない…

なぜならあの人の瞳は澱んでいなかった。

私は朱里や雛理より永く生きている分、人の見分け方は分かっている方だと思っています。

だから言える…この人は私達に危害は加えない。

「本当ですか！ありがとうございます」

「野宿しなくて済みますね、主…」

連れれの御方も女性、とても武に長けている雰囲気をしている。

「今夕食を作っていましたので、ちょうど良かったですね」

「夕食頂いていいのですか？」

「どうぞ、遠慮なさらず」

この人とはちょっと話してみたい……それに確かめたいこともあるので……

「何から何までありがとうございます」

男の人が頭を下げてくれた。

「いいですよ、御飯というのは大勢で食べた方がいいですか」

「本当にありがとうございます、自分は櫻井、字は紫郎というものです」

やっぱりこの人が最近噂になっている、天の御遣い……

見た目でも充分に見分けが付きますね。

「私の名は趙雲、字は子竜です」

この人も噂通り、天の御遣いの側近……

やはり噂と一致します……この人達に間違いないです。

「私の名前は水鏡と申します、この家で私塾を開いている者です」

紫郎さんは驚いた顔していますが、何かあったのでしょうか…？

「では、中へどうぞ」

朱里や雛理、見たら驚くかしら

〈水鏡side out〉

俺は今…ものすごく驚いている…

まさか寄った場所が水鏡先生がいる私塾だったとは……

これは原作に出てないよな……かなり話が変わってしまったな……  
まあいいか！

あつ、名軍師の諸葛亮と鳳統に会った……最初に俺を見た時に「は  
わわ〜」、「あわわ〜」と言って驚いていました。

これを聞いて感動していた……自分が居たwww

そして水鏡先生は俺が天の御遣いと分かっていたらしい、諸葛亮と  
鳳統が驚き過ぎてましたwww

水鏡先生はなんでも『見た目』で俺が天の御遣いと分かったそうで  
す。

それで今は朱里と雛理と一緒に料理を作っています。

えっ、なんで真名呼んでいるか……？……それは料理しながら話して

いたら急に呼んでくれって言われたからさあ！

雛理も恥ずかしそうに「呼んでいいでちゅ、噛んじゃった／＼あわわ／＼／」と慌て出したので落ち着かせるために優しく頭を撫でたら、猫のように目を細めて気持ちよさそうにしていました。

そんなこんなで呼んでいいってことになりましたwww

今は夕食を頂いています。

「この春巻き美味しいな」

これはかなり美味しい。

「それは私と雛理ちゃんが作ったんですよ！」

へえ〜こんな美味しい物を作れるなんて凄いな！

「朱里も雛理もいいお嫁さんなれるねえ」

これは本当にいい出来だ。

「しよんなことありませんよ／＼／（はわわ〜噛んじゃった／＼／）

・・・」

「……／＼／」

「あらら〜」

朱里は噛んじゃったね

朱里も雛理も照れ屋だな

水鏡さんは本当のお母さんみたいですね。

「水鏡殿、後でこのメンマ作り方を教えてください！」

星は水鏡さん特製メンマに惚れたらしく、メンマばかり食べている。

「はい、いいですよ」

本当にいい人だな、水鏡さん

……  
……  
……

さてご飯も食べ終わって、俺は自室でのんびりしている、ちなみに星とは違う部屋だぞ！

「主、私を呼んだ理由はなんですか……？……まさか……一夜を共にしろというのであれば、ぜひしますが！」

……

改めて……星を呼んだ理由は『気』を使う練習をさせるためだ。

星にも強くなって貰いたいから……それに万が一ってこともあるから……



「えつとく星を呼んだ理由は『気』というものを覚えて欲しくて」

「『気』ですか…？…聞いたことならありますが、私に使えるのですか？」

「人が誰でも持つていられると言われていたからね！…星の体の中から気の波動を感じるから使えるよ…その質は人それぞれだけどねえ」

「なるほど…」

なんとか納得してくれたみたいだ。

「『気』というのは人間の体内に秘められた生命を根源とするものであり、使用者の体力を消耗させて用いる、そしてそれを自分の体に纏わせるのも武器に纏わせるのもいい考えだね、体に纏わせれば身体能力の向上にもなるし、武器に纏わせれば切断力、貫通力が増すから結構いいと思うよ、でも使い過ぎると気絶する場合もあるから注意するように！」

「本当ですか！」

瞳を輝かせながら見てきた。

興味津々みたいだ。

「ああ、もしものためだ」

「もしも…ってなんですか？」

おっと！口に出してしまっただか！

「いやなんでもないよ！さてと修行を開始しようか！」

それからは星に気の使い方を教えていました。

〈朱里 side〉

私は最近噂になっている天の御遣い様と言われ呉では金獅子と呼ばれている、櫻井紫郎さんに会いました。

私はどうゆう人が気になりました……怖い人なのか、それとも民の為に戦っている人なのか……

でも噂を聞けば聞くほど、私は気になって仕方ありませんでした。

どの噂も良い評判を言っており、率先して老人を助けたり、人助けの話を良く耳にします。

その人は絶対にいい人なんだなと思っていました。

そして私と雛理ちゃんはお料理の最中に……水鏡先生が客人といって連れて来た人が……なんとツ！……噂の人でした！！

私も雛理ちゃんも驚きすぎて……「はわわ〜」、「あわわ〜」と取り乱してしまいました……

その後は一緒にお料理を作っていました・・・その最中に私の真名と雛理ちゃんの真名を教えました・・・

私は雛理ちゃんが初対面の人に真名を教えた事に驚いていました。

でもなんとなく気持ちは分かります・・・なぜなら・・・紫郎様はなんとゆうか・・・信用できるというか・・・んんんそう!・・・安心してできる。

雛理ちゃんもそう思ったに違いありません。

そして私は今・・・水鏡先生の部屋にいます。

雛理ちゃんと一緒に・・・

〔朱里 side out〕

〔雛理 side〕

私は今、朱里ちゃんと一緒に水鏡先生の部屋に来ています。

「貴方達が来た理由は分かりますよ」

やっぱり水鏡先生には御見通しのようです・・・

私と朱里ちゃんは一緒に話し合って・・・天の御遣い様・・・櫻井紫郎様に付いて行きたいと決めたのです。

元々興味がありまして、天の御遣い様を知りたいと思っていた時にやって来ましたので。

人と接するのが苦手な私でも・・・すぐに話せるようになり、紫郎さんと話していると・・・なんというか・・・気持ちがポカポカするというか・・・安心できる。

多分、朱里ちゃんもそう思っているに違いありません。

「貴方達の好きなようにしなさい」

水鏡先生は優しく微笑みながら言って下さいました。

「本当にいいんですか？」

私は聞いてみました。

「いいですよ、貴方達の未来は自分で切り開くものです・・・それに紫郎様なら信用に値する御方です」

私達は納得しました。

「さあ、もう夜も晚いですし、明日の朝にでも話してみればいいでしょう」

「はい！」

私と朱里ちゃんはすぐに部屋を出て、自分達の部屋に戻りました。

「まさか雛理が自分の意思で動くなんて……これは嬉しい事ねえ」

最後に水鏡先生がなんて言ったのかは……私には聞こえませんでした。

〔雛理 side out〕

……

……

……

何時の間にか寝てしまったみたいだ。

確か……星と『気』の練習をしていたんだっただなあ！

っていつか！隣でスヤスヤ寝ているんですけど……

服が乱れていないから、何もしていないのは分かるが……なんで一緒に寝てんだろ……？

「……主い……」

起きているのか？……寝言か。

それにしても……こうしてゆっくり見ると……本当に綺麗だな。

紫郎は星の頭をゆっくりと撫でた。

「……ん」

星も気持ちよさそうに寝ている。

こんないい女を家臣に持って……いや家臣じゃなくて、仲間  
に持っている俺は幸せ物だな。

そつえば桃香達は元気だろうか？

……

……

……

〈愛紗 side〉

「ご主人様!!」

私は不意に……今は旅に出ている我が主で天の御遣い様である……  
・櫻井紫郎様のことを呼んでしまった。

今……ご主人様が私のことを読んだ気がしたのですが……

「気のせいですね」

……つとそこに……

ドオオン!!

「愛紗ちゃん!!」

「愛紗！」

扉を突き破る勢いで入って来たのは、私の義姉妹の契りを交わした桃香様と鈴々だった。

「どうしたんですか？二人揃って？」

二人ともすごい勢いで入ってきて、いったいどうしたのか？

「愛紗ちゃん！今ご主人様が私を呼んだ感じしたんだけど・・・」

えっ！さっきのは気のせいではなかったか！

「鈴々も呼ばれたような気がしたのだ！」

やっぱり気のせいではなかったですね！

「私も呼ばれたような気がしました」

「やっぱり！気のせいなんかじゃなかったみたい！三人共そう感じたってことは、ご主人様が私達のことを思ったってことだよ」

これはある意味で凄い事ですね！三人共一緒の人のことを感じたというの・・・

「紫郎お兄ちゃんはいつ帰って来るのだ？」

鈴々が言った。

本当に何時になったら帰って来て下さるのでしょうか・・・

「きつと帰って来るよ、私達と約束したし・・・それに・・・」

桃香様が満面の笑みで言う。

「それに・・・ご主人様は私達を忘れていなかったでしょ！今呼んだ感じがしたのもきつとご主人様が私達のことを心配下さったに違いないよ」

桃香様は心の底に思っていること言ったに違いない。

まったく・・・私とした事が・・・主を信じなくて何が臣下か！

「そうです、私達をご主人様の帰りを待たないといけませんねえ！」

「うん！そうだね！」

「なのだ〜」

本当に私達のご主人様にベタ惚れですね。

こんなに待つのを楽しんだ事はありませんよ。

「じゃあさっそく桃香様は政務を・・・鈴々は兵の訓練を」

今私達は徐州を守っている。

桃香様が徐州太守に就任したのです。



「了解！「なのだ」！」

二人ともいい返事をして、いい表情で仕事に向かって行った。

「さて、私もやりますか！」

ご主人様・・・なるべく早く帰って来て下さい。

（愛紗 side out）

.....

.....

.....

なんだろう・・・今・・・愛紗達が俺の事を思ってくれたような・・・  
・これは気のせいなんかじゃないな。

本当・・・俺って幸せものだな。

「主・・・大丈夫ですか・・・顔がにやけてますよ」

おっと顔に出してしまったか！

「すまん・・・で・・・話を聞くが本当に良いのかい？」

俺は今・・・

「はい！私達は貴方に仕えたいのです」

「私も！」

そう・・・俺は朱里と雛理と話している。

何でも天の御遣い様の噂を聞いて、元々仕えようと思っていたらしく・・・そして昨日まさかの本物と出会い・・・話してみても噂に違わぬお人だったから決意したとのこと。

「水鏡さんはいいのですか？」

「はい、この子たちにはなるべく自分達の自由にさせて欲しいのです」

水鏡さんは慈愛満ちた表情でそう言った。

「分かりました、では朱里、雛理、これから宜しくお願いするよ」

あの子達の決意は固いな、目を見れば分かる。

「はい！宜しく願います」

うん！元気があっていいねえ！

紫郎は朱里と雛理の頭を優しく撫でた。

「いい返事だ、でも無茶はしちゃ駄目だよ」

俺は自分できる最高の笑みをした。

「／／／」

「ちよつ！主・・・それ反則です／＼／」

「あら／＼／」

紫郎の笑みに周りの人達も被害を受けてしまった。

おそろるべし紫郎！！

「じゃあこれからの方針なんだが・・・星と朱里達は今から桃香達に会いに行ってもらいます・・・」

「」「えっ！」「」

やはりいきなりだと驚くよな。

朱里達は桃香〓劉備と教えていた。

「主！そんな話聞いてませんよ」

そりゃそうだ！言っていないんだからWWW

「そりゃ〜言っていないからな、でも分かってくれ・・・これは必要なことなんだ」

「ですけど・・・」

これじゃあ埒がないな。

「じゃあ聞いてくれたら、何でも一つ言っ事を聞くんよ」

これで通じなかつたら、他に手が無いんだが・・・

「えっ・・・・・・・・・・本当ですか？」

おおオ！これは効いているぞ。

「ああ・・・何でも良いぞ」

この調子ならいけそうだな。

「なら主の子供を作らして下さい！」

「・・・・・・・・・・もう一言ってくれないか・・・？」

耳が遠くなったのかな・・・変なことが聞こえたような・・・

水鏡さんや朱里や雛理も目が点になってますよ。

「ですから・・・主の子を生ませて下さい」

「・・・・・・・・・・分かった善処する」

こうでもしないと絶対に俺の傍を離れ様としないもんな・・・

「はわわ〜」

「あわわ〜」

「若いつて良い事ねえ〜」

朱里も雛理も動揺してしまったようだな。

水鏡さん、あなたは十分に若いですよ、そこ等辺の村娘より綺麗ですよ。

「本当ですか・・・？もしも破ったら・・・どうなるか・・・分かりますね」

ちょっと！怖すぎるぞ！それに槍を首に当てるな！

「分かっているよ・・・善処するが、せめてこの世の中が平和になつてからな！」

「分かりました、それまでこの契約は胸の奥に閉っておきます」

ふうふうどうにか切り抜けた。

「話が変わってしまったが・・・噂では桃香達は徐州を統治しているみたいだから・・・三人では政務も大変だろうし、そこで朱里達には桃香達の手助けをしてもらいたい」

そうなのだよ、俺も桃香が徐州の太守になったと聞いて驚いたよ。

「でもそれだと・・・紫郎様が一人になっちゃうよ」

雛理そんな潤んだ目で見ないでくれよ。

「俺はちょっとやることがあるんだ」

「やること・・・？」

俺は曹操と董卓に会いたいのだよ。

でももしかしたら会う前に戦闘になるかもしれない・・・それでも朱里達が同行していて、被害が出たらたまったものじゃない。

だから安全策ということで桃香達の所に行かせるのだ。

「まあ色々あるんだよ」

「はぐらかしましたね」

そこをツツコな星！

「朱里と雛理、後は水鏡さん、この首飾りをしてください」

俺は三人に琥珀色の勾玉を渡した。

「これは？」

「これはですね・・・相手のことを念じれば言葉を必要とせず話せる道具です」

三人共驚いている。

実際にやった方がいいかな？

「（えつと聞こえますか？）」

「「「えつ！」「」」

初めての体験で三人共愕然としている。

「まあ、こんな感じですが、距離はありません、相手が存在していは通じますよ」

三人共しぶしぶ納得したって感じですね。

「なんで私にもこれをくれたのですか？」

水鏡さんが聞いてきた。

「こんなご時世に女性一人と私塾の子供達じゃ危なすぎる・・・ですから危なくなつた時に私を呼んで頂ければいいと思ひまして、呼ばすぐに駆けつけますよ」

紫郎は又しても笑みを見せる。

「その心遣いありがとうございます／＼・・・大切にします」

水鏡さんも満更でもないように大切に握り締めた。

朱里や雛理も嬉しそうに首にかけていた。

「そういえば星さんにはあげないのですか？」

朱里があえて気になっていたことを聞いてみた。

そう星には首飾りをかけていない・・・

「私は主から『念話』といものを教わったから心配しなくてもいいぞ！」

俺は昨日の内に星に勾玉を必要とせずに話せるように教えといた・  
でも念話には条件があった。

「『念話』ですか？・・・それはいつたいなんですか？」

「それはだな、その勾玉を必要とせずに話せる技だ、だが主がいうにはその相手と念話するなら、まじ・・・」「星そこまで！・・・全部言わせてくださいよ主！」

そうなのだ・・・特定の相手と念話をするならその相手とパスを通すみたいだ。

つまり・・・接吻や交わる必要があるみたいなのだ。

これはマリアから教えてもらった知識にあつたものだ。

「この話は今度にしよう！じゃあもう俺は出るぞ」

「もう行くのですか？」

星が悲しそうな表情で見てくる。

「善は急げというからな、じゃあ星・・・朱里と雛理を頼むぞ！」

「分かっていますよ、この趙子竜にお任せを！」

いい返事をありがとう。



「それとこの手紙を桃香達と一緒に見てくれ」

紫郎は手紙を星に渡した。

「これは？」

「重要なことだ・・・それが今後の鍵になることが書いてある事だから無くすなよ」

その手紙には今後の俺達の運命を変える切り札的ことが書いてある。

「承知しました、私は朱里達を送って、この手紙を桃香達と見ればいいのですね？」

「そのとおり！」

この手紙は今後の恋姫の展開を予測した計画が入っているが・・・

おれが気になっているのはイレギュラー達だ。

まだどこにいるかも分かっていないから・・・こいつらの動きがもしかしたら何らかの影響をもたらすかもしれない。

「じゃあこの手紙を見た後は主の後を追いかけてよいのですか？」

考え事をしていたら星が言ってきた。

「いいよ、ただし桃香達にも気の使い方を説明してくれよ、せめて念話を使えるようにしてほしい、後は鈴々にはこの勾玉を付けさせ

といてくれ」

俺はもう一個勾玉の首飾りを渡した。

「分かりました」

これで桃香達の方は大丈夫だろ。

「朱里も雛理もしっかり桃香達を支えてくれよ」

「はい！」

いい返事だね、これは期待できるな。

「水鏡さんも一晩だけですけどお世話になりました」

「いえ、これからもいつでも来て下さって結構ですよ」

本当に良いお人だ。

「・・・主・・・」

星よ・・・そんな悲しそうな表情をするなよ。

「一時離れるだけだ、それにいつでも念話で話せるだろ？」

「それはそうなのですが・・・」

星もまだ不安そうだな・・・星とは一番長く居たからな。

「じゃあ最後に！」

「へえっ！……んっ……ん……ん……ちゅ……んっ……んむっ」

俺は星にキスをした。

「……んっ……ちゅ……ちゅ……くちゅ」

星も求めきた。

「はぁ……はぁ……やっぱり……主との接吻は最高です」

満面の笑みでうつとりしている。

「じゃあこれで我慢してくれよ、次はまた会ったら！」

「まだ満足していませんが……分かりました」

「じゃあまたな」

……

……

……

「行っちゃったね」

「そうだね」

朱里と雛理は不満気に言った。

「でも「またな」と言ってくれていたんだからまた会えますよ」

水鏡先生が言った。

「そつだぞ、主は絶対に約束を破ったりはしない」

星も自信満々に言った。

「そつですね」

「そつだね」

二人は笑顔で答える。

「じゃあ私達も行こうか！」

星がそついうと・・・

「はい！宜しく願います」

元氣よく答える。

「2人共紫郎様が言っていた通りあまり無茶はしないようにね」

水鏡先生は本当の母親見たく2人に問い掛ける。

「はい！なるべくしないようにします！」

「私も頑張ります・・・」

朱里は笑みで答え、雖理はちょっと困った顔をしたらけれど、すぐに笑みで言った。

「じゃあ行くぞ」

星は歩き出した。

「じゃあまた何時か来ますね！水鏡先生！」

「手紙書くから〜！」

2人は星の後を付いて行った。

「待つてるわよ」

水鏡先生は見えなくなるまで手を振り続けた。

「あの子達の歴史が始まるのねえ・・・この新たな始まりは間違いなく、歴史に残ることになるでしょうね」

水鏡先生は誰もいないこの時・・・一人・・・行く末を気にしていた。

#### 第十四話 紫郎は伏竜と鳳雛と出会う（後書き）

一週間で掛かってしまいスイマセン。

しかもこれからテストや修学旅行があるので、もっと遅れるかもしれません。

話の内容がかなりグダグダになってしまいました。

自分の頭の中では、虎牢関の戦いまで内容は決まっていますが・

・

PCを弄る暇がないので・・・でもなるべく早くそこまで行きたいと思います。

## 第十五話 あの人組と出会う

星達と分かれて、二日が経った……改めて一人旅は淋しい事に気付いた。

そんな事はいいとして……俺は今街で飯を食べている。

なんで？というところ……俺の目的は曹操に会うためということだ。

次に董卓に会うのも、この旅の目的なんだ。

だから近場から行くとしたら、まずは曹操が近かったから曹操に当たってわけだよ。

じゃあなぜ飯を食べているかというところ……お腹が減ったからに決まっているだろう！

だから今は休憩みたいなもんだな。

だが……飯を食べているのはいいが……みなさん荷物を纏めているんですね……なんで……？

「オイ！ご飯食べている人」

はて……？ご飯食べている人？

「さっき注文した人だよ、ついでに言うと顔を隠している人だよ！」

俺か……今の俺の状態はローブを着ており、そして髪を隠すた

めにフードもしている。

他人から見れば絶対に怪しまれる。

「やっと気付いたようだな、まあそんなことは良いとしてあんたも早く逃げろよ」

「逃げる？」

なぜ逃げなければならぬのか？

「なんでも賊が攻めてくるみたいなんだとよ、それもかなりの数だ」  
「まったく！あつちでも賊は出る、こつちでも賊は出る、本当に荒れている世の中だな。」

「でも義勇兵が時間を稼いでくれるみたいだから」

「へえ」

義勇兵か・・・後で見に行くか！

「俺は家族がいるから一足先に逃げるから、飯の代金はいいから！あんたも早くこの街を出ろよ！」

と言い残し店主は家族を連れて走っていた。

「マジでタダ飯かよ！儲けだな」

三分後



「じつそうさまでした」

麻婆豆腐と青椒肉絲とご飯大盛りを間食した。

「さてと・・・義勇軍を見に行きますか！」

紫郎はその場から立ち去った。

.....

.....

.....

俺は今城壁に来ている。

確かに・・・義勇兵がいるんだが・・・少なすぎやしないか？

700〜800ぐらいしかいないような気がするが・・・自発的に参加する兵には多い方か。

だが向こうの兵力にもよるな・・・それにこちらの指揮官がどうゆう人なのかにもよるな。

「賊はすぐ近くまで来ている、みんなそれぞれ配置に付いてくれ」

白い髪に体中に傷がある女の子がそういうとみんなが配置に付いて行った。

でも三人だけその場残っている人たちがいる・・・あれ・・・あの子達は確か・・・

「なあゝ風・・・曹操様に来るまでほんなに耐えられるかい？」

今度は紫色をした髪の子が言った・・・ていっかなぜにビキニ？あんな肌を露出させていて大丈夫なのか？

「正直厳しい過ぎる、こちらは800の兵に対し賊共は5000だ・・・どのぐらい耐えられるか・・・私にも分からない」

それは厳しいな、敵の数が圧倒的過ぎる・・・しかもこちらはあまり訓練をされていない義勇兵だから不利だ。

「曹操様に救援を頼んだのだけど・・・後二刻は掛かるとさっき伝令が届いたの」

次に話したのは片方に髪を纏めて眼鏡をしている女の子だ。

二刻というと・・・一時間だったけど・・・？・・・そんなことはいとして二刻も耐えられるのか？

「二刻か・・・守りに徹するしかないな」

その通りだ、もし「討って出る」とか言い出したらどうしようか思っただよ！

みなさんも分かる人は分かるだろ・・・この三人は楽進、李典、于禁・・・つまりこの展開は魏ルートだな。

援軍で曹操が来るなら、これを気に会つとくか！

そんならさっそく助けますか！

……

……

……

（風side）

私は今義勇軍に参加している……なぜならこの近くにいる賊がこの街を攻めてくると聞いたからである。

今は共に義勇軍参加してくれた、真桜、沙和と一緒に迎撃の指揮に合ったっているのだが……数が違いすぎるのだ。

遠くの方で土煙がたっている……報告によればあちらは5000、それに比べこちらは800だ。

これは厳しい……近くの太守である、曹操様に救援を頼んだが、まだ来るのには時間が掛かる。

どうする……どうすればいい……我々が突破されれば後ろにいる民が殺されるだろ……そんなことさせる訳にはいかない！

「あの〜スイマセン」

んっ！私の後ろに白い装束を着た男が居た。

私に気が配を感じ取れなかった！……いや私達三人共が気付けなかった。

この男かなりできるな！

「何者だ！」

私が白装束の男に聞いてみると・・・

「唯の儂い旅人ですよ」

男はそう言った・・・そんなわけないだろ！この男はかなり武術を極めている者に違いない。

「その旅人さんがどういったようでごここに来たんや！」

真桜もかなり警戒しているようだ、いや私達三人共警戒している。

「ただ単に義勇兵のみなさんを見に来たのですよ・・・でも気が変わりました私も参加します」

はっ！この男は何を言っているんだ？・・・真桜も沙和も啞然としているぞ。

見に来たと言っておきながら、気が変わって参加するだど・・・ふざけるな！

「ふざけるな！これは遊びじゃないんだぞ！」

私はふざけるとしか思えないこの男に怒りをぶつけてしまった。

「ふざけている訳無いだろ・・・それに今の君達は猫の手も借りた位だろ？」

くっ！この男の言うことは正しい。

後ろにいる真桜と沙和が呼んでいる。

「この際だからなんでもありやる」

真桜が私の耳元でそう言った。

「そうなの～今は一人でも兵が欲しいの～」

沙和も私の耳元でそう言った。

仕方ないか・・・今はあいつの言う通り猫の手も借りたい位だからな。

「分かった、おまえの参加を・・・!!」

私は振り返りながら言っていたが、そこには誰もいなかった。

「俺が賊共の相手をするから、もしものために守りの準備はしておけよ」

声が出した方を振り返ると・・・白装束の男が居たけど・・・今度は頭巾風にしたかぶり物を取っている。(頭巾風とはフードのことです)

風のせいで金色の髪が後ろに靡なびいている・・・後ろ姿だけでもすごい迫力を感じる。

ゆっくりとその人はこちらを向いた。

「もしも曹操が救援で来た時に帰って来ていなかったら死んだと思っ  
つてくれ」

その御方はこちらを向いてそう言った。

顔がはつきり見える・・・金色の長髪をしており、真紅の瞳でこちら  
らを見ている・・・なんなんだ・・・あの燃え上がる様な瞳は・・・  
なんでだろう・・・この人はいつたい？・・・私はなぜだか興味も  
沸いた・・・ただ恐怖心も沸いてきた。

凧はいきなり現れた紫郎に魅入ってしまった・・・ただ得たいの知  
れない人に恐怖もしていた。

凧 side out

真桜 side

なんなんや！あの旅人さんは・・・

さっきまでそこに居たと思っていたら・・・今は城壁の前に乗り出  
しおるし。

それに今は顔が見える・・・なっ！ななな！あんなカツコイイ男こ  
の世におるん？

隣におる、凧も沙和も呆然としておる・・・あれっ？よく見ると凧  
も沙和も顔がちょっと赤くなつてないか？でも凧のあれは・・・

ちよつと動揺している表情も見えるような・・・勘違いやな。

でもこれは、これは！まさかの！まさかであつか！・・・という私も頬が熱くなつてるのは気のせいか・・・？

〈真桜 side out〉

〈沙和 side〉

私は今人生で初めての一目惚れというものを経験しているの〜

あんなに綺麗な金色の髪見たことないの〜それに真っ赤に燃えている瞳がとても綺麗なの〜

それに見たこともない服を着ているの〜それでも十分気になるの〜！

横を向いて見ると凧と真桜が呆然としているの〜・・・あれっ！でも頬が微かに赤いような・・・？

これはもしや・・・ま・さ・か・な・の〜!!!

〈沙和 side out〉

・・・ありや・・・三人共固まつちやつたよ・・・

やはりフードは取らなかつた方が良かったかな。

はあ〜今はそんなことは気にしていられないな。

「じゃあ、さっき言った通りお願いね」

俺は城壁から飛び降りようとしたが・・・「お待ち下さい！」と声を掛けられた。

「貴方様のお名前を教えてください！」

まだ名前を聞いていないが・・・多分楽進から名前を尋ねられた。

「俺の名前は櫻井紫郎だ、じゃあまたな、とあ〜！」

俺は城壁から飛び降りて無影という技を使った、これは俺が開発した簡単にいえばネ〇ま！に出てくる虚空瞬動だ。

この無影は空中の方向転換は利くし、工夫すれば空中に浮いていられる技だ。

これは愛紗や星に教える予定だ。

さて後ろから声が聞こえた気がするが、気にしないことにしよう。

あっという間に敵の目の前に来てしまいました。

「おっと！ここから先は行かせないぜ・・・賊のみなさん！」

俺がそういつと賊共が足を止めた。

「誰だ、てめえ！」



リーダーらしき奴が言った。

「私はただの旅人です、今貴方達の前に立っている理由はある御願  
いがあります……」

紫郎はなるべくいい人そうに笑みを見せた。

だが紫郎の願いを聞くわけもなく……

「へッ！誰がてめえなんぞの願いを聞くかよ、野郎共殺せ！」

リーダーがそうゆうと数人が紫郎に斬りかかった。

賊の剣が紫郎に当たる……ガキンツ！と音がした……

「賊のリーダー side」

なんなんだ！あいつは……いきなり現れて御願いだと！意味が分  
からねえ！

「へえ！誰がてめえなんぞの願いを聞くかよ、野郎共殺せ！」

俺がそういつと仲間の数人が剣で斬りかかっていった。

俺はその瞬間、なぜだか悪寒が背筋にに走った、なんだんだよお！

いたい！

ガキンツ！

な、なん・・・なんだと！なんで斬れないんだよ。

そいつは剣を避けることなくその身に受けた・・・だが体は斬られる事はなく体に剣が当たった状態で鉄でも叩いたんじゃないかという音を出してそいつは居る。

「・・・恐れでは私は倒せぬよ」

いきなり金髪の男が喋りだした。

「<sup>は</sup>卿らでは私は倒せぬよ、なぜなら・・・」

男がそう言って、手を動かして剣に触れる。

「私と卿らの背負っている物が違いすぎる」

パキンツ！っという音とともに触れていた数本の剣が砕けた。

化け物だ！なんなんだよ！こいつは！

「卿らはもう消えてくれ」

金髪の男が手を上にあげた、すると・・・男の後ろが赤くなっ  
ていきどどん広がつていく。

赤い空間から禍々しい武器が俺の視野で捉えられる範囲いっぱい

出てきている……いや……まだまだ出てくる。

こいつは！俺らが相手してはいけない存在なんだと認識した。

「賊の諸君……さようなら」

金髪の男はそう言うと手を振り下ろした。

今……この瞬間……この何万という武器が飛んでくる中……俺は後悔をした……今日攻めるんじゃないかと……

そこから……俺の意識途切れた。

〔賊のリーダー side out〕

俺はなぜだかシリアスになっていた。

慣れない口調で喋ったからかな？……いや違うな……これは人を殺しているからだ。

今日の前で……一方的な展開というなの……虐殺が起こっている。

俺の王の財宝からゲイト・オブ・バビロン雨霰と発射されている、幾千幾万の武器が賊を絶命させている。

運が悪いものは腕を吹き飛ばされているのにまだ意識があったり、首に刺さっているのにまだ意識があったり、血の池地獄と化してる……

だがこれも経験だ・・・もう人を殺すのには慣れたつもりだったが・・・改めて再確認。

賊の連中も生きる為に村や街を襲っているに違いない・・・やはり人それぞれ生きるのに必死なんだよな。

っと思っている内に最後の一人が絶命した。

こんなに人を殺して・・・こんな俺があいつら・・・桃香達と一緒に居ていいものなのだろうか・・・？

だがこれを・・・こいつらの命を背負ってこそ俺は前に進めるのかな・・・？

ちよっとクサイセリフを言ってしまったか・・・我ながら馬鹿だな！

んっ！ちよっと後方だが気配がするな・・・それもかなりの数だ。

これはきつと曹操だな、後は強い気が5人・・・いや6人いるな。

これは多分、曹操、夏侯姉妹、許緒、楽進、李典、于禁だな。

そう考えているうちにもう後ろにいた・・・

## 第十五話 あの人組と出会う（後書き）

なんか急いで作ったのに一週間掛かってしまいました。

新しく新キャラを入れたのですが自分で思いつく人物が居るっちやいうんですけど・・真名が思いつかないんですよ。

そこでアンケートを取りたいと思います。

えっとこの中にいる人物は出る予定なのです。でもまだ増えるかもしません。

高順、馬騰、ホウ徳、田豊、張コウ、徐盛、凌統、魯肅、太史慈、  
法正、張任、徐庶、月英、姜維、徐晃、曹仁、司馬懿、

それぞれのキャラの詳細

高順

戦闘スタイル：弓を主体戦う

見た目：腰まであるポニーテールで赤いリボンで留めている黒髪で、  
スタイルは蜀の桔梗と同じぐらい

性格：いつもはクールに何でもこなすお姉さんの存在なのだが、  
恋の前では甘えてしまう。音々音とは恋の取り合いをしている。

馬騰

戦闘スタイル：翠や蒲公英と一緒に槍を持って戦う。

見た目：翠が成長したって感じ、ポニーテールをしており、胸もかなりある、2人も産んだのかというほど美人。

性格：一言でいうと豪快な性格、だけど料理や裁縫が得意という意外な特技がある。

ホウ徳

戦闘スタイル：片手に一本ずつ槍を持って戦う。

見た目：キリツとしており、真っ白な髪が肩に当たるぐらい、スタイルは夏侯姉妹と同じぐらい。

性格：忠義心が厚く、規則には忠実、真面目な性格・・・だが酒癖が悪く何時もとは性格が正反対になってしまう。

田豊

戦闘スタイル：前線に出ることがないが、一応短剣を袖に入れている。

見た目：朱里や雛理みたいな口り、大き目の黒ぶち眼鏡をかけている。

性格：いつも落ち着いており猪々子や斗詩といつも麗羽の相手をさせられている、唯一斗詩の苦勞を分かっている一人。

張コウ

戦闘スタイル：小太刀を二本持ち速さで攪乱かくらんして戦うスタイル。

見た目：目が細く普通に相手と目を合わせようとすると睨まれていると思われるらしい、スタイルは思春と一緒にぐらい。

性格：自分の速さに自身を持っておりかなりの自信過剰な性格、でも心を許した者には性格が一転し、素直になる。

徐盛

戦闘スタイル：双剣でテクニカルに戦う。

見た目：いつも笑顔でいるお母さんの存在、茶髪色の髪が腰に届くぐらい、スタイルは祭と同じぐらい。

性格：おっとりしていてなんでもマイペース、口癖は「あらあら」

凌統

戦闘スタイル：三国無双に出てくる凌統と同じでヌンチャク

見た目：スタイルは蒲公英と一緒に感じて、肩に掛かるぐらいの黒い髪、頭部には飛び跳ねたアホ毛がある。

性格：悪戯好きで、いつも明るい性格である。だが甘寧との因縁があり父の仇をとろうとしている。

#### 魯肅

戦闘スタイル：杖を持って棒術で戦うがあまり戦闘には出ない。

見た目：まるで生氣でも抜けたような白い髪をしており、肌も白く体が弱いためいつも車椅子で行動している。

性格：誰にでも優しく差別なく人に接する、同時に人を見分ける洞察力が飛び向けており「孫策様はいずれこの大陸中に名を轟かすでしょう」と言った。

#### 太史慈

戦闘スタイル：連結剣をムチみたいに振り戦う。

見た目：頬に大きな傷があり怖そうな人にも見えるが至って優しい、髪は彼女を現すかのような真っ赤な髪をしている。

性格：かなり熱血漢が強く、ねっけつおんな熱血女言われている。

#### 法正

戦闘スタイル：レイピアみたいな武器でフェンシングみたいな戦い方をする。



見た目：狐目でオレンジ色の髪をして右の方に髪を結んでいる（Strikersに出てくる某魔法少女的な）

性格：お調子者でよく弄られる。

張任

戦闘スタイル：トンファーを武器に戦う。（某風紀委員長みたいな）

見た目：前髪が長く目が隠れている、素顔はかなりの美女、スタイルは紫苑と同じぐらい。

性格：任務はちゃんとこなす、書類整理もちゃんとこなすけどどじる、桃香よりかはマシだそうだ。

徐庶、

戦闘スタイル：凧と同じで手甲使って戦う。

見た目：髪の色は茶髪で前髪をを片方に寄せている（秋蘭みたいな感じ）

性格：何をやってもやる気が出ないがなんでもこなす、口癖は「給料分は働きますよ」

月英

戦闘スタイル：自作で作ったマスコット銃を使う。

見た目：愛紗の髪を解いた状態でポストン型の眼鏡をしており知的な見た目をしている。

性格：軍のこと、政治、外交、すべてをこなせるが・新しい発見や興味を持った物にはそれにのめり込んでしまい、回りの声が聞こえなくなってしまう（マッドサイエンティスト）

姜維

戦闘スタイル：十文字槍で戦う。

見た目：ツインテールで緑色の髪をしている、スタイルは紫苑や桔梗と同じぐらいなんだけど自分は朱里や雛理みたいな体系がよかったですと言っている。

性格：誰とでも仲良くできて、朱里を『お師匠様』と言って学問を習っている。

徐晃

戦闘スタイル：戦斧で戦う。

見た目：肩に当たるぐらいの髪をしており、いつもおろしており、でも武器を持たせると人格が変わり口調が悪くなる。色々な武器を持たすと口調も変わる。

性格：人と話すのが苦手で話されると物陰に隠れてしまう、武器を持たせると口調が変わりオラオラ系になる。その他の武器も色々で口調が変わる。

曹仁

戦闘スタイル：大きな盾をした模したパイルバンカーみたいな物を使う。(MELTY BLOOD Actress Againに出ってくるリースバイフェ・ストリンドヴァリみたいな)

見た目：青い髪を後ろで結んでおり、凛々しさと中世的な外見ゆえに男女の区別が付けにくい。リースそのもの

性格：戦闘ではド派手な行動が好きで、突撃隊長的な存在。だけど意外にも手が器用で家庭的な部分もある。

司馬懿

戦闘スタイル：糸を使い相手絞め殺したり切り裂いたりする。

見た目：紫色の髪をしており、右腕全体に包帯を巻いている。

性格：自分より劣る者にはキツく当たり、自分より優れていると思つた人には敬意を持って接する。口癖は「黙れ！下種ッ！」

えっと、もしも「自分はこうゆうキャラの方がいいかな？」という

ことがあれば見た目や性格を書いてくれれば、それを載せるかもし  
れません。

では真名を思いついた人は感想に書いてくれればありがたいです。

第十六話 魏 突入？ 霸王との出会い（前書き）

更新遅れてすいません。

まさかの修学旅行に中間試験があり書く気力が出ませんでした。

## 第十六話 魏 突入？ 霸王との出会い

（????? side out）

今私は陳留の近くで賊共が街に攻め込んで来ると聞き、春蘭、秋蘭、季衣、兵を三千率いて救援に向かった。

向かっている最中に向こうの街の義勇兵から救援要請を受けた、その者が言うには敵の数は五千だそうだ、そして義勇兵の数は八百だそうだ。

その兵から様子が伺える、その表情はかなり厳しいといっている。

それはそうでしょうね、数が違いすぎるもの・・・でも義勇兵の將はこの伝令役に伝言まで頼んでいる・・・「曹操様が来るまで耐えみせます」と言っていたらしい。

それはそれで面白いわね、数の差が圧倒的というのに耐えて見せるですって・・・ずいぶんと落ち着いているわね。

生きていたら是非とも会っておきたい人材だわ・・・私はそう思いつつ進軍を早めた。

.....

.....

.....

これはいったいどうゆうこと・・・なんで・・・戦闘行為が行なわれた形跡がない。

私が今、目にしているのは、攻められ必死に戦っている義勇兵の姿でもなく、攻められて燃えている街でもない……。何も被害を受けていない街があった。

殺されている民の姿もなく、義勇兵の死体も賊の死体もない。

「救援に来て頂き感謝します、曹操様」

「ほんまにおおきに」

「ありがとうございますな」

私にお礼を言ってきたのは三人の女の子だった。

最初の女の子は、真面目そうな性格で全身の傷がある子だった、

二人目が朗らかそうな性格をしてそうで、肌を露出させすぎている。

三人目に変な喋り方をしている、服とかに拘っていきそうねえ。

「貴女達が救援を頼んだのね」

「はい!」、「はい」、「そうなの」

何とも気が抜ける返事が二つあるけど、そんなことはどうでもいい。

「そう、貴方達名はなんというの?」

「私は楽進と申します」

「ウチは李典や」

「沙和は于禁なの〜」

なるほど、一般兵士達とは纏っている空気が違うな。

「どうも、それで聞きたいのだけど・・・なんで戦いが起きていないのかしら？」

私は気になっていた事を聞いた。

無論、春蘭、秋蘭、季衣も気になっていた。

私がここに来るまでに二刻は掛かった筈・・・それで伝令役は焦っていたからもう始まっているものかと思っていたのだけど・・・

「はい！それは・・・えつと・・・何と云えばいいのですか・・・」

楽進が困ったような表情で答えようとしている。

「あれは〜なんて答えればいいのやら〜」

李典も困ったように答える。

「そうなの〜」

于禁も困った様子でなんと云えばいいか言葉で表せられないらしい。

「ちゃんとはつきり言わないか！」



春蘭が怒ったようだ。

「はッい！一人の殿方が賊が向かって来る方に行つてから今の状態になつてゐる訳です」

楽進が答えた。

一人ですつて！一人の男が賊共に向かつて行つた・・・それで今のこの無傷の街の状況・・・男は一人で戦つてゐるに違いない。

「男の人はこうも言つておりました「もしも曹操が救援で来た時に歸つて来ていなければたら死んだと思つてくれ」つと云つて賊の方に行つたと思われます」

つまり今この場にいないということは死んだということか・・・んつ・・・ちよつと待つて・・・賊の方に行つたと思ひます？おかしくないか？

「ちよつと待つて！「行つたと思われます」とはどういう意味だ？」

秋蘭もやはり氣になつたようね。

「それはなあ、城壁から飛び降りたと思つて下を見たらいなかったんですわ」

李典が説明してくれたが・・・意味が分からない・・・普通城壁から飛び降りたとしたら下に着地するはず・・・普通は城壁から飛び降りたりはしないわね。

「まったく理解できん!」「状況が呑み込めない」「どうなっているの?」

私の後ろに居る三人も理解ができていないらしい・・・私だってあまり理解できていないわ。

「ここで討論していても意味はないわ・・・ここは直接行って見るしかないわね」

「それが妥当だと思います、華琳様」

秋蘭もそう思っているらしい。

「春蘭、秋蘭、季衣、このまま賊がいる方へ向かう」

「」「御意」「」

「貴方達も行くわよ」

私は義勇軍も連れて行くことにした。

三人共「なんで?」って表情をしている。

「貴方達しか顔を知らないのだから」

私達は顔を見ていないのだから分かるわけがない。

あら、三人共頬を赤くしているわねえ・・・

これは自分の目で確認した方がいいわね。

多分・・・男は賊達の方へ向かったに違いない、なぜなら賊が今の街に来ていないからだ。

十中八九その男は賊達と戦っているに違いない・・・だが一人の人が五千も相手出来るものなのか・・・不可能だ！

私はその男に興味を持ったが・・・反面不安感も持ったのだ・・・なぜだか・・・嫌な予感がする。

〔華琳 side out〕

.....

.....

.....

しまった！・・・俺の予定では・・・賊を倒して 街に戻って 曹操と会うだったのだが・・・まさかこんな虐殺空間的な所で会ってしまうとは・・・

ほら見ろ！ 曹操、夏侯姉妹、許緒、楽進、李典、于禁が戦闘態勢に入っているぞ。

ああッッもう！なんでもありだあ！

「義勇軍の人、言ったとおり倒しましたよ」

俺はできるだけ優しく言った。

「あんさん・・・なんなんやこれは・・・」

李典が言ってきた。

「これは酷いな」

楽進が言った。

「残酷なの〜」

于禁が言った。

それはそうだろ・・・こんな惨殺・・・普通の人はいない。

「貴方がこれをやったの？」

俺と同じ金色の髪、一言で言うと才気煥発だ、さすが霸王と言われるだけはある。

雪蓮もそうだが・・・やはり王の器を持つものは纏っている物が違  
いすぎるな、これは・・・霸気だ！

「ああ、そうだが・・・」

この状態を見ても動じないか・・・さすがだ！

「そう、私は曹操よ、貴方の名は・・・？」

これは予想外だ！曹操自ら名乗ってくれるとは・・・これを気に  
魏の面々に会っておきたい。

「華琳様！　こんな得体の知れない者に近づいてはなりません！」  
ほう、その判断は良いぞ！夏侯惇！主君を守ろうとするのは・・・  
夏侯淵は反応が遅いな、ちよつと呆けていた感じだな。

「得体の者とは失礼な・・・私の名は櫻井紫郎と申します」  
自分ではできるだけ礼儀正しく自己紹介をした。

「ッ！　貴方が天の御遣いにして金獅子という異名の！？」  
その場にいる全員が驚いていた。

うわあ、超広まっているな、俺の異名。

「確かに、そう呼ばれているみたいだな」

別に金獅子っていう異名は嫌いじゃない、逆に好感を持っている。

「噂で聞いている容姿も一致しますね」

やっぱりこの容姿は目立ちますよね！

「そうね、秋蘭。ねえ、金獅子さん、今からこのまま賊の本陣がある  
砦まで行くのだけれど一緒に行かない？」

これは良い機会だな。

「いいのか？こんな得体の知れない者を一緒に連れて行って・・・」  
「？」

「いいのよ、もうあなたの正体も知ったのだから気にしなくていいわよ」

なんというか・・・警戒心がないというか・・・でもこれはある意味器の大きさというものだろ。

「じゃあ、ありがたく同行させてもらうよ、それから俺の事は紫郎と呼んでくれ」

一時はどうなるかと思ったよ、戦いそうな雰囲気があったから。

「なら私の事は華琳と呼んでくれて結構よ」

!!・・・いきなり真名を教えていいのかよ。

「いいのか？」

「かまわなくてよ」

「か、華琳様!?!」

「いいのよ、春蘭、それより貴方達も教えるべきだと思っけど?」

いや別にいいのだが・・・

「私は夏候淵、真名は秋蘭だ」

「ボクは許緒、真名は季衣です!よろしくね、兄ちゃん」

「秋蘭に季衣まで！？むうう私には春蘭だ！」

まさかマジで真名まで教えてくれるとは……

「貴方達も教えたければ教えていいのよ」

華琳は義勇軍の三人にもそう言った。

「我が名は楽進、真名は凧です、以後お見知りおきを！」

「ウチは李典、真名は真桜や！よろしゅうな」

「私は于禁、真名は沙和なの よろしくなの」

まさかこんなに楽に魏の方々の真名を教えてもらえるとは。

「みんなありがとう、ありがたく呼ばさせてもらっよ」

俺は自分でできる最高の笑顔で礼を言った。

ありやくみなさんどうしたのでしょうか？ 頬を赤く染めて……

「……ほら早く賊の討伐に行くわよ！」

華琳がそう言いいいながら進軍して行った。

「了解、それじゃあみんな行こうぜ」

俺が言った。

「こら！貴様が命令するな！」

春蘭が怒りながら言ってくる。

「フツ…これは面白くなりそうだな」

秋蘭がクールに言った。

「ちょっと待って下さいよ！」

季衣が慌てて言った。

「私達も戦功をたて、曹操様の軍に入れるように頑張ろう」

凧は言った。

「凧、張り切ってるな、ウチも頑張るか！」

真桜は気合を入れた。

「沙和も頑張るの、でも紫郎さんといっぱい話したいの！」

沙和の気合の入れ方が違う方を向いていた。

……

……

……

（春蘭 side）



私は見てはいけない光景を見ているようだ。

なんなんだ、この死体の山は……それになんなんだ、あの男は……華琳様と同じ髪の色、それに体から滲み出ている、あの覇気は華琳様と同じみたいだ。

それに奴がこの人数を倒したのなら、なぜ返り血を浴びていないのだ？

私は不思議で、しょうがなかった、隣に居る秋蘭もそんな感じだ。

華琳様が男に近づいて行った。

私は華琳様を守ろうと前に出た。

そして話していくうちに男の名前は……桜井紫郎というそうだ。

最近噂になっている男だそうだが、私には華琳様が居れば十分だ。

私は華琳様の命令でしょうがなく、しょうがなくてぞ！真名を教えただ。

ふん！ 華琳様が嬉しいそうにしているのは私にも嬉しいことだ。

だがそれがあの男の事なのはムカつく！

でも……最後の笑みはよかった……ってそんなことはどうでもいい！

早くこの戦を終わらせて、華琳様の寵愛を受けるのだ。

〈春蘭side out〉

〈秋蘭side〉

そこはまるで地獄だった。

誰一人として生き残っている者はいなかった。

ある者は頭がなかったり、ある者は喉が裂けていたり、ある者は腕がなかったり、ある者は腹に穴があいていたり、ある者は上と下が別けられていたり、そんな殺戮空間の中に……

返り血を浴びっておらず……穢れなど一切金色の髪をした男が立っていた。

私の胸の中で何かが駆け回った、これがなんなのか……今の私には分からない。

私が呆けている間に我が主、華琳様が男に近づいて行った、姉者がすかさず華琳様を止めに入ったが、私は反応が遅れてしまった。

くそっ！？　なんとという失態をしてしまったんだ。

私は内心自分の行動の遅さに悔やんだ。

自分の心の中の整理をした後、私は男の名を聞いて驚愕してしまっ

た。

この男の名は櫻井紫郎・・・最近噂になっている金獅子だ。

なんでも目にもとまらぬ速さで敵を斬り伏せていたり、なんでも砦を吹き飛ばしたとか、後は魅力的な殿方・・・最初の二つはありえないとして・・・最後のなんだ？

華琳様の命令で私達の真名を教えることになったのだが、私は別に教えてもいいと思っていた。

姉者は嫌々教えたみたいだな・・・やはり姉者は可愛いな。

全員の真名を言い終えた後に見せた笑みは・・・なんでか心臓の鼓動が早くなった感じがした。

今なら誰でも倒せそうだ。

〈秋蘭side out〉

.....

.....

.....

「あれが賊がいる砦ねえ」

まだ結構な数があるな、さてと霸王曹操の戦い方を見せて貰おうか！

俺は期待をしつつ華琳に付いて行った。

「討つて出て来たみたいだから、紫郎、何か策はあるかしら？」

そこでなぜ俺に聞く！

「じゃあ、部隊を三つに別けて、右翼、左翼、本隊を置くのがいいんじゃない」

「その通りよ、貴方すぐに答えられるなんてさすがだわ」

これぐらいは楽勝ですよ。

「左翼に楽進、李典、于禁と義勇軍と分隊、右翼に季衣と紫郎と分隊、そして後は本隊に置くのがよろしいかと、華琳様」

「そうね、左翼の指揮は楽進、右翼の指揮は紫郎に任せるわ」

了k・・・・???

「俺か？」

きつと空耳だ・・・きつと！

「ええ！あなたに右翼を任せるわ」

はい、聞き間違えではありませんでした。

「了解、できるだけ頑張りますよ」

はあ～～一人で戦いたかったよ

「それから義勇兵の三人はこの戦の戦功によって、私の戦列に加えてあげるわ」

「本当ですか!」「これは頑張らな〜!」「頑張るの〜」

三人共やる気満々みたいです。

.....

「この隊を任された櫻井紫郎だ、よろしくな!」

今自分は華琳に任された部隊行って挨拶している。

ザワザワ・・・

あれ・・・?俺なんかしたか?・・・それとも頼りないとか?

「あ〜」

誰かが手を上げてきた。

「どうしたんだ?」

俺は聞いてみた。

「もしかして貴方様は最近噂になっている、天の御遣いにして金獅子という異名の...?」

いったいどうゆう噂が流されているのやら・・・

「ああ！そう呼ばれていたりする」

俺がそういうと・・・突如・・・ワァ！と湧く隊のみなさん・・・  
おいおい、どうした？

「まさかあの金獅子様がこの隊を率いるとは！」

「噂の通り良い男ねえ！」

「男の俺でもうっとりするぜ！」

最後に言った奴は以外はどうもありがとう。

後、俺は男には興味ないから！

「はいはい、今から賊と戦うだから切り替えるよ」

「了解しました！ 大将！」

中々に良い返事だ、それより大将と呼ぶな。

「兄ちゃん、兵を率いたことあるの？」

季衣が話しかけてきた。

「ないぞ！」

「そうなんだ・・・って！ 大丈夫なの！？」

ナイスな反応だ、ありがとう。

「そこはなんとかなるよ……(多分)」

それでもゲームとかで鍛えた腕がある。

「分かった！ 兄ちゃんを信じるよ！」

「ありがとうな、御礼に頭を撫でてあげよう」

そう言っつて、俺は季衣の頭を撫でてあげた。

「……ん……なんか落ち着くなあ」

気持ちよさそうな反応をしてくれた。

「さてと、これぐらいにしてこの続きは帰ってきたらなあ！」

「うん！ ボク全力でやるよ！」

季衣の士気が上がった。

「よし！ その意気だ、右翼前進するぞ！」

ウオオオオー！！

紫郎率いる右翼の隊は以上に指揮が高まっていた。

……

……

……

〔華琳 side〕

「なんで初めて率いる部隊の士気があんなに高いんだ？」

春蘭が不思議なものを見るかのように言った。

「それは私も思った……だが紫郎のあの覇気や容姿、それにあいつを見ているとなぜだか頑張ろうという気がしてくる」

秋蘭が紫郎の事を言った。

「そうね、私とは違う何かを持っているのは確かね……」

華琳が興味満々という感じで言った。

「はい、私に華琳様が居られなかったとしたら、彼に着いて行ったかもしれない」

「秋蘭！？……ふふ、貴女にそこまで言わせるなんて紫郎は、やはり貴方は面白いわ」

私が信用している秋蘭に此処まで言わせた紫郎はやはり凄い存在なのだと思えた。

だが同時に自身の覇道の最大の壁になるのではないかと確認した。



「一目見た時から『こいつは普通じゃない』と行ってしまった。

なぜだか人とは思えない神々しさを感じた・・・まさかこの私がこんな風に思うなんてね・・・やめましよう、今は戦いに集中するのよ。

私は目の前の敵を見る・・・だがそれよりも私は金髪の髪を靡かせて敵に向かおうとしている、一匹の獅子の方に目がいつてしまう。

「私がこんなにも興味を持つなんてね・・・貴方の力、この曹孟徳に見せて頂戴」

私は横に居る二人にも聞こえない程度の声で言った。

〈華琳 side out〉

.....

.....

.....

「いいか、俺と季衣の前には絶対に出るなよ、俺らが道を開く！君達は突っ込んできた奴だけを処理しろ！けして油断するなよ！」

ウオオオーー！

「よし！ 季衣もあまり無理しなくていいからな」

「分かったよ、兄ちゃん」

よし、これで準備はいい・・・あまり犠牲を出したくは無い。

「さあー逝くぞ！ 突撃だあ！」

俺は部隊の先頭に立って号令をした。

皆、俺の後に付いて来る。

さて何人生きて帰せるか・・・頑張りますか。

俺は王の財宝から無毀なる湖光アロンダイトを取り出した。

この剣は円卓の騎士の一人であるランスロットの愛刀アロンダイトである。決して刃こぼれしなかったとされる剣のだが、俺の解析の結果持ち主の身体能力を向上させるみたいだ。

俺の身体能力はもうチートなのにそれに上乗せされるなんてどんな事になるやら

瞬間、噴出す闘氣と殺氣と覇氣。

彼の闘氣と覇氣は味方の士気を大幅に上げ、殺氣は敵の戦意を限りなく削いで行く。

……  
……  
……

（季衣 side）

僕は今兄ちゃんと一緒に賊と戦っているんだ！

兄ちゃんって誰か？ それは最近噂になっている金獅子、櫻井紫郎様だよ。

僕も噂程度でしか聞いたことがないんだけど流石がすごい勢いで僕にその話をするから興味を持ったんだ。

でも生で見ると華琳様と同じ金色の髪、赤い瞳、最初見たときは恐ろしいと思った・・・こんな人がこの世に存在するのだと・・・けど案外話してみたら話しやすく、頼りになりそうだなと僕は思ったよ。

でもその考えは甘かった事に気付いた。

戦闘が始まる瞬間兄ちゃんは前を向いていたので表情は何えなかったけど、噴出す闘氣と殺氣と覇氣。

兄ちゃんの闘氣と覇氣は味方の士気を大幅に上げ、殺氣は敵の動きを進軍を止めてしまった、賊の視線は全部兄ちゃんにいつている後ろにいる僕達には気が付いていないって感じになっている。

兄ちゃんは敵を次から次へ斬り伏せてゆく、僕の目にも見えないほどの剣の速さで・・・

「みんな！ 兄ちゃんの後について！」

僕はボケっとしていた部隊のみんなに声を掛けた。

…すげえ〜なんなんだあの人は・・・

…なんて凜々しいのかしら、さすが金獅子様！

…やべえー鳥肌がたった。

なんか部隊のみんなの喋り声が聞こえるけど、今は目の前の敵を倒すことに集中しようっと!!

僕は鉄球『岩打武反魔』いわだむはんまを敵に向かって投げた。

この戦いが終わったらもっと話してみよう!

季衣はそう思いながら鉄球をふるった。

〈季衣 side out〉

……

「…右翼部隊の方が上手く連携できているようね」

華琳は的確に言ってみせた。

「はい…左翼に比べ士気も統率もかなり上ですね」

「むう…左翼の働きも良い方だとは思いますが、右翼の働きは目を疑うぞ」

春蘭、秋蘭の二人も右翼の状態に感心している。

「そうね…本隊、出撃するわよ!…ふふ、初めて扱う部隊をあんなに動かせるなんて…欲しいわね…」

華琳はそういつと自分の部隊を率いて戦場に向かった。

……

「本隊が動いてるの…」

沙和がいち早く本隊の動きに気付いた。

「ちよっ!?! ウチらまだあんまり敵倒してへんで」

真桜は驚いている。

「どうやら右翼から突破するらしい…さすがは紫郎様、いや…金獅子殿! 我らも負けてはられないぞ!」

凧は冷静に分析し現状の最善のことをしようと動いた。

……

あれから一刻もしないうちに敵は壊滅したのだが、まだ残った賊が砦に立て籠もっている。

華琳はなるべく早く落としたいみだから、時間をかけないようにしよう。

「季衣、部隊の指揮は任せた」

「えっ！？ちよっ！？」

俺は季衣に部隊を任せ（強制）砦の門に向かって無影を使い、左手に剣を持ち替え、右手に気を溜めて・・・

「行くぜええー爆破拳！」

ドガガガンッ

音と共に門が・・・吹き飛んだ。

「門が壊された…というか！なんなんだ、いったい！」

なんか偉そうにしている男を発見した。

これで楽に落とせるだろ…大将首は頂くぞ。

「奴を殺せ！一斉に掛ければイケるはずだ」

そいつが命令を下した。やはりあいつが大将か！

「邪魔なんだよ、君達！」

向かってくる敵は全員無影を使い一瞬で首を跳ねて殺した。

「ひいーわ、分かった、降伏する・・・だから命まではとらないでくれ！」

偉そうな奴が俺に縋るかのように迫ってきた。

こいつは腐っているな、目を見れば分かる。

「すまない、俺はそんなに優しくはない・・・貴様を・・・」

俺はこいつを殺したいのか？・・・否、断じて否！こいつはこれまでに幾人もの人を殺してきた。

なぜ分かるかと？俺にはこいつの過去は分からない、だがこいつの目を見て心の底まで覗いた。

こいつは腐っている。

「貴様は命乞いをする奴に手を差し伸べたか？」

「ッ！.....」

あくまで白を切るつもりだな。

「ならば逃げ、貴様に生きる価値など無い」

俺はもうこいつを見たくない、どんな世の中でもこいつゆづ奴は居るものだな。

「てめえー！」

男が斬りかかってきた・・・だが・・・

「なっ！なんなんだ、これは！」

男は変な感覚に襲われていた、自分の見ていた物がすべて逆さまに見えるのだ。

男はやつと分かったのだ、『自分は首を落とされていたのだと！』  
だが気付くのはあまりにも遅かった。

ドスンッ！

男の首は地面に無残にも落ちた。

「この腐った奴でも利用価値はあるんだな」

紫郎は首を持ち、華琳のいる本陣に向かった。

.....

いつもそうだが人を殺した後は罪悪感が残るな。

紫郎は一人呟いていた。

「紫郎、ボサツとしてないで、戦果の報告を」

おっと！ぼおっつとしてしまっていた。

「了解、賊は殲滅、ついでに兵糧庫、武器庫を破壊しといた、これが大将の首だ」

俺は華琳の目の前に首を置いた。



「あら、貴方が全てやったことになるじゃない、何か褒美はいる？」

華琳は瞳をギラギラさせながら紫郎に言った。

「いやいや…この褒美は義勇軍のものにしてほしいぞ、今日は頑張っていたしな」

紫郎はさらりと言ってみせた。

「……………ッ！」「……………」

この場にいる全員が驚いた、なんせ自分の戦功を他人にあげたのだ。

普通は戦功をたて褒美をもらうはず、それをこの男は…

「フッフ…面白いわね！ 本当にいいの？」

「ああ…俺にはいらぬよ、義勇軍の子達にあげるよ」

華琳はものすごく興味を持った。

褒美をいらぬですって！こんな人もいるのだなっ…

「そう、今調べたけど倒した敵の数は最多、負傷した兵の数は数人…戦死者はいない…これは凄いい言葉では表わせられないわ、よほど兵を扱うのに慣れてるようね？ どうやったの？」

華琳は一瞬報告を聞き耳を疑ったが紫郎に任せた部隊を見ると…戦の後だというのに負傷者の看病や回りの警護にあたっているのだ。

ついさっきまで戦っていた部隊なのかと思ったほどだ。

「いや、初めてだが…？ やったことなら季衣に聞いてくれ、説明しにくいし客観的に何があったか聞いた方がいいだろ？」

俺は説明がめんどいので、季衣にまかせた。

「・・・へっ？」

霸王が気の抜けた声を出し『こいつ何を言っているんだ』って顔をしていた。

「だから、季衣に聞いてくれって……」

「ちょっと！？ そっちじゃないわ、初めてってどついついこと…？」

珍しく取り乱している、華琳。

「ああ…いつも俺さあ、一人で戦うから兵を指揮するのは今回が初めてなんだ」

それを聞いて…

「…………ええ〜！」「…………ほう〜」

春蘭、季衣、凧、真桜、沙和がすごい反応してくれた。

秋蘭はクールな反応をしていた、ああ〜というのカッコイイな。

「初めてであるの動き……ふ、あははは！ 気に入ったわ…どう、私

のものにならない?」

………まったく、この女は何を言っているんだか……!?

「華琳様ツツ!?!」

春蘭はいち早く反応した…秋蘭は…

「私も興味を持っているので、ぜひとも仲間になりたいです」

華琳の意見に賛成みたいだな。哀れ春蘭。

「秋蘭! 季衣もなんとか言ってくれ」

春蘭は季衣に頼ったが…

「兄ちゃん! 撫でて撫でて!」

頼りの季衣は紫郎に夢中だった。

「季衣まで! ……ぜ、絶望したああー!!」

春蘭が某教師みたいに膝をついて頂垂れていた。

「まあ、春蘭はいいとして、その誘いは魅力的だけど……俺には帰る場所があるから、ごめんな」

紫郎は申し訳なさそうに言った。

「そう……力尽くで手に入れたのだけど、貴方一人にこちらが

壊滅するのはごめんね…」

華琳はこの場に居る誰一人として、紫郎には勝てないと悟っていた。

「うん、分かってくれて助かるよ、でも俺は元々陳留に行くつもりだったから居る間は頼ってくれていいよ」

紫郎の元々の目的は曹操に会う事だったから目的は達成された。

「なら私の城に招待するは対等な客として扱うから…でも長居しない方がいいかもしれないわよ？考えが変わって我が臣下になると言う可能性もあるのだから」

華琳は不適な笑みを浮かべていた。

おいおい、こいつは悪魔の尻尾を付けたら小悪魔になるなと紫郎は苦笑していた。

「気をつけるよ、でももしかしたらあるかもな…：君は魅力的だから」

紫郎は華琳に近付き、顎を持ち上げ顔を近づけた。

「ッ！／＼／」

「うん、やっぱり良い瞳をしているよ…揺るぎない信念を持った瞳だ」

紫郎はそういうと手を離して元の所に戻った。

「ちょっと貴方、いきなり何をするのよ／＼」

華琳はそういうと自分の武器である『絶』<sup>せつ</sup>を投げてきた。

俺はそれを掴み取った。

「おいおい、危ないだろ、こんな物騒なものを投げるな」

紫郎は平然として応えた。

「普通そんな風に掴み取れないわよ、もういいわよ…さっきの事は水に流してあげるわ」

「ごめん、ごめん、今度は言ってから近づくよ」

…あの華琳様が弄られるとは！………本当に面白いな

…ああ…絶望したああ！

…華琳様もあんな風に動揺するんだ。

…ていうか、わたしら空気になってないか？

…………言うな

…そこは言わないで欲しいの！

それぞれが色々な反応をしているが…春蘭は早く立ち直りなさい。

華琳は呆れながら義勇軍の三人の方を向いた。

「はあくさてごめんなさい、貴方達は報告も聞いたけれど紫郎には及ばないけれど、とても良い動きをしていたわ、だから兼ねての約束道理貴方達は私達の戦列に加えてあげるわ！」

もし華琳が戦列に入れなかつたら俺がもらっている所だがな。

「宜しく御願います！ 私の真名は凧です！」

「やった〜、ウチは真桜 よろしゅうな〜」

「頑張るの〜 私は沙和なの〜」

三人共嬉しそうだな、まあ〜前から入りたと思っていたのだろう。

「これで一応話は全部纏まったわね…残りは城に帰ってから決めましょう、紫郎には城にある部屋を貸してあげるわ」

「それは助かる」

華琳は満足そうな顔してから、城に向けて軍を動かした。

陳留に向かいながらの帰り道……

「絶望したあ！」

春蘭はまだ馬の上で頂垂れていた。

「ほら、春蘭様、元気を出して下さいよ！」

「そうだぞ、姉者！確か…今日の夜は姉者が華琳様の相手をするのでは…」

季衣も秋蘭も春蘭を励まそうとした。

「ッ！！そうだぞ！今日は私だった、急ぎ帰還するぞ！」

春蘭はいつものようにキリツとした表情に戻り、馬を勢いよく走らせた。

「姉者はあゝでなくてはな！」

秋蘭はいつものように戻った姉に満足気に笑みをみせた。

「ですね！ 春蘭様はあれじゃあなくっちゃ」

季衣も無邪気な笑みを見せた。

「さて、我らも追い掛けようか！」

「はい！」

二人は春蘭の後を負いかけて行った。

「なんか私達終盤になって影が薄いの〜」

沙和がフツと思ったことを言ってみた。

「それを言ったらアカンよ！」

真桜がツツコンだ。

「まあ〜私達の出番は今後出るらしいぞ」

凧が言った。

「ちょっと！凧！どついうことや〜！」

「そうなの〜！」

真桜と沙和が凧に問い詰めてきた。

「んツ！私は今何か言ったのか？」

凧は今気が付いたのかという表情をしていた。

「凧…大丈夫かい〜」

「そうなの〜もしかして疲れたの？」

二人は凧のおかしさに気づいた。

「私は何か言ったのか？」

凧は二人に不思議そうな顔で言ってみた。

「なんでもあらへんよ！」 「そうなの〜なんもなかったなの〜」



二人は必死に否定した。

「そ、そうか！あつ！我らだけちょっと遅れている様だな、急ぐつ  
！」

凧は馬を走らせた。

「きつと疲れているの〜」

「そつやな〜私達も疲れてもうたしな〜」

二人も凧の後を追いかけて行った。

## 第十六話 魏 突入？ 霸王との出会い（後書き）

お疲れ様でした。

自分的にはもつと短く書こうと思ったのですが…手が止まらなくて！

技の紹介

爆碎拳・・・気を手に溜めて相手との接触時に解放させる。単純に見えて結構難しいらしい。

新キャラの真名を自分でも考えてみました。

高順：椛<sup>もみじ</sup>

馬騰：灯<sup>あかり</sup>

ホウ徳：倅<sup>はこ</sup>

田豊：美雪<sup>みゆき</sup>

後は検討中なので…何か良い名前があったらぜひとも意見をください。

## 第十七話 魏の人達との顔合わせ

### 第十七話

「デカイ城だなあ〜！」

俺は今、華琳にの招きを受け陳留に来ている。

「そう？これが普通だと思うのだけれど…？」

華琳は不思議そうに紫郎に言ってみせた。

おいおい！？これが普通なのかよ？

それにしても賑わっているな！それほどここが安定しているっていう証拠だな。

「兄ちゃん、後でこの街を案内してあげるよ！」

季衣が紫郎に近づいて、嬉しそうに言った。

「それはありがとな」

紫郎は優しいげな笑みを見せながら頭を撫でた。

「えへへ／＼／」

季衣も気持ちよさそうに撫でられていた。

こんな表情されると撫でりがいがあるな。

「そこ！早く来い、このまま玉座に行つて、華琳様直々に皆を紹介して下さるそうだよ」

春蘭がそう言いながら此方に来た。

「ほら早くしろ、もう全員揃っているのだぞ」

俺は春蘭と季衣と一緒に玉座へと向かった。

・・・

「これで全員揃つたわね」

玉座についてすぐに猫耳をしている女に睨まれていた。

「はい、そのようですが・・・華琳様あの男は？」

あの男とは失礼だな。

「それは今から説明するわ、それから桂花、貴方失礼過ぎるわよ」

華琳は猫耳女を睨みつけた。

「も、申し訳ありません、気をつけます」

さすがにあんな風睨まれたら怯みますよ。

「それでいいでしょう・・・さて本題に戻るわね、この男の人は最

近噂になっっている金獅子、天の御使いの櫻井紫郎よ」

猫耳女と眼鏡をした女の子と水色の髪の少女は驚いている。

ただど一人だけまったりしている少女だけは「やはり」って感じの顔をしていた。

「華琳から紹介された通りだ、紫郎と呼び捨てにしてかまわないよ、少しの間滞在するからヨロシクね」

俺が一応自己紹介をしたら・・・一人が過剰に反応した。

「なぜ貴様が華琳様の真名を呼んでいる！」

猫耳女だ・・・

「桂花いいのよ、私自ら許したのだから・・・それよりも貴方達も教えなさい、貴方達以外は全員教えたのだから」

「えっ！」

さすがの猫耳女も驚いているみたいだ。

「私は程？、真名は風です、本当に噂に聞いてたような人そうですね、正直驚きです（この人は本当に人間なのですかね？）・・・」

頭に彫像の様なものを置いている少女が紫郎に言った、だが表情には出さないように内心では異質な存在に疑問を感じていた。

「風！私は郭嘉、真名は稟です・・・お会いできて光栄です（なる

ほど…華琳様の目に留まるわね、隠しているつもりだけど体からイヤでも覇気が滲み出ている)…」

眼鏡をしたキリツとした少女が風に続けて言った、だが風と同様内心では的確に紫郎の分析をしていた。

「わ、私は典章、ま、真名は流琉と言います…。(噂で聞いたとおりカツコイイです!)」

水色の前髪を縛っている少女が目をキラキラさせながら紫郎に言うてきた。

「後は桂花だけよ」

「…私は苟?、真名は桂花よ、教えたからって気安く呼ばないでね!(コイツ!なんなのよ)…」

桂花は気に食わないって表情で紫郎を見ていた。

「さて貴方達にはこれから仕事を割り振りたいんだけど…桂花、稟、風、何かあったかしら?」

華琳は三人に聞いた。

「そうですね…新兵の訓練、街の警備、後は最近勢力を広めてしまったので文官の仕事が山のようにありました」

稟が言った。

「私は書簡を整理するのは少々…」

凧が困ったそうな顔で言った。

「文官の仕事はちよつとなあ…それ以外なら出来」

真桜も頬を掻きながら困ったそうにしている。

「同じくなの〜!」

沙和は…元気だ。

「そう、なら貴方達は新兵の訓練と街の警護だけでいいわ、紫郎は全部やってくれるわよね?」

…はっ…コイツ何を言っているんだ?

「紫郎ならこのぐらい容易いと思うのだけれど?」

…はあ…

「働かざるもの食うべからずって事か…了解したよ」

「そうゆうと思ったわ、後三人の面倒もみてあげてね、文官の仕事の事は私か、桂花、風、稟に聞いてちょうだいね」

華琳は一瞬だけ笑みを見せたような…謀られたか!

「配置も決めたことだし、今日はこれで解散よ、紫郎は空いてる部屋を好きに使ってくれて結構よ」

ふう〜今日はゆっくり眠りたいものだ。

「紫郎様、いえ・・・隊長これからヨロシク御願ひします」

んっ・・・ああ〜警備のことか？

「あかんよ〜風、隊長やない、大隊長や！」

真桜・・・それはあまり変わっていないよな・・・

「それいいの〜ヨロシクなの〜」

どこがいいのやら・・・

「まあ〜なんでもいいが一々大隊長何て言うのは言いにくいから、隊長と呼んでくれ・・・任されたからにはちゃんとやるよ、三人共頼むな！」

「」「」はいッ！」「合点」「」任されたの〜」「」

うん、風以外は心配だな。

「兄ちゃん、この後暇なら一緒に街に行こっ」

そうだな、この街のことに詳しい人から案内された方がいいな。

それに約束していたしな。

「あの・・・私も付いて行っていいですか？」



確か・・流琉だったっけ？

「良いに決まってるじゃん。ねえいいよね？」

季衣が自分に聞いてきた、それはもちろん…

「いいよ、俺もみんなと親交を深めたいと思っていたからさあ」

俺が笑顔で答えると…

「あっ／＼ありがとうございます、お兄様！…あっ！」

流琉はつつい言ってしまったという表情をしている。

「ははは、いいよ、流琉の好きなように呼んでくれていいぞ」

紫郎は流琉の反応が面白かったのか、笑いながら流琉の頭を撫でた。

「本当ですか！？ありがとうございます／＼」

流琉も呼んでよかったのか心配だったのだろう、不安げな顔から可愛らしい笑みを見せてくれた。

「よしッ！じゃあ行こうか、凧達も一緒に行くかい？」

紫郎は凧達も一緒に街を回ろうと誘った。

「ぜひともお供します」

「行くでえ〜」

「行くの？」

三人共行くという事だな。

「季衣、流琉、三人増えるけどいいか？」

「「いいよ」「いいですよ」

2人共了承してくれた。

「じゃあこれから出かけてくるわ」

華琳達にそう言い出ようとしたら・・・

「なるべく早くに帰ってきなさい、貴方の歓迎会をやるから」

別にそんな事やらなくていいのに。

「別にやらなくていいぞ」

俺が断ると・・・

「別にいいじゃない、それにみんな貴方との親睦を深めたいのよ、もちろん私も」

・・・まさかこんな言葉を聴けるとは！

「分かったよ、夕方前には帰ってくるよ」

「一応了承しといた。」

「そう、楽しみにしてなさい、私が料理を作るのだから！」

へえ、華琳が作るのか・・・それは楽しみだな。

「ああ、華琳の腕がどれ程のものか期待させてもらうよ」

紫郎は挑発的な言葉を言ってみた。

「せいぜい期待しなさい」

華琳はなんとも思わず逆に挑発的な笑みを見せた。

「紫郎、正直に言うが華琳様の作る料理はとても美味しいぞ」

秋蘭がこんなに評価するなら美味しいんだな。

まあ、華琳はなんでもできそうだな。

「マジか、ならお腹すかせて帰ってくるから楽しみにしているぞ、じゃあ行って来るわ」

俺はそう言うと扉を開けて外に出て行った。

「華琳様、僕も楽しみにしているねえ」

「私もできるだけ早く帰って手伝います」

季衣に流琉はそういつと紫郎の後を追いかけて行った。

「では私達も」

「隊長おゝ待ってなあゝ」

「歩くの早いので」

凧達も紫郎の後を追いかけて行った。

.....

ゝ玉座に残った人達ゝ

「三人共、紫郎を見てどう思ったかしら？」

華琳が軍師三人に紫郎の事について聞いてみた。

「正直あんな殿方見た事がありません、それに隠しているようですよ。あの御方からは華琳様と同じ。いえ、もしかしたらそれ以上の覇気を持っているように見えました」

凧が自分の正直な気持ちを言ってみせた。

「凧、それは華琳様が奴に劣っていると聞いたのか！？」

春蘭が怒った様子で凧に問い詰めにかかった。

「やめなさい春蘭。私だって戦いの時に見せた紫郎の覇気に私も一瞬だけ。負けたと思ったのよ」

華琳は自分が一瞬でも負けたと思わされた事に悔み掌をぎゅっと握り締めて、悔しそうな顔をしていた。

「華琳様……」

「……」

皆がそれぞれに自分の主のこんな表情を見た事がなく戸惑っていた。

「でも……同時にこうも思ったわ……」「面白い」「っと……なぜかしら……あれほど胸が躍った事はないわ」

……喜び、歓喜……そう……華琳は自分の覇道の妨げになるかもしれない……いやなるに違いない存在と出会い悔む一方、期待感も湧いてきたのだ。

「華琳様がこれほど評価なさるとは……さすがだな紫郎」

秋蘭は自分の主がこれほどに評価する紫郎に「やはり」「っという感じで納得してしまった。

「……私は誰であろうと華琳様の覇道を妨げるものなら斬ってみせます、私を楽しませてくれよ、紫郎！」

春蘭は主の為に斬ると決心した、だが強敵を相手にする躍動感に期待をしていた。

「任せて下さい、華琳様の御役に必ずやなってみせます」

桂花は華琳の役にたとって決心した。

「でも紫郎さんは本当にカツコイイ殿方ですよ〜」

風が今この場にまつたく会わない言葉を言ってしまった。

「風！？みなさんが真剣になつて考えていると言つのに、「稟はなんとも思わなかつたのですか？」それは思つたわよ、カツコイイな〜っと思つたり・・・つて！私はいつたい何を／＼」

稟が風にツッコミ入れたのだが、逆に問いただされてしまい、つい暴露してしまつた。

「そうね、風の言うとおりよ、あんな男手放したくはないわ、顔は良し、性格も良い、文武両道なんて、文句の言い様がないわね」

先程までの空気は何処へ行つたのか・・・

「紫郎には「考えが変わつて我が臣下になると言つ可能性もあるのだから」つと言つてあるのだから、私達の力を合わせて此方に引き込みましょう（それに貴方の事は結構気に入つたのよ・・・紫郎）・・・」

華琳はさつきまで敵対意識があつたのに今では『欲しい』と思つている、さらには紫郎の事が気に入つたみたいです。

「それはいい考えです（ふう〜私も華琳様と同じく紫郎の事が気に入つてしまつたのかもしぬな／＼）・・・」

秋蘭は自分の中で紫郎の事をもつと知りたいたいという思いがあつた。

「華琳様が汚される」

春蘭は自分の主が男によって汚されると思い込んでいる。

「あの男・・・あの男・・・」

桂花はブツブツと紫郎の事を言っていた。

「私もあの御方の事を知りたいと思っていました・・・別にあの瞳で見られたいではなく、あくまで情報収集を・・・」

稟は何が言いたいのか、今一答えられない模様。

「稟ちゃん、さっぱり意味がわからないのですが・・・もしや紫郎さんに一目惚れしたのでは？」

風が意味がわからなそうな顔をしていたのだが・・・いきなりの惚れてますか？宣言をし・・・

「な、なにをいう！・・・そんなことあるわけがないぞ、そう・・・あるわけが・・・」

稟は、はっきり否定しようとしたのだが、本当にどうなのか、自分に問いただしているみたい。

「まあ～冗談はさておき、紫郎さんにが来てから面白くなりそうです」

風は稟の事をあしらい、これからの皆さんの行動がどう出るか、面白そうに笑っていた。

「さてと、私は歓迎会の料理作りにとりかかるわ、後はお願いね」  
華琳がそう言うと玉座を後にした。

ゾクツ！？

な、なんだこれは・・・鳥肌が急に立ったぞ、誰かが俺を殺そうとでもしているのか？

紫郎はこれから何かが起こるのを予期したのか体が反応していた。

「どうしたの〜兄ちゃん？」

「どうされたのですか？」

季衣と流琉が急に立ち止まった紫郎に話しかけてきた。



「いやなんでもないぞ、さてと案内ヨロシクな」

紫郎は気のせいだと思い、流した。

「了解」「任せて下さい」「

季衣も流琉も良い返事をした。

## 第十七話 魏の人達との顔合わせ（後書き）

更新遅れてしまってスイマセンでした。

いや〜バイト入れ過ぎてました！

まあ〜そのおかげでかなり稼げました。

これからの更新はなるべく早くしたいと心掛けます。

なにかご意見がありましたらドンドンください。  
それを参考にして考えてみますので。

〜次回〜

## 第十八話 街案内

「1、2の料理は・・・まさか!？」

第十八話 街案内（前書き）

今回は随分と長く書いてしまいました。

今回のメインは風です。

## 第十八話 街案内

本当に賑わっているな

「あそこのお店とか美味しい食べ物があるんだよ！」

「お兄様、あそこのお店も中々にいい品揃えですよ！」

今少女二人に手を握られて誘導されている。

いや〜逸れちゃいけないからと言われて手を繋がされたのだが・  
流琉がやや照れていたような。

「御二人共そんなに慌てなくともまだ時間はありますよ」

凧が仲介役みたいに落ち着かせようとしていた。

「これめっちゃ欲しいわ〜」

真桜はあっちこっちの店をまわっているみたいだ。

「この服欲しいの〜」

沙和も真桜と同じで店をまわっていた。

季衣も流琉も楽しんでいるようだね。

「凧も堅苦しくならないで今日はゆっくり過〜そっ」

二人共は楽しんでいるみたいなのに凧だけは堅苦しくしていた。

「いえ、華琳様から街の警護任されたのですから気など抜いていられません」

はあく張り切り過ぎだよ。

「確かに仕事も大事だけど息抜きも重要な仕事だよ」

「えっ、しかし・・・」

まったく堅い、堅過ぎるよ。

「今日仕事を任されて、まだ街の道を分かっていないのだから今日はそれを覚えようじゃないか・・・それにさっきまで戦をしていたのだから疲れているだろ...?」

「・・・分かりました、今日は街の道を覚えるのに専念します」

納得していいのだろうか？

「まああまり気張るなよ」

紫郎は凧を撫でた。

「あつ・・・／＼／」

凧は頬を染めて照れている。

「凧も女性なんだから、真桜や沙和達みたいに趣味はないのかい？」

凧も男みたいな口調の時もあるけど女の子だな。

「!?!?・・・女性:??ワタシが?」

あれ...?なんで凧は驚いているんだ?

「そつだぞ!今俺の目の前にいる子、凧、君だよ」

なんで驚いているんだ、本当に?

「そんな・・・こんな傷だらけの体な女の人はいませんよ」

あつ!なるほどな、確かに凧の体は傷が多い...それを気にしていたのか・・・

「いいかい、凧・・・自分にとって女性だけではなく男性もそうですが、例え醜い外見でもその人のことを軽蔑するつもりはありませんよ。自分は判断するのではなくその人の人柄、人格、外見で判断する事はありませんよ、だからその人にどんな傷があっても関係ないよ」

紫郎は撫でながら優しく言っている。

凧はそれをしつかりと聞いている、凧の瞳は何故だか潤んでいた。

「そのことで色々あったんだよね?だけど私は凧は可愛い女性にか見えないからね」

紫郎は撫でながら最後に笑みを見せた。

「・・・はい!・・・っ／／／」

凧は下を向いて涙を拭って上を向いた瞬間紫郎の顔があり、それに加え笑顔の紫郎を見てしまい顔を真っ赤にしてみました。

「さてと話を戻すけど凧は趣味とかないのかい？」

紫郎はさきほどの話に戻した。

「／／／・・・あっ!えっと〜笑わないですか？」

凧は人差し指と人差し指をちよんちよん合わせて恥ずかしそうにしていた。

これはカワイイな。

「笑う訳にだらう」

人の趣味を侮辱するのは最低だらう。

「あのですね〜料理や裁縫が趣味です／／／」

凧は真っ赤かにしながら照れていた。

「いい趣味じゃないか!凧は将来いい嫁になるぞ、私が保証するよ」

紫郎は乙女心を持っているんだなっと思っていた。

「ええ〜そんな／／／私が嫁になんていけるわけないですよ／／／」

凧は予想外の事を言われ何時ものクールはどこにいったのか・・・  
とてつもなく動揺している。

「そんなに照れる事はないぞ、凧も服を変えたりしたらきつと男性  
はほつとかないと思うよ」

「／／／．．．そんな／／／．．．ブツブツ」

ありゃ？なにか言っているようだけど聞こえないな？

「それとも私が嫁にもらっちゃおうかな…？」

冗談のつもりで凧に顔を近づけて言ってみた。

「えっ．．．．．／／／．．．ブシュ」

驚いたと思ったら間をあけて頭から湯気を出しながら倒れた。

「ええ〜凧、しつかりしろ！」

紫郎は倒れる瞬間に抱きかかえた。

「おい兄ちゃん、ごめんね、自分達だけ楽しんで．．．ってなん  
で凧が倒れているの!？」

おっ！みんな集合したみたいだな．．．季衣、俺にも分からないん  
だよ。

「本当です!？何かしたのですかお兄様？」



だから俺にもわからないんだよね。

「ほんまや！わいらが目を離れた隙になにしとんね！？」

「いやいや！君は知らない間に離れてたよね！？」

「本当に何もしてないの？でもなんで風を抱いているのか説明してなの～！」

これにはわけがあるんだって・・・

今の紫郎の状態は風をお姫様抱っこしている状態なのだ。

・・・十分後・・・

「わかったか・・・どうゆうわけか気絶してしまったのだよ」

紫郎は風との会話をしていた内容を説明した。

「兄ちゃん、それは僕でも恥ずかしくて逃げたくなるよ」

確かに所々で風が照れていたが自分は本心を言ったままでだよ。

「お兄様は本当にいい人ですね」

流琉は紫郎の風の傷についての言葉に感動していた。

「うわぁ～風大変そうやな～ウチもそないなこと言われたら同じ状況になっただかもしれんわ～」

真桜は顎に手をやり、納得という感じをしていた。

「うっ、凧ちゃんだけずるいの」

なぜだか沙和だけ不機嫌になっていた。

「俺も悪かったのかな？…それより…おっい凧、起きてくれ！」

そろそろちよっどいぐらいの昼時なのでご飯を食べに行きたいのですよ。

「んっ…っ！？／＼／＼／＼ 申し訳ありません」

おっと起きたと思ったたらいきなり謝られたよ。

「いやいいよ、自分の方こそごめんね」

謝つとかないと…

「いえ、私がすべて悪いのですから気にしないでください…あの／＼／＼それより降ろしてくれませんか…？」

おっと！？ずっと抱いたまんまだった。

「ごめんね、よっど」

凧を降ろしてあげた。

「気絶してしまい申し訳ありませんでした」

凧は深々と頭を下げ、謝ってきた。

「いや謝らなくていいって本当は自分が悪いんだから」

「いえいえ私が悪いんですよ」

凧と一生この話をしてそうだ。

「はいはい、お二人さんどっちも謝ってるんやからそれでいいじゃないですか？」

真桜が終わらなそうな会話に入ってきてくれた。

「そうだな、それでいいか凧？」

「ですが・・・分かりました」

凧も納得してくれたみたいだ。

「よし、ちょうど良く昼時だからご飯を食べに行きますか？」

「そのためにみんな集まったんだよ！」

ああなるほどな。

「じゃあ季衣、流琉、二人共美味しい店を知っているかい？」

二人に尋ねてみると・・・

「もちろん！」

おおく頼りになるな。

「じゃあ案内頼む」

「了解！「しました！」」

二人に手を引つ張られて案内された。

後ろで凧達がなにか話しているみたいだが聞こえないな。

く凧sideく

私達のご飯を食べるために季衣様や流琉様の案内でお店に向かっています。

はあく本当先程は身狂いし姿を紫郎様に・・・隊長に見せてしまった。

でもあの言葉私の胸に響いた・・・私はこの体の傷の事を気にしていました。

でもまさかあんな言葉を掛けてくれるなんて・・・本当に泣きそうになりましたよ。

それに趣味の裁縫と料理の事も褒めてくれたので、隊長に会えてよ

かったと思いました。

なぜだか頭を撫でてくれると落ち着くのですよ。

でも隊長が嫁にもらってくれらるなら、私は絶対に嫌がらないと思いますね。

本当にこの出会いに感謝です。

「凧ちゃんばかり良い思いしてずるいの〜」

沙和がなぜだか拗ねている。

「なんで沙和は拗ねているのだ？」

私がそんな疑問を聞くと・・・

「それはあれや〜凧が隊長を一人締めしていたからやろ〜それに抱かれていたからが決定打や〜」

真桜が説明してくれた。

・・・

「そんな一人締めなんてしてないぞ！・・・それに抱かれてなんてなか〜t・・・／／／・・・あつたな」

今思い出してみれば、私気絶から起きた時に隊長の顔が間近にあったな。

「凧ちゃんも隊長の事好きなの〜?」

沙和がいきなり聞いてきた。

って私はそんな事は・・・

「私は・・・!? ちょっと待って「凧ちゃんも」ってまさか?」

私は驚いていた。

「そうなの〜私は隊長・・・紫郎さんの事が好きなの〜／＼／」

「「ええ〜」」

これは私も真桜も驚いてしまった。

「い、いつからや?」

それは私も気になるぞ!!

「えつと〜初めて見た時に私の心臓の鼓動が早くなったの〜そしてあの人の事をもっと知りたいと思ったの〜／＼／」

頬を染めている・・・間違いない、あれは恋をしている。

「へえ〜沙和は一目惚れかい〜まあそれは納得できるかもしれへん」

真桜は首を盾に振り納得していた。

確かに初めて会った時はかっこいいと思ったが同時に不安もあった。

ただ今日、隊長との会話でもう不安は消し飛んでしまった。

「凧はどんなやつ？」

考え事をしていたら真桜に話を振られた。

「私は・・・そんな感情はない・・・だけど・・・／＼／＼」

「「「「「「「」」」」」」」」

このどうにも言葉で表せない気持ちをどう伝えれば・・・

「「「「「「「」」」」」」」」  
「どう言ったらいいのだろう・・・隊長と話しているだけで幸せと  
感じてしまう、この気持ちをどう表して良いか私には分かんない・・・」

凧は真剣に考えているみたいだ。

「「「「「」」」」」」

二人は顔を見合わせて思った・・・「それって恋じゃん」と思い。

「あゝあんな凧いくつが質問するから答えてくれな？」

真桜はどうやって分からしたらいいか分からなかったので質問に  
して聞いてみた。

あの二人は何を考えているだと凧は思っていた。

「えつと〜まずは隊長を見ていると何か自分に変わることはある〜?」

沙和が聞いてみた。

「隊長を見ていると・・・胸の鼓動が早くなったりする」

凧は正直に答えたに違いない。

「・・・」

またもや二人共顔を見合わせて何かを思ったみたいだ。

「じゃあ〜隊長が他の女の人と話していたらどう思うん〜?」

真桜が聞いてみた。

「え!?! 他の女性の人と・・・それはヤダな」

ちよつと暗い表情になったが答えた。

二人は目で会話をしていた。

(おい、沙和、これってマジでベタ惚れじゃないか?)

(そ、そうなの〜しかも本人自覚なしなの〜)

二人はこれは間違いないと思った。

「えつとな〜凧それは間違いないな〜」



「間違いなく」

「恋やな」 「なの」 「」

二人は同時に言った。

え、これが恋なのか？ ・ ・ まったく分からなかった。

でも悪い気分じゃない。

「うわあ、強敵現るなの」

沙和は困っている表情をしていた。

「これは、なんや、隊長やるの」

真桜は自分の上司に感服していた。

これで私のこの気持ちがあつたぞ、これが恋なのか・・・

生まれて初めてだな。

おっと、隊長達と距離が出来てしまった。

「ほら隊長達に追いつかれるぞ」

私は走った。

「風待ってな」

「そんなに走らなくてもいいの〜」

私の気分は今最高によかった。

それもさっきの隊長との会話もあるが一番気分が晴れたのはこの気持ちに気付けた事だろ。

〜 風 side out 〜

「へえ〜結構種類豊富だな」

今自分は季衣と流琉の案内でこのお店に来ている。

「ここは僕と流琉がよく通う店なんだ」

「そうですね、ここのお店は料理の種類も様々ですが安くて美味しいのがもつとなんです」

季衣と流琉がとてもこの店を評価しているな。

「うわあ〜本当やな〜種類が豊富や〜」

真桜はどれにしようか迷っている模様。

「こんなにあると困るの〜」

沙和も困っている模様。

「……………ゴクツ……………」

凧はお腹がすいている模様で・・・

「いらっしゃい！おお～季衣ちゃんに流琉ちゃん、いつも来てくれてありがとうな」

店主が来たみたいだ。

「それは美味しいから何時でも来ますよ！僕は坦々面大盛りで！後は炒飯と餃子！」

季衣はそんなに食べて大丈夫なのか？

「じゃあ私は酢豚と白ご飯と・・・八宝菜をお願いします」

流琉も結構食べるな。

「おっちゃん、ウチは炒飯と麻婆豆腐とエビチリ」

その組み合わせいいな。

「沙和は麻婆茄子と炒飯と・・・おまけで水餃子もー！」

麻婆茄子も外せないな・・・自分もお腹が結構すいているからな。

「私は麻婆豆腐、麻婆茄子、辣子鶏、回鍋肉、エビチリ、全部大盛り唐辛子ビタビタで！」

おお～凧も結構頼むな・・・ってビタビタって何ッ！？

これはあれか某神父みたいなものなのか!?

凧には『言峰』という称号をあげよう。

「了解だぜ、ビタビタでいいんだな?」

「・・・コクツ・・・」

首を縦に振り了承した。

「凧大丈夫なのか?」

一応確認で聞いてみると・・・

「凧は辛い物が好きなんよ〜!」

真桜が答えてくれた。

「凧ちゃんは私ら三人の中でも一番の食通、辛い物好きなの〜」

沙和も凧が辛い物好きと言っている。

「それはビタビタ発言で分かったよ」

「・・・／／・・・お恥ずかしいながら」

まあ〜人それぞれだから・・・

「で、その兄さんは何にするんだ?」

おっと言つのを忘れていた。

「自分は麻婆豆腐、麻婆茄子、エビチリ、酢豚と白ご飯を頼むよ」

「あいよ！」

店主は店の奥に行き調理し始めた。

・・・五分後・・・

「よし、これで全部揃ったか？」

今俺の目の前にはテーブルいっぱい皿がある。

「全部揃いました！」

「こつちもいいですね」

「沙和もいいの」

三人は大丈夫だな。

「季衣も流琉もちゃんと頼んだもの来たかい？」

後は二人を確認して・・・

「来たよ！」

「はい、揃っています」

よし全員確認完了だな。

「隊長早く！もう沙和お腹がすいて倒れちゃうの〜」

「うちももうだめや〜」

「早く！」

「兄ちゃん早く！」

「お兄様なるべく早く！」

ありゃ・・・みなさん早くご飯にありつきたいようですね。

自分もこんなにおいしそうなのを見せられたら我慢できませんよ。

「では〜いただきます！」

「「「「「いただきます〜」「「「「「

みんな勢いよく食べ始めたな。

「もぐもぐ・・・」

皿は美味しそうに食べているな。

これはそそられるぞ。

「やっぱりこのお店の坦々面美味しいよ〜！」

季衣も満足そうに食べている。

ってゆうか食べるの早いな。

「これ味を自分の物にしてみせる」

流琉は料理人魂に火がついたみたいだ。

そつえば流琉の趣味も料理だったな。

「これのエビチリ美味いやんか〜！」

真桜が絶賛している。

マジか〜俺も頼んどいてよかった。

「本当なの〜？一口頂戴なの」

沙和も興味を持ったみたいだ。

「ええ〜隊長からもらいなあ」

真桜が自分に振ってきた。

「いいぞ、ほら沙和、あ〜ん」

蓮華にエビチリを乗せ、沙和の口元までもって行き・・・

「えっ！あ〜ん／＼／＼」

沙和は恥ずかしそうに食べた。

「どうだ、美味いだろ？」

紫郎は笑顔で味を聞いた。

「うん！美味しいの〜／＼／」

沙和はエビチリの味は美味しかったけど紫郎の笑みで照れてしまった。

「お返しに水餃子どうぞなの〜／＼／」

沙和が水餃子をくれるみたいだ。

「お、ありがとう」

紫郎は素直に受ける。

「はい、あ〜ん／＼／」

「おっと、んん〜おっ！これは美味しいな」

この水餃子美味しいな・・後で城に帰ってから作ってみよう。

「兄ちゃん、僕の餃子もいいよ！」

「私の酢豚もどうぞ！」

二人共そんなに焦ってどうした？



「ほんまに隊長は正直やな〜まあ〜そこが良い所なんやね！」

真桜は自分を褒めてくれたようだ。

「じゃあ餃子も酢豚も頂くよ」

俺はそういつて箸で取ろうとしたら・・・

「僕達が食べさせてあげるよ」

「そうです、私達が食べさせてあげます」

なんか知らんありがたい。

「じゃあ餃子を」

「は〜いどうぞ！あ〜ん／＼／」

「んん〜こっちも美味しいな」

やっぱり自分は焼いてある方がいいな。

「じゃあ酢豚も」

「あっはいどうぞ！あ〜んです／＼／」

「ん・・・んん・・・これも美味しい」

本当に美味しいぞこれ、さすが紹介してくれるだけの事はあるな。

「あの〜この麻婆もどつですか／＼／？」

凧が自分の麻婆豆腐を口元にもつてきた。

「隊長それかなり辛そうやな、きいつけや〜」

「真っ赤かなの〜」

そういつが・・・せつかくくれるのだから・・・

「じゃあ頂くよ」

これは食べるしかない

「はいっ！どうぞ、あ〜ん／＼／」

凧は照れくさそうにくれた。

「ん〜・・・おお〜辛い！・待ってよけど後からこの風味・・・こいつは味わい深いかもしれぬぞ！」

これは予想外だ！まさか下を痛めるかもしれないと思ったらそこまで辛くはない・・・むしろ食欲が増してきたぞ。

「やはり隊長もそう思いますか！この辛さもさることながら麻婆豆腐がすばらしい」

凧も理解者が居たって感じて嬉しそうにしている。

「さてと俺も自分のを本格的に食べようかな」

みんなからもらったりして自分のに手をつけるのを忘れていた。

「誰か髪縛るもの持ってないかい？」

髪が邪魔で上手く食べられん。

「沙和持つてるの〜」

ナイスだ！

沙和から黒いリボンみたいな物をもらった。

「ありがとう」

沙和から受け取り髪を一つに纏めてポニーテールにしてみました。

「よし、じゃあ改めて食うぞ！・・・ってどうしたんだ？」

気合をいれて食べようと思ったのだが・・・みなさんが固まっているのですよ。

「いやなんでもないよ、兄ちゃん（なんか色っぽい）・・・」

季衣は髪を纏めた紫郎を見て色っぽいと思った。

「季衣の言う通りですよ、なんでもないですよ（髪の毛だけでこんなにも変わるんですね）・・・」

流琉も季衣と同じ事を思っている。

「隊長・・・髪を纏めるとまた魅力が出ますね／＼」・・・」

凧は髪だけここまで魅了されるとは・・・という感じの表情をしていた。

「今更きくんやけど・・・なんでそんな綺麗な髪の毛しとるんや〜！（ウチの髪なんてボサボサなのに！）・・・」

真桜は紫郎の髪がなぜあんなに綺麗なのか不思議でしようがなかったらしい。

「隊長！今度髪の毛を弄らせて下さいなの〜（綺麗な髪だと思っていただけけど益々興味を持ったの〜）・・・」

沙和は紫郎の髪の毛を自分好みに弄ってみたいと思っただけらしい。

「はいはい、それじゃあご飯食べるぞ」

紫郎は軽くスルーした。

「……………分かった「や〜」「の〜」「……………」

俺らは楽しく会話をしながら美味しく食べました。

「それから今日は俺の奢りだからな」

「「「「「えっ！ええ」」」」」

第十八話 街案内（後書き）

いやクドわふーやりながら此方もやっていたので目がやばいです。

後今週から来週までテストがあるので、更新がだいぶ遅れるかもしれません。

そこは申し訳ありません。

第十八 五話 五十万アクセス記念（前書き）

今回は主人公はあまり出ません。

それぞれの視点で書いてみました。

第十八 五話 五十万アクセス記念

（星side）

ふうふうようやく着いたぞ。

ようやく私は目的地である徐州の街に来ている。

この太守になったという桃香に会いに行きましようか。

「星さん、もう日も落ちていきますのでなるべく早く劉備さんに会いましよう」

朱里のいうことはもつともだ。

「それに・・・その子を早く休ませないと・・・」

そうせかすでない、難理。

今私は道中倒れていた白い髪の幼女を背中に負ぶっているのだ。

見つけた時は意識はあるみたいなのだがだいぶ衰弱していたのであるべく早く徐州を目指したのだ。

「そうだな、では会いに行くか！」

私たちは城に足を進めた。

.....



念話での会話は「（）」

「（主、聞こえますか？）」

「（おお！久しぶりだね、徐州に着いたのかい？）」

「（はい、無事に着きました・・・でも・・・）」

「（どうした・・・？）」

「（道中に白い髪の幼女が倒れていた・・・保護してしまいました）」

「（白い髪の・・・分かった、それは良い事をしたじゃないか！）」

「（いえ、それ程でも）」

「（その子は大事な客として城に滞在させておいてくれ・・・）もしかして・・・まさかな！・・・）」

紫郎は一つの推測をしていた。

「（了解しました・・・ですけど主・・・）」

「（今度はどうした？）」

「（まさかとは思いますが・・・その幼女を襲うのですか？）」

「（グハッ！・・・ゲホッゲホッ・・・いきなり何を言うかと思った

らなんだそりゃ？食べていた物を喉に詰らせる所だったぞ！」

「（いやだって大事にということは・・・帰って来た時に主がもしかしたら幼女にハアハアするのではないかと思い・・・）」

「（はあくそんなことする訳ないだろ・・・はい、もう終わりにするぞ、こちらは今人と話しているのぞな！）」

「（最後に一つだけいいですか？）」

「（どっど）」

「（今どちらにいますのですか？）」

「（今は陳留にいる、道中曹操に会ってしまっとな、城に招待されてしまっとな）」

「（・・・）」

「（すまないがまた後で連絡をしてくれ・・・くれぐれも今から来ようとするなよ！ちゃんと桃香達に教えてからだぞ！）」

「（分かっていますよ（まさかとは思いますがまた主の周りに女が・・・）」

「（よろしい・・・じゃあまたな）」

「はあく悩みの種がまた増えてしまった・・・」

星は主の今の状況がなんとなく分かっちゃってしまっていた。

.....

門兵に我が名を言ったらなんとなく通してくれた。

桃香達が言ってくれたのだな。

「ではここで少々お待ち下さい」

兵に待合室に案内された。

「なんか緊張します」

「.....」

おやく？ 幼女二人は何やら緊張しているもようだな。

「そう心配する事はあるまい、桃香も愛紗も鈴々も別に怖くはないぞ」

二人共まだまだ子供だなww

「それは紫郎様から聞いて分かりますが.....」

「.....初対面の人というのはさすがに緊張します」

ああなるほど、まあそんなのは慣れるしかないな。

ダダダ...

これは来たか！？廊下からものすごい勢いで走って来る音が聞こえる・・・間違いないな・・・この気配！

バタンツッ！！！！

「「「ご主人様！？「紫郎お兄ちゃん！」「」」

す、すごい勢いで入ってきたな・・・扉が悲鳴をあげているぞ。

それにしても待つていて一分もしないうちに来たぞ・・・これで主がないと知れば相当落ち込むに違いないな。

星は内心で苦笑していた。

「主はいないぞ」

星は普通に返答したのだが・・・

「星ちゃん・・・それって・・・」

あれ・・・桃香はなぜ泣きそうになっているのだ…？

「星・・・貴様あ・・・」

ちょっと待て・・・なぜ愛紗はそんなに拳を握り締めているんだ。

「星！それはいったいどうゆう意味なのだ〜！」

鈴々までどうしたのだ？

「ちょっと……星さんその……言い方が悪いと思うんですけど。」

おお！だからか。

「すまない、言い直すが……この場にはいないということだぞ、主とは別行動になってしまったのだ」

確かに……あの言い方は勘違いされてもしょうがないなww

「……ちゃんと……」

おやおや？三人共体がピクピクさせてどうしたのだ？

「……ちゃんと最初に言つてよ！」なのだ！」「」

本当にすまない。

「いや、すまないと思う、それより一部屋貸してくれないか？この子を寝かせてあげたいのだが……」

早くこの子を寝かせてあげないと……

「はあ、後でちゃんと説明するんだぞ」

愛紗に渡して連れて行って貰う事にした。

〈星side out〉

（朱里 side）

今は皆さんが腰を落ち着かせてお茶を飲んでいます。

「久しぶりだな星、それとそちらの方々は？」

あれが豪傑で知られている関羽雲長殿ですか・・・確かに武に長けている雰囲気がありますね。

「私は諸葛亮、字は孔明です」

「わ、私は鳳統、字は士元です」

「つまなくてよかった」

「宜しくね、孔明ちゃん、士元ちゃん」

この方が劉備殿・・・紫郎様は『天然』と言っていましたが高んなんとなく分かりました。

「鈴々は張飛！字は翼徳なのだ！」

この子が張飛・・・紫郎様は「素直で良い子」と言っていました・・・元気で明るい子ですね。

「で、だ・・・本題に入るが・・・ご主人様は生きているんだな？」

関羽殿・・・怖いです。

「当たり前だ・・・もし主が死んだら私も一緒に死んでいる・・・それに・・・」

星さん凄い事を真顔で言わないでください。

「それになんなのだ？」

張飛殿が聞いてみる。

「それに・・・主が私達を置いて先に逝くわけがないだろ／／／」

星さんまたもや凄い事を言っている・・・今度は照れていますけど・・・

「ご主人様の性格からして置いて行くわけがないよね／／／」

「それもそうですね・・・／／／」

「たはは／／／」

皆さん照れていますね。

「話を戻すが今回私が此処に来たのは主から手紙を預かってきたのと此処にいる諸葛亮、鳳統の両名の護衛だ」

星さんが簡潔に説明してくれました。

「手紙ですか・・・ご主人様自ら来るべきですよ・・・ブツブツ」

劉備殿がなにやらブツブツ言っておられるようですが・・・？

「諸葛亮、鳳統も主に仕えたいと申され、主はそれを受諾し軍師に一任したのだが・・・主はそこから別行動したいというわけで桃香達が政務とかで忙しいだろうという事で此処に来たのだ」

説明ありがとうございます。

「なるほど・・・ご主人様が決めたことは逆らう訳にはいかないな・・・ではこれからよろしく頼むぞ、二人共！」

「はいっ！」

よしーこれから頑張るぞ。

隣にいる雛理ちゃんもやる気満々という感じでした。

「私の真名は桃香だよ、よろしくね」

いきなり教えてもらっちゃってよいのですか？

「いいのですか？」

「これから一緒にいるんだからいいんだよ」

なるほど・・・

「私の真名は愛紗だ」

「鈴々は鈴々なのだっ！」



愛紗さんに鈴々ちゃんですか・・・鈴々ちゃんは最初から自分の真名を言っていたんですねw w

「私の真名は朱里です、これから宜しく御願います」

「わ、私の真名は雛理です、ど、どうか、これから宜しく御願います」

これからはここで暮らしていくんだ・・・精一杯頑張らなくちゃ。

だからご主人様もなるべく早く帰って来て下さいね。

（朱里 side out）

（雛理 side）

ふう〜最初はどうゆう人達なのか不安で胸がいっぱいだったのだけれど・・・

話してみれば良い人達なのだと分かりました。

「それと私が来た理由はもう一つあるんだぞ」

今喋ったのは星さんです、星さんとは道中色々話していて紫郎様に忠誠を誓っているのが本気で分かりました。

でも色々と紫郎様に危ない事をしようと考えていたので・・・紫郎様

大変だなとも思いました。

でもそれほど慕われているのだとも分かりました。

「そうなの？星ちゃん!？」

今話された方はこの徐州の太守の劉備様・でも真名を教えてくださいましたので桃香様です。

紫郎様が言うには『お人よしで情に脆く、彼女自身の腕はあまり大したことはないけど・人一倍義と情を持っている、それに天然惚けの面が目立つが意外に頑固なんだよ』と云ってくれましたけど・確かに武には長けていなそうです・でも初対面の人にもしつかり目を見て話しをしており前に水鏡先生に『目を見て話す人は心に隠し事がない人よ』と云っていたので・桃香様は信用に値する人だと思いました。

「それはいつたいなんなんだ・・・？」

今話した人は美しい黒髪をなびかせて戦う姿から「美髪公」の二つ名でも呼ばれる関羽殿・真名は愛紗というそうです。

紫郎様が言うには『義に篤い勇将で万能なんだけど・意外に嫉妬深い・でもそこが可愛いのだよ』とこのようにいうには紫郎様の信頼は絶大ですね、けど嫉妬深いとはどうゆう意味なんでしょうか？

今の愛紗さんは可愛いより凛々しくてカッコイイというのが当てはまる様な気がしますか・・・？

(紫郎は愛紗のデレの部分を行っている)

「なんなのだ〜?」

今話した人は私と同じぐらいの身長の高飛・真名は鈴々という子です。

紫郎様は『小さいけどものすごい力持ちだよ、それに愛紗と互角か・それ以上の武を持っているよ』と言っており・私とあまり体系が変らないのに凄いと感心してしまいました。

私と仲良くしてくれるかな・

雛理は新しく友達ができるかと少々不安になっていました。

「ふむ、実は主から『気』というものを教えていただき、それを桃香達にも教えてやってくれと言われたのでな」

私も本の中でなら知っていますけど実際には見たことはありません。

「気・・・私は聞いたことがある」

愛紗さんは知っているご様子で・・・さすがです!

「気・・・?なにそれ?」

桃香様は・・・やっぱり・・・

「気・・・なんなのだ〜?・・・美味しい物なのか?」

鈴々ちゃんは分かっていますね。

「その気についてだが説明をするぞ」

星さんは軽いノリで話を進めた。

・・・説明中・・・

「なるほどそれは凄いな！」

愛紗さんは星さんの話を真剣に聞いていました。

「へえ〜つまりそれを使うと強くなれるという事なんだね！」

桃香様も瞳をキラキラさせながら聞いています。

「それは凄いことなのだ〜!？」

鈴々ちゃんも興味津々です。

「愛紗と桃香はちょっと耳を貸してください」

星さんが二人を呼んでコソコソ話しています・・・なんなんでしょう？

〜離理side out〜

〜桃香side〜

今星ちゃんに呼ばれて愛紗ちゃんも入れて三人で顔近づけてコソコソ話しています。

「で、どうしたのだ、星？」

愛紗ちゃんが私も思った疑問を聞いた。

「さっきの話でも言ったが念話の事は説明したな？」

ああ、あれねえ、便利だよな！声を出さずに遠くにいる人と話せるのだから

「あれは本当はこれが無くしてはできないのだと・・・でも・・・」

星ちゃんが懐から出したのは綺麗な山吹色の勾玉がありました。

「実はもう私達は三人は主と念話できるんだ」

「ええええ」

これは驚くしかないよ！？

いつの間にそんな事ができるようになっていたの。

「愛紗達は何をそんなに騒いでいるのだ？」

あつ！鈴々ちゃんが寄ってきた。

「あゝえつとだな・・・そうだ！・・・鈴々、朱里と離理にこの城を案

内してあげなさい、ついでに食堂に饅頭があるから食べていいぞ」「  
愛紗ちゃん誤魔化してる。

「本当なのか！朱里、雛理、鈴々について来るのだ！」

鈴々ちゃんは勢いよく飛び出して行った。

「あ、ちよつと待ってくださいよ〜」

朱里ちゃんがその後を追いかけて行った。

「……………ぺ……………」

雛理ちゃんは礼儀正しくお辞儀して追いかけて行った。

「本題に戻るけど星ちゃん、それって何時からできるようになっていたの？」

私は気付かない間にご主人様と話が出来ていたのだと思い、それが何時からなのか知りたかった。

「私達が交わった時ですよ」

「……………えっ!?!」

私は一瞬だけ何を言っているのかわかっていませんでした。

隣にいる愛紗ちゃんも唾然としていました。

それはそうだよね・・・それを知っていたら・・・もっと早くしていたのに・・・

「主が言うには接吻だけでもいいと言っていましたけど・・・交わった方がより強く繋がるそうなんですよ」

星ちゃんは嬉しそうに言っています。

「で、その念話はどうやってやるんだ？」

「そうだよ、早く教えてよー！」

私達二人は早くご主人様と話したくて星ちゃんに問い詰めた。

「主が言うには『心の中で呼び掛ける』だそうだ」

星ちゃんに言われてすぐにやってみた。

「（ご主人様！）」

「（うおー！？二人共いきなりどうした！？というか久しぶりだな）」

「（久しぶり・・・じゃないよ！私達がどれだけ心配したと思ってるんですか！）」

なんか涙が出てきそう。

「（桃香様の言うとおりです、本当に心配したんですよ！）」

愛紗ちゃんも泣きそうになっている。

「（主は相変わらずに好かれていますね）」

星ちゃんは微笑ましいという感じで見ている。

「（ごめんな、任せきりにして・・・）」

「（いいよ、こうして話せただけでも感謝だよ）」

「（そうですよ、ご主人様の無事を確認できてホッとしています）」

愛紗ちゃんの言う通りだよ。

「（ありがとうな・・・すまんが今ちょっと呼ばれてしまったから  
念話終わらすぞ）」

「（ご主人様は今いったいどこに居られるのですか？）」

それ私も思った！

「（今は陳留にいるよ、曹操の所にやっかいになっている）」

曹操・最近勢力を伸ばしつつある人。

「（大丈夫なのですか？）」

「（大丈夫だよ、城に招待されたんだから）」

えっ！それってどうゆう意味・・・？



「（あつ！すまんが念話を一時やめるぞ、またすぐこれで会話できるから心配しなくていいから）」

「（ちよつとご主人様・・・）」

それからは聞こえなくなっていました。

「はあ〜ご主人様はいつたい何をしているんだか・・・」

愛紗ちゃんが溜め息をはきながら心配そうにしていた。

そつだよね・・・私達にも内緒で何をしているんですかね・・・

はあ〜帰ってきたら問い詰めてやるんだから

（桃香 side out）

（愛紗 side）

星から教えてもらった念話というものは便利だな。

遠くの人とも声もださずに会話ができるとは・・・！？

それでさつき念話でご主人様と久し振りに会話をしたというのに・・・すぐに切られてしまいました。

本当に・・・まったく私達がどれだけ心配しているか、分かっています

せんね！

もうこれだけで一時間ぐらい愚痴れますよ！

「さてと手紙を読もうじゃありませんか」

そういえばそんな物もあったな。

「そうだね」

桃香様が手紙の中身を見始めた。

「どれどれ」

星も見ようとしている。

「……ええ〜これってどうゆう意味かな!？」

「……これはあれですよ!??」

桃香様も星も何を驚いているのだ。

「どれ、私にも見せてくれ」

私はおもむろに手紙を見始めた。

「……?……!??……これは確かにあれだな……」

星の言つとおりだ。

「予言・・・主はこれが起こる事を予想している」

星の言う通りだ・・・もしこれが当たっていけば主は未来が読める事になる。

それはそれで凄すぎる。

手紙の内容はこう書いてある。

『最近黄巾賊という連中が暴れ回っているだろ？そいつらが近い内に大軍を率いてもつと暴れまわるだろ・・・そこである人物がそれを討伐するために軍を動かす・・・それで桃香達、後はおそらく孫呉の王・・・孫策に声が掛かるだろう・・・それでだ！それに参加してくれというのがこの手紙の送った理由だ、まあ～予測が正しければ・・・手紙を読むより念話を使って会話するのが先になると思うのだけれどね それじゃあもしも声が掛かって来たら参加してくれよ！自分もそこにいるから！』

確かに・・・先に念話をして会話をするというのが合っている。

「失礼します！」

兵が入ってきた。

「どうした？」

「はっ！先程このような手紙が送られてきました」

私は手紙をもらった。

「ごくろう、持ち場に戻ってよいぞ」

「はっ！」

兵はすぐに部屋を出て行った。

「愛紗ちゃん、早く読もう」

そう焦らないでください。

「……………!?……………えっ！これってまさか!？」

私は夢でも見ているのか!？

「見ろ、愛紗！送り主を」

私は最後に書かれている文字を見た。

「曹操……」

主が書いた手紙の通りに『黄巾賊が大軍で暴れ回っているから一緒に討伐しましょう』と書かれていた。

主は今曹操殿の所に滞在している。

なるほどあの手紙に書いてあった『ある人物』というのは曹操殿でしたか……

まさか……本当に当たるとは思っていませんでした。

「ご主人様って何者なの？」

桃香様が言った通り・・・本当に何者なのでしょう？

（愛紗 side out）

.....

.....

.....

「あれ？・・・まだご主人様の手紙に何か書いてあるよ？」

桃香がそれを見始めた。

「どれ私にも見せてくれ」

星も見始めた。

『最後に・・・星は桃香達と一緒に来てくれ！朱里達を送り届けてすぐに此方に来ようとしないうちに！』

「.....」

星が何かを言いたそうにしている。

「あるじいの、嘘つき！すぐに追いかけていいと言っていたのに.....」

星が悔しそうに壁を殴っていた。

「あははは〜そうゆう事もあるよ（ふう〜星ちゃんにだけいい思いさせないんだから）・・・」

桃香は励まそうとしてい・・・だが、内心はよかったと思っていた

「そつだぞ星、桃香様の言うとおりで（星ばかりいい思いさせてたまるか！）・・・」

愛紗も桃香と同じく励まそうとしていたが・・・内心は最近まで紫郎に会っていた星に嫉妬していた。

・・・

・・・

・・・

「ううー!?!?」

なんだなんだ？今ものすごい悪寒がしたぞ!?!?

紫郎はいきなりの悪寒に少々驚き気味だった。

第十八 五話 五十万アクセス記念（後書き）

勉強の休憩中に書いてみたんですけど・・・どうですかね？

久しぶりに桃香さん達を出してみました。

いや〜なんか空気化していたので・・・

まだ試験が続いているので更新が遅くなるかもしれませんがそこは  
ご勘弁を・・・

第十九話 あれ！？ほのほのすぎる・・・？

昼飯も食べて色々と街を案内されながらうろついていたら、何時の間にもやたら夕方になりかけていた。

「ああ～しまった！？ 華琳様のお手伝いに行かなくちゃ！」

流琉はいきなり大声を出して、城に向かって走って行った。

「そついえば華琳が料理を作るんだつたな」

独り言のように言つと・・・

「そのように言っていましたね」

凧が答えてくれた。

「そつやな～どんなもんが出てくるか楽しみだわ！」

真桜はどんなものが出るか頭の中で考えているみたいだ。

華琳の事だから・・・上品な料理だろ。

「きつととびっきりの豪華な料理なの～」

沙和も楽しみそうにしている。

「華琳様の料理は本当にとても美味しいんだよ」



この中で季衣だけが食べたことがあるから、きっと美味いに違わないな。

まあ、華琳には苦手な事が無さそうだから心配はないな。

「それは期待できるな　よし、それじゃあ俺らも城に戻ろうか」

紫郎達は城に足を向けて歩き始めた。

.....

「紫郎達おかえり、街はどうだった？」

後ろから秋蘭が話しかけてきた。

「ただいま、民の人達が常に笑顔でいる、華琳は良い君主だと改めて思わされたよ」

本当にそう思ったよ。

賑やかで活気に満ちていた。

「そうか、それは嬉しい事を言ってくれるな」

秋蘭は本当に嬉しそうに笑みを浮かべていた。

「そういえば夕食は華琳様を作る予定だったのだが急な書類が届いてしまってな、そちらに手をまわしてしまってな・・・今から私が作りに行こうと思ってな」

それはご愁傷様で・・・でも華琳の料理食べてみたかったのにそれじゃあしょうがないな。

「よし、じゃあ今日は俺が作るよ！」

こう見えても料理は得意な方だと思つ。

「くくくくえつ！」「くくく」

ひでえーな・・・

「そんなに以外か？」

ちよつと落ち込むぞ・・・

「隊長つて料理できるん〜!?!?」

真桜が聞いてきた。

「できるぞ」

まあ人並みだけだな。

「凄いの〜!」

そうか？なんか照れるぞ。

「そうなのか？それは驚きだ、なら今回は紫郎に作ってもらおうか！  
私は手伝いをするぞ」

秋蘭は驚いた表情を崩したがすぐにいつもの表情に戻った。

「なら頼むよ！ 凧も手伝ってくれるか？」

凧にも手伝ってもらおう。

「私なんかが参加してよいのですか？」

・・・まったく・・・何を言うかと思いきや・・・

「当たり前だろ、みんなで料理した方が楽しいだろ？」

大勢で料理するのもそれはそれでアリだよな。

「ありがとうございます！ ぜひとも参加させてください！」

凧もやる気になってくれたみたいだ。

「真桜と沙和と季衣どうする？」

紫郎は他の三人にも聞いてみた。

「僕は一回部屋に戻ってのんびりするよ（あんまり料理ってできないんだよね〜）・・・」

季衣は内心で料理に苦手意識があったみたいだ。

「ウ、ウチはいいや〜（料理ができないなんて言えないわ！）・・・」

真桜も料理が苦手な事を隠した。

「さ、沙和は新しい部屋を見に行ってくるの！（ううう料理ができないなんて言えないの）・・・」

沙和も料理が出来ない事を隠したみたいだ。

真桜も沙和も何をそんなに焦っているんだ？

紫郎は気づいてないみたいだが。

「そっか、じゃあまた後でな」

紫郎はそう言っていると厨房に向かって足を進めた。

.....

「お〜い〜流琉、何を作るか決めているのか？」

厨房に着くと流琉が食材を見ながら考えていた。

「あ、お兄様、はいーそうなんですよ、てっきり華琳様を作っていると思いました」

それは確かに驚くなww

「華琳様は急な仕事が入ってしまったってな、それで代わりに私達を作ろうと思っとな」

秋蘭が説明してくれた。

「そんなんですか！　なら私もお手伝いします」

それは助かる、これで戦力が増えた。

「助かるよ、もう夕飯時だから、なるべく早く作らなくちゃな」

「紫郎は何か作るのか、決めたのか？」

「一応あるけど・・・昼飯の時に食べたんだよな・・・」

「麻婆豆腐を作ろうかと思っている」

さすがに舌が飽きてしまっかな？

「なるほど」

秋蘭は納得してくれた。

「いいですね」

流琉も納得してくれた。

「風はさすがに飽きるか？」

真桜もそうだが昼の時に食べたから大丈夫か？

「いや私麻婆豆腐好きなので大丈夫ですよ・・・けどお願いがあるんですけど・・・」

なんとなく分かるぞ。

「ビタビタでいいんだな？」

凧と言えばこれしかない。

「コクツ・・・／／／」

やっぱり・・・

「了解したよ」

照れてる所がちょっとグツと来てしまったよ。

「よし時間もないし、秋蘭は米を炊いてくれ、流琉は食材の調理をしてくれ、凧と俺は麻婆豆腐を作ろうか！」

「」「はい」「」

さてと調理開始だ。

・・・調理中・・・

やはりみんな手付きがとても良い。

順調に調理が進む・・・凧もさすが趣味だけの事はある。

でも凧・・・自分でビタビタを作っているのは分かるが・・・豆板醬を三瓶使つなよ・・・真っ赤だぞ。

もうそろそろで完成だな。

なら食後のデザートでも作っとくか。

.....

「さてと完成だから持って行くっか！」

結構早く完成した。

「じゃあ私は皆さんを呼んできますね」

流琉がみんなを呼びに行ってくれた。

さてとみんなはどんな反応をしてくれるかな。

・

・

・

みんなが食堂に揃った。

「あら美味しそうだわ」

華琳が褒めてくれた。

「どうも、仕事の方は大丈夫か？」

疲れてそうな顔をしているぞ。

「どづつてことはないわ、それより私が作れなくてごめんないさいね」

別にそんなぐらいいいで。

「気にするな、華琳は忙しい身なんだから」

一国の君主様に料理をさせるのはどうかと自分でも思っていた。

「さてとお腹も減ったし、食べますか」

みんながそれぞれ食べ始めた。

中々に好評かだ。

真桜も美味しそうに食べてくれた。

俺が麻婆をご飯にかけて食べていたら・・・みんなから変な目で見られたのだが・・・

試しにやってみろつと言ってみて、皆さんやってみた所・・・

驚きの声があがり、凧なんて「大発見です!」っと言って驚いていた。

それに食べている最中に星から「今、徐州に着いた」という報告が念話で伝えてきた。

久し振りに星と話したような気がするよ。



星の報告によると向かっている途中に白髪の幼女を保護したと聞いた。

・・・もしかしてヘルか？

これは一回確認しとかないといけないな。

紫郎は家出三姉妹の三女ではないかと思っているみたいだ。

話を戻すが、星の奴・・・襲うのですか？」とか聞いてきた。

俺は餓えてはいないぞ！ まったく食べていた物を喉に詰らせてしまっただろ！

星との念話も終わり、食後にゴマ団子、桃饅頭を作ってみて食べてもらいました。

みんなには大好評でしたよ、華琳にも「また作ってくれないかしら？」と言われたので軽く了承しました。

で・・・今は自室にて稟と風と自分、三人で世間話している。

「お兄さんはこれから伸びそうな勢力は誰かとか考えたりしていますか？」

風が唐突に聞いてきた。

風がお兄さんと呼んでいる理由はそう呼んでいいと聞かれたので了承した。

「そうだね．．まずは南にいる、孫策、次に今徐州を治めている、劉備、そして曹操だと思うよ」

二人共なんでそんなに驚いた顔をしているんだ？

「その理由はなんですか？」

「これは天の知識だよ、俺の居た世界ではこの三人が一番の勢力を持っていたと歴史に残っている」

稟の問いに答えてあげた。

「なるほど天の知識ですか．．確かに私も風も孫策殿が伸びるとは予測をしていましたが．．劉備殿が伸びるとは思っていませんでした」

へえーやっぱり二人共頭がキレるな。

「お兄さんは三人の中で誰が勝ち残ると思います？」

中々にいい質問だね。

歴史では三人が生きている時には決着はつかなかった．．その息子達が決着をつけた。

「それは分からない、ただ．．」

「ただ．．？」

二人共頭の上に???が浮んでいる。

「三人にはなるべく戦ってほしくわない、もし戦うんだとしたら・

」

紫郎は最後の言葉を言おうとしているが知らない間に殺気まで出していた。

部屋の空気が一瞬だけ凍った感じがした、稟も風もそれを肌で感じていた。

ガチャ!

「紫郎、華琳様が御呼びだ、それに稟も風も呼ばれているぞ」

紫郎が言おうとしたのだが、春蘭が入ってきた。

おっと!? 知らない間に殺気を出してしまったみたいだ。

落ち着こう・・・よっし、これでいいだろ。

「この話はまた今度だな、二人共行こうか」

紫郎はそう言って立ち上がり玉座に向かった。

〈稟side〉

紫郎殿つて料理も出来るんだと思いました。

最初見たときは華琳様以上の魅力を感じましたよ、でも一番驚いたのは・・・

華琳様に優れていると認められたうえに華琳様に負けを認めさせるほどの才能を持っている所でした。

本当にこの麻婆豆腐美味しいですね。

これならお金を払ってでも食べたいですね、それに食後に出してくれた、ゴマ団子と桃饅頭は美味でした。

また食べてみたいですな。

さてと今は彼の部屋にて話をしています。

風も一緒ですよ！ 私一人で行ったら夜這いしに行くみたいじゃないですか！

だから風も一緒ですよ。

彼の話は私達が思っていた事の確信を捉えた考えで本当にそうなりそうな気がします。

でも最後に何を言おうとしたのか分からないけど・・・とてもイヤな事だと悟りました。

それに彼の殺気は本当に怖かったです・・・もうあんなの味わいたくないです。

華琳様が呼んでるといふことは・・・あの事かな？

ああ！ 待つて下さいよ！紫郎さん

〈稟side out〉

〈風side〉

金獅子さんってどんな人か気にはなっていましたか・・・一言で言えばカッコイイ殿方ですね。

それに華琳様が認めてしまうほどの才能を持ち、尚且つ華琳様以上の覇気を持つ・・・そんな人がいるのかと思いましたが本人を見たらなるほどっと思えましたよ！

しかも料理腕も優れていました・・・特に食後に出てきた、ゴマ団子は素晴らしく美味しかったです！

さてと今私は稟ちゃんに連れられてお兄さん部屋に來ています。

なんで私がお兄さんと呼んでいるかと疑問に思ったと思いますが、自分でも呼んでみたいと思っと思って思っと思って呼んでみた所・・・最初は驚いていましたけど、笑顔で呼んでいいと言われて撫でられました。

あれ！？ 撫でられるのはこんなに気持ちいものでした？

・話を戻しますがお兄さんも今の状況について真剣に考えていますねえ

私達以上に今後の動きを把握しています・恐ろしいですね

んっ!? お兄さんの表情が険しくなりました、しかもこの何々ならぬ殺気はいつたい・!?

まだ話があるというのに丁度いい所で春蘭様が来ました。

お兄さんも「また今度」って言っていましたし、また話してみましよう。

（風side out）

春蘭から華琳が呼んでいると言われ行くこうと思ったのだが、桃香と愛紗と星が念話で話してきた。

久しぶりに話をしたのだけれど俺の心配をしてくれて涙が出そうになったよ。

二人共元気でなによりだったよ。

春蘭に呼ばれていて少ししか話せなかったけど後で色々与会話してみるか。

「来たみたいね」

考え事をしていたら何時の間にもやら玉座に着いていた。

「これで全員揃ったわね」

「それでどうしたんだ？ 何かあったか？」

「そうなのよ、最近黄巾賊という連中が暴れ回っているでしょ？  
それでさっき入った情報によればその連中が大軍を率いもつと暴れ  
まわりそうなのよ・・そこで朝廷より討伐命令が下ったわ」

朝廷が命令してきたという事は朝廷にはもうそんなに力はないな・・  
腐敗したゴミ共が・・

「私はこれを気に黄巾賊殲滅するわ、完膚なきまでに倒すわ」

華琳の今の目はマジでやる気だな、華琳なら大丈夫だろ。

「でも敵の数も大軍なので我が軍だけではどうにも数負けしてしま  
う、それで何人かの太守に声を掛けたわ」

俺の予測が正しければ・・

「まずは呉の孫策、二人目は徐州の劉備、この二人に声を手紙で呼  
び掛けといたわ」

予想道理！ やはり華琳も二人の事は気になるのかな？

「華琳様、なぜその二人なのでしょう？」

「そうね、孫策は自分の目で見てみたいという興味本位よ、劉備は  
民の間で噂になっていたから気になったの」

この三人が後にこの大陸に名を知らしめるのだから。

「そこで紫郎貴方にも参加してもらおうよ」

なるほどそれが目的ですか。

「いいぞ、俺も部屋を借りている恩もあるし久し振りに雪蓮に会ってみたいしな」

借りを作つたらすぐに返すのが自分の考えなんだな、これが。

「雪蓮？ 雪蓮とは誰のこと？」

しまった！？ つい口が滑ってしまった！

「あゝ今のは忘れてくれ」

こんな言い訳で大丈夫か？

「……まあいいわ、今日はちょっと疲れてしまったから寝るわ、明日は朝早くから出陣するから皆も夜更かししないようにね」

華琳はそう言うつと自分の寝室に向かっていた。

急な仕事が入ってしまったのだから、それは疲れるな。

俺も桃香達と少し話してから寝るとしますか・・・

「紫郎、ちょっと待て！」



ん〜・・なんだ春蘭、秋蘭、一体どうしたんだ？

「さっきの話に出てきた名前、あれって女の人の名前ですよね」

なんだ・・なんか話がややこしくなってしまうような気がするぞ。

「その女とはどんな関係だ！」

「！？」

やはりキターツ！？ なぜにこつゆづ展開になってしまっのかい！？

「私も気になりました！」

「わいも〜」

「私もなの〜！」

三人組もなぜに気になるんだよ！！

「わ、私も・・」

「風も気になりました」

また二人追加・・これで俺の退路は・・

「まさか・・季衣や流琉もかい？」

おそろおそろ聞いてみた。

「僕は眠いから寝る」

「私は気になりました」

季衣・君は偉いぞ。

その後は色々と言いついて「すぐに会える」と言い残しその場から逃げた。

追撃はなく部屋に戻って、桃香達と俺が居ない間に合った出来事や世間話をしていた。

あつ！ もう深夜だな・寝よう。

ではお休みなさい。

## 第十九話 あれ！？ほのほのすぎる・・・？（後書き）

二週間も更新できずスイマセンでした。

夏休みに入って真剣に書けるとおもいきや・旅行が入ったり、オープンキャンバスが入ったりしてもう大変です。

ですけどなるべく早く更新できるように頑張りますので応援お願いします！

なんか違うシリーズも書きたくなくなってしまったので参考にタイトルを出します。

とある魔術の禁書目録（二十巻まで読んだのでそこまでは書いてみたいと思います）

・上条勢力と戦ってしまうかもしれせん。

・暗部組織の連中とも戦う。

・ラスボスみたいな存在になってしまいう可能性アリ

・ハーレムになってしまいうかも

これから下のはまだあまり詳細を決めてないのだけどやりたいと思っっているものです。

真剣で私に恋しなさい！×君が主で執事が俺で×つよきす

魔法少女リリカルなのは×とらいあんぐるハート

魔法先生ネギま！

それが全部合わせて、他の作品も追加してクロスオーバー

以上です。何かこれをやって欲しいとあらばドシドシ返事をください。

第二十話 三国の英雄揃う……そして紫郎は死す……（精神的に）

第二十話 三国の英雄揃う……そして紫郎は死す……

俺は今死んでいる……なぜか？

それは……

「ちよつとっ！？紫郎は私達のものよー！」

「そつだ、紫郎は我らが呉にこそ相応しい」

「姉様っ！？それに冥琳もっ！？……紫郎……どうか強く生きて……」

そう言つて俺の左手を引つ張っている雪蓮、冥琳。

少し離れた所で蓮華が哀れみの目で見ていた。

蓮華よおー、そついうなら助けておくれえ〜！

紫郎の助けは蓮華には届かなかつた……

だがまだ紫郎の苦悩は続く……

「何を言つんですか！ご主人様は私達のものだよ、それにご主人様は私達の主なんです」

「その通りです！ご主人様は私達と一緒に居るのが相応しい！」

「あわわ、これはいつたいたいどうしたらいいのでしょうか？…混ぜるべき？…止めるべき？…混ぜたらご主人様に迷惑がかかりますし…かといって止めに入ったご主人様を取られてしまいますし…（ブツブツ）」

そして反対側の右手を桃香と愛紗が引つ張っているのだ！

朱里い！俺は誰のものにもならないから…早く止めてくれえ！

またもや紫郎の助けは届かず…

そしてもう一人…

「待ちなさい！紫郎は誰のものでもないわ、私のものよ！」

「華琳様、できれば私にも紫郎を分けて下さい」

「華琳様に秋蘭まで！？おのれえ、きさまあ、貴様だけはー私が斬る！」

「華琳様っ！？…そう、そうなのね…やはり殺すしかないのね…これも運命だと思って…死んで！」

真正面から首に両腕を回して華琳が抱きついてきやがった！

しかももこいつにやけてやがる！絶対に遊んでやがる。

ああ、秋蘭は自分の主の行動を止めるべきでは…？

春蘭、早まるなよ！涙流しながら剣を振るなあ！

桂花……その殺気だけで一般人なら死んでるぞ。

もはや助ける人もおらず、背水の陣の紫郎であった。

でも作者さん的には……羨ましいぞ、この野郎お！

んっ！？今誰かが俺の事を羨ましいと思ったな……

そんな事はどうでもいい！

なぜこんな風になったのか……それは……

……

俺は黄巾賊の本隊を叩くべく華琳率いる軍に付いて来ている。

季衣と流琉が留守番を任されてそれ以外は今此処にいる。

華琳が書状に俺の事を書いたらしく、返答の書状には「紫郎には手を出さないでね」、「ご主人様は私達のもんですから」と書い

てあつたらしく、皆から変な目で見られてしまった。

今は呼びかけに応じてくれた、孫策、劉備の到着を待っている。

そして今は合流地点で自軍の軍を休めている…桂花、凧、真桜、沙和は兵達に新たな指示を出しに行つたみたいだ…そして天幕の中は……

「紫郎はあの二人とはどんな関係なの？」

華琳、ちよつと目がマジで怖いのですが…

「凧…華琳様って怖いですね…」

「凧ちゃん、あれは触れてはなりませんよ…」

コソコソと話す二人がいるが…そんな事は関係ない…俺がピンチなんだあ！

「え、えつと…だな…ただの…「失礼するわよ」…ツ!？」

……この声は…まさかツ!？…

「紫郎お〜」

「ぐはあ!」

振り返つた紫郎に真正面から抱きついた雪蓮であつた。

さすがの紫郎も物凄い勢いだったので痛そうにしている。

「紫郎、元気だった？いきなり手紙を置いてどっか行っちゃうんだから心配したわよ」

「…………それはすまなかった…でも見ての通り元気ですから…」

紫郎は安心させるように頭を撫でている。

「心配したのは雪蓮だけではないわよ、もちろん私も心配したわよ」

「私も…………い、いち、一応心配したのよ」

声が出た方を見ると…………冥琳が安心したような顔でそこにいた、蓮華も心配していたんだって顔をしていた。

「冥琳も蓮華もごめんな…今度からは手紙じゃなく直接言うようにするよ」

冥琳と蓮華が寄って来たので撫でてあげた。

「なんでこんなに落ち着くんだらう…？そう思わない？冥琳？」

「だな、こんなに安心できるとは…」

「姉様や冥琳が子供みたいになっている…………私もそう見えてしまうのかしら…？」

三人を交互に撫でてあげているのだが…



三人共可愛い表情して…愛らしく思ってきてしまっじゃないか。

「紫郎お…SE・TU・ME・I・してくれないかしら？」

……もつと怖くなっているよ…華琳…ほら、兵士のみんなが怖がっているよ。

「そつだな…雪蓮とは…」妻よ！「その通りつm!?!…雪蓮!?!」

「…はあ…ご愁傷様…」

「姉様!!?!?」

ちよつとツ!?!?話を混乱させないでくれよ!春蘭や秋蘭なんて殺気を放ちながら武器を構えているぞ!

冥琳せめて助け舟を出してくれよ。

「へえ…それは知らなかったわ…ごめんなさい……(な、なんで、なんでこんなに胸が苦しいのかしら…)…」

華琳は俯いたまま自分の胸を抑えて何も発することはなかった。

「か、華琳、あれは冗談だからな、春蘭も秋蘭も分かってくれよ」

「嘘をつけえー!」

「姉者の言つとおりだ」

春蘭が今にも手に持つ 七星餓狼しちせいがろうで斬りかかってきそつだ。

秋蘭も弓、餓狼爪がらうそうじをこちらに向けている。

「曹操、落ち込む事はないぞ…あれは全部雪蓮…孫策の冗談よ！ほら…」

この場にいる全員が紫郎に抱きついている雪蓮を見た。

「お前は何を言い出すかと思ったら…もう雪蓮の事なんて嫌いになってしまったよ（このぐらい言わなくちゃ懲りないだろ）…」

紫郎は抱きついている雪蓮を無理矢理はがして離れた。

紫郎はあえて冷たくあつたっているみたいだ。

「えっ！？ちょっと！？嘘でしょ…？」

「……………」

雪蓮の言葉に耳を貸す仕草を見せない紫郎……よつするにシカトっというやつだ。

「…ごめんなさい…さっきのは謝るから…だから許して…お願い…」

雪蓮は目尻に涙が溜まっていた。

（これはやり過ぎたか？）

紫郎も女の人の涙には勝てない模様…

「……まあ、これからあまりやらないでくれよ……そうしないと俺の身が持たないからさあ」

紫郎は観念したのか……雪蓮に寄り涙を拭ってあげた。

「……多少……私の予想とは違うけど……これで嘘だって分かったでしょう？（ああ、雪蓮……なんて可愛い表情をするんだ／＼）」

冥琳は何時もどおり対応をした……ただし外側だけ……内側では雪蓮に萌えていた。

「姉様がタジタジね……これは一つ弱味を握れたかしら……（何時も攻められてばかりだけど……これで）」

蓮華も何かを思ったのか……クスクス笑っている……これはこれで怖い。

「……なんか凄い事になってしまったわね……（でも私の胸のモヤモヤも消えたみたいね）」

華琳はなんだかんだで立ち直った。

「ふう、なんだそうだったのか……！」

春蘭はなんか納得したみたいだ。

「……ふむ……（紫郎は涙に弱いと……覚えておこう！）」

秋蘭は春蘭と同じで納得したご様子……

「風…これは現実…？」

「稟ちゃん…これは現実ですよ…」

二人は冷静になりながら状況を把握している…結果…カオス的空間。

「後は一組か…どうせまた紫郎関係で問題になるのかしら…」

華琳が誰にも聞こえないようにボソツと口にした。

「そうよね…本当…紫郎の周りには女の子が寄ってくるのよね…はあ〜」

「孫策！？何時の間に！」

華琳の口にした事は何時の間にかすぐ近くに居た雪蓮に聞こえていた。

「貴方とは真剣に話してみたかったのよ、曹操」

「あら、私だって貴方に興味があったからこそこうして呼んだのよ、孫策」

二人は見つめ合って…何かを察したらしい。

華琳から見て孫策は…さつきまでとはまるで違う…今は堂々としており体から覇気が滲み出ている…これがあの江東の虎の恐れられた、その娘…虎の子はそれ以上か…面白い…実に面白いわね。

雪蓮から見て曹操は…さつきまでとはまるで違うわね…噂では武芸に長け政にも秀でた文武両道の少女と聞いていたけど…正しくその通りね…しかもこの覇気…これは凄いときかいいようがないわね…でもこの程度じゃあ私は負けないわよ…戦も恋もね

この二人の間だけは異様な空間になっている。

それに二人共顔がにやけている…強者と出会った喜び？違うな…これは二人共悟ったのだ。

目の前にいる人が自分達の前に立ちはだかる事を…

「ご主人様あ！」

「ぐほー」

この雰囲気をぶち壊しにした…そう…また紫郎関係で…

「孫策…貴方とはもつと話したいのだけれど、私あつちの方が気になって仕方がないのだけれど…」

華琳が紫郎の方を見て…またかつという感じで頭を抑えていた。

「その意見に同意だわ…私も貴方とはもつと話したかたのだけれど…アレがどうも気になってしょうがないのよ…」

雪蓮も華琳の意見に賛成らしい…そして後ろで紫郎とイチャついてる、三人の女の子が気になるらしい。

「なら一緒に問い詰めに行きましょう」

「それに乗ってあげるわ」

二人共凄い笑みで紫郎の所に向かった。

…それからはご想像に任せます。

〈華琳side〉

まったくなんでこんなにイライラするのかしら…

これもそれも全部紫郎が悪いの…まったく我が軍の将と仲良くするならまだしも…他の軍の女の子と仲良くするんじゃないわよ。

確かに…劉備も孫策も綺麗だし胸もかなりある。

それに比べて…私もまあ綺麗って言ったら綺麗な方だと思ってるわよ…だけど胸は…負けている…くっ！屈辱だわ…

なんで私こんなに紫郎の事気になっているよ!?

…まさか…これが鯉?…違ったわ…恋の方ね?

でも私にも分からないわ……でも今は討伐の事だけを考えましょう。  
帰ってからでもゆっくり考えましょう。

〔華琳 side out〕

〔雪蓮 side〕

久しぶりの紫郎…相変わらずカッコいいわね

つい抱きついちゃったじゃない

冥琳も蓮華も紫郎に甘えちゃって可愛いんだから

でもいきなり紫郎が冷たい態度を取って来たときは心臓が止まりそ  
うになったわ。

あんなに胸が締められた感覚は母様おかさまが亡くなった時以来だわ。

なぜだか涙も出てきてしまったわ…でも紫郎はやっぱり優しくかった  
わ。

涙を拭ってくれたし優しく抱いてくれた……本当にもう紫郎から離

れられないかも。

改めて思ったわ…皆の目の前であんな事をしてしまった…恥ずかしいわ／＼

でもなんで紫郎の周りにはあんなに女の子が寄ってくるのかしら？

劉備に曹操に私…しかも部下の子達も惚れてるのかな？はあ…紫郎も大変だと思っけど…私のことも見てちょうだいね

〈雪蓮 side out〉

……あれから一時間……

「さてとこうして集まってもらったのは他でもない、書状でも説明した通りにこれから黄巾賊の討伐を手伝って欲しい」

華琳が真剣に話を始めた。

あれから皆さんを落ち着かせるのは大変だった…ええ、それはもう…



桃香達と雪蓮達は後でそれぞれの陣に行くと言ったら納得してくれた。

だが…春蘭や帰ってきた桂花が殺気を放ちながら襲い掛かってきたのだ。

桂花は素手で殴ってこようとした。

二人共頭に血が上っていたらしく、動きが大振りすぎたので気絶させようと背後に一瞬で回り手刀で終わらせようと思ったのだが…華琳が一声かけたくれたおかげでしなくてすんだ。

だが…あの表情からしてまだ納得していないみたいだな。

凧達も何が起こったのか状況が呑み込めていなかったらしい。

(凧達は兵達に指示を出して帰って来てみたら…華琳が紫郎に抱きついていたらしい)

「それで数はどのくらいなんだ？」

冥琳が的確に聞いた。

「敵は皆と皆の回りに陣を取り、およそ二十万…ですが戦える兵は五万です」

「およそとはどういう訳だ？」

そこは俺も気になったぞ、愛紗。

「潜伏させた兵が十人中一人しか帰ってきませんでして、帰って来た兵も行方を眩ましてしまい…」

報告をしている桂花も戸惑っているみたいだ。

「いったいどうなってるの?」

桃香、それはだれもが思っていることだ。

「此方の兵は曹操…一万二千、孫策…一万、劉備…八千、合わせて三万です」

「所詮元は農民相手にならない」

「そういう問題じゃないぞ、姉者…」

まったく春蘭は…

二万の差か…だが数で決まるわけではない、戦術、戦力を駆使しこれを排除しなければならぬ。

だが数は偉大だなwww

「私はこれを気に黄巾賊殲滅するわ、もう農民共が軍を作る行為を行なえない様にするには…精神面も痛めつけなくちゃ…それで殲滅するには一番いいのは…?」

うわぁ〜華琳のドSっぷりが炸裂している。

ってか俺に問うなよ!??

「ん〜そうだな……（精神的にか……）……火なんてどうだ？火計なんて？」

やはり火は偉大だろ！

「上出来よ」

「やはり紫郎も思っていたか！」

「さすがご主人様！私と同じ事を考えていましたか」

華琳は満足気な表情をしてくれた。

冥琳と朱里と同じ事を考えていたみたいだ。

「では誰か隠密に特化している人材はいないか？」

「それじゃあうちの周泰と甘寧を推薦するわ」

なるほど……あの二人はそうゆうのには向いているな。

「他にいないならその二人に任せたいと思うのだけれど……」

その二人で決定かと思いきや……

「俺も行くぞ、二人だけじゃあ心配だしさあ」

なんと紫郎が行きたいと言い出した。

「そんな危ないところに行かせられないよ!」

「そうですね、万が一ご主人様に何かあつたら…」

「ご主人様は本陣に居てくだちゃい…はわわ! 噛んでしまいました」

三人共止めてくれるのはありがたい。

「そうよ、紫郎は此処に居てちょうだい」

「お前つて奴は…」

「二人を気遣つてくれるのはありがたいが…紫郎は此処に居なさい」

雪蓮に冥琳に蓮華、心配してくれてありがとうよ。

「貴方が行きたいなら好きにすればいいわ、ただし…」

「ただし…?」

華琳が軽く了承してくれた、これは以外だった。

「絶対に戻つてきなさいよ」

……こんな言葉を掛けられちゃ…死んでも戻つてこなくちゃ…おつと間違えた! 意地でも戻つてこなくちゃ。

「みんなも納得してくれないか?」

華琳一人にだけ納得されても駄目だな。

「でも…」

桃香が戸惑っているようだな…これはあれでイクか

…念話…

(桃香、後でなんでも言う事聞くから頼むよ！)

( なんでもいいの？ )

( ドンと来い！ )

( ならいいよ )

( 二人に説明宜しく )

( 任された )

…念話終了…

「いいよ、ご主人様」

桃香はとても良い笑顔で了承してくれた。

上手くいったZE

「ちよつとっ！？桃香様？」

「いったいどうしたのですか？」

さてと桃香はどう動くか…？

「二人共耳かして」

「「??.」」

二人は桃香とコソコソ話している。

待てよ…俺はもしかしてとんでもない約束をしてしまったんじゃないか？

紫郎が気づくのは遅すぎた…

「…それなら了承しましょう／＼」

「…コクコク…／＼」

二人共陥落…桃香はいつた何を言ったんだ？

「雪蓮も冥琳も蓮華も納得してくれないか？」

さすがにこの三人は無理かな…？

「分かったわ、そのかわり条件があるわ」

条件？

「条件は後で話すわ…だから了承してあげる、冥琳も蓮華も納得してくれるわよね」

「分かった…（雪蓮があんな笑みを浮かべたら何かよからぬ事を考えているわね…）」

「……分かりました（姉様はまた何を考えているのやら）」

これは以外だ…まさか三人が了承してくれるとは…

「では決まり…今夜仕掛けるわ、周泰と甘寧と紫郎が兵糧庫、および砦に火を放ち、そこから出てきた連中を私達が叩く…異論は？」

みんながそれぞれ首を縦に振った。

「では、一時解散しましょう」

華琳が言うと皆がそれぞれ自軍の陣に戻っていった。

・ ・ ・ ・

↳劉備の陣↳

紫郎は最初に桃香の所に訪れた。

「ご主人様あ！」

おお〜雛理、ずいぶんと大胆な行動をしてきたな。

雛理は真正面から抱きついてきた。

「紫郎お兄ちゃん！」

ぐっ！鈴々…横から突っ込んでくるな…

鈴々は右脇腹に抱きついてきた。

「主いい！」

ぐえ〜星よおーお前も横から突っ込んでくるな…

星も鈴々と反対側の左脇腹から抱きついてきた。

「三人共心配させてすまなかつた」

痛みに耐えながら三人を背中に手を回して抱き寄せた。

「あわわ〜（今思ったら私ってなんて恥ずかしい事をしてしまったんだろ／＼／＼）」

「にやははは〜」

「主のおいだあ〜」

雛理は急に焦りだしていた。

鈴々は人懐っこい笑みを紫郎にむけていた。



星は……幼児退化したみたいに体を寄せてくる。

「みんな元気みたいだね」

紫郎も久し振りに会ったから自然と笑顔が出てきたらしく見惚れてしまいそんな笑みをしていた。

「ちゃんとご主人様が留守の間は仕事しました」

「もちろんなのだ」

紫郎は二人の頭を撫でた。

「うん、偉いぞ！だが体には気をつける様にな」

「はい」

二人共撫でられているのが気持ちよいらしく目を細めて猫みたいになっっている。

「……」

だが…星がなぜだか静かだ。

「星？どうしたんだ？」

紫郎は気になったらしく聞いてみた。

「やはり たりない」

星の声が小さくて聞こえない。

「やっぱり何かもの足りない!」

何を思ったか知らないが……星が俺の唇目掛けて顔を近づけてきたあ!!

「だが……当たらないんだな、これがな!」

紫郎は華麗に避けて見せた。

「なぜですか!主い!なぜさせてくれないのですか!?」

「……なら後ろを見てみなさい」

「えっ後ろです」「星ちゃん!」「星い!」「!?!」

星が後ろを向くと…修羅が二人居た。

「私達だって我慢しているんだから……」

「我慢しろおお!!」

桃香に愛紗……君ら…性格が壊れ始めたか…?

「あわわ」

「はわわ」

「にゅははは〜やっぱりこうでなくっちゃなのだ〜」

幼女三人は何だかんだで取り乱しているが…一人が和んでいるよう  
な…

「みんなの顔も見れたし次は雪蓮の陣に行くか」

紫郎はそそくさと退出していった。

・  
・  
・  
・

「主いいい〜」

星の盛大な悲鳴が聞こえたのは余談だがな。

・  
・  
・  
・

〜孫策の陣〜

紫郎は次に雪蓮の陣に向かっていった途中……

「おっ！亞莎、久し振りだね」

陣に戻ろうとしている、亞莎と遭遇した。

「し、紫郎さん！お、お久し振りで、です」

非常に動揺しているみたいだ。

眼鏡がずれているぞ。

「元気そうで何よりだ、これから戻るんだろ？一緒に行くっぜ」

「は、はい、是非とも」

落ち着けよ、亞莎。

・  
・  
・  
・

着いたのはいいんだが……何か嫌な予感がする。

「どうしたんですか？」

亞莎が首をかしげながら聞いてきた。

「いやちょっと嫌な予感がしてな……」

「大丈夫ですってww」

亞莎が可愛げのある笑みを見せてきた。

「……………大丈夫だろ……………」

「そうですねよ」

亞莎はそういうと中に入っていった。

じゃあ俺も入りますか……………」

「紫郎さん……………」

……………あれ？まだ中に入ってないのですが……………？

「きゃああー」

おいおい、まさか……………」

俺が中に入ってみると……………」

穩が亞莎を押し倒して……………口付けをしていたあ！

「……………ああ、穩、何をしているのかな？」

「へっ？……………あれ紫郎さん……………お久し振りです」

なんと一つおっとりし過ぎだろ！

「……………あれ……………じゃあ私誰に接吻を……………亞莎ちゃん……………!?」

気付くのが遅いぞお！もつと早く気付いてあげて！

「これは気絶しちゃってるわね…報告は後でいいや、紫郎、亞莎を寝かして来て」

雪蓮、なぜ俺にやらせる？

「あら〜別にいいわよ……ああ〜亞莎可哀想…放置にされて…」

ちっ……これはしょうがない。

「わかった、やりますから」

そして俺は亞莎を寢床に連れて行った。

連れて行っている途中に……穩×亞莎もありだなっと思っ  
てしまっ  
た。

・  
・  
・  
・

「さてと久し振りの人は久し振り、元気そうで何よりです」

俺は祭、穩、思春、明命に挨拶をした。

「うむ、お主も元気そうで何よりじゃ」

「紫郎さん〜チュ〜」

「紫郎、また手合わせをしてくれないか？」

「紫郎さん、紫郎さん、紫郎さんが居なくなっただけから街にお猫様の姿をあまり見なくなっただけですよ……それで気になったのですが……貴方はお猫様の神様なのですか？」

祭さんは相変わらず元気そうですね。

やめてくれよ、穏……皆の鋭い視線が当たって痛いんだが……

そうだな……久し振りに思春とも手合わせしたくなってきたよ。

そして明命……神様とは知り合いだ……お猫様の神ではないからな、そこの所を宜しく。

「最初の出来事は忘れて……シャオも会いたがっていたから呉に来てよね」

シャオも元気そうにしていそうだな。

「それでちょっと聞きたいことがあるのだけれど……」

いきなり雪蓮と冥琳の雰囲気が変わったぞ！？

「大喬と小喬も会いたがっているのだけれど……どういうことだ？」

……その事か……でも好意を持たれる事はしてないのだが……

「……柄の悪い連中に絡まれていたから助けてあげて、ついでに買い

物中だったから手伝ってあげたぐらいしか記憶にないが…？」

か弱い少女がゴツイ男達に絡まれていたら助けるだろ？普通。

「そう…（それだけで十分だわ）…」

「そうなのか…（さすがは紫郎と言つべきか…賞賛に値するよ）…」

二人は納得したのか…：静かになった。

俺何かしたのか…？

・ ・ ・ ・

それからは思春と明命に作戦の説明をして了解をもらった。

祭や穩、起きてきた亞莎にも心配をされたがどうにか納得してもらった。

だが雪蓮の条件というのが…また困ったもんなんだな、これが。

なんでも次に呉に来た時に一人一人の言う事を何でも聞く事だそう  
だ。

もちろん、シャオや大喬や小喬も入っているみたいだ。

なんか危険な事になりそうだが…：まあいいかって感じでした承。





第二十話 三国の英雄揃う……そして紫郎は死す…（精神的に）（後書き）

自分でも思ったほどに更新ペースが遅いと思ってしまいました。  
すいません。

しかもこれからちょっと用事があるので更新がもっと遅れるかもし  
れません。

真剣で私に恋しなさい！×君が主で執事が俺で×つよきすは順調に  
書いています。

第二十一話 芸術は……爆発だああ！（前書き）

更新できずにすみませんでした。

第二十一話 芸術は……爆発だああ！

あれから結構な時間が経ち夜になった…

夜になるまでは大変でしたよ……それはもう……

雪蓮の陣にいる時に桃香達が乱入して来たのだ……

いきなりの事で俺も呉の面々も驚いたが、すぐに持ち直した。

雪蓮も桃香に興味を持っていたみたいなので、その場で話し合いつて感じになっていた。

でっなんだよ！それからは自己紹介をしてから皆が自由に話している空間になってしまった。

普通話し合いつて席について真剣に話すのもじゃあないのっと思っただけけれど……友好を深めるにはいいかと思ってしまった。

だがある一部を除いては……

雪蓮や桃香は俺の話をしており、「どうやって出会ったの？」「やら」紫郎「ご主人様」をどう思う？」「っ俺の話をしていた。

愛紗はなぜだか…亞莎の事を睨んでいたのだ……亞莎が怯えちゃっているぞ！

一応二人の間に入って…どうにか会話をさせて愛紗の方は柔らかく  
なっただけだ…

……亞莎が俺の後ろに隠れながら話していたのであった……

ひょこつと顔だけは出しているんだが………「紫郎さん、関羽さ  
んが怖いんですけど」

ヤバイ!?　　すげえー亞莎が可愛く見えるのは気のせいか……?

上目遣いはやめてくれえ〜

………ほら〜愛紗が殺気を飛ばしてくるから、亞莎が怖がっている  
のんだが……

これが何回続いた事か……

最後に愛紗になぜ睨んでいるかつと聞いた所……「自分でも分かり  
ませんが……呂蒙とはなぜだか宿命を感じます……」

………それはだな…確かにそうだな。

冥琳と穩と朱里と雛理…軍師達は何だかんだで政治的な話をしてい  
る。

でも朱里や雛理が自分の胸をおさえているような気がするのだが…

……

星と祭は一緒に酒を飲み始めてしまった。

そして俺も酒を飲もうと誘われたのだが、丁重にお断りしました。

蓮華と鈴々は二人でお茶を啜りながら饅頭を食べていた。

さすが蓮華だな、鈴々の口の周りを拭いてあげたり、お茶を淹れてあげたりと姉的存在になっている。

鈴々も全快の笑みでいる……これはマジで姉妹に見えてしまうぞ。

やはり女同士だと話が何だかんだで出てくるんだな。

「あれ？そういえば……明命は……？」

「明命ならさっき出て行ったぞ」

後ろから声がしたので……振り返ると……思春がいた。

「そうか……俺もこの場の雰囲気にはついていけないから退散しようかな……思春、一緒に散歩なんてどうだ？」

さすがに無理があるよな…

「いいぞ」

……な、なんだとおーこれは意外だ。

「何を誘った本人が驚いている、私もこの雰囲気にはついていけなくてな…」

皆がそれぞれで会話しあっているからな……

「蓮華の護衛はいいのか…？」

「ならお前はあの二人の近くに居られるか？」

あれは……無理だな。

蓮華も鈴々も普通に笑い合っている。

「無理だな……なら行きますか」

・  
・  
・  
・

さてと思春と散歩を開始したのだが…あまり会話がないんだよな。

最初の時は口も聞いてくれなかったけど……手合わせを繰り返すうちに向こうからも話してくれるようになってくれたのは嬉しかったよ。

ニヤー

「お猫様！こんな所に居ては危険です……」

ん〜なんか明命の声が聞こえたが……

「あっちの方からだな」

思春も聞こえていたらしい。

……

ニヤー

「あうう〜そんな可愛い表情されたら……」

見つけたと思ったら明命が子猫を見つめながら……だらけていた。

「明命、お前こんな所にまで猫を連れてくるな」

思春が少々怒ったのか……？

「あわ〜思春さん、これはですね……」

「言い訳はいい、早くその猫を森に返せ」



これはだいぶ頭にキているな。

「まあ〜待てよ、この猫も悪気が合って此処に来た訳じゃないだろ」

ニヤー

この猫は俺の言葉が分かるのか…？

「しかしだな、これから戦なんだぞ…」

「まだ時間はあるんだ、ちょっとは息抜きもしなくちゃな〜」

俺はそういつと猫の頭を撫でた。

とても気持ちよさそうにしている。

「紫郎さん、私にも撫でさせて下さい」

「いいぞ、思春もどつだ？」

「遠慮する」

つれないな〜

ニヤー

お前もそう思つか！この子猫はすいいぞ。

明命は笑顔でうつとりしているぞ。

.....

それからは二人と一匹と世間話をしていた。

思春と蓮華の出会いや明命はなぜ呉に入ったのかつと色々と友好を深めた。

だが日も暮れてきて猫とも別れ、雪蓮の陣に戻ったのだが……

なぜだか雪蓮と桃香が凄い笑顔で真名を呼び合っていた。

なんでも同盟を組んだらしく、その同盟の証として全員と真名を交換したらしい。

まったく大胆な行動に出るものだな……

だがこれもこの二人のカリスマ性みたいなものかなと紫郎は思っていた。

もちろん、思春や明命も真名を教えたぞ。

.....

（紫郎が居ない間の雪蓮達と桃香達）

「まさか…!? 私達以外に抱かれた人が居ると　紫郎！　あら  
〜? 紫郎がいないわね…　もう〜肝心な時にいないんだからあ!」

「私達の知らない間に孫策さんや部下の人達を抱くなんて…　ご主人様の節操なしい!」

二人は紫郎と出会った事や色々と自慢話をしていたのだが…　最後の最後に二人共、「紫郎に女にされた」と言ったらしく…　それで二人共キレているらしい。

「雪蓮、その事は後にして、もうそろそろ夜になるわよ」

「桃香様も陣に戻って戦の準備をしてください!」

ここで軍師達が割り入ってきた。

「そうですね、もう日も落ちかけていますし…」

「そうだな…　しかし…　呂蒙、お前はもっと自分に自信を持って、そうすればもっとたくさんの人と話せるだろう」

「は、はい! 頑張ってみます、関羽さん」

亞莎と愛紗も話に入ってきた。

愛紗が嫌な顔せず亞莎と話している……先程とは大違い。

「孫権のお姉ちゃんともこれで話すの最後になっちゃうのか？」

「そんな事はないわよ、いつでも会えるわよ」

鈴々が俯いている…蓮華は頭を撫でてあげている。

第三者から見たら……姉妹に見えてしまう。

「ふむ、もう時間か……お前とはまたいずれこうして酒を交わしながら話したいものじゃ、趙雲」

「私もそう思っていたところだ、黄蓋」

二人は最後にそれぞれの杯に酒をいれ、杯と杯同士を軽くあわせて飲み交わした。

劉備（桃香）達が陣に戻ろうと天幕を出ようとした時…

「ちょっと待って劉備、まだ話があるんだけど…手短話すから」

孫策（雪蓮）に呼び止められた。

「はい…なんですか？」

「単刀直入に言うわ、私達と同盟を組まない？」

「へっ？…あ、はい、良いと思います」

桃香は一時考えたように見えたが…すぐに了解してしまった。

「ちよつと！？桃香様！？私達に相談もせずに決めないでください！」

「雪蓮もだぞ！そんな話私は聞いていないぞ」

朱里に冥琳が自分の主君に問いただしに詰め寄っていった。

「あゝ朱里ちゃん？怖いんだけど…怖いじゃありませんよ！こつちゆうことは真剣に考えなくちゃいけないですよ！なにが…あ、良いと思いますじゃありません！」　「ごめんなさいいい！」

「冥琳、私はちゃんと考えがあるのよ…」雪蓮の考えでマシだったのは両手で数えられる程度だったような気がするが…？　「ごめん、私が悪かったからそんな睨まないでよおお！」

その場で二人は正座をさせられ…説教が始まった。

二人の主君は…軍師には頭があがらないようです。

他の人たちは自分達の主君の情けなさに頭を痛めていた。

一部は笑っているみたいだが…

……朱里、冥琳の説教が然ること十分……

「で、いきなり同盟をしようと思った理由は…？」

「待ってました！（ギロツ） すいませんでした…」

雪蓮はやっと解放されたっという思いで声を出してしまい、冥琳に思いつきり睨まれてしまった。

「劉備と話していてね、自分達の主君は紫郎だっ言うから今のうちに同盟をしときたくて、それに…私紫郎とは戦いたくないし…」

呉の面々は驚いている…何故かという…雪蓮は戦いが好きなのだ、それだからよく「前線に出ていい？」と言っているものなのに…

「策殿…それは本気で言っておるのか？」

祭が雪蓮に聞いてみた。

「当たり前じゃない、私は確かに強い人は好きよ…けど…好きな人を斬れるわけじゃないじゃない」

『…っ！！？』

今度は桃香達も驚いている…なんせ…雪蓮の表情はまさに女の一面を全快にしているのだ。

「うん、やっぱり同盟しようよ、朱里ちゃん！」

「え、桃香様…？」

唐突に桃香が満足したという顔で言っただけだ。

「ご主人様をこんなに思ってくれる人に悪い人とかはいないと思うよ、その代わり孫策さん……」

桃香は真っ直ぐに雪蓮を見て……

「ご主人様の正妻は私ということをお忘れしないで下さいね」

桃香は言っただけだということ満足の顔をしていた。

『はっ！！？』

「正妻ってなんなのさ？」

皆さん…この場に居る全員が反応して……例外も一人居た。

「桃香あー！貴様あ！私に許可なく正妻と言ったな！正妻は私なのだぞ」

「星！お前も何を言っているんだ！正妻はわたし、愛紗ちゃん、ここはお姉ちゃんを譲りなさい」卑怯ですぞ！ここで長姉を出すとは…！？」

「愛紗も星も何をそんなに騒いでるのだ？」

星と愛紗は自分こそと言っているが…そこに桃香も加わり言い合いになっているに다가…鈴々は分かっているようにだ。

「はわわ〜これは大変な事になっちゃいました」

「でも朱里ちゃん、なんでそんなに真剣に考え事しているの〜？」

朱里と雛理はあえて離れた所で傍観。

「雛理ちゃん、雛理ちゃんだってご主人様の事好きでしょ？」

「へっ？……………（ボンツ）／／／…いきなり何言い出ちゅの…あわわ〜噛んじゃった／／／」

雛理はいきなりの朱里の質問に意味分からないという表情をしたが、すぐに理解し、湯気が出るほど顔が真っ赤になってしまった。

「それは……………確かに好きなのもしいけど……………まだ分かんないよ……………」

雛理は自分の気持ちを正直に話してみせた。

「そうなんだ……………でも私達って……………ご主人様から見……………妹って感じで見られているような気がするの気のせい？」

「あっ！それ、私も思った……………朱里ちゃん……………まずは一人の女と思われるように頑張ろう！」



「だね！雛理ちゃん！」

二人は握手をし新たな決意をした。

これで紫郎の苦難もまた増える事だ……

「……あ、はは、あははは」

桃香達がい合いになっていいる中…突如雪蓮が笑い始めた。

「面白いわね、劉備……でもね……」

「でも……？（何か嫌な予感が）……」

桃香はなぜだか嫌な予感がした。

そう……それは乙女の直感が悟っていた。

「紫郎は私が貰うわ……そして正妻は私のものになるのよ」

『はっ！！！？』

「だから正妻ってなんなのだ？」

本日二度目の驚き発言に皆が……いや約一名は分かっていたいなかった。

「雪蓮様〜穏は愛人でいいですよ〜」

穩はそれに便乗するかのよりに乗ってきた。

「策殿、私もそれをお願いする」

祭もそれに便乗。

もうこいつらは戦いの前という事を忘れているようだ。

「私が正妻になるんです！」

「いやあ、私になるんだ！」

桃香と雪蓮は子供の言い合いみたいになっている。

星や愛紗は穩と祭と言いあっている。

軍師達というと……なぜか全員揃って溜め息をついている。

まさにカオス……

そして時間が経って……紫郎が戻ってくる前には……なぜだが仲良くなっていた。

真名も交換し合いニコニコしている、桃香と雪蓮。

他の面々も真名交換をしており……握手をしている人達もいた。

一体何があったのかというのは……またいずれ話そう。

(魏の人たちとはまだ桃香達と雪蓮達は真名を交わしていません)

・  
・  
・  
・

……………本陣……………

空も真つ暗になり夜……

「紫郎達は上手く潜入できたようね」

華琳は満足そうに隣に居る人に言った。

「それはご主人様ですから」

桃香も信頼しているからこそ笑みで返答した。

「紫郎なら余裕でしょ、何たって私のおと」雪蓮……今は……」「わかってるわよ、冗談よ、冗談」

雪蓮も紫郎のなら大丈夫だろうという事を思っているのか言っていた。

でも一言多いを言おうと思ったのだが……冥琳に突っ込まれた。

「各部隊の配置は完璧です、敵が来た所を何時でも叩けます」

桂花の報告している、これで準備は整った。

「後はいつ火がまわるか……」

「大丈夫よ、何たって私の自慢の部下と紫郎だから」

「そうだよ、曹操さん、何たってご主人様だもの」

華琳が心配している中……雪蓮と桃香は超慢心していた。

「それもそうね」

華琳も何だかんだで二人の雰囲気に乗ってしまった。

「『『H A H A H A』』」

華琳も桃香と雪蓮の雰囲気吞まれてしまった。

まさか華琳がこんな反応をするとは……

キャラが崩壊し始めている……

「か、華琳様……？」

桂花が華琳の行動に驚きを隠せないようだ。

それはそうだ……なんたって何時もはクールな華琳が……ああではな……

「……あの〜冥琳さん……」

「言うな、私も頭を痛ませているのだ……」

朱里と冥琳は自分の主に対して……とても頭を悩ませていた。

もうすぐ戦いが始まるというのに……何をのほほんとしているのかと……

・  
・  
・  
・

さてと……侵入は成功した。

今は順調に進んでいる……今は兵糧庫に潜入して油を撒いて火をつけて脱出しようとしている所だ。

疑問に思った所もあると思うが、顔を黄色い布で隠し、体が隠れるぐらいの布を羽織って砦の城壁から侵入しようと思ったのだが……「黄巾党は馬鹿なのか……？」と思ったほど砦の周りに陣取っている連中は酒を飲みながら馬鹿騒ぎをしていた。

砦の門も全開で門兵も酒を飲んでおり、なんなく進入できた。

なぜだか砦の兵は一箇所に固まって何かの歌を聴いていた……まるでライブをしているみたいだった。

それはさておき目標である兵糧庫を見つけたのだが見張りが二人居たのだが……酒を飲んでおり酔っ払っていた。

そこを俺と思春が素早く後ろに回り口を押さえて、喉を斬った。

血を浴びる瞬間に部屋の端に投げたので俺達は血を浴びずにすんだ。

「紫郎、これで完了だ、後は誰にも見つからずに脱出するぞ」

思春の合図で俺らは兵糧庫を出る瞬間に部屋の前にあつた松明を投たいまつげて燃やした。

まだ火は弱いが…これからだんだん強くなるぞ…

俺達はなるべく急いだ。

そしてを門を出ようとした時だった。

ニヤー

「あっ！紫郎さん、あの人ごみの中にお猫様があります」

明命が猫の声が聞こえたらしくそつちを向いてしまった、俺も向いた。

「……あの猫…さっき俺らと遊んでいた猫だな」

なぜだか一目見ただけで分かってしまった。

「貴様等、今は任務中だぞ」

「分かっているよ」

思春がとてつもなく怒ってしまったぞ。

ニヤー

「なんだコイツ…?」

「へっ！邪魔だ！」

黄巾党の連中が猫に気付いたらしく、猫をゴミみたいに蹴りやがった。

「！？ 貴様等あ！許さないぞお！」

明命が服を隠していた布を取り、剣を抜いて斬りかかってしまった。

「ぐはあ」

「ぎゃあー」

明命は自分の速さを生かして、一瞬にして二人を殺した。

だが…

「貴様等敵だな、おい、ここに敵が居るぞ」

やっぱり敵陣のど真ん中ですから見つかってしまった。

「すみませんでした、私が…私が早まった行動を取ってしまったから…」

明命は猫を抱えながら思春と俺に謝ってきた。

「気にするな、明命が動かなかつたら俺が動いていたからさあ」

「ありがとうございます…」

あれはさすがに頭にキテしまったよ。

「もういいぞ、気にするな…それよりもだ…」

「ああ、この敵をどうするかだな…」

今俺達の状況はまさに敵陣に孤立しており、何百という兵に囲まれており、外の兵もどんどん中に入ってきており、その数はかなりのものだ。

俺一人ならまだしも……思春に猫を抱えた明命がいる。



「おい、兵糧庫の方から火が出てるぞ」

一人の兵がようやく気付いたようだ。

これは好機だな。

「二人共失礼するぞ」

「「えっ！」」

俺は二人を抱えて飛んだ……まあ城壁の上にだがな。

「なあ！……アイツ等を逃がすな、「それより火を消すぞ」「うるさ  
いぞ、俺の指示に従え！」

黄巾賊は混乱し始めていた……だが混乱するのはこれからだ。

・  
・  
・  
・

「おい紫郎、これからどうする気だ？」

一時的に城壁に飛んで包囲網を突破したが……

「砦から降りても敵が居ますし…」

明命もどうしたらいいか、分からないようだ。

「明命、猫を見せてくれないか？」

「はい 「キュア」 えっ？あ、お猫様の怪我が治ってます！」

「やゃ」

俺はテイ ズシリーズの技である『キュア』を使い治してあげた。

「これで大丈夫だろう、でも安静にさせといてね」

「はい、分かりました」

これでひとまず大丈夫だね。

「それより手が空いたなら手伝え！」

俺等が治療している間に敵が来たみたいだ。

「これではギリ貧だな」

思春がまた一人と敵を斬っているが…敵がわんさか現れる。

「お前等は二人は絶対に死なせないからな」

「ふん、その言葉信じさせてもらっぞ／＼／」

「……／＼／」

いきなり前に出てきた紫郎がこうゆうセリフを言った。

二人共恥ずかしいみたいですな。

「では」

「「っ!？」」

思春と明命は急な浮遊感に驚き……

「火の勢いが弱いから俺がもつとつけてくるから……二人は本陣に居る三人に出陣の合図を頼む」

紫郎は何故だか物を投げ体勢にはいつていた……

「おい、紫郎……お前……まさか!？」

思春の顔が青ざめた。

「……?」

明命は何がなんだかって感じですよ。

「頼んだぞ……逝くぞ、狙い投げるぜええ!!」

紫郎はまさか……二人を味方の陣の方に投げたのだった!!

これは前代未聞だああ!

「きゃあ~~~~」紫郎おゝ覚えているよー」……」

なぜだか…明命と思春の声がはつきり聞こえた。

(しまった！？本陣の場所分かるから転移させてればよかった……)

なんと！？ここにきて楽な方法があった事を思い出したあ！

(まあ〜いいか！)

なんて奴だあ！凄い適当な奴だ。

「さてとここからが本番だね……」

紫郎はそうゆうと皆のど真ん中まで飛び……

「 芸術は……」

凄い間を空けて……

「 B A K U H A T U D A 」

その言葉を言った直後に『パチン』という音と共に皆のあちからこち  
らから爆発が起こったのであった。

・ ・ ・

……本陣……

「もつそろそろで時間ね……」

華琳は立ち上がるうとしたら……

「そうね……」「きゃ〜」  
今何か聞こえなかった？」

雪蓮もそれに続いて立とうとしたら……

どこか分からないが女の人の悲鳴が聞こえた。

「あれ…？だんだん近づいてくるような気がします…？」

桃香も聞こえてくる声がどんどんはつきり聞こえてくるのを感じて  
いた。

「いったいどこから……！？…まさか！！？」

冥琳は天幕の上を見た。

「冥琳どうし」「ドスン！」  
えっ！上から！？」

雪蓮が上を向いている冥琳が不思議に思い、声を掛けようかと思っ

たら天幕の上に何かが落ちてきた。

「とにかく外に出てみよう」

桃香が一番最初に外に出た。

それに続いて本陣にいる者達が全員つづいて出た。

『えっ!?!』

全員が同じ反応をした。

「ちょっと!?!なんで思春と明命は此処にいるのよ? てか空から降ってきたの...?」

いち早く雪蓮が反応した。

「雪蓮様、これには深い訳がありまして!」

「よかったあ お猫様は無事です」

思春は珍しく動揺しており、明命は大事に抱えていた猫の心配をしていた。

「それよりも早く!」

二人は声をそろえて何かを言おうと……

『それよりも...?』

全員がまたもや同じ反応をした。

「紫郎「紫郎さん」が砦に残って戦っています!」「いるんです!」

……」

『なんだって〜!』

またもや……だがこれは一大事だ。

「全部隊に直ちに出陣させなさい、指揮は私達が執る」

「はっ!」

華琳は神速の速さで兵に指示を下さず。

「冥琳、私達の部隊にも出陣を、私も出るわ!」

雪蓮もすかさず指示をとばす……そして自分の武器である、なんかいほ南海霸王おうを持ち行くこととするが……

「雪蓮は此処にいなさい……」

冥琳に捕まった。

「えっ〜」「えっ〜じゃないわ!此処にいなさい!」  
鬼いい……

……」

「鬼で結構！　穩、蓮華様達の部隊に伝令を「はっ！お任せ下さいね！」……あれはいつものんびりしている穩なのか？」

雪蓮の言葉を受け流し、穩に伝令を頼んだのだが……何時もの穩ではなかった。

ものすごいスピードで走って行ったのだ。

「朱里ちゃん、私達も出陣するよ」

桃香もやる気満々であった。

「もう出陣の伝令は出しましたから、桃香様は此処で見守っていて下さい」

朱里は冷静に物事をみていた為にいち早く伝令を出していたのだ。

「でも……」

「私達にはあまり戦える力はありませんので、悔しいですけど……ここで祈る事しかできません……」

桃香も朱里も悔しそうに手を強く握っていた。

「あっ！そうだ、朱里ちゃん、念話してみよう！」



「あっ！その手がありました」

二人共、便利な会話方法をすっかり忘れていたらしい、

〈念話〉

（ご主人様！）

（……………）

（ご主人様、応えて下さいよ）

（そうだよ、私達を泣かせる気…！）

（……………）

桃香も朱里も応答がない事で泣きそうになっている。

（ご主人様！）

（おっと、ごめんな、今念話を切っていたから聞こえなかったわ）

（ご主人様！ご無事なんですか？）

（当たり前だろ……それより早く来てくれないか、昔の中はどうにかなるが、外の敵が邪魔だよ）

（今全部隊を出陣させましたから、すぐに着きます）

二人共、生存を確認できたのかほっとしている……

（そうか、なら俺はまだやる事があるから切るぞ）

（ご主人様、生きて帰ってきてよ）

（絶対ですよ！）

（任せな！この俺を誰だと思ってやがる！）

（念話終了）

「皆さん、ご主人様は無事ですよ」

桃香は嬉しさのあまり皆に報告した。

「なんで分かるのよ……？」

華琳が不思議に思った。

それもそうだろう、今この場にいない人の無事がなぜ分かるのか？

「あ、それはですね……」

……桃香、朱里説明中……

「へえーそんな便利なものがあつたのね…（私…紫郎と何もしてないわね…）」

華琳は無事を知って安心したのだが…

念話の方法である、接吻や交わるをしていないと思ひ落ち込んでいた。

「へえー私そんなの聞いていないんだけどな」（紫郎…後でO H

A N A S I ね）…」

雪蓮も無事と聞いて嬉しそうにしたが…

念話というものがある事を聞いて…なんで自分に教えてくれないのかという怒りが巡って暴れそうになっていた。

あの馬鹿がいきなり私を投げて、自分は残って何を考えているんだ。  
もしこれで死んでみる！

私はお前の死体を八つ裂きにしてやる。

お前が死んでみる、お前に好意を持っていた呉の面々が泣くだろうが！

それにお前を死なせたとなると最後に近くに居た、私が悔やんでも悔やみきれないだろ。

そしたら私は自害するぞ。

なぜなら、『私を守る』と言って死んだのだぞ！

死んで、あの世で後悔させてやる。

〈思春side out〉

〈明命side〉

紫郎さん、本当に大丈夫なんでしょうか…？

お猫様もそう思いませんか？

ニヤニヤー

……何を言っているか分かりませんが大丈夫と言っているような気がします。

でもお猫様はお怪我は大丈夫なのですか…？

ニヤニヤ

ああ〜可愛いですね、大丈夫と言っているような気がします。

ニヤニヤヤニヤー

えっ！いきなり爪をたてて怒らないでください。

え、早く助けに行け…？　そうでした…では、私は紫郎さんの救援に行つて来ます。

お猫様は安静にしてください。

紫郎さんは私が絶対に救つてみせます！

（明命side out）

• •

・  
・  
(前線部隊の人達は紫郎の安否を知らない)

砦が燃えており指揮系統が混乱している黄巾賊は曹操、孫策、劉備の連合軍の部隊に殲滅させられていた。

一方的な展開になっていた。

敵はこちらの部隊に気付くと一目散に逃げる奴もいるがこちらに斬りかかってくるものもいるのだがそんな奴など訓練されたこちらの兵に勝てるわけがなく死んでいった。

将の人達も的確に指示をしておりこちらの被害は無いに等しい。

だが……連合軍の兵が気になっている事があったのだ。

ドオオン!!

それはさっきから砦の中から物凄い音とともに物凄い炎があがっているのだ。

砦の中から出てきた賊共は体のあっちこっちに火がついており焼死のものもかなりいる。砦の中は火の海である。

「まだご主人様はあの中に在られるに違いない！」

「待て、愛紗！お前もあの中に入ったらその丸焦げの死体になるんじゃないぞ！」

愛紗が自分の主である紫郎がまだ帰ってきていないので、愛紗が乗り込もうとしてる所を祭が必死に止めている。

「離してくれ、祭……私は……私は……また大事な人を失いたくない！」

愛紗が膝をついて自分の拳を血が出るぐらい握りしていた。

「趙雲！お前も自分に水をかけて行こうとするな！」

「離せ、夏侯淵！私が助けなきゃ誰が助けるといふのだあ！」

こっちも趙雲が頭から水を被り、砦に入ろうとしていたのを夏侯淵（秋蘭）が止めているのだ。

「私が心に決めた主なんだ！私の命がどうなるうとかまわらないだから……だから主を救わせてくれえ！」

星の声は燃えている砦の周りにいる全員に聞こえていた。

本当は皆が動きたかった……けどこの炎ではもう……どうにもならないと思っていた。

……それは突然だった。

「皆、ご苦労さん さて早く此処から離れようか、皆も熱いだろ？」  
いきなり空から金髪の髪、そして炎にも負けない真紅の瞳……紫郎  
が降って来たのだ。

……三人の女の子を連れて……

・ ・ ・ ・

どうも、紫郎です。

いや、炎の中は暑かったですよ。

でも体に気を冷気に変換させて、体に纏わせていたので涼しかったですけど

話を戻しますが。

俺が思春と明命を投げてから何をしたのか不思議に思つかもしれませんが……

あれはですね…… 『の錬 術師』の某大佐の能力を使わせても



らいました。

フィンガースナップを利かせながら炎を起こしました。

手袋はしてません。

砦の外が騒がしくなり華琳や雪蓮や桃香の部隊が来たと思い、もつと火をつけて敵を動揺させようと思い、盛大に点火してあげました。

だけど…どこからか…女の人の悲鳴が聞こえて駆けつけて見ると…

十人ぐらいの人数で男共が三人の女の子を襲おうとしていたのだ。

俺は考えるより先に三人娘の前に出ていた。

三人は体を震わせて涙を流していた…

男共は剣を持ち、襲い掛かってきた…動いた瞬間…前に居た五人の首が落ちたのだ。

紫郎は三人娘の前に立つ前に神速の速さで五人の首を斬っていたのだ。

仲間の首がいきなり落ちて、後の五人は何処かえと逃げて行った。

まだ泣いている三人娘を落ち着かせる為に頭を撫でながらできるだけ優しく話しかけた。

それから程なくしてこの三人共も落ち着きを取り戻して、なんで此処に居るのかと聞こうとしたのだが…

火が此処までまわってきてしまったのだ。

さすがにもう脱出した方が良いと思い、三人に提案した。

そして女の子が此処から脱出するのはきついと思い、「俺が三人共  
負ぶって行こう」って言うと三人共なんだか顔を真っ赤にして話し  
合いだした。

もう時間がないからピンク髪のロングヘアの子を横抱きにして二人  
は背中に乗ってもらおう事にして、急いで脱出しようとした。

ピンク髪の子はいきなりの事に顔が真っ赤になっていたけど、そんな  
事は今は関係ない。

背中に乗った二人も「天和姉さん、ずるい」と言っているがそんな  
事は知らん。

俺は気を使い跳躍をした。

岩をはるかに超えている高さで三人共叫んでいるがそんな声は聞こ  
えない。

（背中に負ぶっているって事は耳の近くで叫ばれているのではない  
か？）

高く飛んでいるなら重力により下に落ちる。

下に落ちているときも三人共叫んでいるのに聞こえていないみたい  
だ。

そして着地はなぜだか……静かに降り立った。

「「ご主人様〜！」」

「「「紫郎！」」」

「「「紫郎さん！」」」

それぞれ将や軍師の人が啞然としていた。

**第二十一話 芸術は……爆発だぁ！（後書き）**

大変長らく更新できずに申し訳ありませんでした。

もしかしたら明日からはもっと更新できなくなってしまっつかもしれませんがお許しを……

誤字や矛盾点がありましたら是非とも注意してください。

感想は随時お待ちしております。

第二十二話 戦後……各陣での出来事……（前書き）

今回の短いです。

## 第二十二話 戦後……各陣での出来事……

まずはあれからどうなったか説明しよう。

着地した所に丁度よく前線メンバーが居たので良かったものの……もしこれが敵のだ真ん中だったら……考えないようにしよう……うん。

三人娘達が静かだと思っただら気絶していた。

まあ何も言わずあんな高さまで飛んで…急降下したからな。

それからは愛紗と星がいきなり抱きついてきて体中を触ってきたのだ。

まあどこも怪我もしてないし、少し服が焼けてしまったかな。

そんな事を思っていたが……それよりも二人共尻尻に涙を溜めて、愛紗は手から血を出していたし、星は体中が濡れているから何事かと思いきや……

二人共今にも泣きそうで、何を喋っているのか上手く聞き取れなかったけど……本当に心配してくれたのが伝わってきた。

他の将の皆も集まってきた俺の安否を確認してホッとしているみたいだ、

まったく皆心配すぎだよ」「このぐらいじゃ俺は死なないよ」「つと  
言ってみたところ……」

「……いやいや可笑しいだろ!?!」「……」つとツツコまれた。

普通の奴ならあの火の中じゃ、酸素欠乏……(略して酸欠)で死んで  
いたかな。

戦いはどうなったかと聞いた所……戦いになっていなかったらしい。

それから皆とは状況確認をして部隊被害報告を聞いたところ……負  
傷者はいるが死人はいないみたいだ。

・ ・ ・ ・

く本陣く

本陣に着くと皆が俺に駆け寄ってきた。

三人娘の子達は気絶しているので寝かしてきた。

桃香達



「まったくご主人様、心配させないでよね」

「そうです、私達がどれだけ心配したか！」

桃香も朱里も念話で俺の安否知っていたのに……

「ごめんな、今度からは気をつけますよ」

紫郎はそういうと二人の頭に手を乗せながら苦笑いしていた。

「もう！……（ご主人様は自分がどれだけ心配されているか分かっているのかな……）」

桃香は頬を膨らまして怒っているぞという表情をしている。

「……（もつと触って下さい！……って私はこんな時に何を思っているのですよ〜！）」

朱里は頬を赤く染めながら照れていた……

雪蓮達

「私は紫郎を信じていたから！」

雪蓮は自信満々に胸を張りながら言っただけ。

「何を言っと思ったら……雪蓮 貴方一番暴走していたわよ」

冥琳は眼鏡を掛け直しながら言った。

「冥琳！余計な事は言わなくていいの！」

雪蓮は冥琳に掴み掛かろうとしたが避けられた。

避けた勢いで俺の目の前まで来て……

「私は心配したんだぞ、紫郎」

寄り添うように紫郎を隣に来た。

「そうか、それは嬉しいね」

紫郎は隣に来た冥琳の肩に手を回して自分に引き寄せた。

「…紫郎」

「…冥琳」

二人は顔をどんどん近付けていく……そして……

「ちよつと待ったあ！なんでそんな雰囲気になっているのよ！」

雪蓮は俺と冥琳の間に入って二人を離させた。

「ちっ！（後少しだったのに…）」

「ええ〜ちよつと冥琳舌打ちしたでしょ！」

二人は何時ものように喧嘩していた。

ってかじゃれあいだな。

「紫郎さん、お猫様を助けていただいてありがとうございますとございました」

明命、無事のように何よりだ。

それに明命に抱かれながら寝ているのか、猫も無事だ。

「当然のことをしたまでだよ、それよりいきなり投げ飛ばしたりしてごめんね……」

「いえ、怪我もしたりしてませんし……でも思春さんがカンカンに怒ってましたけど……」

げっ！それは何かとヤバそうだ……

黄巾賊の方がマシの様な気がするような……

その後明命と猫の話をして……そろそろ華琳の所に行こうと思っ  
て行こうとしたら……バツタリ思春に会ってしまった。

……まずい……なんか言わなくてわ……

「怪我はなかったか？」

「ッ！？」

思春はなぜだか驚いた表情をしていた。

「全く貴様という奴は……」

思春は苦笑していた。

「おい、どうしたんだ？」

俺はいきなり苦笑し始めた思春を心配した。

まさか予想外の行動をしてくるとは……

「フン、貴様を見つけたら斬りかかるつもりでいたのだが……きみょう興きょうが醒めた……」

アハハ、斬りかかるつもりだったのかよ。

「まあその事はもういい」

思春はすぐにクールな表情に戻った。

そしてこちらに近づいてくる。

「れい礼だ」

「えっ　ん　」

思春は俺の首に手を回して……接吻をしてきた。

……まさかこうなるとは……

「私にはこのくらいのお礼しかできないが……許せ」

そう言うと去って行った。

数秒の軽いキスだったが……

なぜだか……すごい長く感じた……

「まさか……あの思春さんがあんな大胆な行動をするなんて……私もした方がいいのかなあ／＼／＼」

まだこの場に居た明命が一人そんな事を言っていたのは……余談だ。

### 曹操達

華琳は何時ものように対応している。

「そう、黄巾賊は壊滅ね」

「ああ、主力は叩いた……けど首謀者の張角、張宝、張梁の行方は分からないままだ」

実をいうと……原作の記憶がもう思い出せなくなってしまっているんだ……

多分これは俺がこの世界を変えてしまったからだろう。

もう原作道理には進まないって事か……

「それはいいわ、あの炎の中では逃げられないでしょう……それより何か悩み事があるんかしら？」

「え……どうしてそう思うんだ……？」

まさか顔に出ていたのか……

「これでも洞察眼には自信があるのよ」

まったく……華琳は本当に敵に回したくないよ。恐れ入ったよ。

「そうだったな……別に小さい事だから大丈夫だよ」

紫郎は笑みを浮かべて何でもなかったようにしていた。

「そう……（本当……何でも自分で抱え込むんじゃないわよ……）」

華琳は何時もの紫郎の笑みではないと気付いており内心心配していた。

・ ・ ・

今は皆戦の疲れから陣の周りは静かだ。

寝ているものも居れば、静かに酒を飲んでいる。

そして俺は近くの森の中にある湖の近くで座りながら一人酒を飲んで  
いた。

「もうお酒も慣れたものだ」

（ 実をいうとまだ未成年です！ ）

「……隠れている人は出てきたらいいよ……多分華琳と凧だと思っ  
けど……」

この気配的はあの二人のものだと思っが……

「すごいわね！よく分かったわね」

「さすがは隊長です！」

やはりこの二人だった！

「お二人さんはなんで此処に……？」

もう結構深夜なのになぜにいるんだ？

「眠れなくて風に当たりたいと思って散歩をしていたのよ」

「私は華琳様が一人で歩いて森に入って行ったので護衛をしなければと思ひまして……」

「なるほどな……ならちよつと此処で話さないか？」

一人でのんびりしているのもいいけど……やっぱり誰かと話したい方がいい。

「そうね、じゃあちよつとだけお酒を頂こうかしら」

華琳はそういふと俺の杯でお酒を飲み始めた。

「久し振りに飲んだから美味しいわね、それとも紫郎の杯だからかしら？」

少し頬を赤く染めてにやけていた。

「おいおい……そんな訳ないだろうが……まったく人の勝手に飲むなよ」

まあもう無くなりそうだったからいいけど……

「あの……隊長……御願ひがあります……」

凧が真剣な表情で俺を見ている。

「なんだい？凧の願ひなら出来る限りは聞くよ」

凧が願ひをしてくる事態珍しいな。



「私に是非とも修行をつけて貰いたいのです」

「はいよ」

「……紫郎、了承するの早くない…?」

華琳の指摘は分かる気はする。

「ここは少し悩むところじゃないかって事だろ。」

「凧とは一回手合わせしたいと思っていたいし、俺も拳で語り合っのもいいかと思っただろ」

「いいのですか?」

凧が申し訳無さそうに尋ねてくる。

「いいよ、城に帰ってからでいいよね……?」

さすがにここでやり始めたら他の連中が参戦してくるかもしれないし…

「はい！ありがとうございます！」

凄じ嬉しそうにしているよ。

具体的に言つと凄じ頭を下げて来ている。

「よかったわね、凧」

「はい！」

元気があるな… 凧は……

てかそんな嬉しいのか？

良い事を思いついたぞ！

「華琳、一つ提案があるのだが…」

「何…？」

よし食いついたな。

「俺が凧に修行をつけて凧を強くする……ここから本題なのだが」

「早く言いなさい」

「……？」

華琳も凧も何を言いたいのかわかっていないみたいだ。

「 凧を春蘭以上に強くする」

「 「ッ!？」」

二人共凄く驚いているようす……

こんな顔をする華琳はめずらしいぞ。

「無理ですよ、隊長！」

いきなり諦めるのかよ……

「凧……やってみなければ分からないぞ、まあ俺が絶対に強くしてやるよ」

俺は真剣に凧の目を見る……

「……分かりました、私やってみます！（あんなに真っ直ぐに見られたら出来る気がする！……それに隊長カツコイイです！）」

凧は紫郎から急に出てきた覇気に驚いたが……それよりも紫郎が真剣に見てきて「自分ではできる」という感情が出てきたらしい。

他にも色々と思った事はあるのだが……

「それは面白いわね……ならこうゆう条件も付けるのはどうかしら？」

華琳はクスクス笑いながら言った。

「敗者は勝者の命令を一つなんでも聞く事……どうかしら……？」

華琳は小悪魔的な笑みで言ったのけた。

「……その話乗ったぜ！覚悟しろよ、華琳！」

「それは貴方が言う事かしら…紫郎」

二人は笑みを出しながら向かい合い……

「隊長！そんな約束して良いのですか？」

その間に風が乱入したのであった。

「いいのいいの！負けないから！」

「ずいぶんと余裕じゃない、紫郎」

またまた二人は向かい合って……

「まあいいや、さてと隠れている三人は出てきてくれ！」

紫郎が視線を森に向けた。

すると……

「アハハ、見つかったちゃってたか……」

「なんか物凄い真剣な話をしていた気がする！」

「姉さん達……今私たちの状況分かっているの？」

俺が救った三人娘が居た。

くその頃く

「ちよつと何で紫郎が居ないのよ!」

雪蓮達が桃香達の陣に来ていた。

「私達だつてご主人様が何処にいるか分からないんですよ!」

雪蓮も桃香も目当ての人がいないからちよつと怒っている。

「一体何処に行ったのやら…」

冥琳が頭を抑えて言った。

「失礼するぞ、劉備、華琳様を見なかつたか？」

と又もや春蘭と秋蘭が入ってきた。

「曹操さんですか…？見ていませんけど…雪蓮さんは…？」

「いや私も見ていないけど……」

二人共知らないみたいだが……

「ま、まさかつ！」

二人共何を思ったのか…顔を見合わせて同じ事を思ったらしい。

「曹操「さん」が紫郎「ご主人様」とどこか行ったのかも！」

「……ええ〜！？」「……」

二人共ピツタリ声が揃っていた。

皆も同じ声をあげるしかできなかつた。

「そんな馬鹿な！華琳様が…華琳様が……」

春蘭が膝を地面につき、この世の終わりみたいな表情をしていた。

……燃え尽きたように真っ白になっていた。

「華琳様……流石です！」

秋蘭は自分の主の行動の早さに感服していた。

てか何の行動だよ！

「曹操……これで貴方は私の敵になった……くふふ」

雪蓮は不気味に笑っている……

それはもう……おぞましい。

「相変わらず紫郎はモテるな……はあ」

冥琳も自分の惚れた相手に溜め息しか出なかった。

「ご主人様は私のものなんだから!!」

桃香も怒りが頂点に足しておりお怒りのご様子……

「まあまあ落ち着いてください、桃香様……（ご主人様は帰ってきたらお仕置きですね）……」

愛紗は桃香を落ち着かせようとしている。

だが……内面では黒い何か<sup>めい</sup>が蠢<sup>うご</sup>いていた。

「全く主は……私達では飽き足らず……まあ私が正妻ですけど!」

星は自分の主に困り果てたものの……余裕の表情をしていた。

「ご主人様は……はあ」

こちらの軍師も自分の主に困っている模様……

「朱里ちゃん！私達も頑張ろう！」

もう一人の軍師さんはなぜだか気合が入っていた。

「ZZZ…」

鈴々は先程までご飯を食べていたので満腹になったのか…寝ている。

・ ・ ・ ・

（雪蓮の陣（雪蓮、冥琳は不在））

「雪蓮様たちが行った途端に桃香さん達の陣が五月蠅くなりましたね」

穩が桃香達の陣の方を見ている。

「何かあったんでしょうか？」

明命も気になる様子……

「すぐに戻ってくるわよ…」（私も行きたかった）



蓮華は凄い気になる様子…

「……」

思春はあまり気になっていない様子で

「／／／」

やっぱり気になっている。

何かを思い出したらしく顔を真っ赤にしていた。

・ ・ ・ ・

（華琳の陣（華琳、凧は不在））

「全く戦いの後だというのに何を騒いでいるのか……それよりも春蘭や秋蘭は帰ってくるのが遅いわね……ああ、華琳様！早く帰ってきてください」

桂花は自分の主が何処にいるのか心配でしょうがないらしい。

「それにしても皆さんは疲れが溜まっていないのですかね……？」

稟は劉備の陣を見ながら言った。

確かに…戦いの後だということにかなり盛り上がっているみたいだ。

「稟ちゃん、楽しい事なら人間疲れなんて感じないんですよ」

風は椅子に座りながら報告書を書いている。

「ほんまにナニをあないに騒いでいるだ…?」

真桜も凄い気になっている模様…

「そうなの…なんであんなに五月蠅いんだろうね」

沙和も超気になっている模様……

「それより沙和、風はどないしたんや〜?」

「さあ〜そこらへんうつろついでるんじゃないのかな〜?」

真桜も沙和も風の居場所が分からない模様……

………実は華琳と風が一緒にいるのはこの場の誰も知らないのだった。

第二十二話 戦後……各陣での出来事……（後書き）

夏休みもあっという間でした……

そして皆さんに一言……

あまり更新できずスイマセンでした!!

これから学校も始まるので、もっと更新が遅くなるかもしれません。  
本当にスイマセン。

小説の話に戻りますが……

今回は話があまり書けなくてこれでいいのかと思っしまいました。

〜次回〜

第二十三話 三姉妹の正体

分かる人は分かっってしまうかもしれません。

## 第二十三話 三姉妹の正体

### 第二十三話 三姉妹の正体

「で、君達は一体何者なんだ…？」

三人は今俺達の目の前に座って貰っている。

話し合うときに立っていたりしたら、話じづらいからね。

まあ、先程の決闘の件は城に入ってから詳細を決めるらしい。

でも『敗者は勝者の命令を一つなんでも聞く事』は絶対やると華琳が言っていた。

……今はそれよりもこの子達の話を知ろう。

「」「」「」

あくまで三人共言わないつもりみたいだね。

「貴方達……黙っているなら こちらも手段を選ばないわよ……」

華琳は先程の紫郎との決闘の内容を話していたのを邪魔されたのが相当むかついたらしく……

覇気を放ちながら悪魔みたいな笑みを浮かべていた……

「ひゃ！　　言います、言いますからその笑みで私達を見ないでください！」

三人共とても恐ろしい物を見たという表情をしており顔が青ざめていた。

しかも三人共土下座をしている。

「あの……華琳様怖すぎです……（ブルツ！？）」

凧もいつものクールな華琳とは裏腹な怖すぎる華琳に鳥肌が立ってしまった様だ。

「まあまあ華琳落ち着いてくれよ、ほら、三人共怖がっているぞ」

「紫郎は甘いのよ！報告で言っていたけど……この三人共皆の中に居たのに……この通り襲われていた形跡や汚れすらないのよ……これを怪しいと言わずして何というのかしら……？」

……華琳の言いたい事は十分に分かる。

……もしもこんな美女が三人も居たら……あの賊共の事だ……襲っているはずだ……

でもこの子達は……服も乱れては居ないし……あるとすれば火から逃げるときに服の裾の部分がこげたくらいしかない。

「華琳の言った事は俺も思っていた事だ、もう誰だか予想はついてしまっている　けど……」

「 けど…? 」

「 …… (ビクッ!?) 」

眼鏡を掛けたショートカットの子が気づいたらしく体が少し反応したみたいだ。

……だが聞いて欲しい これは俺の本心だ。

「俺はこの三人 この子達の口から本当の事を聞きたいんだ」

「ッッ!!?!?」

俺は三人の方を真っ直ぐ見て言った。

三人も俺の方を向いて驚いた表情を見せたが……何か決心をしたのか……三人共目で意思疎通をしたみたいだ……

「分かりました……」

「 ……私達が何者で 」

「 ……なぜあそこに居たのか……御教えます 」

……三人共、何かを覚悟をしたという顔で話し始めた……

・ ・  
〈長女 s i d e 〉

はあ〜本当どうしてこうなったんだろ……

歌っていたら何時の間にもやら黄巾賊っていう集団が出来ていて、それの首謀者に私達三人なっているみたい。

純粹に歌を聴いてくれて嬉しいのだけれど……

村を襲ったり、盗賊みたいな事している人もいるみたい……

私達もそういう事はやめようと呼びかけたのに全然やめる気ないし……

ついには討伐軍まで来てしまった！

でも私達はこれを気に逃げようと考えたのだ……でも……

私達は逃げ様とした矢先……十人ぐらいの男の人に囲まれてしまった

……

男の人達は息を荒くして今にも襲い掛かってこようとしていて……  
お姉ちゃんもちーちゃん、人和ちゃんも体が震えて動けなかった……

もう私達はダメなの……かと思った……けど

襲つてこようとした五人の首が落ちたのだ…そして 私達を  
守るかのように金髪の男の人が目の前に現れたのだ。

……それから何か記憶が曖昧なんですよ、でもあの人が私の事を  
抱えてくれた事は覚えているですよ、／＼／＼えへ／／

でもそこからの記憶が本当に思い出せなくて…二人にも聞いたのだ  
けれど思い出せないみたいです。

そして今……私達はあの金髪の男の人と女王様みたいな金髪の女の  
人と体に無数の傷がある銀髪の女の人と向かい合っている。

あの人は真剣な表情で私達を見ている……

ちーちゃんも人和ちゃんも私に目で訴え掛けてきている……「この  
人になら言つて良い」と……

お姉ちゃんもそれには賛成！この人なら信用できるよ

私達は意を決して全て言つた。

・ ・ ・ ・



でもあの女王様みたいな人の視線が怖いの〜！

〔張角（天和） side out〕

〔次女 side〕

まったくムカつく！！

なんで私がこんな目に合わなくちゃいけないのよっ！

歌っていたら……勝手に軍みたいのができているし、それを制御もできないし……もう最悪……

そして討伐部隊まで来ちゃったし！！

もう何なのよ！でもこれはチャンスと思い、私達はこれに乗じて逃げようと思った……

やっぱりこつゆう奴等はあるのね……

私達は十人ぐらいの男に迫られていた……

姉さんも人和も怯えているようで体が動かないみたい……そう言う私もそうなんだけど…w w

はあ〜私の人生ってここで終わっちゃうのかな…？

……そんな事を思っていたら男達が襲い掛かってきた……

……でも動いた瞬間に……前に居る五人の首が落ちたのだ！

私は目を疑ったわ、落ちたと思った……すぐに金色の髪の人が見れたのだ。

他の連中は逃げたらしい。

……それからは私も姉さんも人和も思い出せないのだけれど……姉さんがいい思いをしたのは覚えている……ような気がする……

ああ〜！なんだかムカつく！

でも今はそんな事より……私達の正体を明かしているのかという事だ……

今正面に居る金髪の男の人……後はその他二人……

私達は目を合わせて、同じ事を思ったみたい……『この人は信用できると……』

まあ〜私も認めてあげるわよ……勘違いするんじゃないわよ！

（張宝（地和） side out）

（末妹 side）

姉さん達には呆れてしまっわ…

元気よく歌うのは良いのだけれど…まさかこんな大事になるとは思  
いもしなかったわ。

私はちゃんと「このほとぼりが収まるまで歌うのをやめよう」と言  
ったのに…」「気にしない、気にしない」「なんて言って…

だからこんな風になっちゃうのよ！

今私達はこの黄巾賊という首謀者になってしまったので討伐軍が来  
ている。

もう皆が火の海になっている、こっちはただの農民だった連中…  
そして向こうは訓練を積んでいる精鋭…

例え数が上回っていても…勝てないな。

今はそんな事を考えている暇はない…早くここから逃げなく  
ちや！

私は元々逃げる用意をしていたので、荷物は纏めてある。

でも…：… やつぱりこうゆう人はいるんですね 私達の前には十人  
ぐらいの男の人たちが立っていた。

私も姉さん達も体が震えて動けない…：… 逃げなくちゃ行けないのに  
… 体が動かない…：…

男の人達も獲物を喰らうような目をしている…：… こんな事になるな  
ら早いうちに逃げとくべきだった…：…

私は後悔に駆られた…：… でもそこで…：… 予想外の事が起きた。

男の人達の首が突如落ちたのだ…：… 私は一瞬何が起きたのか分  
からなかった…：…

それに首が落ちた途端 背中越しても分かる程の金色の髪の人が  
現れたのだ。

私は助かったと思った…：… けど…：… その人が此方を襲って来ないとは限  
らない…：…

私は警戒心を解かずにその人をずっと見ていた…：…

でもその人は私達を落ち着かせるように頭を撫でてくれた。

…：… なんて暖かいんだろ…：… 私はそう思った…：…

それからの記憶はあまり思い出せないんですよ。

でも天和姉さんが良い思いをしたというのは地和姉さんと思っただった。

そして今はあの金色の髪の人と噂で聞いた事がある、多分曹操様だと思っんですけど……後はその部下の人に事情を聴かれている。

…私達はあちらから見たら怪しい存在…曹操様？だと思っ人はもう感じていると思う…あの人も……

でもあの人は「この子達の口から本当の事を聞きたいんだ」と真剣な顔で言われてしまった。

姉さん達も覚悟をした表情をしていた。もちろん私も。

そしえ私達は言った、全てを……

…一瞬だけあの人の真剣な顔にドキツとしたのは心の内に閉っておきます。

（張梁（人和）side out）

なるほど、なるほど！この子達は張三姉妹なんだね。

やっと疑問が解けたぞ！

……華琳は俺と同じで納得した表情をしていた。凧は…構えをとっている……

「貴方達の事情は分かったわ、でもね　それはただの言い訳よ……」

華琳は冷静に無表情で怒っている……それはもう声が低い……

三人も真剣に聞いているが……その表情は先程の覚悟を決めた表情より少し動揺しているようだ。

「もういいわ、貴方達は生きる価値はないわ　死になさい」

華琳は死刑宣告をした……それがどれほどの判断なのか……

華琳は多分この子達がもつとしつかりしていれば、民達の暴動みたいな事にはならなかったと思っっているんだろう。

……それに華琳どんな戦いでも真剣に戦う……それで相手に審判を下す……

華琳はそれで覇道を歩むつもりだ……そして今……相手の事情を聞いた……

……だがそんなもので納得するはずがない。

華琳はまず間違いなく、張三姉妹を殺す！。

「だが華琳…いいのか？」

俺はあえて張三姉妹を助けよう…なぜなら…どうにも困っている人をほっとけない性分なんだ！

「何が…？」

華琳は機嫌が悪いみたいだ…

「この子達は歌で人を引き寄せたみたいじゃないか…もしもだぞ、この子達を徴兵や指揮をあげる為に使ってみろ…」

「……………」

「お前なら予想できるはずだ、それにお前は優秀な人材が欲しいんだろ？この子達も十分逸材だぞ」

ここはあえて華琳に嫌われても、この子達を助けてあげたい。

あんな…若い子達の未来を潰しちゃいけない。

「……………分かったわ、紫郎の案を採用するわ、貴方達！」

「……………は、はい！」「……………」

先程の暗い表情よりか…マシになったか。

「これから先は張三姉妹だった事は忘れなさい、私の所に来るなら新しく名乗りなさい」

華琳も大胆な行動に出るなあ W W

まあ華琳はそれなりに分かる奴だって分かっていたからさあ！

「じゃあ天和って名乗る！」

ロングヘアーの子が言った。

「姉さん、それって真名じゃない」

ポニーテールの子がすかさず反応した。

真名って、おい！

「もう私達に名前なんてないんだから真名しかないじゃん」

「でも……」

真名は神聖なものだからな……それは迷って当然だ。

「地和姉さん、私達に選ぶ権利なんてないわ」

ショートカットの眼鏡の子が言った。

「そうだよ、人和ちゃんも分かってくれてるんだから……」

「分かったわよ！私もこれから地和って名乗るわ」

どうにか納得したみたいだ。



「すみません、私は天和って名乗ります」

「私は地和って名乗ります」

「私は人和と名乗ります」

三人共真名を言ったみたいだね。

「よろしい、私は曹操、真名は華琳よ」

「……ッ!?」「」「」

これには驚きだ、まさか華琳も真名を名乗るとは……!

「相手が真名を名乗ったのだから礼儀は尽くさなくちゃいけないでしょ」

なるほど……でも大胆だな。まあそれも華琳の魅力かな。

「俺は櫻井紫郎、気軽に紫郎って呼んでくれて結構だ」

「……えっ!」「」

あれ……?三人共そんなに驚いてどうしたのだ……?

「もしかして“金獅子”さんですか?」

人和って子が聞いてきた。

やっぱりそれで通っているのね…

「ああ、一樣そう呼ばれている…」

俺って結構有名になっていたのか…

「凄い！まさかこんな所で出会えるなんて！」

「最近噂の人ね！」

「噂に聞いた通りの容姿ですね」

俺に三人共詰め寄ってきた。

俺ってそんな活躍する事したかな…？

非常に活躍しています！

「紫郎と話したいのは分かるけど後にしなさい……風、貴方も自己紹介しなさい、真名は別に言わなくていいわよ」

華琳が騒ぎ始めた三人に言った……そういえば、風が空気だった…

「……私は楽進だ」

ちょっと怒っているかな……

「…貴方達の役割は後でちゃんと決めるわ、でも私の前ではちゃんとしなさい でないと」

華琳が何か言うつもりだ……

「 死刑宣告するから」

「「「ッ!」「」」

強烈な一言だな。

それに言った瞬間に殺気を出すなんて……怖いな……

「分かったわね!」

「「「はい!肝に銘じておきます!」「」」

三人共敬礼をして返事をした。

あれはマジだ……華琳ならやるに違いない。

「さてと話はこれくらいにして帰ろうか。そろそろ眠気が襲ってくる頃だしね」

今は十分深夜なんだけどね。

「それもそうね、私も眠くなってきたわ……」

華琳も色々と疲れているんだろう。

「じゃあ帰ろうか！」

そして俺達は帰った……のだが……

帰ったら、皆に問い詰められた。

しかも何故だか桃香の陣に帰ったのに雪蓮達や夏侯姉妹が居た。

（華琳とはもう別れています）

入った瞬間に春蘭に胸倉を掴まれて、「華琳様は!？」と言われて  
…素直に帰ったと言った。

そしたら猛ダツシユで帰って行った。

秋蘭も「姉者可愛い」と言って付いて行ったみたいだ。

いったいなんだったんだ。

だがそれからが大変だった。

なんか正座をしなきゃイケない雰囲気です座をして、桃香、雪蓮に  
質問攻めをさせられましたよ。

なんでも「曹操とはどこまでいったの?」とか「浮気はいけないぞ」  
とか色々……

てか別に華琳には手を出していないし、手出したら春蘭や桂花が黙

っていないだろうし、まず華琳に殺される！

まあそれは良いとしてだ…俺が一番怖いのは愛紗が青龍偃月刀をちらつかせて満面の笑みで居るのが怖い！

もう逃げたいぐらいだ！朱里や雛理なんて抱き合いながら震えてるぞ！

…星や冥琳はクールにお酒を飲んでいるんだが……

ああ～早く寝てえ～！

・ ・ ・ ・

～華琳 side～

まったく紫郎は女には優しすぎなのよ！

先まで私と決闘の話で真剣に話していたのに……あの三人が出てきてからあの三人の事が気になって……ふう～落ち着こう。

私はあの三人が黄巾賊の首謀者だと予想を立てた……見事に当たっていた。

でもそのぐらいではあんまり驚かないわ……そこからよ……

彼女達の事情を聞いたわ……甘ったれるのもいい加減にしなさい！

この世の中……生きるか死ぬか……それをこいつらは……！

こんな連中は生かしている価値もないわ！

私は殺す気だった……けど……

紫郎が庇う様に言った……その意見には頷ける……

……ちよつと熱くなりすぎたかしら……？

私は一回頭の整理をしたわ……この才を生かすも殺すも私の判断で下す。

これが結論だ。

だけど私はまだこの三人を許すつもりはない。

この三人がもつと計画的にやっつけていれば、ここまでの暴動にならなかったのに……

もうなってしまった事はいいわ。

さてと私も眠くなってきたから寝ましようかしら……今日は桂花と春蘭どつちと寝ましようかしら

〔華琳side out〕

〔凧side〕

隊長も無理な事を言う。

私が春蘭様より強くなれるのか…？

今でも結構な差があるというのに…

でも隊長のあの目あの表情…なんかできると思ってしまった、自分が居た。

私も隊長の隣に立てる位の強さを絶対に付けてみせる。

…途中から三人の女の人が見れて…その人達が今回の暴動の黄巾賊の首謀者の人達であった。

華琳様は殺すつもりだった…けど…

隊長が彼女達を庇うように割り込んだ。

まったく隊長は女性に優しくすぎです……

隊長の説得により華琳様は殺さず生かすみたいだ。

それからは話に入れず、聞いていましたが……

三姉妹が隊長に近付いて話している……なんでだろう……

ちょっと切ない……

それから私は自分の名前を言う時に……声を低くしてしまった。

……なんでだろう……？

〈 風 side out 〉



## 第二十三話 三姉妹の正体（後書き）

更新遅くてすいません。

今回はなんか華琳を怒らせ過ぎました……  
華琳の性格的に合わない様な気がしましたが……これはこれであり  
かと思……

何か注意点があればドシドシ申しください。

〜次回〜

「凧……君をこれから強くする！必ず！」

「御意！たいちよ……いえ……師匠！」

〜凧との修行〜



## 第二十四話 凧との修行

どうも！櫻井紫郎です。

「はああ！」

今俺は凧の修行をつけています。

「気をもつと練れ！そんなんじゃ俺に傷一つつけられないぞ！」

凧と模擬戦をしながら注意している。

…えっ！？いきなり話が飛びすぎて分からない？

……それはだな……

説明が面倒だ！

……まあ、簡単に此処までの経緯を話そう。

・  
・  
・  
・

黄巾賊討伐も終わってから早二日……

皆それぞれ自国に帰ろうとしているのだが……

雪蓮と桃香がうるさいんだよ。

「ご主人様はこちらに来ていただけれるんですよね？」

「何言っているの、桃香…？紫郎はこっちに来るに決まっているんだから」

と、言い合いながら腕を引っ張って睨み合っている…

……俺は華琳の所行く予定だから…無理かな…？

まあ…念話とかあるから大丈夫だろ。

それに雪蓮達にも教えといたし、連絡手段は大丈夫だろ…

……そう言ったのは良かったのだが……

…二人共華琳の陣に突撃して行った…

遠くからも聞こるぐらい騒がしくなっているみたいだ。

……だがそれよりも……俺は鬼の形相の愛紗と何やら考え込んでいる星を説得しないと……

はあ…死んだかな……

・ ・ ・

二人の説得は案外簡単に済んでしまった。

……それはだな……必殺技の『なんでも一つ言う事を利く』

と言ったところ……二人共俺から距離を取り……ヒソヒソ話し合っ  
て……

凄い笑みで許してくれたのだが……逆にそれが怖い。

( オマケみたいのを書くときに満面の笑みの理由は分かります )

・ ・ ・

まあそれからはだいぶ疲れている様子の華琳と合流して陳留に帰る  
事になった。

雪蓮や桃香は最後まで離してくれなかったけど……

冥琳、愛紗が助けしてくれたおかげでどうにか助かった。

でも愛紗はまだ満面の笑みで…ちょっと怖い。

冥琳は「またな」と言っつて雪蓮を引つ張りながら去って行った。

やべえーカツコイイな！

……おつと話が変わってしまつところだつた！

それから陳留に戻るまで馬でゆつくり戻つた。

なぜだか桂花や春蘭が睨んできていたような……

そこつ思つているうちに帰つてきていた。

それから各自体を休めたり好きにして良いと言われたので、部屋に戻るつとしたら…

凧から「ぜひとも修行をつけてくれませんか？」と言われて……どうしようか迷つたが、凧は戦疲れもないみたいなので了承した。

「という訳だ」

分かつていいただけましたかな？

「隊長、誰に話しかけているのですか？」

「なんでもないぞ！そろそろ休憩にするかい？」

彼此<sup>かれこれ</sup>三時間ぐらいやっているかな。

「いえ、まだやれます!」

まったく自分の体の事も考えなさい。

「ほら、足が少し震えているぞ、かなり気を扱って体が付いてきていないんだろ」

俺は凧を無理やり座らせて休ませた。

こうでもしないと休まなそうだしな。

「それにしても隊長……この仕組みはいったいどうなっているんですか?」

「それについては……秘密だ」

凧の驚きは分かる……だってここは 森の中なのだ!

確かに……この状況は理解しがたいだろう。

この疑問を解決するには俺の能力が不可欠だ。

元々愛紗や鈴々や星を育てるために使おうと作っておいた……ネギ  
○に出てくるダイオラマ球だ。使う機会が掴めなくて無限倉庫にし  
まっておいたのだ。

作って置いたのは良かったのだが……内部の構想を考えていなかった  
たので、急遽森と家を創造した。

ダイオラマ球内の外の一時間が中では一日はそのままにしてある。

一日待たなくても何時でも抜け出せる。

……これから創ったものも披露するが、まだまだ創るぞ！

それで森の中で木がない広い所でまずは手合わせをしたのだが……  
手加減するのを忘れてしまった。

俺も拳ではあまり戦闘経験がないので慣らそうと思ったのだが……  
速過ぎたらしい。

凧を一撃で沈めてしまったのだ。

凧が言うには……「何が起きたか分かりませんでした。自分が気付  
いたときには意識が飛び一歩手前でした」と……

……それからは凧が目覚めるまで家に家具や日用品を整えた。

凧が起きてからは気の使い方を教えている。

身体能力の向上、気を使つての移動方（無影）を教えたり、その他



諸々……

まだ身体強化ぐらいしかできないが、それでも凧はよくやっていると思うぞ。

無影も最初は川沿いでやったのだが……見事に最初は水の中に突貫して行った。

でも元々凧は自分の気を使い戦ったりしていたからコツを掴めば難しくできていく。

でもまだ完全に無影を使えてはいない。方向転換や宙に浮いての移動はまだ無理だからね。

そしてまだ連発して無影も無理だから。

さすがにこの短時間でそこまでいったら才能があるという言葉では表しきれない。

まあ今はゆっくり休ませなくちゃ。

いきなりこんなになると体が持たないからな。

「凧、今は休め。まだ時間はたくさんあるんだから！」

なんとなく凧の頭を軽く触ってから家に向かって食べ物を取り行った。

（ 凧 side ）

隊長には色々と驚かせられた。

まずは今私がいるこの場所だ。隊長の部屋に入って、変な球体に近付いたら……気付いたら今いる森の中だった。

最初は戸惑ったけど、隊長との戦いを前に動揺してられないと思い、自分を落ち着かせた。

そして隊長が急に構えをとった。

左手を前に出し、右手をお腹の近くに構えをとっていた。

私も構えをとった。隊長がどうゆう攻撃をしてくるのか凄く気になった反面……

私を凝視している目線にちょっと頬が熱くなった気がしたけど……  
一呼吸して落ち着かせた。

そして構えをとりながら十五秒ぐらいが経過したとき……

……私は隊長をちゃんと見ていたのに……消えた。

そして、私の腹部に衝撃が走った……隊長の腹部に隊長の手が当たっている所は見えた……そこから気を失ってしまった。

それから私が起きてから修行を開始してくれました。

身体能力の強化の技など、高速移動法など、色々私の知らない技を教えてくださいました。

私は無我夢中にやっていた……いや、新しい事に挑む楽しさという気持ちなのか、私はまったく疲れを感じなく必死に修行にのめり込んでいた。

隊長が休めと声をかけてきたのだが…私は気付いていなかった……自分の足が震えている事に……

そこから私は座って休憩をとっています。

そういえば……隊長って呼ぶのと師匠ってどっちで呼べばいいのですかね…？

（ 凧 side out ）

そこからは凧と談笑しながら休憩していた。

でも凧が急に「師匠と呼んだ方がいいのですか？」って聞いてきたもんだから、ちよつと驚いちゃったよ。

修行は師匠って呼ぶ事になった。

・ ・ ・ ・

〜その頃〜

真桜と沙和が二人で紫郎の部屋の前に来ていた。

「城を見て回ったちゅうのに風が見つからん」

「と、なると……やっぱり隊長の部屋にいるんじゃないかと思ひ…」

「「ここに来た（の）（や）」」

二人共もう扉に手を掛けて入る気満々です。

「いくで、沙和！」

「了解なのー！」

「「せえの」」

二人は一緒に部屋に入って行ったが…

「あれ」

「なんで、なんでや〜」

二人は部屋に入ったのだが……肝心の二人が居ないのだ！

「一体あの二人は何処に行ったんや…?」

「隊長の部屋以外は探したのに〜!」

二人共……頑張りすぎだ。

「おい、沙和…あれなんや…?」

真桜がその物体に近付いてゆく。

「どうしたの〜?ってあれ…?」

沙和がちよつと目を放した際に真桜が部屋の中から消えていたのだ。

「おーい、真桜ちゃん、何処にいるの〜」

沙和も必死に部屋中を探しているが、見つからない。

まずこの部屋に隠れる所はないのだが。

「おい、沙和、紫郎の部屋で何やっているんだ…?」

と、そこに秋蘭が現れた。

「あ、秋蘭様〜。真桜ちゃんを見ませんでしたか?」

「いやここに来るまでに誰にも会わなかったが…？」

沙和は考え込んでいた……と目に移った物があった。

「これって何だろう…？」

沙和はその丸い球体に近づいて行った。

つと触れた瞬間　沙和が消えた！？

「沙和ッ！？」

秋蘭も何が起こったか分からず、沙和の居た場所に行った。

「これが元凶だな……これは一体なんだ…？」

秋蘭は不思議そうに球体を見ていた。

「これに触ったら消えたのか…？」

秋蘭も触ってみた。

「な、なんなんだ、これは！？ここは何処だ…？」

秋蘭が触った瞬間周りの景色がいきなり変って、森の中に居たのだ

……

「ああ、秋蘭様も来たのー！」

「ほんまや〜！」

森の中から真桜と沙和が現れた。

「ここは一体何処なんだ？」

秋蘭は不思議でしろうがなかった。

「それは俺が説明するよ」

真桜と沙和の後ろから紫郎が現れたのだ。

（修行の最中）

「そつえば、部屋に置きっ放しにしまった。」

紫郎は風修行を付けている最中に思った事だった。



## 第二十四話 凧との修行（後書き）

更新遅くて本当にすいません。

最近まったく小説に割く時間があまりなくて、自分的に良いものが書けなくて…

でもどうにか頑張ってみます。

今日から一週間は忙しさも半減しますんで、もう一話ぐらい更新できるように頑張ります。

～次回～

### 第二十四・五 愛紗の受難、星の企み

「愛紗は主の〇〇が欲しくないのか…?」

「ほ、欲しいに決まっているだろうっおー!」

「ならここは我慢だ。」

星は、にやけた口に手を当て……………何か計画を立てていた。

第二十四・五 愛紗の受難、星の企み（前書き）

今回も短いです。

第二十四・五 愛紗の受難、星の企み

〈愛紗 side〉

今私の前には我等がご主人様がいる。

ご主人様の帰る場所は私達の所だというのに…

曹操殿と一緒に行くと言っている。

「なんでも一つ言う事を利く」

と、言っているのだが、私はそんな事よりも早く帰って来て欲しかった。

まさか曹操殿にまで手を出したんじゃ……

これはちょっと…OHANASISHIなくてわ！

と、私はご主人様に近付こうとしたのだが……

「待て、愛紗！」

星が私の肩を掴み、止めてきた。

「…なんだ星……私はご主人様とO H A N A S I Iしなくてはならないのだが……」

私を止めるつもりか…？

邪魔をするなら……例え仲間でも痛い目を見るぞ。

「まあー落ち着け。良い話を持ってきたんだが…？聞くか…？」

今はそんな事より……私はご主人様と

「ああ〜言い忘れていたが、主の事でだ……それに主と幸せになれるんだぞ……」

な・ん・だ・と……一応聞いといてやるか……

愛紗は紫郎に向けていた足を星の方に向けた。

……愛紗は見ていなかったが……星は一瞬だけ……にやけた。

だが愛紗が気付く事はなかった。

そして二人は紫郎から少し離れた場所で話し始めた。

「で、その良い話とはなんだ？（…実を言うと…結構気になってい  
るんだがな…）」

愛紗は興味なさそうな表情をしているが、内心では聞きたくてしよ  
うがないらしい。

「実は……私は以前主と旅をしていた時に朱里や雛理を徐州に送る  
際にだな……」

星は物凄い幸せそうな笑みを浮かべている。

「実際に……なんだ……？」

愛紗も星の不気味すぎる笑みに退いている。

「主と子供をつくる約束を取りつけたんだ」

「ッ！？」

愛紗は驚きすぎて声が出なかった。

「……………ずるい……………ボン」

「……？」

星は愛紗が何を言ったのか、聞こえなかったらしい。

「あ、愛紗ッ！？」

星は愛紗の顔を見て驚愕していた。

だって……目尻に涙を溜めていたのだから……

「……星の方がご主人様と長く一緒に居たんだから……私達に勝ち目なんてないじゃないか……」

私の胸が痛む……ご主人様が星を選んだのなら……選んだのなら……私は……

「ちょっと待て！私の話を最後まで聞け！」

うるさい！星はご主人様と……ご主人様と宜しくやってるおー！

「私が持ってきた話は……主がなんでも言う事を聞くといいことは……愛紗も私と同じ提案をすればいいという事を伝えようと思ってな」

……同じ提案……／＼／＼ってまさか……

「愛紗は主の子供なんていらなのか……？そうなら私は桃香にも……ほ、欲しいに決まっているだろ！」ですよね」

私だって女として強い殿方に惹かれて子供を授かりたいと思っている。

……ご主人様が一番当てはまるのですけどね。

「私だけが幸せになるのも良かったのだが……なんか罪悪感があったな」

星、お前って奴は……良い奴なんだな。

「で、この提案を受けるのか？受けないのか？」

今更そんな事を聞くな、答えはもちろん

「承諾するに決まっているだろ！」

「それでこそ…愛紗だ」

何やら星がにやけていたような気がするが……今は…ご主人様と何人作ろうか考えなくては…

「言うておくが、この乱世の時代が終わってからというのが主からの条件だぞ」

「それを早く言えー！」

まだまだこの時代は続きそうなのに……はぁ……

でも私とご主人様の幸せのために早急にこの乱世を終わらせてみせる。

（愛紗 side out）

まさか愛紗があんな可愛い反応をするとは……乙女というのは凄いな。

私ももちろん乙女ですけど。

でもあの涙目は一瞬ドキッとしてしまったのが、私的には不覚をとってしまった。

まあでもこれで主を縛る鎖が徐々に出て上がっている。

この計画にはまだ…桃香、朱里、雛理を入れる予定なのだよ。

桃香は主の事大好きだし、朱里に雛理も惚れているし……これでもまだ主を縛る鎖が足りないような気がする。

呉の面々を入れたら……いや止めておこう。

でも雪蓮殿は絶対に主を狙ってしつこく来るから……計画に入れるか…？

冥琳殿も祭殿も主にベタ惚れですし…穏も確定だし…亞莎も惚れている。



蓮華殿と思春殿と明命はまだ分からないな。

シャオ殿は主に近づきたいとだけだと思えますし……

まあー計画に入れますか。

さてと最大の問題は曹操殿は主に好意を持っているのかという事だ、後部下の人達も……私は会った事しかないからそんなに知らないから一体どうなっているのか分からないんですよ、これが。

もしも曹操殿が主に好意を持っているのなら……こちらに引き込みたいの出すが……また会う機会があればですがね。

……もし主を独り占めするようであれば……呉の面々と同盟を結び、戦争を起こします！

おっと、ちょっと興奮し過ぎました

まあもしもですから。

はあくまったく主もこんないい女の人達に思われて幸せですね。

もちろん私が一番主を愛していますけどね

side  
out

## 第二十四・五 愛紗の受難、星の企み（後書き）

まだ暑い日が続きますね……健康管理はしっかりした方がいいですね。

の事は独り言です、お気になさらず。

小説の方なのですが……なんか書きたい事がありすぎて話が進まない上に……書く暇がないのが、自分の悪い所なんで直して生きたいと思います。

今回の話はオマケですね！次回からはちゃんと書きます。

〜次回〜

「勝たせてもらいますよ、春蘭様！」

凧が構えを変えた。

「ふん、来い、凧！」

春蘭も大剣を構え、真正面から凧を迎え撃つつもりだ。

第二十五話 いざ、尋常に勝負！ そして別れ……だが、意外な展開……？（前書

色々と詰め込みすぎてヤバいです。

第二十五話 いざ、尋常に勝負！ そして別れ……だが、意外な展開……？

つい先ほど此処に迷い込んだ、秋蘭、真桜、沙和にこの場所について説明した。

「そんなもん有り得るのかいな……？」

さすがに納得できていないようだ。

「まあ、天の世界にはこうゆう物があると思ってくれ」

と言ったら、どうにか納得してくれた。

でも真桜が興味津々で「これはどうやって作られてるんや？」とか「この仕組みはどうなっとん？」と、色々と質問攻めされて大変だった。

・ ・ ・

三人は風の修行を見ながらゆっくりしていた。

「……しまったッ！？すっかり忘れていた！」

突然秋蘭が声を上げた。

「ん、どうしたんだ？」

いつもクールな秋蘭がちょっと慌てている。

これは珍しい。

「華琳様に紫郎を呼んで来て欲しいと言われていたのを忘れていたのだ……」

ああ、なるほど……それは一大事だな。

「大丈夫だよ、この中は外より時間が進むのが遅いから外では一〇二分しか経ってないよ」

「そ、そうなのか？……それより早く華琳様の所に行くぞ」

俺と秋蘭はダイオラマ球内を出るために家の中にある魔方陣みたいなものに向かった。

一応皆に此処の出口を教えといたから……

「あつ！お〜い風いー俺が戻ってくるまで休憩しているよ」

家に入る前に風に言っというた。

ちゃんと休憩しないと体を壊しかねないからな。

（ 凧 side ）

隊長曰く師匠が家の中に入っていた。

「ふう〜師匠が帰ってくるまで体力を回復させないと……」

私は軽く体を伸ばしてから木に寄り掛かりながら座った。

「まさか短時間で色々変わった様な気がする……」

瞳を閉じて精神統一をしてみる。

私は自分の気の総量を大分把握した。

私の体に流れる気の流れが分かる……足に気を集中、手に気を集中

……

「凧いー！」

「凧ちゃんー！」

「……急に抱きつくな！」

せっかく集中していたのだが、真桜と沙和に邪魔されてしまった……

「体中痛いんだから、あまり強く抱きつくな！」

私の体も結構疲れが溜まってしまった様だ。

隊長も「急に激しい鍛錬をしてるから体の事は常に気にかけていてね」と言われていたのだが……

修行中は体に気を巡らせていたので身体能力が上がったせいか……  
体の痛みがあまりなかったのだが……

「凧ちゃん、凧ちゃん、隊長と二人だけで何か進展はあったのー？」

「そや、わいらが来る前に何かイケない事とかしてなかったのかー  
？」

な、何を言っているんだ！

た、隊長、い、いや、師匠がそんな事する訳ないだろ…… / / /

「凧ちゃん、顔が真っ赤なの〜！」

「これはあれやな〜」

「何かあったに違いない!!」「」

な、何を根拠に言っているんだ、こいつ等！



「ふふ、風ちゃんあゝ隊長が帰ってくるまで問い詰めてやるんだから」

「もち、私も協力するでー！」

こいつら……まさか最初からこれを狙っていたのか！？

くそお！体が思いど通りに動かない……こんな時に……！？

「さてと」

「堪忍せいや」

……師匠、私はここで終わりのようです……

それから風は二人に何があったかを聞かれたらしい。

正直……紫郎は何もしていないし、されてもない。

（風 side out）

ん…?!今風がに呼ばれた様な…

「紫郎、貴方を呼んだのは決闘の詳細を決めるためよ」

気のせいかな…?

それで今は華琳に呼ばれて玉座に来たのだよ。

今この場に居るのは華琳、春蘭、秋蘭、桂花だ。

そういえば…秋蘭が全然時間が進んでいない事に驚いていた。

「決闘は一週間後でいいかしら…?」

一週間……予定が狂うな。

「いや三日でいいぞ」

「「「「つ!!!?」「」「」

紫郎の返事を聞いてそれぞれ驚いている。

「貴方それ本当に言っているの？」

華琳が聞いてきた。

「もちろんだ」

まだ今の状態では勝てるか……分からないけど……

三日もあれば……勝てる。

「私も舐められたものだ」

春蘭から殺気が滲み出ている。

「春蘭、今は抑えなさい……紫郎、それでいいのね？」

「ああ、後は武器はそれぞれ訓練用なので、敗北条件は相手を倒すか、自分で負けを認めることでもいいか？」

「それでいいわよ、春蘭それでかまわないわね？」

「はい！」

これで決定だな。

「じゃあ俺は自室に戻るぞ」

俺はそう言ってから玉座を出た。

そして部屋に戻り、ダイオラマ球内に入ったのだが……風が真桜と沙和に襲われていたのだ…

（真桜と沙和は風の色々聞こうとして、動けない風を押し倒したら、運悪く紫郎が帰ってきた）

俺は雰囲気的に邪魔者みたいなので、ダイオラマ球から出ようとしたのだが、神速の勢いで来た風に止められた。

真桜と沙和は……どうやら風に殴られて気絶しているようだ。

・ ・ ・ ・

（玉座メンバー）

「紫郎のあの自信は一体何処から来るのかしら…?」

華琳は不意に言葉を発した。

「きつと強がっているんですよ!」

桂花がそれに答えた。

「あいつは一体何を考えているんだ…?」

春蘭も先程よりかは冷静になっている。

「……………」

秋蘭は黙ったまま何か思いつめている。

「秋蘭…？どうしたの…？」

華琳が気付かないわけがない。

「…！？いえ何でもありません（もしもあの球体の中で修行するのなら……可能性は十分にあるな）」

秋蘭は内心である予測をしていたらしい。

「そう、ならいいのだけれど……（秋蘭は何か知っているみたいね……………」）」

華琳は秋蘭の表情から何かをよんだらしい。

秋蘭とは……いや、此処にいる人とは幼少の頃からの付き合いだから、華琳にとって何か隠しているというのを読み取るのは簡単なのだろう。

「まあそれは三日後の楽しみにして……今日は誰が私と一緒に寝てくれるのかしら？」

華琳が話を変えた。

ある二人の目が急に輝いた。

「はい！はい！ぜひとも私をお誘い下さい！」

春蘭と桂花が一目散に華琳に近付いた。

「桂花……お前は消える！」

「何言つてやがるんです……？そつちこそ消えなさい！」

春蘭と桂花が顔を近づけあい睨み合っている。

「（まあ今はそんな事を考えてる場合ではないな……）」

秋蘭は考えるのをやめてその輪の中に入って行った。

春蘭と桂花の事を止めに行ったのか？それとも参戦しに行ったのかは……そこは想像に御任せします。

・ ・ ・

（三日後）

今俺達は城の広場に集まっている。

将の全員が集まっております、広場の中心には春蘭と凧が向かい合っている。

「紫郎、凧をどれほど強くしたのか見せてもらおうよ」

隣にいる華琳がこちらをにやけながら言ってきた。

「存分に見てくれ、さぞや驚くことだろうな」

俺もついにやけてながら言ってしまった。

「期待させて貰うわよ」

その返事に満足をしたのか笑みを浮かべて二人の方を見た。

「二人共準備はいいか？」

俺は審判なので二人の間にいる。

「ああ、もちろんだ」

春蘭は訓練用である大剣を担いで臨戦態勢に入っている。

「こちらもよろしいです、師匠」

凧も訓練用の手甲をして準備ができたみたいだ。

さて……凧は確かに強くなった……技のキレも接近戦の技術もものすごい成長した。

ただ自分で意識していないと身体強化した気が乱れて解けてしまうのが、汚点なんだよな……

まだ修行させたかったなー。

おっといけない、今はこの二人の集中だ。

「二人共いいみたいだな、じゃあ……始めい!!」

試合開始の合図と共に思い切りよく、春蘭が大剣を振りかぶり突っ込んでいく。

だが……

『っ……!?!?』

この場に居る全員が驚いている……なんせ……対戦相手の凧が消えたのだ。

春蘭が突っ込んでいくと同時に凧も突っ込んだのだ……無影を使っ



て……

「くっ！」

春蘭は突っ込むのをやめて大剣を構え、周りに目を凝らしている……  
…春蘭の目には凧が映っていない様だ。

「こつちです！」

「ぐあぁっ！」

ドガアア！

突如、凧が春蘭の背後から蹴りをかました。

春蘭の体は城の壁に突撃していった。

壁は春蘭と一緒に崩れ落ちた……

見ている人達も何が起こったのか、さっぱり分かっていないようだ。

ズンッ！！！！

「私にも油断はあったみたいだ、凧……お前は本当に強くなっ

「たみたいだな」

瓦礫の中から春蘭が出てきた……口から少量血を流しながら……

「春蘭様……当たる寸前に一瞬前に飛んで衝撃を和らげましたね」

「背後からいやな気配がしたからな……体が勝手に反応したんだ」

春蘭は目では追えていなかったが、条件反射で攻撃を察知していたのだ。

戦場を潜り抜けてきた猛者だからこそできる事だ。

「……では行きます」

「来い！」

二人は動き出した……凧は自分の速さを活かすして戦う気だ、春蘭は一撃で決めるつもりでいる。

「はああ！」

凧は無影を使い春蘭の右側から殴り掛かって行った。

春蘭は凧の速さにまだ付いていけないようだ。

「…甘いわぁ！」

突然、春蘭は自分の右側に剣を振った。

春蘭は感覚……いや、本能で右から来ると判断したのだろう。

さすがは武芸の腕は曹魏随一の豪傑だ、伊達に「魏武の大剣」と言われていないな。

「ッ!?」

その攻撃は凧の頬を僅かに掠りかけた。

これは凧にとっては予想外みたいだ。

自分の速さに自信を持っていたのにそれをいとも簡単に見切られてしまったのだから……

凧はその場に一瞬立ち止まってしまった。

「こちらからも行かせて貰うぞ！」

その隙を逃がす春蘭ではない。

すぐさま風は剣を振りかぶって叩きつけた。

「ぐあっ！」

それを風は両手の手甲で防いだ。

だが衝撃が強いのか、片足をつきながら耐えている。

それほど春蘭の攻撃が重いのだろう。

「よく耐えた！しかし……」

春蘭は両手で防いでる風に対し、腹に蹴りを入れた。

「がはぁぁー！」

風は意識的に強化するのを忘れていたせいか、思いっきり腹に直撃した。

後方に飛ばされたものの空中で回転し着地した。

だが思ったよりいいところにもらってしまったのか、片足をついて  
いる。

「脆過ぎるぞ、凧！」

春蘭が剣を凧に向け、堂々と言つてのけた。

「まだですよ、春蘭様……まだこれからですよ！」

凧もまだまだやるようだ。

立ちながら手甲を再度確認し構える……

「行くぞ！」

同時に動き出した。

春蘭が一瞬で凧の間合いに入り剣を振った。

凧も接近戦で挑むつもりで剣の軌道を読み、回避しつつ反撃してい  
るが、春蘭はそれを避ける。

重い剣を持っている春蘭は重さをものともせず、軽やかに避けている。

二人共、避けて、反撃、避けて、反撃の繰り返しだ。

だが直撃といえる攻撃は当たらない、掠っている攻撃はよくあるみたいだが……

「久々に胸が躍るぞ！」

「修行の成果を見せる時だ！」

二人共嬉しそうに笑っている……

春蘭は齒応えがある相手との戦いと喜び。

凧は倒したいと思っていた春蘭と互角に戦えている喜び。それと自分が強くなったという喜び。

……… ちょっと待てよ……… 俺……… 凧に色々攻撃系の技教えたのに……… 凧の奴使ってないぞ？

まさか、体術だけで戦うつもりか……？

「はぁぁ！」

今もまだ接近戦をしている。だが技を使う動作もない。

……凧にも何か事情があるのだろうか……技を使ったら春蘭を簡単に倒してしまうのではないのかと思っているのだろうか。

……「こは凧に任せますか……」

「見ている魏の人達」

「ちょっと、ちょっと、なんであんなに凧は強くなっているのよ」

さすがにいつも冷静な華琳でも驚きを隠せないようす。

「まさかあの春蘭と互角とは……」

桂花が珍しく春蘭を侮辱していない……でも『あの春蘭』ってなんだよ。

「風よ……これは夢なのか？」

凧も眼鏡を何度も拭いたりして確認している。

話しかけられた風は

「ぐう z z z」

寝ていました

「こら起きなさい！」

凵は頭を軽く叩いて起こした。

「なんですか凵ちゃん、ちゃんと起きてましたよ」

どうやら風は寝たふりをしていたみたいだ。

「いやーなんか凄すぎて現実逃避をしまいましたよ… W W」

さすがの風でもこんな展開になるとは思っていなかったようだ。

「凵さんがあんなに強くなっているなんて！」

「春蘭様と互角以上に戦っているよ！」

流琉と季衣も驚きを隠せない。

それはそうだろう……三日間で春蘭と互角以上に戦えるようになったのだから……

「やはり皆驚いているな。華琳様ですら驚きを隠せない様子だ」



秋蘭はちよくちよく修行の様子を見に來たりしていたのだ。

後、仕事の疲れを癒す為に俺が創った温泉に入ったりして結構來ていたのだ。

「そらあー秋蘭様、凧はかなり頑張っていたやないか」

「そうなのー私達が寝ていた時だつて一人で鍛錬していたの〜」

真桜と沙和は秋蘭よりもダイオラマ球に通いつめていた。

特にあの二人はよく寝ていた……なんでも「仕事で疲れたから」だ、そうだ。

お前等……全然仕事していないのに……

「それは分かっている。姉者も本気だな……（だが、変だな……凧はもつと紫郎から教わった技を使っていないぞ……？）」

秋蘭も凧が技を使わないのがおかしい事に気付いたようだ。

実は秋蘭も紫郎に技を教えてもらっている。

「凧ちゃん頑張つてなの〜！」

「凧いゝ負けるなや〜！」

真桜も沙和も凧の勝利を信じているみたいだ。

精一杯応援して凧を援護している。

「ふっ、凧には悪いが此処は姉者を応援させてもらっよ」

秋蘭が少し笑みを見せたがすぐに何時ものクールな表情に戻った。

・ ・ ・ ・

二人の戦いはまだ続いている。

だが……さすがに接近戦で戦い続けて、二人共かなりの体力を減らしたみたいだ。

二人共息を荒くして、肩膝をついている。

「凧……この一撃で終わらしてやる」

春蘭は両手で剣を持ち構えをとる。

……誰でも分かる、今の春蘭は足に相当疲労がきている。

立っただけでも僅かに震えている足。

「そうですね、もう私も限界です」

凧も構えをとる。

……凧も同様に足に疲労が溜まっている。

覚えたといっても無影を連発したら、さすがに足にかなりの疲労を蓄積させてしまう。

だが凧は震える足でもちゃんと立って、相手である春蘭を見る。拳を握り、力を入れる……そう、目の前の相手を倒すために……

……二人は構える……周りはその雰囲気呑まれ静かになった。

「勝たせてもらいますよ、春蘭様！」

先に動いたのは凧だった。

さすがにもう無影を使えるだけの体力がないみたいだ。

凧は姿勢を低くし真正面から春蘭に突っ込んで行った。だが、右手の拳に気を溜めている。

あの攻撃を喰らったら、さすがの春蘭でも立ち上がれないだろう。

「上等お！来い、凧！」

春蘭は上段に構えて一気に凧に振り下ろすつもりだ。

あんな一撃喰らったら骨が折れるどころか、訓練用の剣でも打ち所が悪ければ死ぬぞ！

「はあああ　　！！！」

凧は低い姿勢のまま拳をアッパーの軌道で振るった。

「くらええ　　！！！」

それを迎え撃つかのように上段に構えていた剣を振り下ろした、春蘭。

二人の剣と拳はぶつかりあった。

だが……

「ちっ！剣が折れたか……」

春蘭の手には折れた訓練用の剣がある。

「やはり手甲がもちませんでしたか……」

凧の手には碎け散った手甲があった。

「そこまでだな、二人共武器が使えなくなったから引き分けだ」

審判である自分が言った。

「凧、まさかお前がここまで強くなるとは思わなかったぞ」

春蘭は凧に手を指し伸ばした。

「いえ、私は師匠との修行をしなければ到底相手になりませんでしたよ」

凧はその手を握った。

「いや、それはお前が努力したという事だ……私も凧以上に鍛錬をするようにするぞ」

春蘭は自分の強さに自信をもっていたのだが、今の戦いを通して自分はいつか武力的に風にな抜かされる悟ったのだろう……自分の中でもっと強くなると決心したらしい。

「良い勝負だったぞ、二人共」

そこに紫郎が入ってきた。

「じつとしてるよ」

紫郎は二人に手を向けて何かをするつもりだ。

……紫郎はボソツと何かを呟いた。

すると 二人の体が一瞬輝いたと思っただがすぐに光は消えた。

「春蘭、体の痛みはないだろう？でも疲労はあまり取れていないと思っから無理するなよ」

紫郎は二人に治癒術を使ったみたいだ。

「あ、ああ、背中痛みや口の中を切った所も治ったみたいだ……って何をした!？」

春蘭は体中を確かめて傷跡や痛みがしていた場所を見たのだが、全部治っていたのに驚愕していた。

そして一体何をしたのかと紫郎に掴み掛かった。

「ほっと！まだまだ甘いな。凧も痛みとか消えてるだろ？」

紫郎は掴み掛かって来た春蘭を軽く避けて回避した。そして凧に聞いた。

「大丈夫です！さすが師匠です」

凧は元気良く返事して返した。

凧は修行中に何度も治療術を受けたので違和感がしなかったらしい。

「待てえー、私の話を聞け！」

春蘭は疲れているにもかかわらず全力で紫郎を捕まえようとする。

「うるさいな」

紫郎はだるそうにしているがそれでも最小限の動きで避けている。

「お前が捕まればいいんだ！ ツー！？」

さすがに疲労で足が纏ってしまったようだ。こけてしまいそうになった。

「おっと、だから言ったのによ」

紫郎は避けるのは失礼だろうと思いきや支えたのだが……胸に抱きよせてしまった。

「……／＼／＼（お、男の胸板って結構がっちりしているのだな……）」  
いつもの春蘭なら怒鳴っているのだが、怒鳴る体力もなく、なぜだか紫郎に抵抗していない。

これはこれで珍しい光景だ。

だが

「あら、いい御身分ね　紫郎」

青筋を立てた華琳が居た。

「さすがの私でも見逃せないな」

もう一人青筋を立てた秋蘭が居た。

後の人達は離れて見ている。

風は……何故かハンカチをヒラヒラさせながら紫郎の方を見ている。



「二人共、ちょっとこっちへ来い」

俺と春蘭はしょうがなく付いて行った……いや、逃げたら殺されそうなのがしたから……。

・ ・ ・ ・

それからは、なんで三日であんなに強くなったのか？、あの風の技はなんなのか？と色々質問攻めにされた。

口で言うのも面倒なので、実際に見せてみた。

……まあ、予想道理に皆さん驚いていたぜ

それからはダイオラマ球内の事を知らない連中に説明して……皆に温泉に入って来いと進めた。

俺が創った温泉は、疲れ、怪我、美容、健康に良いように創ったから。

その事を言ったら、魏のメンバー全員で入浴しに行った。

……俺はもちろん入ってないぞ。その間に川に来て、軽く体を動かし、自分の鍛錬を始めた。

まあ、まだ自分の能力を全部把握できていないし、意識していないと気で強化した体でも普通に傷を受けてしまうから……

……俺もまだまだ未熟だな……

それから華琳達が上がってからをダイオラマ球内を出て解散した。もう結構夜になっていた。

・  
・  
・  
・

それから数日経った。

結局決闘の結果は引き分けだったので、罰ゲームみたいなのは無くなつたのだが……

自分的に納得できなかったので、華琳の言う事を一つ聞いてあげた。

それが……「今日一日私の物になりなさい！」と言われたのだ。

しかも山のように積んであるし……なんでこうなっているのかというところ……「文官の人数が足りないので手がまわらないのよ」「って言われた。なんとなく納得できた。

そこからは華琳と他の軍師の分の書類（国内の軍備や内政には手を出していない）をやってあげた、五ヶ月分ぐらいあるみたいだ。

さすがの華琳も遠慮したのだが、俺が説得して、今日は一日は仕事の事を考えさせないようにした。

それからは冥琳の政務を手伝ったみたいに素早くやった。

約二時間ぐらいで終了したのだが……追加の書類を秋蘭が持ってきた。少ないからよかった。

そしてまた三十分ぐらいで終わらせてお茶を飲みながら秋蘭と談笑した。

それから華琳達が終わった書類に目を通して、さぞや驚いていた。

全部間違いが無かったらしい。

「さてと……そろそろ洛陽に行こうかな、今日は丁度よく凧達と天和達の活動を見に行く予定だったから」

そういえば天和達は陳留で歌って街を盛り上げたり、軍の人たちに歌ったりしてかなり活躍しているらしい。

あの場で華琳を止めといて正解だったな。

だが……これで華琳の国は勢いづく……困ったな……まあ今はそんな事はいいか……

・  
・  
・  
・

凧達を連れて今は街の見回り、天和達の護衛をする予定だ。

「失礼するぞ」

扉を開けて部屋に入ると……休憩中だったのか、寝床の上で三人仲良く話をしていた。

「あ、紫郎く、ずっと会いたかったよ」

ギュッ!

「なっ!?!?!」

俺を見た瞬間に天和が真正面から抱きついてきた。

後ろにいる、凧は驚いている。

紫郎も避ける動作もせずに受け入れていた。

「あつゝ姉さんだけずるい、私も」

ギュッ!

「なっなっ!?!?!」

天和の抱きついているのを見て地和も腕に抱きついてきた。

凧はまたまた驚いている。

「あ、どうもです、紫郎さん……ちょっと!姉さん達何しているの!?!」

人和は礼儀正しく挨拶して、一瞬空いている腕に抱きつこうとしたのだが、そこは冷静に判断してやめた。

そして今はダメな姉達を止めている。

「……………キ・サ・マ・ラー……………」

紫郎の後ろから黒いものを全快に出しながら凧が拳を血が出そうなぐらい握っている。

いつの間にか真桜と沙和は退避している。

「な、な、凧、落ち着け、落ち着くんのだ」

紫郎は何故だか焦っていた。

凧の豹変にびびっているらしい。

（天和、地和は気付いてません。）

「……………もう知りません、早く行きますよ」

凧はそのまま出て行ってしまった。

もしかして怒らしちゃったのか……………

「ほら、天和も地和も休憩終了で次の仕事をするぞ」

紫郎はそういうと二人を剥がして風呂の後を追った。

部屋残る張三姉妹のうち……二人は不服そうな表情をしているが、一人だけ深刻に考える人が居た。

「……天和姉さん、地和姉さん、これから抱きつく時は華琳様の部下の前ではやめた方がいいと思う……そうしないと……」

天和も地和も人和が何を言い出すんだと思っっているらしい。

それもそうだろう、抱きつくようになって言っているのだから……

「そうしないと……？」

「何かあるわけ……？」

二人共、人和が何を言おうとしているのか、首を傾げている。

「さつき楽進さんが物凄い形相で姉さん達を見ていたわよ、一瞬殺すんじゃないかと思ったほどに……」

人和の言葉で二人共顔を青くして……泣きそうになっていた。

はてさて……それから休憩を終えて次の仕事場に行こうとしている  
三姉妹を俺達は護衛の任務についている。

まあ、街の見回りもだがな。

さてと、俺はこころら辺で……

「凧、真桜、沙和、お前等はこのまま天和達の護衛に付いている、  
俺は行く」

「隊長は何処に行くねん」

「俺は旅を続けるからここでお別れだ」

『ええー!!』

さすがに急だったかな。

此処に居る全員が口をあけて啞然としている。



「な…そんな突然！」

「ちょっと！いきなり過ぎよ！」

いつも冷静な凧も人和も驚いていた。

「もうこれは決定事項だ、俺を止めるのは無理だからな」

さすがに長居し過ぎたので、早く次の場所に行きたいんだよね。

「なら私も行きます！」

「凧ちゃん！？」

え、そう来たか……いや凧を連れていくわけには行かないな。

これから凧は曹操軍に必要な存在になるはずだ。

「それはダメだ……どうせ、いつかは会えるんだ」

凧の頭を撫でながら説得する。

「……（いつかって……そんな曖昧な答えをしないでください）」

凧はまったく納得して表情をしている。

「ええ、紫郎ともっと居たかったのに！」

「私もだよ」

「私も紫郎さんとはもっとお話したいと思っていたのに……」

張三姉妹も残念そうにしている。

それはそうだろう。三姉妹は紫郎に命を救って貰ったうえに本当なら首謀者として処刑されている所助けてもらった。

そして天和と地和は惚れているみたいだが……まだ曖昧だが、もっと紫郎のことを知りたいと思っている。人と同じくだが。

「隊長が居なくなったら寝れないやんけ〜！」

「そうなの〜！」

この二人は……最悪だ。

紫郎がいなくなつて……一番苦労するだろう。

「そう、そう、華琳に伝えておいてくれよ。」「また会おう」「ってな」

華琳に一言ぐらい言っておかないと……うん、後が怖いな。

「それと、凧は基礎練習と体力づくりは欠かさずやるようにな、今の凧に足りないのは基礎と体力だから」

これは春蘭との戦いで気付いた事だ。

接近戦で春蘭に直撃を加えられなかったのは……まだ技にキレが無かつたって事だ。

まあ、三日で、いやダイオラマ球内だから……一週間であのぐらい強くなれたんだから大したものだよ。

「分かりました。精進します」

暗い表情を浮かべながら返答する凧。

「うん、じゃあ俺は行くぞ！」

そういつと街の門の方に向かって行った。

（ 凧 side ）

師匠が遠ざかってゆく。

なんだか……胸が苦しい……なんでなんだろう。

「凧、何か言いたい事がありそうな顔をしてるでー」

真桜……私はそんな表情をしているのか……？

一体なんで……

「凧ちゃん、隊長の事が好きなんだよ！……（まあ、私もだけど……）」

沙和が急にとんでもない事を言い出した。

わ、私が師匠の事が、す、す、好き！？

「じゃあ……で質問をするぞ。ウチが隊長に抱きついたらどう思う……？」

真桜が……師匠に……無性に殴りたい、真桜を……

「その様子からせや……ムカついでるんやな！」

真桜は何か分かったのか、口をニヤつかせてこちらを見ている。

「じゃあ、沙和が隊長に接吻をしたらどうする？」

今度は沙和か……せ、接吻だと！？……それは……殴る、そして私が……って何を考えてるんだ、私は！？

「なんで急に顔を赤くしたのか？」(ニヤ)

沙和も真桜と一緒にニヤけている。一体なんなんだ。

「呶、その反応は完璧隊長に惚れてるわ」

「そう、そう、初々しいの」

そうなのか……？これが世に言う……恋といつものなのか……／＼／

「早くしないと隊長が門を通り過ぎちゃっぞ」

「早く行った、行った」

真桜も沙和もありがとう。なんだかスッキリしたよ。

師匠、貴方にこの思いを伝えたいと思います！

凧は紫郎が歩いて行つた方に走りながら向かった。

真桜と沙和はその背中を見ていた。

「沙和、ウチは気付いてるでえ。あんさんも隊長に惚れてるって事をな〜」

「それを言うなら……真桜ちゃんだつて〜」

二人は笑いあっていた。

二人共気付かない間に紫郎に興味を持っており、何日か過ごしているうちにどんどん紫郎に惹き寄せられていた。

「まあ〜今は不器用な親友に譲るんやけどな〜」

「今回は凧ちゃんに譲るの〜」

二人は別に嫌でもなかったらしい。

親友の恋を応援するのは友達的位置じゃ、普通は協力するんだと思うんだが……

今回は別だ、まして自分が惚れている相手をサポートするのは、普通嫌なはずなのだがな……

「まあ、今回だけやがなww」

「そうなのー今回だけなのww」

二人は笑いながら三姉妹の護衛の仕事を続けた。

〽風 side out〽

さてと、ここからどのぐらい掛かるのかな……？

まあ、ユツタリ行こうか……

「…師匠〽!!」

んっ！後ろから風の声が聞こえたな。

なんかよつか…？まさか付いて行きたいって言うんじゃないんだろうな？

「師匠！あのですね……あの～です、ね／＼／」

急に来たとおもいきや、急に照れだしたぞ！

「わ、私師匠の事が好きです！　ずっと好きでした／＼／」

……？……って、ええ～俺ってなんか好きになる事したか…？

「だから私……ずっと師匠の事待ってますから／＼／」

そういうと凧は走ってどこかに行こうとしたのだが……

「ちょっと待ってくれ、凧……」

紫郎はそれを止めた。

「まだその事について……返事は返せない……だけどこれを持っていてくれ凧」

俺は凧に青の首飾りの勾玉を渡した。

「これは…？」

「それは俺と凧がずっと繋がっていられるものだ」



俺は最悪だな……風は勇気を出して言ってくれたのに……

本当に最悪な男だ……

「はい、絶対に離しません！絶対に！」

風は嬉しそうにそれを握った。

本当に嬉しそうに初めてあんな嬉しそうな表情を見た紫郎は……一瞬だけ胸がドキッとなった。

「ごめんな、本当に……」

紫郎は深々と頭を下げて謝罪した。

「いや、いいですよ……私はこの思いを伝えられただけで……」

「だけど……」

紫郎は風が良いと言っても引き下がらなかった。

でも紫郎の中で罪悪感がうずめいており、それを許せないらしい。

「じゃあ……次に会った時に……」

「会った時に……？」

凧は何かを言おうとしているのだが……ちょっと照れているらしい。

「私に一日付き合ってください」

凧の要求はそんな事だった。

「それでいいのか？」

「はい、私は師匠と一緒にいれば、それだけで幸せですので…／／」

凧は照れながら、そんな恥ずかしいことを言った。

「ああ、分かった、約束するよ／／」

紫郎も珍しく照れているらしい。

「じゃあ、また会おう、絶対にな！」

「はい」

それから紫郎と凧は別れた。

凧は城に帰る道ので嬉しさ全快にしながら勾玉を見ていた。

真桜と沙和は華琳に報告していたのだが……なぜ止めなかったのかと、問われていた。

張三姉妹は紫郎が行ってしまった事で仕事に身が入らなかったらしく……サボったらしい。

そして華琳に怒られるのであった。

第二十五話 いざ、尋常に勝負！ そして別れ……だが、意外な展開……？（後書

更新できなくてすみませんでした。

今回の話はなんというか……詰め込みすぎました。

今回は駄作になってしまつかもしれません。まあいつもののが駄作ですけどねww

それとオリキャラを出そうと思っていたんですけど……やっぱりやめました。

これ以上人が増えると書きづらくて……

～次回～

「逝くでえ～」

「恋、逝く！」

「三対一というのは、気が退けるが……コイツが噂ほどの強さなのか調べるためだ」

三人の武器が紫郎に向けられている。

紫郎は一体どうなったらこうなったのか……？

第二十六話 いざ洛陽へ！（前書き）

久し振りに更新。

## 第二十六話 いざ洛陽へ！

第二十六話 いざ洛陽へ！

凧達と別れてから三日でやっと洛陽に着いた。

三日間の間で特に変わった事はなかった。

だが、桃香達と雪蓮達から念話がきたぐらいかな。

桃香達からは「元気でいますか？」「寂しいですよー！」とか色々  
と愚痴を言われたり、心配されたり……

ただどー番驚いた報告は、白い髪の幼女が目を覚ましたという事だ  
な。

名前もヘルと名乗ったそうだ。後探し人は三人か……

桃香達には大事な客人と扱ってくれと言っておいたので大丈夫だろ  
う。

だけど……俺って今、洛陽に向かっているから当分は戻れなそうだ。

雪蓮達も着実に袁術の元から独立する為に力を蓄えている。

内政も軍備も順調に進んでおり、冥琳や祭の負担が大分和らいだらしい。

明命や亞莎のような新参者の育成も順調らしい。

……そういえば、一回ぐらい袁術に会っておけば良かった……

・  
・  
・  
・

さてと、洛陽に着いたのはいいけど……まずは腹ごしらえだな

「ちょっと、その貴方！」

ご飯を食べる場所を探していると後ろから声を掛けられた。

「はい、なんでしょうか……??」

振り返って見ると……眼鏡を掛けた緑髪の少女が話しかけてきた。その後ろに寄り添う様に白髪の少女が居た。

）　　？　？　？　　s i d e　　）

今日は詠ちゃんと一緒に街へ行く予定なんです。

そして今、詠ちゃんと街を徘徊しているんですけど、民の皆さん元気があっていいですね。

これも詠ちゃんが内政に力をいれてくれておかげです。

皆さんニコニコしていてとても楽しそうですね。何よりです

……あれ！？詠ちゃんが何か見えています…？

私はそつちの方を見ると……金髪で顔が整っていて背が高い男の人がいました。

詠ちゃんはその人が気になっているのかな…？

何か探しているみたいで、キョロキョロ周りを見えています…？

「詠ちゃん、あの人が探しているんじゃないのかな…？」



困っている人がいたら助けた方がいいよね

「月……逆に考えれば怪しいとは思わないの？」

……詠ちゃんが言う事は正しいけど……でもほっとけない。

「分かったわ、私が話しかけるから月は見ていなさい」

「うん」

やっぱり詠ちゃんはいいい友達です

） 月 side out ）

・ ・ ・ ・

「そうなんですか、貴方は旅の人だったのですね」

眼鏡を掛けた緑髪の少女が話しかけてきた。

「ああ、そういえば自己紹介はまだでしたね」

紫郎は初対面の人には敬語を使うらしい……

「自分の名前は櫻井紫郎、真名はないので、紫郎と普通に呼んでくれるとありがたいな」

「「えっ！……ええ！」」

二人共紫郎の名前を知った直後に大声で叫んでしまった。

二人共紫郎のことを知っているようだ。

「もしかして“金獅子”って呼ばれている……？」

眼鏡を掛けた緑髪の子がズレた眼鏡をなおして聞いてきた。

「一応そう呼ばれているみたいだね、まったく困ったものだな」

紫郎は頭を掻きながら苦笑してその問いに返答した。

「その反応からして本当みたいね……月……ちょっとこっち来てくれない」

二人共納得したみたいだが緑髪の子が白髪の子を呼んで後ろを向いてコソコソ話をしている。

「私の話を聞いてね、月……（コソコソ）」

「……さすが詠ちゃん、それ良いね でも……（コソコソ）」

二人共だけで盛り上がっているみたいだ。

ここは楽しそうにしている二人の為に邪魔者は消えますか……

「じゃあ自分は此処で失礼します……」

紫郎はそそくさとこの場から立ち去ろうとしたら……

「ちょっと待って!」「ください!」

「うおっ!びっくりした!」

紫郎はいきなり両手を二人に掴まれて引っ張られたのが相当驚いたのだらう。

「ねえ、ちょっと私達の所に来てくれないかしら…?」

緑髪の子は急に凄い事を言い出した。

緑髪の子は普通に言ったのかもしれないのだが……紫郎は……

「それは誘っているのか…? 聞に…?」

紫郎は何を勘違いしたのか……凄い事を言っている……!

「なっ!?! / / /」「はへえ!?! / / /」

二人共びっくりし過ぎて変な声が出ている。

緑髪の子は薄く頬を染めているが、白髪の子なんて顔を真っ赤にしている。

「なっ!?!? 何を勘違いしているのよ……! 城に来て欲しいのよ……!」

緑髪の子が物凄く訴えている。

ああなるほどな。納得した！

「いいですよ、自分も此処の領主に会いたかったと思っていましたので！」

紫郎は丁度ご飯を食べた後に行こうとしていたので、丁度いいと思  
いそれに答えた。

「えっ！あなたはゆ……っ！……董卓様に会いに来たの……？」

二人共またもや驚いている。白髪の子は苦笑いをしていた。

それに緑髪の子は何かを言おうとして一瞬『しまった！』という顔  
をしていた。

……怪しいな……

「えっと」「紫郎って呼んでくれていいからね」……は、はい！紫  
郎さんは何のために……その……董卓様に会いに来たのなんのため  
にですか？」

白髪の子が苦い顔をしながら話してきた。

白髪の子は何かを隠しているみたいにも思えた。

「ただ単に会って話をしてみたいと思っただけでね、これでも自分は色々と旅をしているんでね……他の城の領主にも会ったりしたからさあ……」

紫郎は色んな所で色んな出会いをしている。

それも全部がこれから出てきそうな有力な人ばかり……紫郎には何か企みがあるらしい。

「そうなんですか？……（この方なら私の正体を明かしてもいいかな？……ブツブツ……）」

白髪の子は何かを真剣に悩んでいる。下を向いて何かをブツブツ言っている。

「ここで話すのもなんだから……行くわよ！」

緑髪の子が言い出した。

「行ってくつて何処に……？」

俺の頭にはある程度予測がついていたが……

「決まっているでしょう！ 城によ！」

やっぱりですかwww

二人は前に立って紫郎を案内した。

案内している間に二人は何かをコソコソ言い合っていたみたいだが、紫郎には聞こえていなかった。

・  
・  
・  
・

おおー！！俺が寄った中でも一番立派な城だ。まず第一に城が大きい！第二に庭が広い！第三に中も大きく広い！！

単に大きい、立派、広いつて事だ。

「この扉の先が玉座だから、そこで待っていてください。」

白髪の子がそういつと緑髪の子と一緒にどこかに行ってしまった。

あの二人何か隠していたな……てか名前教えてもらってないぞ!?

…うん……まさか、な。

紫郎はある予測を思ったみたいだ。

「さてとじゃあ玉座で待たしてもらいますよ」

紫郎は扉を開けて中に入っていった。

この後に待ち受ける事を紫郎は予想もしていなかった……

・  
・  
・  
・

さて、中に入ったのはいいのだが……

「へえ、ほんなら、あんさんが今、噂になっている“金獅子”なん



やな？」

今……俺は玉座に入った瞬間目の前に居た女四人に話を聞かれている。

まったく……誰かいるなら言っといてくれよ！

今、話している人はサラシを巻いており、関西弁を言う人だ。

「貴様が金獅子か……よしっ！勝負しろ！！」

白髪のいかにも武人って感じの人が挑んできた。

だけど……サラシを巻いた人に止められている。

「ダメ、華雄じゃ、この人には勝てない」

今、話したのはぼややんとした天然系みたいな少女だ。

だが……この子はかなりできるな。

「こいつが今、噂になっている“金獅子”ですか……確かに、噂で聞いた通りの容姿をしています。」

帽子を被ったロリが言った。

……まったくこのどいつがそんな噂を流したんだよ。

紫郎は内心困り果てている様子。

「……後でいくらでも戦ってやるよ、それより自己紹介をしてなかったな、俺の名前は櫻井紫郎、真名がないから気軽に紫郎って呼んでくれ」

俺がそういうと此処に居る皆は驚いていた。

「ちょっと待ちや……なんで真名がないん？」

「……お前も私と同じなのだな」

「不思議……」

「それは変です〜!」

一気に質問攻めをされる紫郎であった。

「はい、はい、何か盛り上がっている所悪いけどこっちは注目してくれないかしら」

玉座の方を見てみると、先程別れた、緑髪の子と豪華な服を着た白髪の子が居た。

「紫郎さん、私がこの洛陽の領主の董卓です」

礼儀正しくお辞儀をしてきた。

やはりな、思ったとおりだ……街の中で会ってから違和感があった……だが、城に入ってから確信した。

この二人は城の門番や使用人が全員丁寧に挨拶をしていたんだ……これを可笑しいと思わずしてなんぞ。

……実をいうと……もうこの世界についての記憶が思い出せないんだよ。ただし将の名前は覚えているのだが……顔が思い出せない。

これは実に困った……もうこれから先何が起こるか分からない……だが、何故だか胸が躍る。気持ちが高ぶる。

この高揚感はとてつもなくたまらない……フッフ……ハハハ……

「ちよつと紫郎！？何か反応しなさいよ！？……あっ！ついでに私は賈馱よ。」

紫郎が何か考え事をしている時に賈馱は自分の名前を紹介した。

「おっと！？少し呆<sup>ほう</sup>けていた……なんとなく君が董卓じゃないかと思っていたんだが、まさか当たってしまったとわね。」

紫郎は髪を弄りながら言った。

この董卓と賈馱は心底驚いたらしい。目を大きく開いていた。

董卓も賈馱も今日会ったばかりの人に、しかも先程少しの時間で見抜かれるとは思ってもいなかっただろう。

「だけど当たってて良かったよ」

紫郎は苦笑しながら言ってみせた。

「へー／／／」

その笑みに少し頬を染めた人が居たのは秘密だ。

「「良かった」ってどういう意味よ……？」

この場に居る全員が何のことをいっているのか分かっていなかった。分かるはずもなかった…



「ちょっと!?!あの雰囲気から急にこれって……まあいいわ、城の庭で戦っていいわよ。」

賈馱はツッコミをいれるもの二人は全く反応しなかったから呆れあきてしまった。

賈馱の言葉を聞いて紫郎と華雄は玉座を後にした。

「うちらも見に行こうや、恋!」

サラシの女性は赤髪の子に話しかけていた。

「恋も行く」

赤髪の少女も行く同意。

「恋殿が行くなら音々音も行くです」

帽子を被った少女も行くつもりだ。

「詠ちゃん、私達も見に行こう!」

「月!?!(あれ……?月ってこんなに積極的だったっけ?)」

董卓という子は賈馱に詰め寄り話しかけていた。

賈馱は内心目の前に居る月にびっくりしていた。いつも初対面の相

手には恥ずかしがっていた子がこつも積極的になるとは思ってもいなかったらしい。

「……じゃあ私達も早く見に行こう」

全員、紫郎と華雄の後を追った。

……だがこの後起こる事は誰も予想はできていなかった。だが……紫郎だけはもしくは……予想がついていたのかもしれない。

・ ・ ・ ・

今、城の庭には二人が向かい合っている。

それからちよつと離れた所に見物人がいる。

「準備はできたか……？華雄……？」

紫郎の手には刀身の長さ推定百八十センチ以上ある剣を持っていた。

この武器は紫郎が創造した物だ。まあ某伝説のソルジャーの愛刀なんだがな。

「それはこちらの台詞だ、なんだその身の丈以上の長い剣は…？それで私に挑むというのか…？」

華雄は苛立っていた。なぜかという相手があんな大きな武器を持つて自分に挑んでくる事に対して……

華雄は紫郎があんな武器を扱えるとは思ってもいならしい。

「ああ、肩慣らしには丁度良いと思ってな。さあー始めようか！」

紫郎が挑発的な言葉を言ってみたら……

「貴様あー！言わせておけばあー！」

紫郎の言葉にムカついて戦斧を振りかぶり紫郎に突撃して行った。

もう我を忘れている。とにかく目の前の敵を叩き潰す事しか頭に無いらしい。

「はあああー！！！」

華雄は渾身の力を込めて振りかぶった戦斧を振り下ろした。



ガギン！

だが、その一撃は軽々と止められてしまった。片手に持つ長刀によつて……

「おい、おい、やけに言つてたわりにはその程度なのかよ……」

紫郎は片手でその攻撃を防いだ。だが、攻撃の余波で地面が少し陥没していたのにもかかわらず「その程度」で済ますとは……

「ば、馬鹿な！！なんで！」

華雄は渾身の一撃を止められ、なぜだか恐怖を感じた。

目の前に居る男はまるで何でもなかったのようになっているからだ。

「いいか、華雄」

紫郎は優しく口調で言つてのけた。

「力とは……こうゆう事だ！……」

紫郎はあえて一般人にも見える速さで動き、華雄自身を攻撃せず武器である戦斧に攻撃をした。

「なっ！（これは戦斧で防ぐしかない）」

華雄は意外に冷静だった……だがその攻撃は……

ガキイイン！！

「ぐうーくそおお！！」

ドゴオオオン！！

華雄は城の城壁まで吹き飛んだ。

だが単に吹き飛んだんじゃない。華雄は喰らった瞬間はその場に踏ん張っていたのだが、その重さと力に勝てずに吹き飛んだのだ。

……だがこれだけでは終わらなかった。

キイイイン！！

紫郎は後ろから来た攻撃に対して後ろ振り返らずに刀を後ろに回し構えて受け止めた。

後ろから攻撃してきたのは

「随分と強いやないか、ウチらも混ぜてや！」

サラシの女性が偃月刀を持ち紫郎に攻撃していた。

「恋も混ぜる……」

赤髪の少女も方天画戟を持ち構えをとっていた。

「そこなくちな！」

紫郎はこの展開を予想していたのか……

「恋、勝てる気がするかいな？」

サラシの女性は後方に下がり、一時的に紫郎から距離をとった。

そして距離をとりながら赤髪の子に聞いた。

「……無理、こんなに隙の無い人は初めて……でも負けたくない。」

赤髪の子も一時的に距離を取った。

紫郎から見て、華雄という人より強いというのが感じ取れていた。

それだけに齒応えがあつて欲しいと願っていた。

「そういえばまだ自己紹介せえへんかったな、ウチは張遼文遠や。」

「……呂布奉先。」

なるほど……この二人ですか。それは齒応えがありそうだ。

紫郎は柔和な笑みで二人を見ていた。

「ほな、逝くでえ！金獅子！」

「恋も逝く！」

二人は一斉に仕掛けてきた。

神速の速さで攻撃を繰り出し、当たればまず即死であろう攻撃を繰り出す二人。

それを軽々と避け、刀で捌く紫郎。

この殺人空間に入れるのはまずいなだろう。

紫郎もただ黙って攻撃を受けている訳では、攻撃の隙を狙って的確に反撃をしている。

呂布と張遼はそれを受け止めるだけではなく、軽く受け流しているものの、その顔は苦しそうな表情をしている。

く張遼 side く

なんなんや〜こいつわー!!

ウチは初めてこんな奴に会ったかもせえへん。

今、ウチと恋がごっつごっつ攻撃してるちゆうのに掠りもせえへん。

それだけやない！攻撃に隙あらばすぐにも反撃してきよるし……

しかもその攻撃の重さっていうたら、ウチが受け流したつもりなのに手が痺れてしまうほどの斬撃やでえ！

まさか……恋以上に強い奴がいたとは……こりゃ、恐ろしいことだわww

だがな、それ以上にこれ以上おもしろい事はないきん。

恋だつて必死そうな必死そうな表情をしているや、ウチもそれ以上に必死なんやよ。

まあーそれ以上に興奮しているやけどな。

金獅子に……いや、紫郎にどつやって一撃を喰らわすかでウチの頭はいつぱいや。

〈張遼 side out〉

それからどれだけ経ったのであろうか。

一分、二分、いや、もしかしたら一時間かもしれない。

それだけ打ち合っているのに紫郎は息を乱していない。それはおろか傷一つおっていない。

……それに比べ

「はあはあ、さすがは金獅子やな。」

張遼は偃月刀に支えにして立っている状態だ。そこまで疲労したという事だ。

「はあはあ、強い」

呂布も自分で立っているものの苦い顔をしている。

「さすがにやり過ぎたか、じゃあこれで最後にしようか」

紫郎は刀を横に構えた。

「なんや、ウチの頭が『避ける』ちゅうてる」

張遼は肌で何かが来ると悟り警戒した。

「……！？……霞、今すぐその場を離れて！」

「えっ！？恋？」

凄い必死の呂布に対して、そんな表情をはじめて見た張遼は驚きを隠せない。

だが、それを聞いて張遼は呂布の言う事を聞いて後ろに大きく飛んだ。

それを見てた紫郎は……

「それでいいぞ、さてとじゃあ特別にいいものを見せてあげよう。」

紫郎は張遼が後ろに下がった事に満足したのか、何かをしようとした。

「かわせるか」

紫郎が横一闪に刀を振った。

傍目は武器を一振りしただけに見える……だが、

「なんなんや、これはっ！？」



張遼は自分が先程まで居た地点に複数の斬った後がついていたのだ。その地面は無残にも抉られており、これを生身の人が受けたりしたら……細切れだろう。

「うん、やっぱり張遼も呂布も強いね、満足、満足。」

紫郎が満足そうな表情で刀をしまった。

ただ単に紫郎の能力の一つである、無限倉庫の中にしまったのである。

「ちよい待ち！急に終わらせてもって、まだウチらは戦えるちゆうのにー！！」

張遼は紫郎に駆け寄って戦い足り無そうにしている。

「霞、恋達じゃ、この人には勝てない。」

恋も紫郎の傍に寄ってきた。でも疲れている表情は見えない。

「さっきの変な技みたいのをみたら疲れなんて吹っ飛んだわい。」

張遼はますます紫郎に近寄って、戦えと言っている。

「……言い難いんだが サラシが切れてるぞ。」

紫郎は張遼と目を合わさずに横を向いていた。

そして戦いの中でいつの間にか切れていたサラシの事を言っていた。

サラシが切れて胸がモロに見えているのだ。

「へっ???……………／／／(スタスタ)」

張遼はその言葉を聞いて、一時停止、それから胸を隠しながら紫郎から少しずつ離れて行った。

「ちよいつと待て張遼。」

紫郎は自分の羽織っている着物を張遼に掛けてあげた。

( 紫郎の服装は学ランから某妖怪の孫の夜のり オミtainな服装 になっている )

「これで隠してすぐに巻き直してきなさい。」

紫郎は張遼から顔をそむけながら言っている。

……紳士的対応……？それとも恥ずかしいのか……？

「……おおきに／＼／＼」

張遼は恥ずかしそうにして、城の中に走って行った。

「……紫郎おゝあんた何か言う事はないのかしらー？」

張遼が消えた後すぐに賈馱が紫郎を問い詰めに掛かった……口を引き攣らせながら……

賈馱はこの戦い現状に対して言う事はないかと聞いているみたいだ。

「言う事が……」

紫郎はそういつと董卓に近付き……膝をついた。

「じゃあ客将としておいてくれないか？」

ここにいる誰もが予想しなかっただろう。

ついさっきまで呂布と張遼を相手に軽く戦っていた人が軍列に入れて欲しいと言ってきたのだ。

董卓は金獅子……紫郎の噂をよく耳にしていたのだ。

民のために武勇を振るい、時には国の領主とも共闘して戦ったりと、色々と噂を耳にしていたのだ。

だが、どこの軍にも留まらず、誘いもされるが断っているというのも耳にしていたのだ。

……けれど今、その人が膝をついて入れてくれと言っているのだ。

これを驚かすして何を驚く。

「……えっ！　なんで、何か理由があるんですか…？」

董卓も信じられないという表情で紫郎に聞いた。

「……理由か……それは、な。」

紫郎は一瞬黙り、すぐに口を開いた。

「それはな、君に危機が迫っている、それを助けたいからだよ。」

紫郎は刹那そうなものを表情をしながら言った。

「……危機……？（へうへう）顔が熱い……顔に出てなければ良いのだけれど／＼／＼」

董卓は危機という言葉が気になり聞き返した。だけど頬が少し赤くなっていた。

「ちょっとそれは一体どういう意味よ！ってというか、アンタ私の事無視したわね！！」

隣に居た賈馱がすかさず反応した。

賈馱は結構紫郎に相手されていない様な気が……

「……なら自分の金獅子以外の呼ばれ方なんでしょう……？」

紫郎は自分が天の御遣いという噂も流されているのを知っていたのだ。

「えっ！？……あっ！？もしかして 「天の御遣いだろ」 あう  
く私が言おうとしたのに……」

董卓が言おうとしたら、後ろから……

「華雄！アンタさっきまで城壁に埋まって気を失っていたんじゃないな

いの？」

賈馱はすぐさまに聞いてみた。

「ああ、さっきまで気を失っていたぞ、けど今、目覚めたんだ。」

華雄はなんだか悔しそうな表情をして紫郎を睨んだ。

「まさか、一撃反撃されただけで終わるとは……我ながら情けないものだ。」

自分の武器を握る手に力を入れているのか、拳が震えている。

それほど彼女にとって悔しかったのだろう。

「悔しければ、もっと鍛錬を行なう事だ……」

紫郎はまたもや挑発的な発言をした。

これに華雄は……

「五月蠅い！貴様に何が分かる！！私がどれだけ鍛錬してきたか……  
……どれだけ苦労したか……分かるまい……」

華雄も最初の方は怒鳴った、だがだんだん弱弱しくなっていた。

最後の言葉を言ったら下を向いてしまった。

「……お前の努力の証拠はちゃんとわかっているよ、体に無数の傷跡がある、戦斧の持つ部分が握りすぎて剥がれてきている。それに

」

紫郎はおもむろに華雄の手に優しく触れた。

「この手に出来た肉刺が潰れた後が何よりの証拠だ。」

紫郎はいつの間にか顔を上げていた華雄の目を真剣に見ながら言うてのけた。

その言葉は自分の本心を言ったのだろう。

「……あ、その恥ずかしいだろう／＼／」

華雄は紫郎に手を握られているのに対して恥ずかしそうに頬を染めて、紫郎から顔を背けた。

「あつと！悪いな。」

紫郎は華雄の視線の先にあるもので気付き、すぐさま手を離れた。

……だがこの時華雄は離れた瞬間、一瞬乙女的な表情をしていたの

は余談だがな。

「すまない、話がそれたね。華雄の言ったように自分は天の御使いなどとも言われているみたいなんだが……」

それから紫郎はこの場に居る全員に分かるように説明した。

途中で張遼も合流して、また説明した。

誰もがその説明に……いや、これから起こる事に驚きを隠せなかった。

そう……反董卓連合だ。

「なんで、月が……そんな理不尽な事ないわよ……」

賈馮は涙を流しながら自分の仕える主……こつゆう場合は幼馴染の親友を見ながら涙を流した。

その他の将の方々も悔しそうな表情、暗い表情をしている。

「だから、自分は貴方に……董卓を護りたいから来たのだよ、此処に。」



紫郎はそんな中で唯一笑みをしていた。

他の人たちは「なんでこいつは笑みをしているんだ」と思った表情をしている。

「自分は最初に董卓が民を大事にしない奴だったら断罪するつもりで此処に来た。」

その言葉を聞き、全員に戦慄が走った。

この男は呂布、張遼でも敵わなかったのだ、それなら董卓を殺すのは簡単だった。

「でもね、君が城下にいた時に民を見ながら見せてくれた笑顔で一変したよ。」

紫郎の話を夢中に聞く将の人達。

「この子ならいい領主でいてくれるってそう思ってしまったよ……まあその通りなんだけどね。」

紫郎は自分が言っている事が恥ずかしいのか、皆から視線を逸らした。

「だから自分を客将に入れてくれ。」

紫郎は董卓の前に改めて膝をついてお願いした。

「……もう私の答えは決まっていますよ、私の真名は月です。」

董卓……月が紫郎の目を合わせながら言った。

「こんな話聞かされたら……私の真名は詠よ！（目から涙が出そうだわ）」

賈馱……詠が眼鏡を掛けなおしながら<sup>まぶた</sup>瞼を弄っていた。

「ウチの心にグツとキタわ。ウチの真名は霞や」

張遼……霞はもう腕を組み満足気な笑みを見せながら目尻に涙をためていた。

「……恋は……恋、紫郎は良い人、優しい人、皆もう信用している。」

呂布……恋は紫郎に近付いて握手をしていた。

「……恋殿が認めたらしょうがないです、真名は音々音です。」

帽子を被った口リ、陳宮……音々音は恋の後ろにべったりと付いている。

でもチラチラと紫郎の方を見ていた。

「……お前もそんな事情を抱えていたのか……私に真名はない、華雄と呼んでくれ。」

華雄……真名がないと言った瞬間とても悲しそうな顔をしていた。

紫郎はあえてそれ以上は聞かないようにした。

「いいのか……？そんなすぐ真名を教えて……？」

紫郎は聞いた、なんでそんなすぐに真名を教えてください……？

「それはですね……貴方が信頼に値する人物だからです。」

月が何かを言おうとしている。

「紫郎さんは自分の目的を話してくれました、それだけではなく、私を護つて下さるのですよね…?」

月は年頃の少女らしい笑みで話しかけてきた。

その笑みに紫郎はなぜだか見入った。見入りながら紫郎は首を縦に振った。

「でしたら、信用しないなんてできませんよ、私は紫郎さんを心から信用いたします。」

紫郎は改めてこの子を護つてあげようと決心した。

「じゃあありがたく皆の真名を呼ばせてもらおうよ!」

「はい!」「ふう」「よしやあ!」「うん」「ふっんです!」  
「ああ」

この場にいる全員が微笑みあった。

「ちょっと紫郎、この庭の有り様どうしてくれるのよ!」

賈馱に言われて紫郎は頭を押さえた。

なぜかというところ……先程まで戦っていたこの庭の現状は酷いものだったのだ。

華雄が吹き飛んだ時に城壁に突っ込んで崩壊した場所、紫郎が技を放って抉れた地面など……色々と直す場所があったのだ。

## 第二十六話 いざ洛陽へ！（後書き）

〜技〜

・縮地：複数の剣圧を飛ばす技。某伝説ソルジャーの技。

本当に久し振りの更新です。

最近スランプと風邪になってしまい、自分の気分と体調が最悪でした。（まあ〜今もですけど（笑））

さてと、ストーリーの方も後一話か二話で反董卓連合を始めようと思うのですが……戦い方を言葉に表すのが何かと難しく伝えてもらえないかもしれませんが、そこはすいませんとしか言い様がありません。

前回の次回予告の所とは全然違つとおもいますが……そこはご勘弁ください。

今回の話はもしかしたら変な表現をした文章があるかもしれないので合ったら、ぜひとも注意してくれるとありがたいです

〜次回〜

「私に をくれるのか…？」

「 がないとお前も辛いだろ…？華雄…？」

「 なんや〜ウチらは除け者やな」

「 あの中に入っちゃダメ」

霞と恋は紫郎と華雄をそつと見ている。

## アンケート（前書き）

パソコンの改造をしていたら三週間経っていました。

そして先週から悩んでいた事を聞きたいと思います。



## アンケート

まず一言申し訳ありません。

初めてパソコンを改造したので手間取りこんなに時間がかかってしまいました。

……ですが、実はそれは五日前の話なんですが……

今は……恋姫も書いていますが……

とある魔術の禁書目録と真剣で私に恋しなさいを書きたいという感情が出てきてしまいどちらにするか迷っているんですよ……

皆さんも知っての通り……メルクリウスは更新が遅いという事！！！！

ですから私もとあるかまじこいのどっちかにしようか悩んでいます……（でもパソコン改造中にとあるをもう一度二十二巻まで見てしまったんD A Z E！！）

そして何度もアンケートをしてすいません。

これで何を書くかを決めます。

〈作品詳細〉

とある魔術の禁書目録×恋姫（一部キャラ）

主人公：櫻井 紫郎

マリアに次の世界に飛ばされてその世界がとあるの世界。

アレイスターと同じ時代を生きた生きる伝説（アレイスターとは親友）。

世界中を旅しているゆえに知り合いも多くいる。

能力はそのまま。

恋姫のキャラも一部登場。

おそらくハーレムになるかもしれない。

原作は崩壊します、確実に。

真剣で私に恋しなさい×君が主で執事が俺で×つよきす×恋姫（一部キャラ）

主人公：櫻井 紫郎

マリアに次の世界に飛ばされてその世界がまじこいの世界

体が小さくなっており能力も弱体化している状態。だが歳を取れば取るほど力を取り戻す。

各主要キャラとは思いつきり接点を持つようになる。

世界中を旅しているゆえに知り合いも多くいる。

おそらくハーレムになるかもしれない。

原作は崩壊します、確実に。

このどれかをアンケートしたいんだな、これがな。

一応期限は来年までで御願います。

そしてメリ〜クリスマス〜！

第二十七話 家族 ( ) (前書き)

本当に自分の更新の遅さが頭を傷めています。

今月更新できないかと必死でやりました。ですから誤字脱字あるかもしれないのであったら報告を御願います。

## 第二十七話 家族（ ）

……あの後は全て治しました。……全て創造という力を使い……周りに居た全員が啞然となってしまうたがな。

その後は城の中の地理を把握するために霞と恋と華雄とで話しながら案内をもらった。月や詠や音々音は仕事があるからとかでこの場には居ない。（音々音は恋の側にいるつもりだったが詠に連れてかれた）

……色々と案内されたが、今は城から離れた森にいる。

そして……

「紫郎！私とまた勝負してくれ！」

華雄が頭を深々と下げて言ってきた。

「それぐらいならいいんだが……一つ聞いていいか……？」

「なんだ？」

紫郎はおもむろに先程から気になっていたことについて聞いてみた。

「　　なんで真名がないんだ…?」

「「ツツ!?!」」

「……………」

恋と霞は目を大きく開いて驚いて華雄は苦い顔をした。

「紫郎、それはダメや…!」

「紫郎、それはダメ!」

恋と霞は紫郎に詰め寄り口を押さえに掛かった、が……

「二人共、別に私は気にしていない……」

華雄は別に気にしていなそうな表情をして言ったのけた。

「すまなかった、聞いてはいけない事だったのだな……本当にすま

なかつた。」

紫郎は華雄の前に立ち深々と頭を下げた。

「いやだから別に気にしていないから。頭を上げてくれ。」

華雄は頭を下げている紫郎に近付いて肩にそつと手をおきながら言  
つた。

紫郎は戸惑いながらもゆっくり頭を上げた。

「……真名ないって辛いのか……？」

紫郎は呆れずまだ聞いてのけた。

「辛いって言ったら嘘になるが……な」

華雄は髪を掻きながら困ったように言った。

「……なあ、真名をつけてやるのか……？」

「はあっ？」「

「……………」

華雄と霞は、何を言ってるんだコイツ、という表情をしているが、恋は分かっているようだ。

「…………俺もこの国じゃ独り身だからさあ…………義理だが　　家族にならないか……………」

紫郎は華雄に手を伸ばした。

華雄はその伸ばされた手を真剣に見ていた。

…………とても真剣な目で…………

〈華雄　　s i d e　　〉

私の目の前にいるこの男は、櫻井紫郎。今、噂になっている金獅子だ。



だが、今は仲間になってくれたのだが……

この男は私に真名が無い事を聞いてきた。私もそれなりに気にしている事だ。

私は生まれてすぐに捨てられ、今まで自分ひとりで生きてきた……

自分で言葉も覚えて武術も覚え、今こうしているのは自分が努力した賜物だと思う。

この『華雄』という名前も自分で付けたのだ。

だが……この男は……紫郎は何て言った……？

『 家族にならないか……？』

そんな言葉を言ってくれたのはお前が初めてだ。

なんでだろう……まぶた 瞼が熱くなってきた、そして体の内側から外側に伝わるこの感覚はなんだ……？

……あれ、今日は雨でも降っているのかな……？顔に水がついた。

……これは涙か……そうか、私は泣いているのか。

だけど、悲しくて泣いているんじゃない、嬉しくて泣いているんだ。

こんな感覚は初めてだ……結構悪くないものだ。

私は紫郎の手を両手で握った。

紫郎の手はとても暖かった。

そして紫郎は泣いている私を抱きしめてくれた。

こんな温もりを感じたのは初めてだ。

私は心から紫郎に感謝した。

〈華雄 side out〉

紫郎は自然と華雄を抱きしめていた。

紫郎の胸で子供のように泣く華雄を恋も霞も優しい目で見ていた。

自分達では解決できなかった事をやってのけた紫郎にもっと信頼を寄せてしまふ彼女達。

紫郎も自愛に満ちた表情で泣いている華雄の頭に手を乗せて優しく撫でていた。

やがて華雄は泣き止んできて紫郎の胸元から離れた。

まだ目が真っ赤だったが……先程とは比べ物にならないぐらい綺麗な笑みを見せてくれている。

「…………その話に嘘偽りはないな……？」

華雄は紫郎の瞳を見て言った。

「ああ、自分の本心を言ったまでだ。」

紫郎もそれに応えた。

華雄の瞳をしっかりと見て自分の本心を言った。

「……………」

華雄は少し間をおいて……

「……………あ、ありがとう……………これから宜しくな／＼／」

華雄は頬を掻きながら照れている。表情はとても嬉しそうにしているが……………

「……………あんたら……………ウチらの存在忘れてるやろ〜!〜!」

「……よかったね、華雄。」

霞がちょっと怒っているみたいだが、恋は嬉しそうな顔をしている。

「すまなかったな、二人共……そろそろ陽も落ちるし、城に帰ってご飯の準備でもしますか。」

紫郎はそう言うと華雄の近くにより……

「後で話があるから部屋に行くわ」

紫郎は華雄にだけ聞こえるように言って、城の方に歩いて行った。

「こら！待ったんかい！！」

霞は歩いて行った紫郎の方に走っていった。

「ご飯……何をやるんだろっ……？」

恋もお腹をすかせた子犬みたいに猛ダツシユで紫郎の後を追った。

「……………話とは一体なんだ……………」

華雄は首を傾げながら二人の後に付いて行くように歩いて行った。

（夕食）

陽も沈んで皆がお腹を空かせている時間。

「これは凄いですね！」

月がテーブルに並べられている料理の数々を見て驚いている。

「本当ね、今日はずいぶんと豪華な料理なのね」

詠もいつもとは違う料理に月よりか驚いていない様子。

「それにしてもこんな料理今まで見た事無い様な……?」

音々音は目の前の料理に疑問を感じていた。

「それはそうや！なんたって紫郎が作った天の国の料理やから！な  
あー恋……?」

霞は何故だか自信満々に恋に聞いている……だがその恋は

「……………(ゴクッ)」

目の前の料理を食べたい衝動に耐えているようだ。

霞の声は聞こえていないようだ。

「なるほど、それなら納得できるわね。で、その紫郎は何処に行っ  
たのかしら……?それに華雄も……?」

詠は疑問が解けたみたいで納得した模様、音々音も。

詠はふとこの料理を作った張本人と華雄がない事を聞いた。

「さあ、料理を作って私等に月達を呼んで来てくれ言われて何処か行ったんよ」

霞も目の前の料理が美味しそうだとまらなそうだ。

詠に話しているにかかわらず顔は料理の方に向いている。

「すまなかつたね、待たせて。」

「遅れてすいません。」

話をしていれば本人達が登場した。

「早くするです〜！恋殿を待たせるなです。」

来て早々音々音が怒っている。

「待っていましたよ、紫郎さん、皆揃ってご飯食べたほうが美味し



いでもん」

月がまるで花のような笑みで紫郎達に言葉を言った。

「ありがとうな、月。」

紫郎と華雄はそれぞれ席に着いた。

「それ全員席に着いたところで いただきます」

「「「「「いただきます 「「「「「」

皆一斉に箸を握り食べ始めた。

・ ・ ・ ・

「ふう〜食べた食べた。」

霞は幸せそうな表情をしてお茶を飲んでいる。

「恋、満足」

恋も満足そうな表情をしている。

だがその目の前には山のような皿が積んである。

「音々音も美味しかったと言っておきます。」

音々音も強気な態度をとっているが食事中は恋も顔負けの食べっぷりだった。

「とっても美味しかったですよ、紫郎さん。」

月は食事中も「美味しい、美味しい」「っとすごい言っていた程絶賛だ。

「月の言う通りね、天の料理は絶品ね。」

詠も何時もとは違い素直に紫郎を褒めていた。

「私もこんな美味しい料理は初めて食べたぞ。」

華雄も絶賛し褒めまくっている。

「皆ありがとう……あのさ、ちょっと話したい事があるから聞いてくれないか…？」

紫郎は皆に微笑みながら感謝の言葉を言った後に真剣な顔になって話し始めた。

この場に居る全員がその表情を見た瞬間「なにかあるのか…？」という表情をして疑問に思った。

だが、華雄だけは何かを知っているみたいだ。

紫郎が真剣な表情になった瞬間体がビクツツと反応していたのだ。

「皆も知っているとと思うが　華雄に真名が無いことを…」

ここにいる全員知っていることだった。

それは言うてはいけない事だと……

だが、先程紫郎と居た霞と恋はそれに対しあまり反応はしなかった。

バン！！

「紫郎お！あんたそれは言っちゃいけないことでしょうがぁ！」

詠はそれにすぐさま反応し椅子から立ってテーブルを勢いよく叩いた。

月は驚いて体がビクツツと反応させていた。

「そんな事は分かっている……だが安心してくれていい、もう解決したから」

「……はあい……？」

「……？？」

紫郎は詠を手で静止させて落ち着かせ言った。

華雄以外全員が啞然としている。

恋は首を傾け『なんで』という表情をしている。

「ちよい待ち、解決したとは聞いてらんど」

そこにすかさず反応したのは霞だ。

「霞が知らないのは当たり前だ、つい先程解決したからな。」

そこに口を挟んだのは華雄であった。

華雄はなぜだかとてもいい笑みをしながら話していた。

「さつき遅れてきたのがそれだ。」

紫郎も華雄の方を見ながら二人は頷きながら……

「私達は家族になったんだ。」

二人の言葉はシンクロした。

まさに二人の表情はとても嬉しさが現れている。

華雄は誰もが見た事もないほど清しい笑みを浮かべていた。

「そして自分が華雄に……いや」

紫郎はそこで間をあげ華雄の方を見た。

華雄は紫郎の方を向いて頷いた。

「  
優奈なつめという真名を付けたんだ。」

「「「「ツ！！！」「「「「」

これは全員が驚くしかなかった。

真名の重要性は全員十分理解している。それほど大切なものを名付けたのだ。

華雄は真名を呼ばれて嬉しいのか紫郎の方を見てうっとりしている。

よく見ると頬が赤い。だがそれに気付く者は紫郎だけだった。

「今日から私の真名は優奈名乗る。月様、それから皆には私の真名を受け取って欲しい。」

華雄改め優奈が皆にそう言った。

「……分かりました。私はその真名貰い受けます、これから宜しく御願います、優奈さん。」

月は優奈の真名を素直に受け取った。なんの躊躇ためらいもなしに……

「えっ！！そんなに抵抗もなしに受けちゃっていいの、月……？」

詠が月に言った。

普通は少しは戸惑うものなのだろう……だが、月はそれをすんなり了承したのだ。

詠が疑問に思うのも無理はない。

「詠ちゃん、優奈さんの顔を見てみたら分かるよ。」

詠はそう言われて見てみた。

他の人も優奈の方を見てみた。

「……納得よ、月が納得したり理由が一瞬で分かったわ。」

「詠と同じや、あれは納得せざるおえないや」

「優奈、優奈、優奈、うん……これからそう呼ぶ。」

「まさかあんな嬉しそうな笑みを見るとは……でも月様が納得した理由は分かったのです。」

全員納得した。

優奈の表情は今までに見たこと無いほどの笑みだ。

月はいつも辛そうにしている華雄の事を知っていた。

月は紫郎に感謝している、華雄さんを……優奈さんを助けてくれて。

「良きかな良きかな、じゃあ皆これから真名を呼んでくれよ。」

紫郎は空気を読んで黙っていたが皆の納得した顔を見て嬉しいそうにしてその場から立った。

「食後に甘い物を食べたい者は挙手<sup>きょしゅ</sup>」

紫郎は食事を作っている最中にデザートも作っていたみたいだ。



紫郎の言葉を聞いて二秒もしない内に全員が手をあげた。

「やっぱり女の子は甘いものが好きなんだね。」

紫郎は笑いながらそういうと厨房の方に歩いて行った。

↳紫郎以外の全員↳

恋や霞が何が来るのから楽しみで待ちきれないご様子で椅子の上でじっとしていられないでいる。

「優奈さん、私も話したい事があるんですがいいですか…？」

だが月が話し出したら動きを止めて月の話に耳を傾けた。

「はい、何でしょうか」

優奈はずっと笑顔でいる優奈は月に返答するのも笑顔でいる。

「私達も家族だと思っただけですよ」

月は笑顔で言っただけだ。

優奈は笑顔を崩し、一瞬何を言っているのか分かっていなかった。

他の全員も月の急な発言に驚いている。

「優奈さんを心配していたのは紫郎さんだけじゃありません。此処にいる全員心配していたんですよ。」

優奈はやっと理解したみたいだ。

紫郎と同じで家族になろうと言われていいんだと……

「恋も家族……？」

恋が月に聞いている。

「はい 私たちは家族ですよ。」

月は席から立ち、恋の近くまで行き恋の手を握りながら言った。

「はい 恋さんも此処にいる皆さんは家族です。だからこれからは共に支えあっていきましょう。」

月は恋の瞳を見ながらそう言った。

「そつやな〜月の言うとおりもうウチらは家族やな！」

霞は笑みを浮かべながら言った。

その笑みはとても嬉しそうであった。

「そつね……月の言う通りかも、この場でちゃんと言ったいた方が言いわね。さすが月だわ。」

詠は月の発言に対して反発はせず同意をした。

「家族……ですか。」

音々音はそう言つと顔を下に向け皆から見えないようにした。

「ねね、恥ずかしくて。」

「恋殿ッ！！」

恋の位置からだ横顔しか見えないのだが、恋は音々音の頬が薄く染まっているのに気付いたのだ。

恋の発言でその場の皆が笑ったのであった。

だが一人……

「……グスッ」

優奈が一人だけ笑っておらず……

「うえええ〜ん」

一人泣き始めていたのだ。それも号泣。

「ええ、ちよいと待ち、ウチらどこかで泣かすような事したかい？」

皆がその場から立ち、優奈の周りに集まった。

「い、いや、違うんだ、これは、嬉しく、てな。」

優奈は涙を拭いながら言葉を言ったのだが、どうも上手く喋れないみたいだ。

「おいおい、皆で優奈を苛<sup>い</sup>めているのか…？」

その言葉を言ったのは厨房から帰ってきた紫郎であった。

「なわけないでしょうがぁー！」

詠はすかさず反応し紫郎に近付いて行った。

「おっと！詠、殴るなよ。君らの好きな甘い食べ物と落としてしま  
うからな。」

食べ物と聞き恋がすかさず席に着いたのは全員が驚いた。

「さてとじゃあ皆家族になったことだし、一件落着だ。」

紫郎は全員の前でデザートを置き自分も席に着いた。

「あなた……聞いていたんでしょ？」

詠が眼鏡をあげながら鋭い視線を送っていた。

「まあな、さすがにあの場で入るのは空気が読めていないしな。」

紫郎はずっと廊下で待っていたみたいだ。

「さてと食べますか、この食べ物は天の国のだがちょっと改良した

から美味しいかは……保障しないぞ。」

皆が一瞬手が止まったが、恋の手だけは止まらず、それを口に運んでいた。

「…………ツツ!!」

恋の動きが一瞬止まった。

恋の瞳は大きく開いてまさに驚いているみたいだ。

「美味しい、美味しい!!」

恋はその言葉を言いながら手を止めることはなかった。

「さすがは“ホットケーキ”恋も絶賛だな。」

紫郎も一口食べて味に納得した模様。

さて、なぜこの時代にホットケーキが作れたのかというと……

紫郎の能力の“無限倉庫”に入っていたみたいだ。

しかも色々な本もあり、料理本まであったという。

「おかわり」

紫郎が味に浸っていたら恋はもう全部食べていたのだ。

お皿の上は何も乗っていなかった。

「了解、余分につっておいてよかったわ。取って来る間に自分のを食べていていいぞ。」

紫郎は自分の皿を恋に渡して厨房に余分についたホットケーキを取りに行こうとすると……

「紫郎、ウチもおかわり」

「紫郎さん、私も」

「紫郎、私もよ」

「おかわりです」

「ぜひともおかわりを」



他の女性人もおかわりと言ってきた。

やはり甘いものは別腹らしいと紫郎が思ったのであった。

「分かった。（これは全部なくなるなww）」

その後余分に作り過ぎていたホットケーキは全部女性人が食べてしまった。

その後はこの料理の名前や作り方を聞かれて大変だった。

だが、ここまで波乱な一日を楽しんだ紫郎であった。

第二十七話 家族（）（）（後書き）

どうも〜

もう2010年も終わりですね。全然更新できなかつたのが自分の心残りですが来年はもっと頑張りますので、今後も宜しくお願い致します。

それでは良いお年を。

NANOさんからの意見を頂いた華雄の真名の名前を採用しました。

NANOさんありがとうございます！！

華雄の真名はこれから“優奈<sup>ゆいな</sup>”と名乗らさせていただきます。

第二十八話 洛陽での日常（前書き）

遅くなってすいません。

誤字脱字があつた場合は報告を御願ひします。

## 第二十八話 洛陽での日常

あれから一週間が経った。

自分が董卓軍に入ってから優奈、霞、恋と一緒に鍛錬をしたりして「もつと強くなりたい」と言われたので、ダイオラマ球を使って猛特訓中である。

一応なのだが一週間前の家族宣言の時に交流を踏まえて、このダイオラマ球に招待して皆知っていることになる。最初は皆に質問攻めさせられたが、「天の御遣いだから」と言ったら納得してくれた。ダイオラマ球内では自然の森の中でゆっくりと過ごした。

話は戻るが優奈と霞は気を知っていたものの扱い方が分からなかった。いなかったから、まずは自分の中にある気を知ってもらうために精神統一を重点的にやらせていた。紫郎はそこで体内にある『気』の感じ方だけを説明して、自分の気がどうゆうのかを知って貰いたかったらしい。

十五分ぐらいしたら二人共も落ち着いて静かになってきた。三十分を経過した所で二人の内から微弱ながら気を感じた紫郎はそのまま何分が見守っていることにした。

そしてもう一人、恋は自分の気を自在に使えなかつたらしく無自覚で使っていたと知った紫郎はその使い方を恋に教えたりしていたのだが、恋の呑み込みの速さに驚かされて一時間で完璧にコントロールできるようになり、もう一時間で肉体強化まで覚えてしまった。

そして紫郎はこう思った『こいつら呑み込み速すぎる』と。

一日目の修行では優奈と霞は自分の『気』の存在に気付いて、それをコントロールする修行に移っている。

恋は肉体強化の練度上げつつ、その気を武器に付加させる修行中……

それから毎日行っている。

・  
・  
・  
・

紫郎は早朝から城の庭に出て汗を流していた。

「おはようございます。紫郎様」

優奈が朝なのに満面の笑みで挨拶してきた。

様付けされているのは優奈が「私の血の一滴から髪の毛一本まで捧げます」と言われてから……始まった事だ。その詳細な話は後日に話す。

「…おはよう～zzz…」

眠そうに目を擦りながら挨拶してきたのは恋である。寝癖もまだついているのに一週間前からちゃんと早朝練習に来てくれているのだ。

「おはよう～さん！ やっぱ紫郎は早いな～」

霞は何時でもニコニコしながら早朝練習に来てくれる。なんでいつもニコニコしているのかと聞いてみたら、「自分が日に日に強くなっていってると思うと顔がニヤけてしまうん」と言っていた。

霞は確かに強くなるのが生き甲斐になっていてとお酒を飲んでいる時に言っていたのを紫郎は思い出して苦笑していた。

「じゃあ何時もと一緒にダイオラマ球に入って一日みっちりやるぞ

「！」

紫郎はそう言うと亜空間からダイオラマ球を取り出して皆の前に置いた。

「分かりました」

優奈はとても良い笑みで紫郎の事を見ながら頬に手を当てていた。

「恋、やる」

恋は先ほどまで眠そうだったのが嘘のようにやる気に満ち溢れていた。

「じゃあー！ 今日もやつたるでえ〜」

霞もやる気に満ちており顔の目の前で拳を強く握っていた。

一週間が経ってこの三人と修行をしたのだが、やはりこの世界の女性性は呑み込みが早い事を知った。風や星や他の連中もそうだが、本当に才能の塊みたいな物だと紫郎は改めて思っていた。そしてこの三人も例外ではないと紫郎は思っていた。

恋は俺が教えた事をなんなく吸収していき、今では俺が開発した櫻井流を教えているのだが、さすがにこれは難しいらしくて苦戦している。肉体強化や瞬動や武器強化も楽々使えている。元々力が強かったのもあるが気を使える様になってからさらに強くなってしまい、城門を片手を使って一人で開けられるぐらいの力がついてしまった。恋は力に特化しているみたいだ。

霞は自分の気の総量をはつきりと把握してそれを自由自在に使えるようになっていた。特に速さに特化した技を教えて欲しいと言われたので速さを重点的に教えているのだ。最初は風みたいに瞬動も失敗ばかりだったけど慣れてきたら難無くできるようになっていたが、未だに瞬動に入る瞬間の動作が分かっってしまうのが問題点になっているのだ。一般兵ぐらいなら十分だと思っただが、熟練者や将軍クラスの人には見抜かれてしまうだろう。

そして優奈は気の把握はできたがそれを生かせずにいたのだが肉体強化には以上な成長をみせたのだ。体の中で気を練って防御では三人の中で一番の強さを誇る。その上に根性まで付いているので倒れても倒れても立ち上がってくるので修行中には驚かされたほどだ。

この三人はこの世界でもまず上位にくる強さを持っているだろう。



だが、紫郎は忘れていた。他にも紫郎の教えを忠実に護っている者の事を…

そして修行もしつつ詠や音々音に内政を手伝えと言われて強制的に手伝ったのだが非常に効率が良くなったと言うことで毎度手伝わされる羽目になってしまったのだ。

「はあ〜」

今もまさに書類にサインをしながら仕分けをしているのだ。

「溜め息をついてないでちゃんと手を動かさないよ!」

隣にいる詠も書類を見ながら大変そうにしていた。

「詠殿の言う通りなのですよ。息をつくなら暇があったら手を動か  
せです！」

音々音も口を動かしながら手を動かしていた。

「分かっているよ。はい、今日の分は終了」

紫郎は最後の書類にサインをして席から立った。

「私も丁度終わってたわ」

「ねねも終わりましたです」

二人も丁度終わったみたいだ。

「紫郎が来てから政務がとても楽になったわ。ありがとう」

「前はもっと時間が掛かっていましたからね。音々音からも一応感

謝しているです」

二人は書類を纏めながらそう言ってくれた。聞いた話では前は夕方まで掛かっていたとか量が多い時は深夜まで掛かったとか。

「じゃあ俺は街に行つて来るよ。それと兵の訓練状況の確認をしな」

そう言つて部屋から出て行つた紫郎であった。

そしてそれを手を振りながら送り出していく二人だった。

二人も一週間の間に紫郎と結構仲が良くなった。

詠は内政関係で色々と話したり、月を混ぜて一緒に話したり、街と一緒に見に行つたり、軍人将棋したり、今の所は五戦紫郎が全勝中である。その他にも色々とあるのだが、詠的に一番印象に残っているのは紫郎と一緒に眼鏡を買いに行つた事だろう。最近はよく自分の眼鏡を丁寧に拭いているのを月が目撃している。

音々音も内政の話をしたり、恋と紫郎と一緒に食事したり、「ちんきゅーきつく」を喰らわせたり、でも軽く受け流されてしまったのだが、色々とじゃれあったのであった。でも音々音も構って欲しいみたいなので態度では強く当たっているのだがいつも恋と一緒に紫郎といるのだ。

・ ・ ・ ・

それから紫郎は街に出て見回りをしながら城の外で訓練中の兵士と將軍達に会いに行こうとしていた。

「あ。櫻井さまだ」

「紫郎さま。どうもお疲れ様です」

「紫郎さんー。ちょっとこっち来てくれない！」

「紫郎さん！ 抱いて下さいー！」

紫郎が街に出たら子供達や老人達や若者達が詰め寄ってきて揉みくちやにされていたのであった。特に女性陣が多かったのである。

元々盛り上がっていた洛陽ロウヤウであったのだが紫郎が来てからもっと盛り上がっているのだ。それもそのはずだ。紫郎は一週間の間に洛陽をかなり変えてしまっていたのだ。まずは紫郎が思った事を実行したのであった。

最初は街を綺麗にしようとして動き出したのだ。紫郎は街の人達と話して、手伝ってくれた人にはちゃんと報酬を渡すと約束し何百人も雇い、街の表もそうだが裏の路地の方を徹底的に掃除したのだ。そして紫郎は病気の原因になりそうな場所を徹底的になくしていくことと動いた結果・・・病気や風邪の感染を減少させたのであった。

そしてもう一つは医療の強化であった。まずは一日で医療施設を創り、それと医学に詳しい者を集めようとしたのだが、この時代に医学の知識を持つ人はあまりいなかったのだ。でも紫郎は運が良かった。ある人物と出会ったのだ。

「紫郎、ちよつと教えて欲しい事があるんだが…？」

それが今話し掛けてきた、華佗<sup>かた</sup>である。そして真名は鞆<sup>じん</sup>である。彼は大陸一と言われているほどの腕前であるために紫郎は出会った瞬間に欲しいと思つてしまったほどである。そして紫郎の交渉の結果了承を得てこの洛陽で医者をやつてくれているのだ。

でも鞆の方も紫郎を見た時からこの人ならいいだろうと思つていたらしい。それに大陸を周つていて医療施設を創ろうと考えていた人は紫郎が始めてだったらしい。今では紫郎専属の医者になつていらしい。

そして紫郎は鞆に自分の無限倉庫にある医学の書物を全てあげたのであつた。紫郎はその書物をもう読んでいて記憶していたのでもういらなかつたのであつた。そして鞆もそれを必死に読みながら新たな医学を学んでいたのであつた。分からなかつたところは紫郎に聞けばよかつたのであつた。

「鞆か。分からない所はなんでも聞いてくれよ。それと何か困つたことはないか？」

「そうやるのか！？ 謎が解けたぞ！ じゃあ薬に必要な薬草と布団が足らないんだ」

紫郎は分かりやすく教えていたので鞆もその謎が解けたみたいであった。そして紫郎は全面的に医療施設を支援しているのであった。

「了解。手配しておくわ」

紫郎はこうして民達から信頼を得ているのであった。今や紫郎が居る所には絶対に人が溢れかいると言われているほどだ。

「ありがたい。じゃあ紫郎も忙しいそうだし、俺は新たな医学を覚えに施設に帰るわ。そうそう。患者の方々から「ありがとう」って言っていたぞ」

鞆はそう言いながら去っていた。紫郎が書物を渡してから鞆はやる気に満ち溢れているのだ。一流が超一流になってしまった。まだまだ成長途中の鞆であった。

・ ・ ・ ・

そして現在紫郎は街を抜けて城の外で訓練中の兵士達を今は見ていた。

「どうや？ ウチが鍛えた騎馬隊は？」

「錬度が高いうえに馬の扱いに長けているな」

霞の率いる騎馬隊の訓練を見ていた。非常に動きも良く霞の指示どおり動いておりかなり訓練されているんだと分かる。

「紫郎、こつちも見て」

「恋が鍛えた歩兵部隊も動きがいいな。それに一人一人がちゃん状況が分かって行動しているみたいだな」

霞と話していたのだが恋が紫郎を見つけたらしく飛びついてきたの



だ。紫郎も恋を抱きとめて撫でていた。紫郎が歩兵部隊の訓練を見て思ったことは・・・陣形を組む時の速さと息が合っているのに驚いた。普通は少し乱れる者がいるものなのだがそれがまったくないのだ。

「くらあー！ お前だけ抱きついてずるいぞ恋！」

優奈も紫郎の事を見つけたらしく瞬動を使い抱きつこうとしている。

「普通に歩いてから抱きつけ。もしも瞬動を使ったら避けるからな！ 恋を守る為に！」

瞬動使つて突っ込んできたら紫郎は避けるつもりだった。それもそのはずだ今抱きついていて恋まで被害が及ぶからである。

「以後気をつけます。（ああ〜ちょっと自重しなくては…）」

そう言うと優奈は下を向いてしまった。紫郎から見てもかなり落ち込んでしまったのだと分かってしまった。

「…俺の直属部隊を鍛えてくれてありがとうな。後で褒美でもあげようか？」

紫郎がそう言うと素早く優奈と霞が反応した。

「はい！是非とも私にください！」

「優奈だけずるいでえ〜ウチにもな？」

二人は紫郎に詰め寄って言った。

「????？」

恋はなんのことだが分からないまま紫郎に撫でられているのを堪能していた。

二人が喜んで欲しがる褒美とはいったいなんでしょうね…？

「分かったよ。じゃあ後でな！ それと訓練一時止めていいぞ。そして飯を食べる。」

紫郎は先程大量のおにぎりを作ってからここに来たので、それを運びながらきたのであった。

よしゃー！ 飯だぜ！

紫郎様を見ながら飯はとても良いものね

くそおー！ 呂布將軍可愛いな。

何を言うか！ 華雄將軍の方が最近数倍可愛く見えるぞ。

やっぱり！？ 張遼將軍の方が魅力的だぞ。

休憩中に兵士達の話で紫郎は聞いていた。そして紫郎は自分の直属部隊のところに足を向けていた。

「隊長さん、何か困ったことはないかい？」

そして自分の隊の隊長らしき人に話しかけていた。

「あ、あ、うわわー紫郎様これは失礼しました」

座りながら兵達と話していたせいも急に紫郎に話しかけられて動揺しているみたいだ。他の兵の人達も膝をついていた。

「いつも言っているがそう畏まらなくてもいいぞ。普通に接してくれればいいよ」

紫郎はこう言っているが兵の人達はいつも膝をついているのであった。

この兵達は紫郎が見つつけ出した者もいれば、志願兵も入れれば、助けてくれた恩を返すために入った者もいるのだ。紫郎はなんだかんだでお節介なので結構な人を助けていたのであった。そして何故だが紫郎の部隊には女性が多いのだ。隊長も女性なのだが、その下にいる副隊長二人も女性なのであった。直属部隊の人数は約五千である。

「穰ゆたかは相変わらず紫郎様の前では女ね」

「まあまあ、あれで可愛いじゃないですか」

「……………いつもと態度が違う」

そうこうしている内に副隊長三人が来ていた。

「三人も困ったことはないか？」

紫郎は三人が話しかけてくるなり聞いていた。

「紫郎様。私達の真名を呼んで下さい」

「それが困った事なのですが…？」

「……早く呼んで！」

三人共紫郎に詰め寄って絡んできたのであった。隊長である穰は髪の毛を弄って身だしなみを整えていて三人の行動に気付いていないようだ。

「朶しおり、魅みなぎ、花那かなでいいかな」

この三人も紫郎に助けられた子達である。隊長である穰は元々一般

の兵士であつたがある事により紫郎の目に留まり紫郎の部隊に抜擢はつてきされたのだ。

この三人は元は洛陽の民であつたのだが、これまたとある事により紫郎に助けられたので恩を返すために軍に入ったのだ。そして自分達の実力を磨きこの地位まで登り積めたのだ。隊長合わせて四人共紫郎の事を崇拜しているに等しい。

「はい！（うん！）」

紫郎は三人と少し談笑をしながら楽しく過ごし穰が正常になつた所で部隊の訓練状況を聞き自分も参加しながら訓練を始めたのであつた。

紫郎の部隊は攻守ともに両方出来る部隊であつたが、特に秀ひいでてるのは弓の扱いだ。弓の訓練をどの部隊より多くさせていたおかげでこの軍の中で一番弓の扱いが上手い部隊になつていたので。

そして部隊の訓練も終わつて後処理を隊長と副隊長に任せて、紫郎と三人の将軍は紫郎に戻っている行くのであつた。

・ ・ ・ ・

それから軍師二人、月も揃って全員でご飯を食べようとした時であった。

「紫郎様！ 紫郎様！ はあはあ、これの書状が先程届きました」

穰が息を見だしながら紫郎の元に書状を持ってきたのであった。

670

「ありがとうございます。それからさっき伝えていなかったけど、穰と副隊長三人は後で私の部屋に来てくれ。ちょっと話がある」

「了解しました」

穰は礼儀正しく返事をして部屋を出て行った。

そして紫郎は書状をさっと読み、納得した表情を浮かべていた。

「紫郎。それにはなんて書いてあったの？」

詠や他の人達もそれを知りたがっている顔をしている。

「今言つ事でもないから後にしよう。それより早くご飯を食べようか、冷めちゃうぞ」

紫郎の言葉に他の皆は「紫郎が言つなら……」と納得しご飯を食べ始めたのであった。

・ ・ ・ ・

それから美味しくご飯を食べて今はゆっくりお茶を飲んでいると「」  
ろであった。



「で、さっきの書状の内容はなんだったの？」

詠がお茶を飲みながら聞いていた。他の皆もお茶を飲みながら和んでいた。

「これか。内容からして宣戦布告だ」

「「「「ぶはっ——！！」「「「「

「「んっ！」「」

紫郎は普通になんでもなかったように言っただけだ。その事を聞いて…詠、音々音、霞、優奈であった。吹きかけていたのが恋と月であった。

「そういう事は早く言いなさいよー！！」

「なに落ち着いてご飯なんて食べているんですか！？」

「あかん。紫郎の冷静すぎる対応にどこからシツコミをいれればいいんやー！！」

「はあくん　そういうところも魅力的ですうー」

詠は紫郎から書状を奪ってそれを凝視しており、音々音は紫郎に説教をしようとしている、霞は自分の心の中を巡るツツコミ魂に火が点きそうなのを我慢していた。火が点いたらもう止められなくなりそうであったからである。優奈は少々焦っていたものの紫郎の新たな魅力に気付いてうっとりしていた。

「紫郎さん。不意打ち過ぎます」

「…酷い」

月はなんで紫郎は冷静でいられるのか不思議でしょうがないという表情をしている。恋は急な不意打ちにびっくりしていた。

「起こる事は分かっていたんだから」

紫郎はこの事をちゃんと分かっていたから今冷静にお茶を啜すすっているのだ。

「袁紹が檄を飛ばしたらしいな（そういえば袁紹の所に行っていたな）  
かったな…まあ今となってわな）」

紫郎は袁紹の所に寄ろうと思っていたのだが時間がなかったらしいので諦めていたらしい。

だが、紫郎はこの事をのちに物凄い後悔する事になったのであった  
……

「名を知られている諸侯やあまり名を知られていない諸侯もいるけど数は四十万って物凄い大軍ね」

詠は書状を読み終えて、頭を重そうにしまった。

「いや四十万はいいんだが、問題は“劉璋”<sup>りゅうしょう</sup>が参加する事だ…」

紫郎が知る三国志の歴史の中で反董卓連合では劉璋は参加していなかったのだ。

「つまり袁紹率いる連合軍本隊が洛陽前に展開して後方に劉璋が展開しており、このままでは挟み撃ちにされてしまうという事ですね」

音々音も書状を読み終わったみたいで深刻そうな顔をしている。それもそうだろう、前にいる敵だけならまだしも後ろにも敵がいるんじゃない安心できるはずもない。

「劉璋は俺がなんとかするから詠や音々音は連合軍本隊を頼む！」

紫郎はこの場にいる全員に聞こえるように言った。

「ちよつと！？ 大丈夫なの？」

「劉璋は益州を治める太守で率いてくる兵は三丁四万なのですよ！」

軍師二人はすぐさま反応したものの紫郎はその言葉を聞いてもまったく動じていなかった。

「俺の直属部隊だけでどうにかするから、こっちは心配するな。それよりもそっちはちゃんと何かしら策を考えているんだろっな？」

紫郎は自分の部隊を率いて益州の軍と戦うつもりだ。その発言からでも伝わってくる意志の強さに戦が始まるうとしてるので紫郎は自分の高揚感が押さえきれずに覇気を少し漏らしていたのであった。だが、そのおかげで詠も音々音も頷くしかできなかった。他の恋、霞、優奈もその覇気に当てられてしまっただけで体が疼いていたのであった。

「本当に戦わなくてはいけないのですか？」

ただ一人悲しい顔をしている月がいた。

「向こうが攻めてくるならそれを迎撃しなければならぬ。だが、俺が一番気に食わないのは…董卓は「逆賊」「民に横暴を働いている」というのが非常に怒り心頭しているんだ」

紫郎は眉間みげんに手を当ててどうにか怒りを抑え様としていた。他の皆も顔を見ただけで怒っていると分かるくらいだ。恋や霞は殺気を出しているのだが、優奈は書状を破り捨てて壁に拳を叩きつけていた。

「分かりました。（私は皆が民の人達も無事でいてくれれば…）」

月の思ったことはこの世界では困難である。だけれどいついづかはこの時代にはあまりにも珍しい。

## 第二十八話 洛陽での日常（後書き）

急ピッチで書いたので誤字が結構あったかもしれません。

そして……一ヶ月も更新しなくてスイマセンでした。

そしてようやく反董卓連合の始動ですよ。

此処まで長かったような気がする！！ でも此処からが盛り上がる所なのでやる気が出てきましたよ！！

そして今週はテストなので次の更新は来週ぐらいになります。  
本当に更新遅くてスイマセン。

華佗かたの真名はオリジナルです。

華佗（真・恋姫十無双と同じ設定）

真名：韜じん

## オリキャラの紹介

真名：穰<sup>ゆたか</sup>

紫郎の直属部隊の隊長である。

### ～容姿～

性別：女

髪：黒色で肩に当たるぐらい。

瞳：黒

肌：白

部隊内で一番常識人。

### ～性格～

とても穏やかな性格で誰に対しても丁寧口調である。

普段の時と戦いの時とはまったく違い、戦いになると目が鋭くなり口調は変わらないのだが、人使いが荒くなってしまう。

誰にでも優しいので部下からの信頼も高い。

とにかく器用で武器の扱いや知識も豊富で何でも知っている存在である。

武器：双剣



真名：朶しめら

紫郎の直属部隊の副隊長を務めている。

〈容姿〉

性別：女

髪：茶髪で腰までである。

瞳：水色

肌：白

部隊内で一番胸が大きい。

〈性格〉

部隊のお姉さんの存在で武術の心得があったので部隊内部で一番強い存在である。隊長である穰よりも遥かに強い。

人柄も優しいので多くの子供達から慕われている。

何時も笑みを浮かべて優しいので慕われているが怒らしたら怖いのである。

武器：弓

魅<sup>みなぎ</sup>凧

紫郎の直屬部隊の副隊長を務めている。

〈容姿〉

性別：女

髪：腰まである黒髪

瞳：青

肌：白

部隊内で一番背が高い。

〈性格〉

神出鬼没で隠密行動長けている。近くに居るのに気付かれていないという事がよくあるほど気配を隠すのが上手く忍者である。

元気がある子でいつも明るいのが長所である。

口癖は「まあまあ」といふこと。

武器：剣、暗器類

花那<sup>かな</sup>

紫郎の直屬部隊の副隊長を務めている。

（容姿）

性別：女

髪：肩に乗るぐらいの金髪

瞳：緑

肌：白

部隊の中で一番背が低い。

（性格）

紫郎一直線の無口な女の子。

小蓮と同じぐらいの背でツインテールにしている。

紫郎、穰、栞、魅凧にはちゃんと話すのだが、後の人達には頷いたり地面に字を書いたりして会話している。

小動物が好きで特に猫が大好きである。虎とか見たら瞬時に逃げます。

武器：手甲

第二十九話 各諸侯の動き（前書き）

更新するのが遅すぎですね、すいません。

誤字脱字があつた場合は報告を御願ひします。

## 第二十九話 各諸侯の動き

洛陽に袁紹から宣戦布告の手紙が届く六日前……

） 桃香 side ）

私は先程袁紹さんから届いた書状を読んでいた。

袁紹さんは河北の方で実力のある人だと聞いているし、白蓮ちゃんが「名家という事を自慢してくる馬鹿」と言っていたのを私は思い出していた。

「この書状を読む限りでは袁紹さんはこの董卓という人が朝廷を手中に収めたうえに洛陽と長安の民に重税、圧政をしいて民が苦しんでいるので、これを協力して倒そうというのが内容ですね」

朱里ちゃんが簡潔に説明してくれた。

私や愛紗ちゃんや鈴々ちゃんは是非とも参加するという意志なのだが……

「少々所か、見え透いているな」

「ご主人様の言う通りな展開になっていますね」

「たんじゅんめいかい単純明快です」

星ちゃんや朱里ちゃんや雛理ちゃんがあまり乗る気じゃないのみたいです。

朱里ちゃん達が言うには手紙の内容が単調過ぎて分かりやすい事ばかり書いてあって、これはこんな単純な問題ではない朱里ちゃん達は思っていると言ってきたのだ。

愛紗ちゃんも真剣に考えてみたら、先日洛陽から来た商人が「董卓様は民にとても優しくされている御方です」と言っていたのを思い出したらしく、私達に聞かせてくれた。

明らかにこの書状と商人さんの話に矛盾がある事が分かりました。

「それに昨日ご主人様から」（袁紹が動き出すかもしれないから注意する様に）「と念話で言われましたのでこの事を粗方予想していたみたいですよ」

「私も念話で会話しましたがこの事については私達に一任してくれましたので、参加するもしないも私達の判断に任せると言っておられました」

私、愛紗ちゃん、星ちゃんがすぐに反応していた。

「ええ、私昨日念話したのに」（忙しいからまたな）「って言われたのにー！」

「私も桃香様と同じことを言われました！」

「私なんて」（無理、じゃあ）「ただだぞ！」

私も二人も朱里ちゃんと雛里ちゃんに詰め寄って大きな声で言ってしまった。

「ええー、皆さんそこに反応するんですかっ!？」

「あわわ、声大きいですうー」

朱里ちゃんも雛里ちゃんもそれぞれ驚愕していた。雛里ちゃんは私達の声が大きかったみたいで耳を塞いでいた。

だって、私達とは話をしなかったのになんで朱里ちゃんと雛里ちゃんとは話しているのか、普通は気になるものですよ？

「鈴々も昨日話したのだ〜！」



「「「ええ〜!?!」」」

もう私達は驚くしかなかった。

それになんで私達にだけ話してくれないの〜!

「ま、まあ、こ、ここは幼女組みの勝ちでいいだろう。だが私達は主とは繋がった仲なのだから」

星ちゃんが私から見ても分かるぐらいに焦りながら喋っていた。

何時ものように余裕そうな表情じゃなく強敵に出会ったみたい顔から冷や汗を流していたのであった。

「せ、せ、星の、い、言うとおりで。私達はもう身も心も捧げた仲なのだから」

愛紗ちゃんも星ちゃんと同じで焦りながら喋っていた。

無理矢理作った感がある笑みを浮かべながら言っていた。

「そうだね。愛紗ちゃんの言う通り私達のご主人様とは体を確かめ合った仲なんだから、そんな事で動揺したりしないもんね〜」

私は笑みを浮かべながら正直に言ったのだけど

愛紗ちゃんと星ちゃんが打ちひしがれていたのだ。

床をバンバン叩いて二人共目元を隠していた。

「はわわー桃香様正直過ぎます」

朱里は二人の動揺がはつきり分かっていたので桃香が言ったが十分に二人の心に響いたのが分かったのであった。

「朱里ちゃんも話に乗らないで最初の議題に戻さない」と

この中で唯一話を脱線させずに冷静に対処しようとしている雛里であった。

・ ・ ・ ・

少し時間をおき愛紗ちゃんと星ちゃんが立ち直った所で。

「では話を戻しますが参加するのか、しないのか、決めなくてはなりません」

朱里ちゃんが話を戻しました。

「ご主人様が言った事とこの書状の事はまるっきり違つが怪しいのだが参加しない訳にもいかないだろう」

「愛紗の言う通りだな。私は主の言っている事に嘘はないと思っているので董卓は圧政などやっていないと分かる……だがらといってこの参加しなかった、まず袁紹殿の怒りを買ってしまったところに攻めて来るかもしれないというのが心配だ。だから私は参加した方がいいと思う。不本意だがな」

愛紗ちゃんと星ちゃんの言っている事は分かる。

私だつてご主人様言っている事は本当だと思つ……だつて私達のご主人様なんだから信じるに決まっているよ。

「星さんの言うとおりです。まだ私達には袁紹さんと戦えるだけの力はありませんし、何よりもご主人様不在の最中にご主人様が帰

つて来る場所がなくなってしまうたらいけないと思うので私は参加した方がいいと思います」

「…私は朱里ちゃんと同じ意見です。一騎当千の将が居ても兵がいなくては簡単にやられてしまうので袁紹さんと戦うのは避けるべきですので此処は我慢して参加するべきです。」

軍師二人も同じ参加の意見でこれで私と鈴々ちゃんの二人だけ言っていないのは。

私はふと思ったことがあったのでそれを言おうとした。

「そういえ 「紫郎お兄ちゃんは今何処に居るのさ？」 ああ  
くそれが聞こうとしたのにー！」

私と鈴々ちゃんの言おうとした事が一緒だったみたいで重なってしまった。

「えっと あれっ!？ そういえば雛里ちゃん」

朱里ちゃんが昨日の事を思い出した素振りを見せたのだけど急に

口に手を当てて驚いた表情をしながら雛里ちゃんに確認をするような感じで聞いていた。

「そ、そうだよね。二人共一緒って事は确实だよね」

珍しく焦っている雛里ちゃんであった。

「今ご主人様がいる所は」

朱里ちゃんが言うのを躊躇<sup>ためら</sup>っている。

この朱里ちゃんも雛里ちゃんもなんでそんなに焦っているのか不思議でした。

二人は顔を見合いながら言ってくれた。

「」「洛陽です」

その言葉を聞いた瞬間にこの場が時間が止まったのかの様に静かになっていました。

私も頭では理解しているのだけどなんて言えばいいか分からなかった。でもこれだけは言えた。

『ええ〜！！！！』

朱里ちゃん、雛里ちゃん、二人以外は聞いてから数秒後ぐらいに声をあげていた。もちろん私も。

「これは参加するしかないな」

「星に同意見だ」

「そんな所にお兄ちゃんを置いておけないのだ〜！」

全員一致で参戦と決まりました。

それより本当にご主人様大丈夫なのかな？

ご主人様の周りにはいつも女の子が一人か、二人はいるのは黄巾賊討伐の時に十分分かったので絶対に今現在もきつとそうなるんだと思うのだけれど……危ないことに首を突っ込んでいなければいいのですが　今日は念話して話してみよう。

） 桃香 side out ）

） 雪蓮 side ）

各諸侯に袁紹からの届いた檄文げきぶんの事を皆で話している所である。

「これは我ら孫呉を復活させる為の起爆剤になる。連合に参加して名を知らしめればそれだけで独立に近づける」

真琳がこの争い事を利用して一気に私達の勇名を知らしめてやるつとやる気である。

「まず袁術がこれに参戦するかどうかだが？」

祭もこの大陸全土を巻き込んだ抗争になるであろう戦いにやる気が出てきているみたいね。

「そこは私が上手く口車くちぐるまに乗せて参戦させるように仕向けるわ」

あんなバカな子簡単に参戦するって言うに決まっているじゃないの。

「その所は雪蓮様に任せても大丈夫だと思います」

何時もの様にのほほんとしている穏であった。

いよいよ独立へ道が見えてきた私達は歓喜にも似たものを感じていた。

この戦いに勝つも負けるも私達は動き出す、そして袁術の行く末すえには必ず死が待っている。私が復讐を成し遂げるのも近い未来ね。

「皆さんやる気に満ち溢れてますね」

「それはそうだろう。長年ずっと我慢してきた事だ、私だっけと袁術なんかの下にいるのを我慢してきたのだ」

「蓮華様も皆が待っていた事だ。これ以上はないぐらいに気持ち



が高ぶるのは当然だ」

「私もやる気が出てきましたよ！」

蓮華達も私達と同様に待ちきれない様だけどここは我慢してさっきに董卓という人物と戦わなければならないのだから。

「これに参加して我らの勇名を世間に轟かせるのも目的だが、もう一つやる事があるわ」

皆が冥琳の言っている事に耳を傾けている。

私は大体は想像ができていた

「洛陽にいる紫郎を手に入れることだ」

全然違った答えであった！

「紫郎って今洛陽にいるの！？」

「私がそういと全員頷いていた。

私だけ教えられてないのって……まさか嫌いになってしまったのっ！！？

そんな事って…そんな事…

私は相当落ち込んでいる様だ。皆が心配そうな目で私を見ている。

「えつと雪蓮、落ち込んでいる所悪いが、別に紫郎は嫌っている訳ではないぞ。私達は雪蓮に黙っているっと言われていたし、それに」

落ち込んでいる私に肩に手を乗せて冥琳が言ってきた。

「紫郎が言うには……俺が洛陽に居る事を知ったら雪蓮はやる気出すんじゃないか？」つと云っていたので、それを私が利用して雪蓮を鼓舞するつもりで皆に言っておいたのだけど……まさか裏目に出てしまうとはな。すまなかった。」

そ、そんな事分かっていたわよ！

ちょっと被害妄想しちゃっただけよ！

「策殿も女ですな」

祭が笑いながら言ってきたので私は言ってやった。

「好きな人に嫌われるのは誰でも嫌なものでしょ!？」

私が言った事に頷く者や赤面している者や深刻そうに考えている者や体をくねらせている者のいるといった状況になってしまった。

「んっ！　ともかくだ。紫郎の存在は私達にこれほどの影響を及ぼすほど大きくなってきているのだ。出来る限り手に入れたいのだが、もしも場合は殺るしかないのだが……それはまず不可能だ。これは断言できる。(私でもアイツと話していると落ち着けるし、話が合うし、何だかんだで私の心を掻き乱す存在になっているのは事実だ)」

その場の雰囲気をも冥琳が切り替えた。

冥琳はこの国の現状という事を一番考えているのであった。もしも紫郎が敵で現れた場合は皆は絶対に動揺してしまうだろうと……冥琳は確信にも似た自信を持っていた。

「そうね。冥琳の言うとおり紫郎には勝てないわ」

紫郎には　私達が束になっても勝てないと…私、雪蓮、祭、思春で戦ったのにも関わらず彼に有効的な一撃を与えられなくて髪の毛に掠らせる程度しかできなかった。

それに紫郎はまったく本気ではなかった。

自分の武器を持っているのにも関わらず彼は一般兵士が持つ剣を持って戦っていたのだから…

「で、ですが、それは最終手段であってまだはつきり決まっていますせん」

冥琳と穩に教育を受けている亞莎が発言した。

「亞莎の言うとおりだ。でも皆には知っておいてほしかったので言ったので、これは私が絶対に行なわせないだろう」

冥琳の瞳を見れば強い意志が宿っていると分かった。

「紫郎さんも一つの目的ですけど、もう一つ目的があるんですよ

」

張り詰めた空気をのほほんとした穏が変えてくれた。

「もう一つとはなんだ？」

蓮華もこの場にいる皆も気になっている事であった。

「この反董卓連合に参加して諸侯の動きを見極める必要があるわ」

わたしが言ったら呼応して冥琳も言った。

「この戦いの後にくる群雄割拠の状況によって我らが取る道も変わる、か」

皆も納得したらしく頷いてくれた。

この戦いが終わればいよいよ我ら孫呉の独立の時であるっと思は感じているわ。

長年の目的であった独立がもう叶うんだという気持ち私心の

中を駆け巡ったわ。

「そうですね、今の所は気にすべき諸侯は曹操、劉備だと思います。」

穂が言々と私や他のみんなも黄巾賊討伐の時に警戒が必要な存在だと分かった。

曹操はまだ力を蓄えていると見て間違いないのだけれど部下の育成にも力を入れて優秀な部下を数多く持っており何時か来るだろう群雄割拠の時期が来るのを待っていると分かったわ。

内政、軍事、商業、話術、魅力、全てに長けていると言っても良いと私は思っているわ。あの存在感は凄まじいものだと感じたのは確かだ。

曹操は必ず勢力を広めて私達の敵になるのを肌で感じていたわ。

そして曹操も紫郎の事を狙っているみたいなので恋敵でもある。でも私はもう紫郎に抱かれているから一歩というより百歩ぐらい勝っているだけだね

「皆も黄巾賊討伐の時に曹操の実力が十分分かっただろう？ 我らの宿敵になるのはまず間違いないだろう。劉備 桃香は今の所は同盟関係にあるのだが、敵になる可能性はないのだが……」

「だが……？」

皆が冥琳が言っている事に疑問を持った。

「奴等はいずれ我らの大きな障害になりそうだと私は思っている」

確かに、冥琳の言っている事にも一理あるわね。

劉備：桃香達とは黄巾賊討伐の時に私達も弱小だから弱小同士で同盟を組んだ訳で同盟の証に真名を教え合った仲だったのだが……

あそこの陣営は立派な将や優秀な軍師が居るのに足場がちゃんとしていないのが欠点なのよね。

今は徐州に居るけどいずれ攻められるでしょうね。私の予想だと曹操辺りが攻めて来そうね。

だからあの子達にちゃんとした基盤が整って街や国を持ってそれで兵を持っていたら確かに脅威になるに違いない。

それに君主に紫郎を置いているのが最大の脅威だわ。

全ての能力に特化した君主なんて相手にした喰わないし、紫郎と戦いたくないもの。

でもこの戦いで捕獲するために戦うのはまた別の話だけどね。

「まずは反董卓連合に参加する事じゃな」

皆も真剣に考えているけどまだそれは予想なんだから、真剣に考えなくてもいいのに。

「あ、あのちょっと話したい事があるのですが良いですか？」

会議も終わりに使用かと思ったのだが亞莎が手を軽く挙げて言ってきた。

「ん？ どうしたの？」

これは皆が思っている事だろう。



亞莎が珍しく自分から発言しているという事に。

「昨日（けふ）に紫郎さんと念話を使って話していたんですが、あ、あのですね、この事を私の功績（こうせき）にしていって言って言っていたんですけど

」

とても言い難（にく）そうになっている亞莎。

「紫郎さんは洛陽に行くまでに袁術の城以外の街や村を説得したらしく雪蓮様に寝返ってくれる手筈を取り付けたそうです」

この場にいる者が亞莎の言葉を理解できていなかった。

そして

『ええーツツ！？』

その事を理解して声をあげて驚くしかなかった。

いつも冷静な冥琳や穩の眼鏡がずれてしまっていたり、祭と蓮華がお茶を飲もうとしてこぼしているし、明命は口に手を当てて驚い

ている様子だし、思春なんて目を見開いている。

「それは本当なのか？」

冥琳がずれていた眼鏡を直して何時もの様に冷静な表情で聞いていた。でも私には分かるけど少し頬を引き攣っている。

「はい、間違いないと思います。確認を取って貰っても良いそうですね。」

この事が本当なら楽に独立ができると私やこの場にいる全員が思ったのはまず間違いないでしょうね。

紫郎が嘘をつくとは思えないからこの事は本当でしょうね……さすがと言つべきか、ありえないと言つべきか……私でも紫郎の存在が凄いと思ってしまうわ。

「それは確認せざるおえないだろう」

冥琳はすぐさま部屋を出て兵に指示しに言った様だ。

「私は袁術ちゃんにこの檄文の事を聞きに言って来るわ。もちろん、参戦しなければ参戦させるように誘導するから、各自は部隊の軍備の確認をし、きたるべき戦いに備えてなさい」

『はっ！』

私は自分のやるべき事があるので復讐の相手である袁術に会いに行くのであったが、皆が独立に近付いているのを嬉しそうに静かに噛み締めていたのであった。

・ ・ ・ ・

冥琳が確認を取った所確かに寝返ってくれると話がついていた様だったので、私達の本拠地である建業を始め、周りの城の城主達も私達の下に就いてくれると約束してくれているので反董卓連合には全員で参加する事になったのであった。本当は蓮華や祭を残して独立の為の仕込みをするはずだったのだけどね。

紫郎のおかげで手間が省けたわ。本当に感謝するわよ

〈 雪蓮 side out 〉

今は玉座に座りながら皆を呼んで話しているところよ。

つい先程麗羽の使者で側近の顔良、文醜が私の所に来て董卓という逆賊を討つ為に手を組まないかと言ってきたのを私は了承して早々に帰らした。

「袁紹も良い提案をしてくるものですね。これだけの英傑が揃っている機会はそうはありません。ここで大きな手柄を立てれば華琳さまの名を諸侯の間に一気に広まりますね」

桂花が私の傍でとても嬉しいそうに言っていた。

「孫策も袁術の元で参加するということは私もこれで借りを帰せる」

春蘭も拳を握り締めやる気満々そうね。

「ふむ。黄巾賊討伐の時にも名を馳せたがまだまだ我らには名聲が必要だ。これを気に一気に広め天下統一への足がかりにしましよ」

秋蘭も冷静な表情で瞳にはやる気という炎が宿っていそうね。

「兄ちゃんも参加してるのかな？」

季衣は紫郎に良く懐いていたから久し振りに会いたいのかしら？

「そうだね。お兄様は参加なさっているのでしょうかね？」

流琉も季衣と同じで紫郎に懐いていたので会いたそうな表情を浮かべているのは私だけにしか見えないのかしら。

「最近はお兄さんの噂を聞かなくなりましたからね」

風も何かを思ったのか一瞬だけ寂しそうな表情を浮かべてすぐに何時も表情に戻っていたわ。風も何だかんだで紫郎とは一緒に政務をしていたので結構懐いていたのを私は思い出していたわ。

政務の時に紫郎の膝の上で仕事をしたりして困らせたりもしていたと私は記憶している。

「こんな大規模な戦いに参加しないとは思えないと思うぞ、風」

稟も顎に手をやり少し考えている表情であった。稟も紫郎とは結構話をしたりして交友を深めた仲でもあったので紫郎の性格を大把握していたので、分析して今回の大規模な戦いに参加しないというのは無いだろうという事を思っていた。

偶に紫郎の顔が近くに寄ってきた時に鼻血を出したりして介抱されたりした事もあったので結構親しいのであった。

「そうね。最近紫郎の噂を聞いた者はいるかしら？」

華琳の問いに答えた者がいた。

「師匠は今洛陽にいるそうです」

その問いに答えたのは凧であった。

凧は紫郎と別れてからも念話を使って話したりしていたので紫郎の所在を知っていたのであった。凧も紫郎と話したりしていて喜んでいたのであった。ちゃんと自分なりに鍛錬を行ない独自で技を考えたり色々と開発してみたみたいだ。

「洛陽って言ったら今まさに話題になっている所じゃない!？」

私も他の将も驚いていた。

「はい。詳しくは話せないのですが、すぐに会えるだろうと言っております」

凧の表情から見て嘘を言っているようでもないわね。

でもすぐに会えるという事は紫郎も参加するのかしら？ そうし

てくれたら助かるわ、早々に終わらせて絶対に来るであろう群雄割拠の時代を私は待っているのよ。

紫郎のおかげで人口が増えて街がとても賑やかになって、お金の収入も兵糧も十分貯める事ができたわ。それに黄巾賊討伐の時に私の所に居たのが原因なのか志願兵がとても多く出てきたおかげで兵の増強も出来たわ。

一番紫郎に感謝しているのは黄巾賊の主犯であった、天和、地和、人和を私の所に残してくれた事よ。あの子達の歌のおかげで兵の徴兵、士気、団結力が格段に上がったわ。

あの子達も紫郎が居なくなつた時は仕事もしなくてサボつてばかりだったのだけど、私が叱ろうかと思つただけけど「紫郎がこの事を知つたら心底落胆するんじゃない？」と言つたら瞬間に飛び上がった来て私に仕事を求めてきたわ。あれは傑作だつたわね

「紫郎の事だから凧の言葉の通りすぐに会えるでしょうね」

紫郎は言つた事は守ってくれる性格だから大丈夫でしょうね。

それにしても紫郎をどうやって手に入れようかしらね……

黄巾賊討伐の時に劉備達の主つていうのも分かつた、後は孫策も狙っているつていうのも分かつたのであって、つまりは争奪戦つてことね。

でも紫郎は劉備や孫策には手を出しているみたいだし、私が狙っていた関羽だって食べちゃったみたいだし、向こうも紫郎に夢中だったし…どうやって奪うかなんて考える前に英傑を敵に回す羽目になるわね。これはこれで面白いけど、まだ喧嘩する時でもないわね。

そういえば私や他の皆には手を出していないのに他の国の女性には手を出しているのかしら…？ もしかしてあれかしら…嫌われているのかしらね、もしもそうだったら…調教して無理矢理にでも私を好きにさせてやるわよ。フッフ…

「華琳さま、あの何か気に喰わない事でもありましたか？」

桂花が私にそう言って時に私は気付くのであった。異常に殺気を出しながら笑っていたという事に。

「いえ、なんでもないわ。話はここまでよ、それぞれ精進する様に心掛けよ」

『はっ！』

とても良い返事をしてくれたので私もやる気が出てきたわ。

さあー、劉備に孫策、今回はどんな行動を私に見せてくれるのかしらね



)  
華  
琳  
S  
i  
d  
e  
o  
u  
t  
)

## 第二十九話 各諸侯の動き（後書き）

最近バイト入れ過ぎたので更新が遅れました。

それともう一度、真・恋姫無双をやり直していたので書く事を忘れていました。

さてと、今回の話はそれぞれの君主メンバーの内心の話です。

自分的に全然上手く書けてなかったし、なんか話が上手くいっていないような気がするんですけどね。

やっぱり疲れている時に書いたからかなww

こんな戯言は良いとして、感想や意見をどしどしお待ちしております！

「（）」は念話というものを使って会話をしている事です。

（念話の説明）

言葉を使わずに内心で会話ができる便利なもの。  
離れた相手に言葉を伝えられる。

（使用できる条件）

紫郎と粘膜的接触をした場合と紫郎が持っている勾玉に念じれば会話が出来る。

この念話は紫郎とだけできる会話である。  
紫郎以外とはできない。

まだ紫郎も未熟な故に開発途中！

### 第三十話 反董卓連合（前書き）

更新がめっちゃ遅くなりました、スイマセン。

誤字脱字があつた場合は報告を御願ひします。

### 第三十話 反董卓連合

続々（ぞくぞく）と諸侯達が集まり始めていた。

その数は膨大であり“四十万”に達するだろうという勢いであった。陣を張っている周りには、兵、兵、見る限り兵士しかいなかった。たのであった。

そして今現在袁紹の陣に諸侯が集まっているのだが

「それで、貴方もこの戦に参加するのですね、天の遣いさん？」

この連合の首謀者でもあり、連合内で一番の兵力を持っている袁紹が何故だか、この陣にいる櫻井紫郎に聞いていたのであった。

「ええ、私も“この戦”には参加しますがね」

凄い意味有り気に言っている紫郎であった。

「それは、それは、私わたくしのために存分に働きになってくださいませ！  
おーっほっほっほっほっ！」

袁紹がそう言った後にとても耳障りな笑い声をしていたので紫郎

は苦笑いしながら内心で溜め息をついていた。こんな奴に月を侮辱よこしまされていると思うと「殺してやりたい」という殺意が出て来てしまつのを隠している紫郎であった。もしもこの場でなかつたら限り無く確実に殺していたであろう。

「では、貴方は私達の部隊を率いて戦つてくれるのですか？」

今話し掛けてきた人は袁紹よりも異彩を放ちながら、とてつもなく美しい美女であった。

「いや、ちゃんと自分の部隊があるから大丈夫だ、“アテナ”」

紫郎に話し掛けてきた女性は……紫郎の目的の一つでもあった。家出娘の一人“アテナ”だったのだ。

各諸侯が揃っている天幕の中に入った瞬間に紫郎は気付いたのであった。絶対にアテナだな、と。後、アテナの親のゼウスやヘラが言っていた特徴と同じであるからして確信したのであった。

アテナ……一言で言うと、腰まである金髪碧眼の超絶美人である。金髪であるが袁紹とは比べ物にならない存在感を放っている為に各諸侯の面々もその存在に息を呑んでいる状態になってしまっているのだ。神々しさ、圧倒的な存在感、見惚れてしまつ程の容姿、まるで絵に描いた存在が出てきたのではないかと思うほどにアテナはい

るのである。傍らには剣と盾が置いてあるがその装備ですら神々しさを感じさせられる物であり、気安く触れる代物しろものではないというのが分かる。

堂々と袁紹の横に側近の様に控えており、もう片方の隣では顔良がんりょう文醜ぶんしゅうが控えているのであった。

「アテナさん、もう全員揃いましたか？」

袁紹の問いに対してアテナは…

「いえ、まだ、貴方の従姉妹の袁術殿、劉備殿、そして曹操殿が来ておりません」

アテナの返答に袁紹は呆れた顔を浮かべていたのであった。

「なあ、あんたが天の遣い様かい…？」

自分が呼ばれている事にまったく気付かない紫郎であったが、何秒かしたところで自分の事なんだと理解した紫郎であった。

「はい、えーと君は？」

目の前にいるのは美少女であった。ハチマキをしており、愛紗と同じポニーテールで勇ましい眉をしていて、とても男勝りそうな女の子であると紫郎は思った。

「涼州の馬超だ。今日は馬騰の名代としてここに参加する事になった」

なるほど、と納得した紫郎であった。

「親の代わりか、それは大変だな。俺の名前は櫻井紫郎、紫郎って呼んでくれ」

紫郎は馬超に向けて手を出して握手を求めたのであった。

「そうか、これから宜しくな紫郎！」

馬超は握手をしてとても女の子らしい笑みを浮かべてくれたのであった。その笑みは紫郎の中枢神経を刺激したみたいだ。

「……馬超」

紫郎は不意に真剣な表情で馬超を見始めた紫郎であった。

「お前って笑うと可愛いな」



紫郎は自分が思った事を言っただつもりであったがそれを真に受けてしまう馬超であった。

「お、お、お前、お前えー！ 会って早々に何を言っただ！」

顔全体を真っ赤に染めて動揺を隠しもせずに紫郎に掴み掛かろうとする馬超である。馬超は女として見て貰った事に非常に驚いているが内心ではとても嬉しがっているのであった。

「いや、正直な気持ちを言っただけだが…？ 何か悪かったか？」

紫郎は馬超に対して「何か変なことでも言った」という表情でまったく自分が言った言葉の意味を理解していないのであった。だが、これは演技であって本当は理解しているのであった。どんな反応をするか少々気になったみたいなのでこんな反応をしているのであった。意地悪にも程がある。

「あ、あ……本当か？」

下を向いてモジモジしながら小さく弱弱しい声で馬超は何かを言ったのであったが、ちゃんと紫郎にはその言葉が聞こえていたのであった。

「本当だ。あの笑みは……見惚れてしまう程であったよ」

紫郎は何故に下を向いているのかをちゃんと理解していなかったので撫でたら大丈夫だろうという答えが紫郎の中では出たらしく、優しく言葉を言いながら馬超の頭を撫でていたのであった。

「あ、ありがとうよ」

頭を撫でていた紫郎の手を払い、紫郎に背中を見せるような態度を取ったのであった。だが、馬超の耳まで真っ赤になっていたのを知るのは誰も居なかったのであった。

「相変わらずだな。そんな恥ずかしい事を無意識でよく言えたものだな」

「ありやー、天の遣い様は天然ですかね？」

「いや違つと思つよ。あれが自覚してやっていると思つよ」

馬超が素っ気ない態度を取っている時に話し掛けてきた三人が居た。

「久し振りだな……白蓮ばいれん、で、君達は……？」

「ちょっと待てー!? お前、その一瞬の間はなんだあー!!」

紫郎は久し振りに会う公孫こうそんさん? こと白蓮ばいれんの事を…忘れていたみたいであつた。そこにすかさず反応する白蓮であつた。

そして白蓮以外の他二人は袁紹の側にアテナと一緒に控えていた人達だと分かつたのであつた。

「あたいは文醜だ」

「私は顔良です」

またもや、なるほど、と納得した紫郎であつた。袁紹の配下でま  
ず名前が挙がつてくる二人だと分かつたのであつた。

文醜の方は、お気楽そうでも元気があつて、無鉄砲そうで、  
隣にいる顔良が苦勞してそうだと紫郎は感じ取つた。

顔良の方は、一言で言うとも苦勞人に感じられると思つた  
紫郎であつた。袁紹と文醜に振り回されてそんな人だとも感じた。

「私は天の遣いとも呼ばれているみたいだけど、櫻井紫郎って名前  
なんだ。紫郎って気軽に呼んでくれよ。それと別に忘れていたわけ  
じゃないぞ、単にボケてみただけだ」

まだ馬超が背中しか見せてくれないので三人に話す紫郎であつた。

「なおさら質たちが悪いわー!!」

「珍しい名前だなー。紫郎だな、分かったぞ!」

「猪々子の言うとおり珍しい名前ですね。じゃあ私も“紫郎さん”  
って呼ばして貰います」

白蓮が軽くキレかけているが無視して自己紹介をしてくれた二人と話したのであった。それから二人と交流を深める為に話を始めたのであった。自分の主である麗羽の話をしてくれたり、自分達の武器の話をしてくれたり、アテナについての話もしてくれたのであった。特にアテナの話は詳しく聞いたのであった。

なんでも紫郎が来る、三ヶ月前ぐらいに来ていたらしく、急に袁紹が治める街に来たのを袁紹直々に軍の末席に加えたのだとか。袁紹の部下達はそれを黙っているわけも無く猛反対したみたいだが、アテナの仕事振りや手合わせしたときの強さなどで反論できなくなってしまうのであった。もちろん、反対派の中には文醜、顔良も入っていたみたいだが、文醜は「美味しい飯を作ってくれたから許した」、顔良は「今までしてきた苦勞がアテナ様が来てから半減しました」とか言っており、二人共アテナを絶大な信頼を委ねているのであった。そして見た目からも民達から注目を浴びており、一度街ひとたひに出ると街の人達が寄ってきてアテナを歓迎するんだよ、と顔良が言っていたのであった。そして紫郎は「さすがは女神だな」と内心で感服していたのであった。それから話をしつつアテナの事を聞きながら、袁紹の事も聞き、情報をできるだけ集めたのであった。二人も紫郎が話してくるのに普通に返答して仲が良くなった気分だったのであった。話しているうちに文醜に「アニキ」って呼ばれる

よようになったのであった。

話している最中に白蓮ずっとブツブツ何か言いながら下を向いて明らかに落ち込んでいるというのが分かったので頭を下げて「ごめん」と謝ったのであったが、白蓮がその行動に顔を上げて目を見開いてびっくりしていたのであった。何でも紫郎がからかって落ち込んでいるのではなかったものであった。違う事で悩んでいたとか…？

「すみませんが天の遣い様、ちょっと宜しいですか？」

そして文醜と顔良と白蓮と雑談をしながら交流を深めていたらアテナが紫郎に声を掛けて来たのであった。

「…外に出ようか」

アテナの表情からしてこの場では話しづらそうだと悟り、外で話す事にしたのであった。

• • • •

紫郎とアテナ二人は天幕の外に出て周りに人がいないのを確認したのであった。

「率直に聞きますけど、貴方は父様とくから言われて来たのですか？」

優しいような笑みを浮かべているアテナであるが殺気が少し滲み出ているのを紫郎は感じ取ったのであった。それほどまでに父親であるゼウスがムカつくのかと紫郎は思ったのであった。

「確かに、ゼウスにはアテナを連れ戻してくれ、とは言われているが無理強いはいしないよ」

（確かにゼウスには言われたけど、娘さんが帰りたくなさそうな表情を浮かべているのでどうしようもないんですよ、これだな）

紫郎は内心で「連れ戻せ」と言われていたのだけがそれに逆らった態度を取っていたのであった。無理矢理連れ帰ろうとして怪我でもさせたらゼウスに殺されるのが嫌だからなのだ。

「…！？…本当ですか？」

アテナも少々驚いた様子で紫郎に聞いたのであった。アテナ的には無理矢理でも連れ戻されるのかと思っただけで予想が外れたらしかった。

「本当ですよ。私としては気が済むまで居れば良いと思っています

ので、家出の事に首を突っ込む気はありませんから」

自分の本心を言った紫郎であった。

「そうですか、それは助かります。ありがとうございます」

アテナはこんな簡単に話がつくとは思っていなかったらしく、紫郎の事を高く評価したみたいだ。もしも連れ帰ろうとする行動を取れば一戦交えるつもりでいたのだ。

それから二人は神様の上の存在であるマリアの話やアテナの父のゼウスの話や母のヘラの話をしていたりと交流を深めている一方で、目の前に居る人物がどういう人なのかというのを分析している二人でもあった。ゼウスの話になるとアテナの愚痴がマシガンの如く出てきて、それを聞いて「親馬鹿にも限度があるだろう」とアテナに同情せざるおえない気持ちになってしまったのであった。

「…ん？ 強い気を持った人達が来たようですね。後は大勢の人…  
…これは部隊ですね、それも複数」

アテナとほのぼのと話している中で急に強い気を多く感じた二人であった。

「この気は、とう　劉備、曹操、孫…いや、袁術だろうね」

(それと小さい気が……居るな)

紫郎はふと強い気に限れて小さく弱弱しい気が混じっているを感じたので雪蓮が“まだ”仕えている袁術だろつと予想したのであった。

「なるほど、通りで麗羽様に似ている気です」

アテナは一人で納得したみたいだ。

まだ袁紹の気を把握していなかった紫郎はさっぱり分かっていなかった。

「それでは私は戻りますので、紫郎殿も早く戻るように」

そういつとアテナは天幕内に入って行ったのであった。

「まったく隙が無い上に、こちらの動作や言葉でどういう人間かを把握しようとしていた……恐ろしいな」

一人になった紫郎は呟つぶやいたのであった。あれほど冷静で観察眼に飛び抜けて、隙が無い人を見た事がなかった紫郎は改めて、アテナ



が神話級の存在であると認識したのであった。

・ ・ ・ ・

そして天幕に戻った紫郎は

「紫郎（ご主人様）！！」

と言われて驚かれたのであった。

桃香や雪蓮は紫郎がてつきり洛陽にいるものと思っていたらしく、華琳は予想していたのでそこまでは驚いていないのであったが、内心では久々にあつた紫郎に、出て行くときに挨拶をしなかつた事に対して何か言つてやろうかしら、と思つていたのであった。

今、あたしは天の遣いである櫻井紫郎に背中を見せている…

…何故かというと、ちょっと前に自己紹介をしていたんだが、いきなり向こうが“可愛い”なんて言い出してきたせいで恥ずかしくなって紫郎を正面から見れなくなってしまったんだ。

あたしとした事が初めて会った男に“可愛い”なんて言われて動揺しちゃって、どうしちゃったんだろう…

…それはさあ、母さんや蒲公英には「男らしい」とか良く言われているからさ、女の子みたいな扱いを受けてみたいとは思っていたよ。でもあたしはさあ、昔から男みたいな言葉しか喋らないから周りからも男の様な扱いを受けているから、普通の女の子みたいな扱いに縁が無いことは分かっていたんだけど、この場に居る紫郎は私に“可愛い”って言うてくれたし、頭を優しく撫でてくれた。何故だかその行為だけであたしの心臓の鼓動が早くなってしまつのを感じてしまったよ。

ああ、こんな所を蒲公英に見られたら絶対にネタにされて弄られるだろうな……

そういえば、天の遣い様の噂は良く聞いていたのだが、紫郎は誰にも仕えてもいないみたいだな。

仕えていないならあたし達の所に来てくれないかな

来てくれたらきつと……って！？ あたしは何を考えているんだ。  
ちよつと落ち着こつ……

でも、本当……あたし達の所に来て欲しいな……

「あ、あのさ、紫郎はさあー、誰にも仕えていないならあたし達の  
所に来ないか？」

あたしは背後を振り返って紫郎に話しをするつもりであったが

「」「」……「」「」

紫郎ではなく公孫？と文醜と顔良が居たのであった。

「あ、あ、紫郎は？」

あたしはてつきり紫郎が居ると思っていたのでまさか紫郎がいな  
くて勘違いで公孫？と文醜と顔良に言ってしまった事に対して凄  
恥ずかしくなってしまう顔が真っ赤になっている。なんで、こうい  
う役回りなんだよー！

「アニキならさっきアテナの姉さんを連れて外に行つたぞ、プププ」

「猪々子！ 笑っちゃいけないよ！ アテナ様が呼び出したって感じでしたけど…プ、ププ」

「……紫郎は外だ（あー、これって絶対に惚れているだろ、まったく何をやっているんだ紫郎は…）」

二人共笑いを我慢して、もう一人は何故だか深刻そうな顔を浮かべているのが分かったのであったが、それ以上にあたしは恥ずかしくなってしまうその場から逃走してしまった。あの場に居たら絶対に笑われていたであろうとあたしは思った。

） 馬超 side out ）

あれからは紫郎が大変な目に合わされていたのであった。

桃香達、雪蓮、華琳達、紫郎の事を良く知っている面々は紫郎を見つけた瞬間にそれぞれ行動を取ったのであった。

軍議に来て紫郎の事を見つけた瞬間に桃香と朱里は泣きながら抱きついたのであった。かなりの日数会って居なかつたので寂しかったんだろうという事で紫郎も抱きしめながら、まるで子供をあやすかの様に優しく二人の頭を撫でていたのであった。二人共撫でられていて落ち着いたのか、涙が知らない間に止まっていたらしく、紫

郎に抱きついて抱き心地を確かめていたのであった。二人の表情はとても幸せそうであった。

雪蓮は紫郎に抱かれている桃香達の事を睨みつつ、口をひくつかせながら紫郎に話し掛けたのであった。紫郎は桃香達を撫でてながら雪蓮と話をしたのであったが、それが勘に触ったらしく軽く紫郎の頭を叩いてから袁術の近くに戻って行ったのであった。紫郎もさすがに気付いたらしく、謝ろうとしたのだが桃香、朱里が抱きついていたので動けない状況であった為に念話を使って謝ったのであったが許して貰う代わりに後で雪蓮の陣に来いと言われたのであった。だが、紫郎は「無理だな」という返事をして、雰囲気的にありえない返答したのであった。雪蓮は、もちろん、驚いたのだが同時に睨みつけて「来いよ!」、と言わんばかりの表情で睨みつけたのであった。

華琳は春蘭、秋蘭を護衛として連れており、紫郎に近付きはせず、ただ単に紫郎の事を見続けていたのであった。その視線に気付いた紫郎はなんとなくだが「後で話がある」、と言っている様であった。為に笑みを向けて了承したのだが、その笑みを見て華琳は手を頭にやり、困ったような態度を取ったのであった。華琳的には「こちらに来なさいよ!」って言ったつもりであったが紫郎はまったく違う事だと勘違いしているのであった。

「麗羽様、これで今の所は全員揃いました」

アテナが召集した全諸侯が揃った事を袁紹に伝えたのであった。

「そうですか。一番最後に来たのは……あら、“華琳さん”ですか、ぶりっけつですわね、“ぶりっけつ”おーっほっほっほっ！」

何故だか、一番最後に華琳が入ってきたのを強調して耳障りな笑い声を発している袁紹であった。その横ではアテナが冷静に華琳の事を見ていたのであった。表情からして相手の力量を測ろうとしているのだろう。華琳が袁紹を無視してアテナに話しかけて来た時に何気ない会話からでも相手の本質を見抜こうとしているアテナに対して、華琳が警戒している風にも紫郎には見えたのであった。

・ ・ ・

それからは各諸侯の自己紹介を始めたのであったが何から何まで華琳と比べようとする袁紹に対してアテナが止めに入り、どうにか華琳と袁紹の言い合いになるのは避けられたのであった。だが言い合いになったとしても華琳が勝つであろう、と誤ってしまふ紫郎であった。

そして紫郎が改めて名前を名乗り、最後に天の遣いという事を言

うと場がざわめいたのであった。桃香が何かを言おうとしたのであったが、それに対して桃香の口に手をやり塞ぐという素早い行動を取った紫郎であった。なんでも桃香に今は言われたくない事を言っ  
てしまい掛けていたからであった。

そして全員が席に付いてこれからの方針について話を始めるのであった。

華琳が「董卓はどういう人物なのか？」という質問に対して全員が知らない模様であった。みたくみたくで諸侯の全員が袁紹の方を向いたのであったが、紫郎は目を瞑りながらずつと黙っていたのだ。この連合の首謀者はまったく董卓という人物を知らないみたいで横に居たアテナもそれを聞いて少々驚いた表情を浮かべていたのであった。多分、あれは袁紹が知っているかと思っていたんだろう、とアテナは思っていたんだな、と紫郎は思ったのだ。董卓の情報については逐次集めるといふ事になった。

行軍順は馬超の提案でくじびきに決定したらしく、経路の方も順調に決まるかと思っただのだが、肝心の主謀者である袁紹がまったく話がかかっていないみたいで、袁術の側近の張勳が説明してくれたりと袁紹はダメダメであった。そして紫郎は張勳の服装と口調で、「バスガイドかよ！」と思ってしまった。張勳の話によると戦えるほどの大きい街道はあまりなく、？水関と虎牢関での戦闘が予想される。そして？水関には華雄、虎牢関には張遼と呂布という情報が連合が出来る前の情報だそうで、そこで紫郎は「張勳って優秀じゃん？」と思ってしまった程に手際良く報告してくれたのであった。

そしてそれからは袁紹をほぼ無視してアテナや華琳が話を進めていったのであったが袁紹がそれに口を挟んで、話し合いを止めてしまつのも少々あったのであったが二人が上手く言い包めたので順調に進んでいたのであった。アテナが言うには物資は袁家が出してくる、と言ってくれたので武器、食料の心配はなくなったのであるが、あまり持久戦は望めない模様であった。なにしろ、兵の数が多いで食料の消費も激しいとの事で、最低でも一ヶ月以内に決着をつけなければ食糧不足に陥る模様であるとの事。その話を聞いて袁紹もアテナも二週間いらないには決着をつけるという決断をして、軍議に参加している諸侯もそれに頷いたのであった。

そして一番話が進まなかったのが誰を先鋒にするかという問題であった。

色々話し合つて一応決まったのであったが偵察も兼ねて白蓮が？水関を攻める事になったのであった。偵察の意味が無いじゃないかという事になるのであったが袁紹はお構いなしに白蓮に押し付けたのであった。アテナも申し訳なさそうに白蓮に頭を下げて謝っていたのであった。袁紹の行為で紫郎はだいぶ怒り心頭しているが表情には出していなかった。でも足が少々激しく動いていたので完全には苛立ちを隠せてはいなかったのであった。

そしてアテナがもう一つ報告した話題があった。この場におらず合流する時はこの戦が終わっている時であるだろうと思われる人物、檄文を飛ばして了承をもらった者……劉璋であった。アテナの報告



によると向こうも出陣したらしく、この連合軍と同時期ぐらいには戦闘に入るのであるという報告を受けたのであった。「劉璋が簡単に動くはずがない」と諸侯の中の誰かが言ったのであったが、その問いにアテナが「お金を出すと約束したので」と言いながら不敵な笑みを浮かべたのであった。なるほど、と納得する面々もいるのだが、侮れない<sup>あなじ</sup>という表情を浮かべる者も何人か居たのであった。

） ??? side ）

麗羽姉様は馬鹿なのじゃな。

「……で、何か言いたそうな顔ね」

曹操が麗羽姉様に言ったのであった。妾<sup>わい</sup>でも分かるぐらい曹操は呆れた表情を浮かべているのじゃ。妾でも麗羽姉様は苦手なのじゃ。

「のうー紫郎よ、妾はこの連合の大將になりたいのじゃが？」

今、妾が聞いたのは七乃<sup>ななの</sup>ではないぞ、今話しかけたのは天の遣いという者の紫郎なのじゃ。

「辞めておいた方がいいかな。面倒ごとが全部周って来るし、袁術ちゃんや張勳ちゃん二人じゃ絶対に対応できないぞ」

「紫郎さんの言うとおりでですよお嬢様。それに蜂蜜水はちみつすいも飲めなくなっちゃいますよー」

紫郎が言っている事はちゃんと理解したのじゃ、そう言われるとめんどくさいのじゃな……蜂蜜水が飲めなくなるのはもっと嫌なのじゃー！ 妾は絶対に大将になるうとは思わんのじゃ。

「それよりも何故に俺の膝の上に座っている？」

今更気付いたのかこやつは？

「何故と言われたら……座り心地が良かったからなのじゃ！」

妾はこの場所が気に入ったのじゃ！ 紫郎の膝の上は妾の特等席になったからな。ほっほっほっ！

） 袁術 side out ）

はてさて軍議も意外に長い事続いたのだが、そろそろ終わって解散するところであった。

それまでに色々と話が詰ったりもしたがアテナ、華琳、白蓮のお

かげでスムーズに進んだのであった。途中、袁術が紫郎に話しかけてきたりして話をしたり、としていたのであったが、何故だが、袁術は紫郎の膝に座り思いつき目立ってしまったのであった。その行為に殺気を飛ばす者や叫ぶ者も居て、一時軍議が中止にもなってしまったのであった。紫郎の膝から退く気配がなかったのでアテナはそのまま軍議を続ける事にして話を始めたのであった。周りで騒いでいた連中も袁術、紫郎の事を気にしないような行動を取り、軍議の話を聞き始めたのであったが、コソコソ仲良さそうに話している姿をチラチラと見ている者が居たのであった。袁術の側近である張勳も「可愛らしいです、お嬢様！」と言いながら袁術の行動を止める様子がなかったのであった。

そして 袁術配下の孫策……雪蓮が殺気だけで人を殺せるほどの殺意を袁術に向けていたのであった。だが、袁術はまったく気付かず、逆に紫郎がその殺気を感じ取り冷や汗を流していたのであった。

「さてと、じゃあ私はこれで退散させてもらおうかな」

「なんじゃ？ 何処に行くのじゃ？」

袁術を膝の上から優しく持ち上げて降ろして席から立ちあがる紫郎であった。その行動にこの場にいる全員が紫郎の方を向いたのであった。

「紫郎殿、あと少しで終わるので座っていただけませんか？」

アテナが突然立ち上がった紫郎に対して注意したのであった。

「そういえば紫郎の部隊は何処にいるのかしら？」

華琳が今までずっと軍議に参加してこない紫郎に対して疑問を思っただけであった。

華琳の問いに紫郎は不敵な笑みを浮かべたのであった。

「……ふふふ、私の部隊は洛陽にいる」

その言葉に全員が耳を疑った。そんな言葉が今出てくるとは思っていなかったのだろう。

「！？まさか……董卓側なの？」

アテナは恐る恐る聞いたところ、紫郎は何も言わずに天幕から出ようとするのであった。

その行動が示すのは……つまり董卓側だということであった。

この時、桃香は紫郎に歩み寄ろうとするのだが、それを朱里が止めているのであった。桃香は本当に心配そうな表情を浮かべており、今にも泣きそうであった。朱里は何かを確信しているのか、紫郎と目を合わせていたのであった。

華琳の護衛に付いている春蘭も紫郎の行動に対して怒って掴み掛

かろうとするものの秋蘭や華琳に止められているのであった。秋蘭も紫郎の方を向いて何か企んでいる、と分かったので慌てずにいたのであった。華琳は軍議ですつと黙っていた紫郎が変だと思っていたので、ある程度は予測していた。

雪蓮は連合に来る前に紫郎が洛陽にいたかと思っていたので、最初から居た時点で怪しいと思っていたみたいだ。

「待ちなさい！ 敵陣に一人て来て生きて帰れると思っているのかしら！」

袁紹が声をあげてながら近くに居た衛兵に指示を出して、紫郎を囲む様に武器を構えるのであった。

「うるさい女だ。邪魔をするな！」

言葉を言った直後に一部を除いた全員に向かって殺気を放った。その殺気はあまりにも強烈で紫郎を囲んでいた衛兵はその場に倒れて気絶しており、袁紹やその他諸侯の方々も気絶して倒れてしまったのであった。華琳、護衛二人も気絶はしてはいないものの少し辛そうな表情を浮かべていたのであった。雪蓮は逆に笑みを浮かべて心地良いという感じの表情を浮かべて紫郎を見ていたのであった。桃香や朱里は殺気に当てられておらず、急に周りの人達が倒れた事に動揺していたのであった。馬超は意識を保っているものの手や足が震えて動けないのであった。袁術は殺気が当たる前に張勳が庇ってどうにか殺気に当たらずに済んだものの庇った張勳が苦しんでいるのを見て焦っていたのであった。そしてこの場で唯一平常心でいるアテナは優しそうな表情から一変して紫郎の事を

睨んでいたのであった。

そして今の現状を見た紫郎はゆっくりと天幕を出て行ったのであった。

「猪々子、斗詩！ 麗羽さまを寝かせて来なさい。それと各諸侯が起き始めたら、また軍議を始めると伝えておきなさい。私はこれから紫郎殿を追撃してきます！」

そういうとアテナは自分愛用の剣と盾を持ち天幕から出て行ったのであった。

．．．．

紫郎は連合の本陣を抜けて？水関に向けて瞬動を使いながら移動していたのだが、本気で瞬動で移動していなかったのだから追って来たアテナに追いつかれてしまったのであった。紫郎は王の財宝の中からまだあまり使った事のない武器、ロンギヌスを持って戦っているのがあった。アテナも剣と盾を用いて追いついた直後に剣を交えたのであった。

「いきなりだな！」

「貴方が裏切らなければこんな事にはならなかったんですよ！」

二人はそう言いながら剣と槍を振るっていたのであった。

洛陽側に徐々に後退しながら戦っている紫郎に対して、アテナは剣を振るい攻撃をしてくるのであった。その攻撃に対して槍で受け流し軽く回避し、槍を振るいながら相殺させたりと、紫郎の攻撃に對してもアテナは左手に持つ盾で守りながら反撃したりして互角の戦いをしていたのであった。

二人共、相手の出方を伺っており積極的に攻撃してはおらず紫郎は徐々に？水関側に来ており、アテナは連合の本陣から離れているという状況になっている。

「さすがにそう簡単には倒れてくれませんね」

「それはこっちのセリフだぞ。余裕で俺の攻撃を受け流しやがって」

言葉を発しながら二人は剣と槍を交えて戦っているのであった。

一般人では見れないほどの速さで打ち合っている二人は掠り傷一つないのだ。剣と槍のぶつかり合う金属音しかこの場では聞こえない

くなつてしまつていた。二人共確実に攻撃が当たれば致命傷になる部分を攻撃しており、それを避けたり、武器で防いだり、と殺し合ひになっている。でもこれでも本気ではないらしい二人。

「貴方が持つているその槍……」

急に後方に飛び、攻撃を止めてその場で止まつたアテナを見て紫郎も立ち止まつたのであつた。

「……その槍を使うのは辞めなさい、貴方……その槍に飲まれるわよ！」

アテナの言つた事に対して紫郎は自分の手に持つている槍である、ロンギヌスを改めて見るのであつた。確かに、異質的なものを感じる、と感じ取つていた紫郎であつた。王の財宝の中にある中で一際目立つ存在感を放つ槍である。

「その聖遺物は普通の人には絶対に見せてはいけません、一般人が目視したら魂ごと全てが消失してしまう程の代物です！ 私や貴方は余裕でしょうからいいですけど、他の人には絶対に見せないように！ 使うとしても誰も居ない場所にしなさい！ もしくは永久に封印しなさい！ まだ貴方はその槍の真の力に気付いていない。だからこの世界では使うのを止めなさい！」

一通り王の財宝の中の物を弄つた紫郎はこのロンギヌスだけは未だに使い慣れていなかったのだ。触れれば武器の使い方が分かるの



であったが、何かこの槍には特殊な能力があるらしく、それを解明していなかったのだ。だけどアテナも言っているようにこの槍は危険だと分かっている紫郎であった。

「分かった、この神槍は誰も居ない場所で使って俺の物にする。アテナも言ったとおりだ、触れている俺が一番分かる……俺の魂を喰らっているのがな」

アテナに言われたとおり槍を王の財宝の中に閉った。何故だが、ロングヌスを持っていてる時とは疲れが貯まっていく感じがしていたのに対して、持っていない時では疲れがなくなったのを感じたのであった。

アテナも紫郎が武器を閉ったのを見て、剣を鞘に納めたのであった。

「分かっていると思いますが、貴方も私もこの世界は場違いな存在なんです、少しは自重しなさい」

アテナの言葉の意味をちゃんと理解している紫郎であった。この世界において紫郎やアテナ、他三人も本当は居ない存在なのだ。

「分かっているよ。少しは自重するよ」

髪を掻きながら応えた紫郎であった。アテナから見てもその行為はめんどくさそうだというのが伺えたのであった。

「一応言っておきますが、分かっているようなら……貴方を殺しますので宜しく。では、私はこれで退かして貰います。これ以上行くと？水関の弓部隊の射程圏内に入ってしまうので失礼しますよ」

アテナはそう言うと紫郎に背中を見せて連合本陣に消えて行ったのであった。

それから紫郎は？水関に戻って兵士に警戒するように言うてから洛陽に戻ったのであった。

洛陽に戻ると皆が心配して駆け寄って来てくれたのであって一安心したのであったが、紫郎の報告を聞いて焦りを感じてしまうのであった。兵の数、武器の数、将の数、食料の数、どれをとっても圧倒的差で負けているのであった。だが、全員の心は“戦う”という思いで一致しているのであった、月を守る為に…

アテナも本陣に戻り、気絶して参加できない総大将である袁紹の代わりにアテナが再軍議を始めたのであった。

### 第三十話 反董卓連合（後書き）

皆さん東北地方太平洋沖地震の被害は大丈夫ですか？

私は物が落ちてきて打撲した程度で済みましたが、本当に助かったと命拾いしました。

もしも自分の小説を読んで頂いて気が紛れてもらえれば・・・幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3579k/>

---

新たなる人生の始まり

2011年9月4日15時52分発行